静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第239集

西通北遺跡

平成20～22年度JR東海道本線・JR御殿場線緊急地方道路整備事業（街路B）
平成21年度JR東海道本線・JR御殿場線都市高速鉄道高架事業（新車両基地）
建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１１

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第239集

西通北遺跡

平成20～22年度JR東海道本線・JR御殿場線緊急地方道路整備事業（街路B）
平成21年度JR東海道本線・JR御殿場線都市高速鉄道高架事業（新車両基地）
建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2011

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

環濠（東より）

巻頭図版2

1　環濠全景（西より）

2　環濠土層断面剥ぎ取りのための断ち割り状況（西より）

１　環濠遺物出土状況①（北東より）

２　環濠遺物出土状況②（北より）

巻頭図版4

環濠出土土器

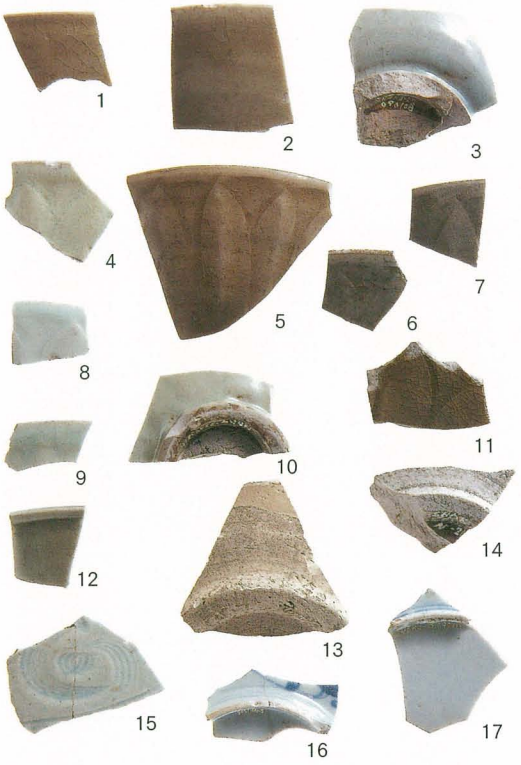
1区完掘状況（西より）

巻頭図版6

３号溝状遺構遺物出土状況（東より）

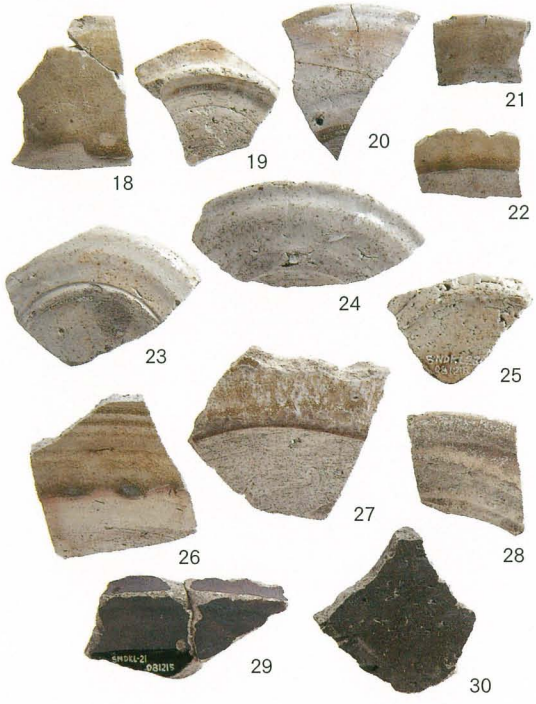
3号溝状遺構出土土器

巻頭図版8



1　貿易陶磁（外面）

2　貿易陶磁（内面）



3　瀬戸美濃製品（外面）

4　瀬戸美濃製品（内面）

序

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所では平成20年から平成22年にかけて、JR沼津駅付近鉄道高架事業に伴う西通北遺跡の発掘調査を実施してきました。発掘調査では、主に弥生時代と奈良・平安時代において、当時の人々の生活の一端を窺えるような、多くの成果をあげることができました。

西通北遺跡の位置する沼津市片浜地区は、北に愛鷹山、南に駿河湾を望み、特に駿河湾に面し隣接する千本松原は、東海道の景勝地の一つとして親しまれています。また、この地域は、愛鷹山南麓に広がる浮島沼として著名な低湿地帯の東縁部に位置しており、海から湖沼を経て陸地化を果たした特異な自然環境下にあります。そうした環境変化を背景にしていたためか、当地域における原始の人々の生活については、今まで不明な部分が多く残されていました。今回の調査では、現在の沼津市域低地部が海から陸地へ変化していく過程で、丘陵部から低地部に移住し始めた最初の弥生時代人の活動痕跡を示す遺構・遺物を発見することができました。

また、当研究所としても、静岡県東部地域において低湿地遺跡のまとまった面積を調査するという点において、今回の調査は数少ない調査事例の一つとなりました。地域の知られざる歴史に迫り得る成果をあげることができたことを喜ばしく思うとともに、本書で報告される調査成果が、広く一般の方々の目に触れ、埋蔵文化財に対する理解と、郷土の歴史に対する関心を高めるための一助となり、多くの研究者の方々に活用されることを祈念してやみません。

最後になりましたが、発掘調査および資料整理並びに本書の作成にあたり、静岡県沼津土木事務所、静岡県教育委員会、沼津市教育委員会をはじめとする関係諸機関の御支援・御協力に感謝するとともに、調査に御理解頂いた地元の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成23年３月

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長　石田　彰

例　言

1．本書は静岡県沼津市大諏訪字新通・小諏訪字二ノ坪に所在する西通北遺跡の発掘調査報告書である。
2．調査は平成20～22年度JR東海道本線・JR御殿場線緊急地方道路整備事業（街路B）工事および平成21年度JR東海道本線・JR御殿場線都市高速鉄道高架事業（新車両基地）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、静岡県沼津土木事務所都市計画課の委託を受け、静岡県教育委員会文化課（現 文化財保護課）の指導のもと、沼津市教育委員会文化振興課の協力を得て、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
3．確認調査は平成17年４月から平成19年３月に沼津市教育委員会文化振興課が実施し、本調査は平成20年６月から平成22年１月まで財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。資料整理は平成21年12月から平成23年３月まで実施した。
4．調査体制は以下のとおりである。

平成20年度（本調査）

所　　長：清水　哲	次長兼総務課長：大場正夫	次長兼調査課長：及川　司
次長兼事業係長：稲葉保幸	保存処理室長：西尾太加二	東部総括係長：中鉢賢治
事業担当：青井拓司	調査担当：大林　元・薗科泰裕・杉山和徳	

平成21年度（本調査・資料整理）

所　　長：天野　忍	次長兼総務課長：松村　亨	次長兼調査課長：及川　司
次長兼事業係長：稲葉保幸	次長兼東部総括係長：中鉢賢治	保存処理室長：西尾太加二
事業担当：青井拓司	調査担当：薗科泰裕・杉山和徳	

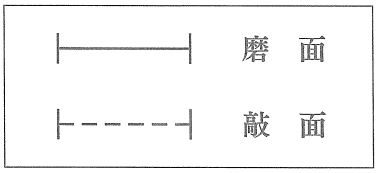
平成22年度（資料整理）

所　　長：石田　彰	次長兼総務課長：松村　亨	調査課長：中鉢賢治
専門監兼事業係長：稲葉保幸	保存処理室長：西尾太加二	調査課調査第二係長：岩本　貴
事業担当：青井拓司	調査担当：杉山和徳	

5．基準点測量・空中写真測量・空中写真撮影は、株式会社シン技術コンサルに委託した。
6．出土した石器の石材鑑定は、当研究所の柴田亮平常勤嘱託員が実施した。
7．出土した木製品の樹種同定は、当研究所の西尾太加二保存処理室長が実施した。
8．出土した木製品と金属製品の保存処理は、当研究所保存処理室が実施した。
9．本書掲載の写真は、現地での写真は各調査研究員が撮影し、遺物写真は当研究所の杉山すず代整理技術員が撮影した。
10．現地での自然科学分析と出土した土器の胎土分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
11．出土した炭化物の年代測定は、株式会社加速器分析研究所に委託した。
12．調査の概要は当研究所の出版物などで一部公開されているが、内容において本書と相違がある場合は本報告をもって訂正する。
13．本書の執筆は、杉山和徳が行った。
14．本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。
15．発掘調査資料は、静岡県教育委員会文化財保護課が保管している。

凡　例

1．本書で用いる方位は国土座標の方位で、座標値は世界測地系に準拠し、標高は海抜高を表す。
2．本書で扱う遺物実測図の縮尺は、土器１／３、土製品１／３、石器１／３（石鏃および石核は１／１）、木製品１／４、金属製品１／２（銭貨は１／１）を基本とした。
3．本書で扱う遺物の挿図番号と図版に示した番号は同一である。
4．本書で用いる色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帖』(農林水産省技術会議事務局監修 1992)に準拠した。
5．本書で扱う遺構の呼称とその定義については、第Ⅲ章第１節に記載しており、特に「環濠」の呼称については、第Ⅴ章第１節においても触れている。
6．土器の器種について、本来は「壺形土器」「甕形土器」のように「～形土器」と記載するのが妥当であるが、本書では便宜上、「壺」「甕」のように略記している。
7．石器実測図中の研磨痕（磨りの範囲）はトーンを入れて表現した。
8．石器実測図中の指示記号は以下のとおりである。



9．遺構の計測表において残存値には（　）を付して表記した。
10．遺物の観察表において推定値・復原値には（　）を付して表記した。
11．第６図は国土地理院発行１：25,000地形図「沼津」を複写して加工・加筆した。

目　次

巻頭図版／序／例言／凡例

第Ⅰ章　調査の概要 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の方法 …… 2
　第３節　調査の経過 …… 3
第Ⅱ章　位置と環境 …… 7
　第１節　遺跡の立地と地理的環境 …… 7
　第２節　歴史的環境 …… 8
第Ⅲ章　調査の成果 …… 13
　第１節　遺構と遺物の概要 …… 13
　第２節　縄文時代以前の遺物 …… 21
　第３節　弥生時代の遺構と遺物 …… 21
　第４節　古墳時代の遺物 …… 42
　第５節　奈良・平安時代の遺構と遺物 …… 44
　第６節　中世の遺物 …… 77
　第７節　近世以降の遺構と遺物 …… 79
第Ⅳ章　理化学的分析 …… 114
　第１節　自然科学分析 …… 114
　第２節　出土弥生土器胎土分析 …… 130
　第３節　放射性炭素年代（AMS測定） …… 142
第Ⅴ章　考察 …… 146
　第１節　環濠の特徴と機能について …… 146
　第２節　溝状遺構と古代条里について …… 156
　第３節　総括 …… 159

図版／報告書抄録

図版目次

巻頭図版１　環濠
巻頭図版２　１　環濠全景
　２　環濠土層断面剥ぎ取りのための断ち割り状況
巻頭図版３　１　環濠遺物出土状況①
　２　環濠遺物出土状況②
巻頭図版４　環濠出土土器
巻頭図版５　１区完掘状況
巻頭図版６　３号溝状遺構遺物出土状況
巻頭図版７　３号溝状遺構出土土器
巻頭図版８　１　貿易陶磁（外面）
　２　貿易陶磁（内面）

3　瀬戸美濃製品（外面）
4　瀬戸美濃製品（内面）
図版１　1　西通北遺跡遠景
2　西通北遺跡完掘状況遠景
図版２　西通北遺跡完掘状況全景
図版３　1　環濠全景
2　環濠西部完掘状況
3　環濠中部完掘状況
4　環濠東部完掘状況
図版４　1　環濠土層断面①
2　環濠土層断面②
3　環濠土層断面③
図版５　1　環濠土層断面④
2　環濠土器出土状況①
3　環濠土器出土状況②
4　環濠土器出土状況③
5　環濠石鏃出土状況
図版６　1　環濠土器出土状況④
2　環濠土器出土状況⑤
3　環濠鉄鉇出土状況
図版７　1　３号溝状遺構上端土器出土状況①
2　３号溝状遺構上端土器出土状況②
3　３号溝状遺構土器出土状況①
4　３号溝状遺構土器出土状況②
5　１号溝状遺構木製品出土状況
図版８　1　５号溝状遺構遺物出土状況
2　池状遺構土層断面
図版９　1　池状遺構遺物出土状況
2　20号溝状遺構遺物出土状況
3　近世陶器出土状況
図版10　弥生土器壺①
図版11　弥生土器壺②
図版12　弥生土器壺③
図版13　1　弥生土器壺④
2　弥生土器甕①
図版14　弥生土器甕②
図版15　弥生土器甕③
図版16　1　環濠出土弥生土器壺
2　環濠出土弥生土器甕
図版17　土師器坏・甕①
図版18　土師器坏・甕・鉢
図版19　1　３号溝状遺構出土土師器甕
2　土師器坏・甕②
図版20　1　遺構外出土土師器坏
2　土師器高坏
図版21　1　土師器堝
2　須恵器坏①
図版22　須恵器坏②
図版23　須恵器坏・高坏・坏蓋
図版24　1　３号溝状遺構出土須恵器坏
2　須恵器坏蓋・壺
図版25　1　５号溝状遺構出土須恵器坏
2　須恵器坏・壺
図版26　1　須恵器坏・坏蓋・壺
2　遺構外出土須恵器坏
図版27　1　須恵器壺・甕・鉢
2　灰釉陶器
図版28　1　灰釉陶器坏・皿
2　中世陶器
3　土製品
図版29　1　近世以降陶器
2　近世以降磁器
図版30　1　石鏃
2　石核
3　石器
4　木製品①
図版31　木製品②
図版32　1　鉄製品
2　銅製品・銭貨
3　銅製品

挿図目次

第１図　西通北遺跡の位置 …… 1
第２図　調査対象範囲図 …… 2
第３図　基本土層柱状図 …… 3
第４図　周辺地質図 …… 7
第５図　浮島沼周辺の地形の変遷 …… 8
第６図　周辺の遺跡分布図 …… 9
第７図　調査区全体図 …… 14
第８図　遺構配置図割付図 …… 14
第９図　遺構配置図① …… 15
第10図　遺構配置図② …… 16
第11図　遺構配置図③ …… 17
第12図　遺構配置図④ …… 18
第13図　遺構配置図⑤ …… 19
第14図　調査区内出土土器分布図 …… 20
第15図　縄文時代以前石器実測図 …… 21
第16図　環濠平面図 …… 22
第17図　環濠図割付図 …… 22
第18図　環濠平面・
　エレベーション図① …… 23
第19図　環濠平面・
　エレベーション図② …… 24
第20図　環濠平面・
　エレベーション図③ …… 24
第21図　環濠平面・
　エレベーション図④ …… 25
第22図　環濠断面図（A～F） …… 26
第23図　環濠断面図（G・H） …… 27
第24図　環濠土器集中１出土状況図 …… 27
第25図　環濠土器集中２出土状況図 …… 28
第26図　環濠土器集中３出土状況図 …… 29
第27図　環濠土器集中４出土状況図 …… 29
第28図　環濠第１・２層出土土器実測図 … 30
第29図　環濠第３層出土土器
　および鉄製品実測図 …… 31
第30図　環濠第４層出土土器実測図 …… 32
第31図　環濠第４層出土土器
　および石器実測図 …… 33
第32図　環濠第５層出土土器実測図 …… 35
第33図　環濠第６層出土土器実測図 …… 36
第34図　環濠第６層出土土器
　および木製品実測図 …… 37
第35図　１～４号土坑平・断面図 …… 38
第36図　５号土坑平・断面図 …… 38
第37図　１号土坑列平・断面図 …… 39
第38図　３・４号土坑・
　１号土坑列出土土器実測図 …… 39
第39図　弥生時代遺構外出土土器実測図 … 41
第40図　弥生時代遺構外出土石器実測図 … 42
第41図　古墳時代土器実測図 …… 43
第42図　１～６号溝状遺構平・断面図 …… 45
第43図　１号溝状遺構出土土器
　および木製品実測図 …… 46
第44図　２号溝状遺構出土土器実測図 …… 46
第45図　３号溝状遺構土器集中１
　出土状況図 …… 47
第46図　３号溝状遺構土器集中２
　出土状況図 …… 48
第47図　３号溝状遺構土器集中３
　出土状況図 …… 49
第48図　３号溝状遺構出土土器実測図① … 51
第49図　３号溝状遺構出土土器実測図② … 52
第50図　３号溝状遺構出土土器実測図③ … 53
第51図　３号溝状遺構出土土器実測図④ … 54
第52図　５号溝状遺構土器集中
　出土状況図 …… 56
第53図　５号溝状遺構出土土器実測図① … 57
第54図　５号溝状遺構出土土器実測図② … 58
第55図　７・８号溝状遺構・２号土坑列
　平・断面図 …… 59
第56図　９・10号溝状遺構・３・４号土坑列
　平・断面図 …… 60
第57図　６・９・10号溝状遺構出土土器
　および石器実測図 …… 60
第58図　11号溝状遺構・６・７号土坑列・
　25号土坑平・断面図 …… 61
第59図　11・12号溝状遺構平・断面図 …… 62

第60図　６号土坑平・断面図 …… 63
第61図　７号土坑・１号溝状遺構
平・断面図 …… 64
第62図　８号土坑平・断面図 …… 65
第63図　９号土坑平・断面図 …… 65
第64図　10号土坑平・断面図 …… 65
第65図　11～13号土坑平・断面図 …… 65
第66図　14～16号土坑平・断面図 …… 67
第67図　17～20号土坑平・断面図 …… 67
第68図　21号土坑平・断面図 …… 67
第69図　22号土坑平・断面図 …… 67
第70図　23号土坑平・断面図 …… 69
第71図　24号土坑平・断面図 …… 69
第72図　５号土坑列平・断面図 …… 69
第73図　８号土坑列平・断面図 …… 69
第74図　６～８号土坑・３・６号土坑列
出土土器実測図 …… 70
第75図　奈良・平安時代遺構外
出土土器実測図① …… 72
第76図　奈良・平安時代遺構外
出土土器実測図② …… 73
第77図　奈良・平安時代遺構外
出土土器実測図③ …… 74
第78図　奈良・平安時代遺構外
出土土器実測図④ …… 75
第79図　奈良・平安時代遺構外出土土器
および土製品実測図 …… 76
第80図　中世土器実測図 …… 78
第81図　池状遺構・16～18号溝状遺構・
26～34号土坑平・断面図
（A～E） …… 80
第82図　26～34号土坑断面図（F～J） …… 81
第83図　池状遺構出土土器・木製品・
銅製品実測図 …… 82
第84図　13号溝状遺構平・断面図 …… 83
第85図　14・15号溝状遺構平・断面図 …… 83
第86図　19～21号溝状遺構平・断面図 …… 85
第87図　35・36号土坑平・断面図 …… 86
第88図　37～40号土坑平・断面図 …… 87
第89図　９号土坑列平・断面図 …… 88
第90図　13・19～21号溝状遺構・
36・40号土坑土器および
石器実測図 …… 89
第91図　近世以降遺構外出土土器・
土製品・石器・銅製品実測図 …… 90
第92図　銭貨拓影図 …… 91
第93図　環濠試料採取地点の層序 …… 115
第94図　主要珪藻化石群集 …… 121
第95図　植物珪酸体含量 …… 124
第96図　各粒度階における鉱物・岩石出現
頻度（％）および粒径組成① …… 132
第97図　各粒度階における鉱物・岩石出現
頻度（％）および粒径組成② …… 133
第98図　砕屑物・基質・孔隙の割合 …… 136
第99図　暦年較正年代グラフ …… 145
第100図 弥生時代中期環濠の
平面形態の諸例 …… 146
第101図 弥生時代中期環濠の
断面形態の諸例 …… 147
第102図 古代駿河国の主要官衙交通路 …… 157
第103図 駿河条里復元概念図 …… 157
第104図 １・８号溝状遺構の配置 …… 158

挿表目次

第１表　本調査・資料整理工程表 …… 6
第２表　出土遺物破片数量表
（貿易陶磁）…… 77
第３表　出土遺物破片数量表
（瀬戸・美濃製品）…… 77
第４表　出土遺物破片数量表
（その他の陶器）…… 78
第５表　新旧遺構番号対照表 …… 92・93
第６表　土坑・小穴計測表 …… 93～95
第７表　出土土器観察表 …… 96～112
第８表　出土土製品観察表 …… 113
第９表　出土石器観察表 …… 113
第10表　出土木製品観察表 …… 113
第11表　出土金属製品観察表 …… 113
第12表　出土銭貨観察表 …… 113
第13表　生態性区分と環境指標種群 …… 117
第14表　珪藻分析結果 …… 119・120
第15表　花粉分析結果 …… 122
第16表　植物珪酸体含量 …… 123
第17表　種実分析結果 …… 123
第18表　試料一覧および胎土分類 …… 130
第19表　薄片観察結果 …… 134・135
第20表　測定結果① …… 144
第21表　測定結果② …… 144
第22表　東海地方出土弥生時代鉄器
地名表 …… 151

挿写真目次

写真１　重機による表土除去 …… 4
写真２　人力による遺構掘削 …… 4
写真３　現地説明会（遺構解説）…… 5
写真４　現地説明会（遺物展示解説）…… 5
写真５　土器復原作業 …… 6
写真６　土器実測作業 …… 6
写真７　珪藻化石 …… 127
写真８　花粉化石 …… 128
写真９　植物珪酸体・種実遺体 …… 129
写真10　胎土薄片① …… 140
写真11　胎土薄片② …… 141
写真12　環濠側壁の窪み …… 148
写真13　アフガニスタン研修生を
現地に迎えて …… 160

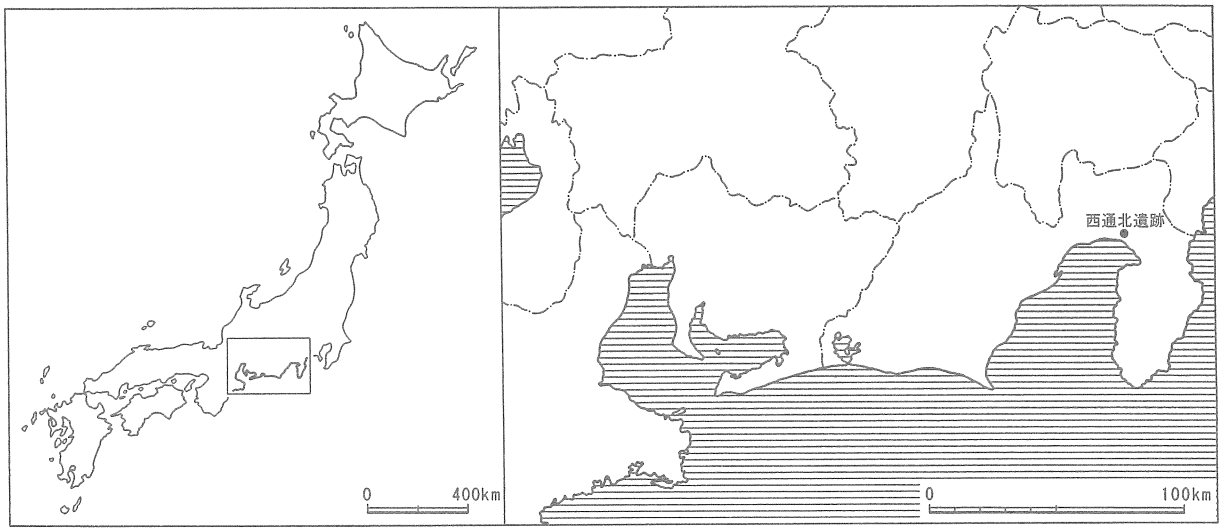
第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

静岡県東部、駿河湾の奥部東側に位置する沼津市は、古来より東西交通の要衝として、また観光地伊豆への玄関口として発展を続けてきた。特にJR沼津駅周辺は、商業・業務施設などの機能が蓄積され、中心市街地としての役割を担っている。しかし、人口増加や通勤圏の拡大に伴い、市街地では慢性的な交通渋滞を引き起こし、鉄道による南北市街地の分断は、住民の利便性を大いに妨げている。また、交通環境や物流システムの変化、大型店の郊外進出などに伴い、駅周辺市街地の空洞化の進行が懸念されている。そのような問題解消の一環として計画されたのが、JR沼津駅付近鉄道高架事業である。鉄道高架事業では、JR東海道本線の大岡団地付近から小諏訪付近の約3.7㎞、JR御殿場線の大岡団地付近から沼津駅付近の約1.6㎞の高架化が計画されている。高架化計画範囲内には、鉄道車両基地（JR東海）と鉄道貨物駅（JR貨物）が存在していることから、高架本体工事に先立ち、両施設の移転が必要とされた。このような経緯から、JR沼津駅北東（富士見町）に位置する車両基地の、駅西部約２㎞先の片浜地区への移転が計画されるに至った。JR東海の新車両基地建設予定地である大諏訪・小諏訪は、周知の埋蔵文化財包蔵地である西通遺跡や中通遺跡、軒通遺跡が隣接し、地形的にこれらの遺跡の一部が及んでいることが推測された。このため、建設に先立って、周知の埋蔵文化財包蔵地の詳細な分布範囲と遺構や遺物の残存状況を把握する目的で確認調査が実施された。

平成17年４月から平成19年３月まで沼津市教育委員会によって行われた確認調査では、事業予定地内南北方向に幅３～５ｍ程の細長いトレンチを20箇所設けて調査を行った。その結果、西側のトレンチを中心に奈良・平安時代の土師器や須恵器等が出土し、東側のトレンチでは、調査範囲を東西方向に横断する弥生時代の溝状遺構の存在も確認された。確認調査によって、遺跡の存在が認められるとともに、遺跡の範囲が把握され、埋蔵文化財包蔵地（西通北遺跡）として登録される。それを受け、平成19年５月に静岡県街路整備室、静岡県沼津土木事務所、静岡県教育委員会、沼津市都市計画部、沼津市教育委員会の間で協議が行われ、同年９月には本調査を当研究所が実施することで合意がなされる。当研究所に発掘調査の実施が依頼され、平成20年度から本調査を行うこととなった。

平成20年２月には、当研究所の本調査に先立ち、静岡県沼津土木事務所が、静岡県教育委員会の立会いのもと、調査対象範囲内の盛土の除去を行う。同年６月より、当研究所の本調査が開始された。



第１図　西通北遺跡の位置

第２節　調査の方法

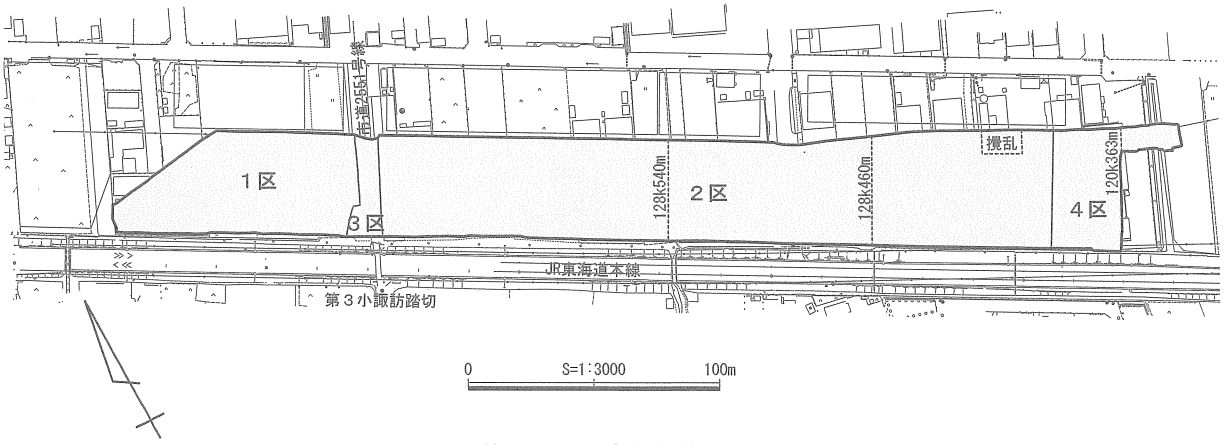
西通北遺跡は、沼津市片浜地区の民家や工場が密集する市街地に位置し、加えて北側には市道が、南側にはJR東海道本線が隣接する。調査期間中はブルーシート等の飛散や排土の散塵が懸念されたため、排土の山は重機で堅固に叩き締め、調査区内のブルーシートは土嚢により手厚く養生した。

低湿地遺跡である西通北遺跡には、常時排水が不可欠である。本格的な包含層掘削を開始する前段階に、調査区下面外周に排水溝を巡らし、計４箇所に集水桝を設けた。調査期間中は200V水中ポンプ２台と100V水中ポンプ４台を稼働させて雨水・湧水に対応した。

調査対象範囲には国土座標の方位に従って、東西南北20mごとにグリッド杭を打設した。グリッド自体は10×10mに設定し、各グリッドの南西コーナーに打たれているグリッド杭等の番号をもってグリッド名としたが、南から北へはアルファベット、西から東へは数字を用い両者を組み合わせた呼称となっている。調査の工程上、調査対象範囲を４つの調査区に分割して調査を行った。調査対象範囲を南北に縦断する市道2551号線を境界とし、市道以西を１区、同以東を２区と呼称した。市道2551号線直下を３区とし、調査対象範囲東端に位置した工場跡地以東を４区と呼称した。各区の面積は１区が3,300㎡、２区が11,160㎡、３区が528㎡、４区が1,421㎡で、全体で16,409㎡である。

確認調査の成果を受け、本調査期間中には西通北遺跡の基本となる５層の土層を確認した。Ⅰ層は調査区全体を覆う旧工場の盛土層であり、黒色土に廃工場の解体瓦礫を多く含み、コンクリート塊や針金などの雑多なもので形成される極めて危険な層位である。また、調査区内では、廃工場建物の基礎として使用されたコンクリート杭や木杭等が、Ⅱ層からⅤ層まで深々と貫通している箇所が多く認められ、それらは全て攪乱として扱った。Ⅱ層は黒色を呈する腐植土層である。Ⅰ層ほどではないものの土中に瓦礫が含まれる。Ⅲ層は黒色（10YR2/1）の締まりの強い粘土層である。乾燥しやすく、乾燥後は脆く崩れやすくなる。Ⅳ層は灰黄褐色（10YR6/2）を呈する粘土層である。Ⅱ層からⅢ層への漸移層に位置付けられ堆積は薄いが、非常に粘性が強い。Ⅴ層は黄褐色（10YR5/6）を呈するシルト質粘土層である。下層ほど粘土・シルト・微砂によるラミナ状の自然堆積の痕跡が顕著に認められた。土中には高師小僧と呼ばれる中空の褐鉄鉱が多く認められた。Ⅰ・Ⅱ層は無遺物層として重機掘削の対象となり、Ⅲ・Ⅳ層が人力による包含層掘削の対象である。Ⅴ層に掘り込まれている遺構を検出し、遺構掘削を実施した。

調査は、盛土や表土といった無遺物層に対してはバックフォーによる掘削をおこない、クローラーダンプやダンプトラックを用いて排土を運搬し、整形処理を行った。表土除去終了後、遺物包含層以下は人力による掘削を行い、包含層掘削が遺構面に達すると同時に遺構の検出を行った。人力掘削土はベル

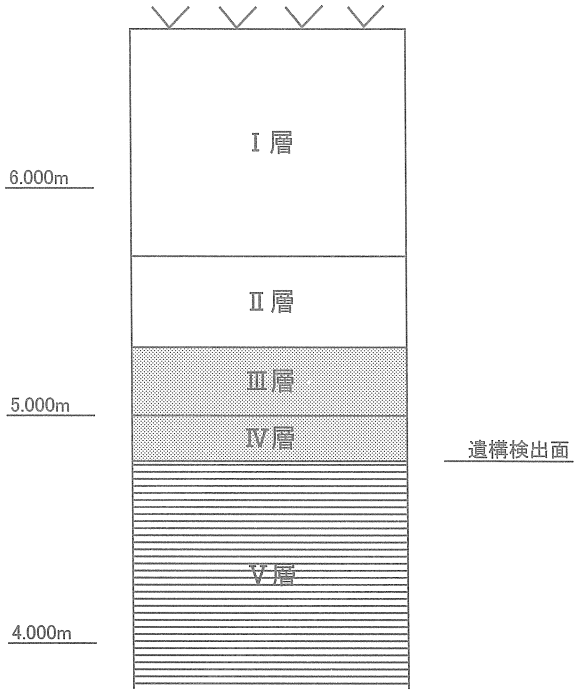


第２図　調査対象範囲図

トコンベア等によって調査区外へ搬出するとともに、排土はバックフォーによって整形をした。検出した遺構に関しては、遺構掘削を行い、遺物が集中的に出土する箇所では丁寧に土を剥がし、遺物の出土状況を忠実に現出させるように努めた。

遺構の検出状況や土層断面などの記録保存には主に６×７判（モノクロ・カラーリバーサル）カメラを用い、特に重要な写真に関しては４×５判カメラを用いた。また、発掘作業の工程記録等には35㎜判（カラーネガ）やデジタルカメラを使用した。全景写真や景観写真など、調査区完掘の節目ごとにローリングタワーからの撮影やラジコンヘリによる空中撮影を実施した。

発掘調査の記録保存として現地において各遺構の平面図や断面図等の図面を作成した。図化作業にはオートレベルやトータルステーションを使用し、遺構面直上出土遺物や重要遺物については、出土地点の正確な国土座標値を記録するため、トータルステーションでポイント取り上げを行った。



第３図　基本土層柱状図

現地調査と並行して現地にて出土遺物の洗浄、注記作業等の基礎整理作業を行い、作業の効率化をはかった。

第３節　調査の経過

１．平成20年度本調査

西通北遺跡の調査対象面積は16,409㎡に及び、準備・撤去等を含め平成20年６月から平成22年１月までの概ね１年８ヶ月間の発掘調査を実施した。

委託契約締結後、調査のための事前準備を始めたが、現地での作業としては平成20年６月16日に仮設事務所を設置し、同20日から調査区内の除草作業等、周辺の環境整備を開始した。７月２日には、静岡県沼津土木事務所・静岡県教育委員会・当研究所の３者による、１区および２区の表土除去前の土量測点の測量確認検査を実施した（以下「３者立会い」と略称）。翌３日より重機による１区の表土除去を開始、同10日に終え、同15日には表土除去後の３者立会いを行い、同17日から人力による包含層掘削を開始した。８月５日に沼津市主催の沼津駅周辺見学ツアーが実施され、親子連れが現地を訪れ、遺跡見学を行った。９月８日に１区の包含層掘削を終え、同12日に包含層掘削後の３者立会いを行い、同17日から遺構掘削を開始した。遺構掘削と併行して写真・図化などの記録作業を行い、10月20日に遺構掘削を終えた。翌21日にラジコンヘリコプターによる空中撮影・写真測量を、同22日にはローリングタワーからの調査区全景撮影を行い、１区における全ての調査を完了した。

10月27日には１区遺構掘削後の３者立会いを行うとともに、重機による２区の表土除去を開始した。0.7㎥バックフォー２台により、調査区東西両方向からの掘削を行い、11月５日にこれを終えた。同10日に表土除去後の３者立会いを行い、同日から包含層掘削を開始した。長大な２区での包含層掘削にあたっては、人員を二手に分け、南北両方向から掘削を進めた。12月25日に２区西半部（128k540mライン以

西）の包含層掘削後の３者立会いを行った。平成21年１月５日からは、２区東半部の包含層掘削を進めるとともに、検査を終えた２区西半部の遺構掘削・記録作業も併行して開始した。２月６日に２区西半部（128k540mライン以西）のラジコンヘリコプターによる空中撮影・写真測量を実施した。２月24日には、２区全域の包含層掘削を終え、同27日には２区東半部（128k540mライン以東）の包含層掘削後の３者立会いを行い、遺構掘削・記録作業に移行した。遺構掘削作業の進展に伴い、２区北部で検出されていた大型溝状遺構が、出土遺物等から弥生時代中期中葉に遡る環濠であろうことが判明した。３月16日には２区の128k540mライン以東128k460mライン以西の範囲における遺構掘削作業を終え、同18日にこの範囲におけるラジコンヘリコプターによる空中撮影・写真測量を実施した。平成20年度の調査では、２区の128k460mライン以東の遺構については未掘の状態であり、この範囲の遺構掘削作業については平成21年度本調査にもち越されることになった。３月26日には、沼津市主催の沼津駅周辺総合整備事業現地視察が実施され、栗原裕康沼津市長、沼津市議会議員、沼津市職員の計32名からなる視察団が現地の視察を行った。

２．平成21年度本調査

平成21年度の本調査は、１区・２区の中間に位置する市道2551号線直下の３区での調査から開始された。４月22・23日に重機による表土除去を行い、同24日には３者立会いによる表土除去後の土量測点の測量確認を実施した。なお、盛土の除去を静岡県沼津土木事務所が施工し、あらかじめ土量測点を確認していたため、表土除去前の測量確認を３者立会いのもとで実施することはなかった。３区の調査では市道2551号線直下を掘削するため、調査期間中は市道2551号線に代わる迂回路を設営する必要が生じた。市道2551号線に接続する第３小諏訪踏切付近は迂回路を切り回すと車両通行が不可能となるため、できる限り早急に調査区の南端の調査を終えて市道を復元し、通行止めになる期間を短縮する必要があった。このため、調査区を南北に２分割したうえで、第３小諏訪踏切に隣接する調査区南半部を先行して調査した。４月27日より３区南半部の包含層掘削を開始した。５月１日には包含層掘削を終え、３者立会いを行った。立会い後の協議によって、３区と隣接する１区との境界が検出できず、３区と１区の境界を確認する必要が生じた。この確認は、調査区を横断する道路等の切り回し工事を終えた時点で実施することとなった。同11日には遺構掘削に着手する。翌12日には遺構掘削を終え、同13日にはラジコンヘリコプターによる空中撮影・写真測量を実施、同14日には静岡県教育委員会による遺構掘削後の作業内容証明立会いを行い、３区南半部における調査を終了した。調査区北半部における調査は５月14日から21日までに包含層掘削を行い、同25日に３者立会いを行った。同26日に遺構掘削を行い、翌27日にはラジコンヘリコプターによる空中撮影・写真測量を実施、同29日には遺構掘削後の３者立会いを行い、３区北半部における調査を終了した。３区と１区との境界を確認するための調査（以下「拡張調査部分」と

写真１　重機による表土除去

写真２　人力による遺構掘削

略称）は、７月７日より着手し、人力による表土除去を行う。翌８日には表土除去を終え、同13日から14日まで包含層掘削を行った。包含層掘削後、拡張調査部分からは遺構が全く検出されなかったため、同14日をもって拡張調査部分における掘削作業を終了した。同17日には静岡県教育委員会による作業内容証明立会い、同23日にはラジコンヘリコプターによる空中撮影・写真測量を実施し、３区での全ての調査を完了した。

６月には平成21年３月18日以来中断されていた２区での調査が再開された。調査対象範囲は、２区の内、遺構が未掘状態にある128k460mライン以東の範囲（3,173㎡）にあたる。６月22日には３者立会いによって遺構掘削前の現地の状況が確認された。また、同日から掘削準備と遺構掘削・記録作業を開始した。７月18日には、地元住民を対象とした西通北遺跡の現地説明会を開催した。現地説明会の周知は近隣５町内会の各町内会長に調査担当者作成の「お知らせ」を回覧して頂けるようお願いするにとどまったが、当日来訪した見学者は78名を数えた。同30日にはパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、環濠を対象に自然科学分析を行うための試料採集を現地にて実施した。８月６日に、当研究所の保存処理室によって環濠の土層剥ぎ取り作業が行われた。同17日までに２区の遺構を完掘した。翌18日にラジコンヘリコプターによる空中撮影・写真測量を、同19日にはローリングタワーからの調査区全景撮影を実施した。同20日に沼津市主催の沼津駅周辺見学ツアーが実施され、親子連れが現地を訪れ、遺跡見学を行った。同25日には遺構掘削後の３者立会いを行い、平成20年度から続いた２区での調査を全て完了した。10月17日には、当研究所と静岡県教育委員会主催の平成21年度遺跡調査報告会「静岡の原像を探る」が静岡県立美術館講堂で開催され、「東駿河の弥生時代の始まり～西通北遺跡～」と題した発表を担当者が行い、遺跡の周知を図った。

４区は工場跡地の直下にあたり、工場移転後の盛土除去から着手することになった。９月中は４区調査の事前準備等を行い、10月21日に盛土除去前の３者立会いを実施した。翌22日より重機による盛土除去を開始し、同29日にこれを終えた。翌30日の盛土除去後の３者立会いを受け、11月２日より重機による表土除去を開始し、同６日にこれを終えた。同９日には表土除去後の３者立会いを行い、同12日には包含層掘削を開始した。包含層掘削作業を進める中で、当初設定されていた調査対象範囲（128k363mライン以西）の北東隅で東西方向に横断する溝状遺構が検出された。溝状遺構が設定された調査区のさらに東側に延伸していることから、同30日に静岡県沼津土木事務所・静岡県教育委員会・当研究所の３者による現地協議を行った。協議では、溝状遺構がやや北に進路をとりながらも、調査区外の東側へのびていることを受け、調査区東端を一部拡張して調査を実施することになった。調査区内、溝状遺構の検出状況、沼津市教育委員会が行った確認調査の成果、調査区内での遺物の出土状況をふまえ、調査区東端である128k363mラインを基点に東西約10m、南北約９ｍを拡張して調査した。しかし、溝状遺構がさらに東側に延伸していることが判明したため、最終的には調査区東端である128k363mラインを基点に、

写真３　現地説明会（遺構解説）

写真４　現地説明会（遺物展示解説）

東西約24m、南北約９ｍの面積221㎡を拡張部として調査した。12月10日に包含層掘削後の３者立会いを実施し、同14日から遺構掘削・記録作業を開始した。同18日には遺構掘削を終え、同21日には調査区全体のラジコンヘリコプターによる空中撮影・写真測量を実施した。同24日には３者立会いのもと、遺構掘削後の現地確認を実施した。

12月21日には空中撮影等を行うとともに、現地の撤収作業にも着手した。同日にベルトコンベアや水中ポンプ、ローリングタワーといった現地設営資材と0.25㎥バックフォーの回送を行った。また、同21日には野外電気設備の工事を実施したうえで、同24日に200V用（ベルトコンベア・水中ポンプ用）と100V用配電盤の撤去作業を行った。年明けの１月７・８日には現地周辺の仮設フェンスの撤去作業を行い、同12～14日に現地プレハブ事務所が解体・撤去された。同15日に撤収後の現地の状態を静岡県沼津土木事務所立会いのもとで確認を行い、現地からの撤収を完了した。

３．資料整理

平成21年12月４日より、現地撮影写真の整理や遺構実測図面の整理等、すでに数量が判明している作業については、西通北遺跡発掘調査事務所内で着手した。12月24日には、３者立会いにより、出土遺物本整理の着手前段階における作業内容証明を受けた。平成22年１月18日より、研究所本部にて本格的な出土遺物整理作業に着手した。出土遺物の分類・仕分け・接合作業を行い、出土土器については一部、復原作業を実施した。金属製品については、保存処理を施したうえで、石器や土製品とともに実測作業を行った。３月前半には平成21年度実施分の資料整理を終え、３月８日には、３者立会いによる作業数量確認と内容確認を受けた。

平成22年５月25日より資料整理を再開、６月14日に３者立会いにより、平成22年度の出土遺物本整理の着手前段階における作業内容証明を受けた。遺構図の作成に関しては、デジタルデータ化された遺構実測図面をもとに、Adobe Illustrator CS3を使用してデジタル編集・版組を実施した。７月１日より、研究所本部にて本格的に出土遺物整理作業を再開した。出土土器の復原・実測作業を行い、木製品については、保存処理を施したうえで、実測作業を行った。実測を終えた出土遺物は、トレース・版組作業を進めるとともに、遺物写真撮影や観察表作成、報告書の原稿執筆を併行して行った。

写真５　土器復原作業

写真６　土器実測作業

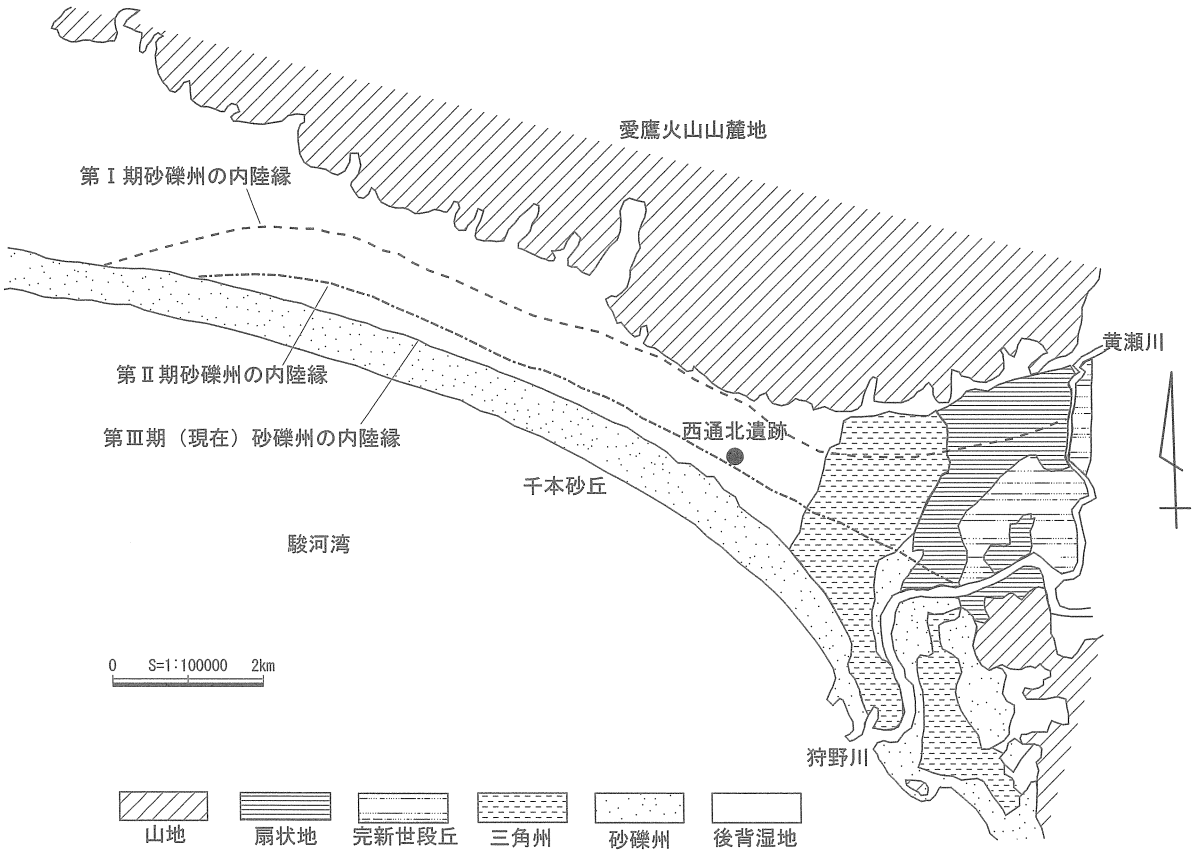
第１表　本調査・資料整理工程表

年	平成20年							平成21年												平成22年												平成23年		
月	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
１区調査	―	―	―	―	―																													
２区調査					―	―	―	―	―	―			―	―	―																			
３区調査											―	―	―	―																				
４区調査																―	―	―	―	―														
資料整理																			―	―	―	―		―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―

第Ⅱ章　位置と環境

第１節　遺跡の立地と地理的環境

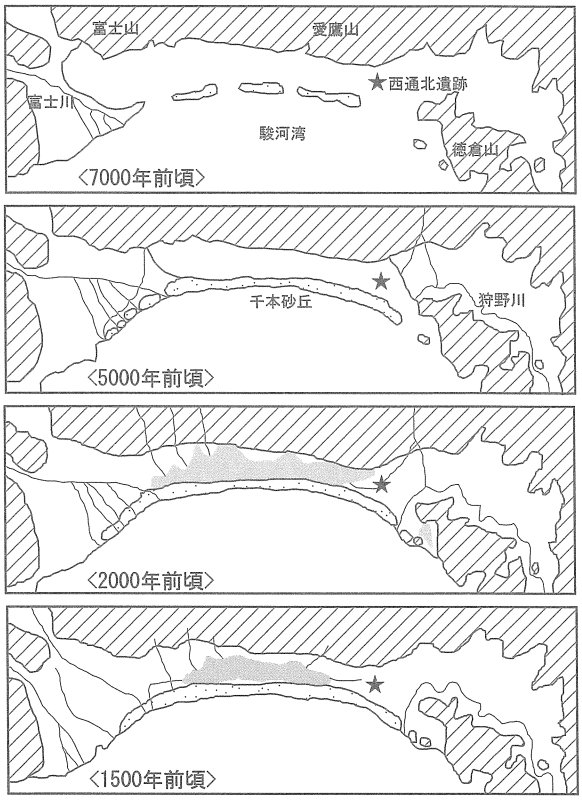
西通北遺跡は、静岡県沼津市大諏訪・小諏訪に所在し、JR東海道本線沼津・片浜駅間のほぼ中間に位置している。本遺跡周辺は、南は千本浜、北は愛鷹山をのぞむ標高６ｍ程の低地で、浮島ヶ原と呼ばれる低湿地帯の東縁にあたる。浮島ヶ原は、富士山・愛鷹山南麓の東西方向に細長く発達し、海岸部の砂礫州と後背湿地で形成される。現在の海岸砂礫州の内陸側には埋没砂礫州が存在し、砂礫州は内陸側から順にⅠ・Ⅱ・Ⅲの３列に区分される。10,000年程前には、現在の愛鷹山南麓付近まで駿河湾の海水が深く入り込み、浮島ヶ原周辺も海中に没していたとされる。その後、富士川と駿河湾の沿岸流により運ばれた砂礫の堆積で形成された千本砂丘（砂嘴）が、駿河湾と愛鷹山南麓との間を遮断し始めた。最も内陸側の第Ⅰ期砂礫州は8,000年程前から堆積を始め、6,000年程前には離水したとされる。この段階では、現在の後背湿地は依然として海域の部分が多く、海水の影響を受けていたことが想定される。5,000年程前には、海側の第Ⅱ期砂礫州が発達し、砂礫州と愛鷹山南麓との間に潟湖が形成される。この潟湖がいわゆる浮島沼の原形である。第Ⅱ期砂礫州が完成した4,000年程前には、富士川や愛鷹山塊から南下する諸小流の影響によって潟湖は次第に埋め立てられ、沼沢地化していった。現在の内陸縁と一致する第Ⅲ期砂礫州は、その後発達し、2,000年程前に完成した。これにより周辺の湿地化が進むこととなる。潟湖を埋め立てた愛鷹山塊の諸小流の内、沼川は流路を大きく変え、現在は西通北遺跡の北側に位置し、国道１号線沿いに東西へ流れている。



第４図　周辺地質図（松原2000をもとに作成）

西通北遺跡の周辺は、浮島ヶ原の中心地よりはやや東に外れた地点に位置することから、浮島ヶ原の中では、比較的早い段階に陸地化したと考えられる。とはいえ、本遺跡周辺も3,000年程前までは入江状の水域であったことが推測され、弥生時代以降、安定した低地になっていったものと思われる。それを示すかのように、本遺跡からJR東海道本線の線路を挟んで南側には西通遺跡・中通遺跡・軒通遺跡といった弥生・古墳時代の遺跡が点在するなど、陸地化後の人々の活動の痕跡が残されている。

上記のような特殊な地理的環境下で形成された地域に西通北遺跡は立地している。本遺跡周辺は地形区分では後背湿地にあたるものの、東隣は三角州、南隣は砂礫州、北側は山地と地形の境目に近い箇所に位置していると言えよう。そのため、遺跡付近から僅かに南北あるいは東に移動するだけで、周囲の地質や土壌の様相は大きく異なったものになることが想定される。



第５図　浮島沼周辺の地形の変遷
（大野ほか編1961をもとに作成）

参考文献

大野虎雄ほか編　1961　『沼津市誌』上巻　沼津市
久松義昭編　1984　『浮島沼と米づくり』　富士市立博物館
松原彰子　1992　「静岡県浮島ヶ原・雌鹿塚遺跡における自然環境と人間活動の変遷」『第四紀研究』第31巻第４号　日本第四紀学会
松原彰子　1999　「海岸低地の地形発達過程と人間活動の変遷―駿河湾沿岸地域を例にして―」『慶應義塾大学日吉紀要社会科学』第10号　慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
松原彰子　2000　「日本における完新世の砂州地形発達」『地理学評論』第73巻第５号　日本地理学会

第２節　歴史的環境

西通北遺跡の位置する後背湿地、その周縁にあたる駿河湾沿いの千本砂礫州上や愛鷹山南麓には、多くの遺跡が認められている。前節でも触れたように、千本砂礫州やその北側の後背湿地には、縄文時代以前の遺跡は僅かしか認められないが、弥生時代以降の遺跡は数多く認められる。

１．縄文時代以前

旧石器時代の遺跡としては、２枚の文化層とナイフ形石器群・細石器群が発見された中沢田円丸遺跡が、愛鷹山南麓に展開する旧石器時代遺跡群の中でも、やや南寄りに位置している。

縄文時代の遺跡は、旧石器時代の遺跡同様、愛鷹山南麓を中心に展開するため、千本砂礫州や後背湿地での分布は乏しい。西通北遺跡の所在する片浜地区からやや西に離れた原地区になるが、砂礫州上に立地する縄文時代遺跡として鳥沢遺跡、湿地に立地する遺跡として雌鹿塚遺跡・雄鹿塚遺跡があげられ

1	西通北遺跡	11	中通遺跡	21	下小路遺跡	31	春ノ木遺跡	41	子ノ神遺跡	51	長塚古墳
2	東畑毛遺跡	12	中溝遺跡	22	千本遺跡	32	久保遺跡	42	子ノ神古墳	52	沢田神明塚古墳
3	神明塚古墳	13	松下町遺跡	23	沼津城跡	33	小屋敷遺跡	43	善治海道遺跡	53	漆畑遺跡
4	松長上ノ段遺跡	14	沢田遺跡	24	上ノ段遺跡	34	東椎路神明古墳	44	中沢田円丸遺跡	54	入方遺跡
5	松長古墳群	15	丸子町遺跡	25	東久保遺跡	35	東荒遺跡	45	伊勢塚古墳	55	開戸遺跡
6	伴名田遺跡	16	錦町遺跡	26	東久保古墳	36	川向遺跡	46	田端遺跡	56	辻畑古墳
7	叶遺跡	17	双葉町遺跡	27	目黒身遺跡	37	大林遺跡	47	道尾塚古墳		
8	長条遺跡	18	白銀町遺跡	28	西椎路山ノ神古墳	38	後藤屋敷跡	48	道尾塚経塚		
9	軒通遺跡	19	常盤町遺跡	29	中尾神明宮遺跡	39	尾崎遺跡	49	山神道古墳		
10	西通遺跡	20	稲荷塚古墳	30	芝切遺跡	40	稲荷林遺跡	50	長塚遺跡		

第６図　周辺の遺跡分布図

る。いずれの遺跡でも、明確な縄文時代の遺構は検出されなかったものの、縄文時代後期から晩期にかけての土器と石器が集中して出土している。

旧石器時代から縄文時代にかけては、千本砂礫州やその後背湿地が、一部水域であったり陸地化後間もない状態であったりしたため、人々の暮らしの場として定着せず、その生活範囲の中心は依然として愛鷹山南麓であったことが考えられよう。

2．弥生時代

弥生時代以降、千本砂礫州やその後背湿地も安定した人々の生活圏内になったようで、住居址等の遺構も認められ始める。弥生時代から古墳時代の遺跡として、西通北遺跡の南隣には、西通遺跡・中通遺跡・軒通遺跡の３遺跡の存在が知られている。軒通遺跡は土砂採集工事によって弥生時代中期後葉（有東式併行期）の壺形土器十数個体が完全な形で発見された。低地への人々の進出が弥生時代中期にまで遡ることは確実と言えよう。伴名田遺跡は掘立柱建物跡や溝跡が検出された弥生時代後期の集落跡である。長条遺跡・中溝遺跡からは、弥生時代後期の水田に伴う柵列や木杭が発見されるなど、居住域のみならず食糧生産に関わる生産域の痕跡も見つかっている。愛鷹山南麓の台地の裾には、弥生時代中期後葉から古墳時代前期の集落跡として著名な目黒身遺跡が立地する。弥生時代後期の住居址や畠跡、古墳時代前期の方形周溝墓等が検出された。また、黄瀬川の古い自然堤防上に立地する沢田遺跡からは、弥生時代後期前半の住居址や井戸跡、水田跡が検出されるとともに、土器・石器・鉄器・木製品といった多様な遺物が出土した。

西通北遺跡の周辺では、弥生時代中期段階から人々の生活の痕跡が認められ始め、定住の基盤が固められたものと思われる。弥生時代後期段階に住居址や畠跡、水田跡といった居住域と生産域が確保されたことは、本格的な定住生活の始まりと集落の確立を意味するものと考えられる。弥生時代終末期から古墳時代前期にかけては、目黒身遺跡で検出されたような方形周溝墓による墓域の形成も認められる。

3．古墳時代

古墳時代の集落跡としては、千本砂礫州上に立地する叶遺跡や松長上ノ段遺跡があげられる。これらの集落跡に隣接して千本砂礫州上には、十数基の円墳（古墳時代後期の群集墳）によって構成される松長古墳群が展開している。また、松長古墳群中には、沼津市内最大にして最古の前方後円墳である神明塚古墳も含まれている。神明塚古墳は、墳丘長54mの前方後円墳で、墳丘や周溝から古墳時代前期に遡る土器片が出土している。一方、愛鷹山南麓にも、古墳時代前期の前方後方墳である辻畑古墳が築造される。後続する古墳時代中期から後期にかけても、集落跡として尾崎遺跡・入方遺跡が、子ノ神古墳・長塚古墳といった前方後円墳が存在する。黄瀬川扇状地の末端には、古墳時代後期の祭祀遺跡として知られる丸子町遺跡が立地し、石製模造品や多数の土器類が出土した。

古墳の立地環境は、神明塚古墳・松長古墳群といった千本砂礫州上に展開する低地の古墳と、辻畑古墳・子ノ神古墳・長塚古墳といった愛鷹山南麓に展開する高地の古墳の二者が認められる。各古墳の付近には小規模ながらも同時期の集落跡が認められる場合が多く、それぞれに一定規模の集団とその首長が存在していたことが考えられる。

4．古代

古代の遺跡分布は古墳時代までと一転して、千本砂礫州や後背湿地、黄瀬川扇状地といった低地での展開が目立つようになる。千本砂礫州上の東畑毛遺跡は、古墳時代後期から平安時代にかけての集落跡で、住居址や掘立柱建物跡が検出されるとともに、９世紀代の緑釉陶器片や墨書土師器（判読不明）が

出土した。双葉町遺跡からは、平安時代の土師器（「有」の字）と灰釉陶器（「本」の字）の中に墨書が認められた。

現在のJR沼津駅北口周辺に位置する上ノ段遺跡では、８世紀前半から10世紀にかけての住居址や掘立柱建物跡が多数検出された。特筆すべき出土遺物として、８世紀前半代の唐三彩の陶枕があげられる。上ノ段遺跡の北東に位置する日吉廃寺は、安倍郡（静岡市）に駿河国分寺が造営されるまでは、駿河国における最大級の伽藍を誇っていたと言われている。遺構配置や特殊遺物の出土、日吉廃寺の存在等から、上ノ段遺跡は郡家の機能の一部を担う官衙関連遺跡であった可能性が考えられる。愛鷹山南麓には、詳細は不明だが、平安時代末期から鎌倉時代にかけての経塚である道尾塚経塚の存在が知られている。

沼津市一帯は古代の国郡制において駿河国駿河郡に属していた。駿河郡家に直接関係する遺跡の存在は未だに知られていないが、上ノ段遺跡や日吉廃寺の存在から、現在のJR沼津駅付近に駿河郡家が存在していた可能性は高いと考えられる。官道である古代東海道は、富士郡柏原駅から海岸沿いに現在の沼津市街地を通って駿河郡家と繋がっていたことが想定され、古代東海道の路線上あるいはその周辺に位置する西通北遺跡でも、古代の人々の往来は盛んであったと思われる。

５．中世

中世における駿東（駿河国東部）地域は、基本的に今川氏の領国であったが、中世後期（戦国時代）になると、後北条氏の領国の西の境目に接する地域となり、武田氏や徳川氏も含めた抗争の地となり、支配者がめまぐるしく変化している。今川氏が長らく治めてきた駿東地域は、天文６年（1537年）の後北条氏による駿河侵攻（河東一乱）によって一時的に後北条氏の支配地とされる。天文14年（1545年）には、武田氏の仲介によって今川氏と後北条氏との間で和議（駿相一和）が成立し、今川氏が駿東地域の領土を回復した。今川義元の桶狭間での敗死後、永禄11年（1568年）に駿河に侵攻した武田氏によって駿東地域は支配されるが、天正10年（1582年）に武田氏が滅ぶと、徳川氏によって治められた。

根古屋の興国寺城は伊勢宗瑞（北条早雲）旗揚げの城として著名であるが、少なくとも現在残る城跡は天文18年（1549年）に今川義元によって築城が開始されたものとされる。城跡の保存事業の本格化に伴い、発掘調査が実施され、南北に連続する本丸・二の丸・三の丸を中心とした縄張りの全容が把握されている。また、西沢田の後藤屋敷跡は今川氏配下の在地土豪勢の一員である後藤氏の屋敷跡として、土塁や礎石の一部が残存している。大手町・上土町一帯に広がっていた三枚橋城は、天正７年（1579年）に武田勝頼による築城とされている。外堀の一部が発掘調査され、戦国時代末期から江戸時代初期の石垣が検出されている。

６．近世以降

江戸時代初頭の慶長19年（1614年）に三枚橋城は廃城となるが、江戸時代中期の安永６年（1777年）には沼津水野藩が成立し、三枚橋城の跡地を利用して沼津城が築造された。明治時代に入り沼津城は沼津兵学校の校舎として使用されたが廃校となり、明治５年（1872年）に城はその土地とともに競売にかけられ解体・売却された。その後、東海道本線開通に伴って沼津市街に南北縦貫道路が建設され、また沼津市内における２度の大火が発生したことにより堀が完全に埋められることになった。現在では城の痕跡は認められず、僅かに城に関する地名が残るのみである。

参考文献

安藤広道　2002　「静岡県沼津市東椎路久保出土の弥生土器について」『民俗考古』第６号　『民俗考古』編集委員会

小野真一　1957「沼津市灰塚遺蹟と軒通遺蹟について」『静岡県東部古代文化総覧』　蘭契社
小野真一　1983「富士周辺における弥生・古墳時代の集落立地の変動について―弥生末海進の提起―」『駿豆考古』第25号　駿豆考古学会
近藤舞　2000「駿豆地方の弥生時代中期後半の遺跡群」『静岡県考古学研究』32　静岡県考古学会
設楽博己　1994「沼津市雌鹿塚遺跡の縄文晩期土器」『沼津市史研究』第３号　沼津市教育委員会
高尾好之・山本惠一・渡井英誉　2010「静岡県沼津市発見の辻畑古墳」『邪馬台国時代の東海と近畿』資料集 ふたかみ邪馬台国シンポジウム10　香芝市教育委員会
竹内直文　1988「東日本における弥生文化の発展―静岡県の土器編年を中心として―」『史館』第20号　弘文社
中野國雄　1987「静岡県に於ける弥生時代遺跡の分布と立地についての予察」『静岡県考古学研究』20　静岡県考古学会
原秀三郎ほか編　2004『沼津市史』資料編 考古　沼津市
原秀三郎ほか編　2007『沼津市史』通史編 原始・古代・中世　沼津市
向坂鋼二　1987「考古学的方法における静岡県の地域区分」『静岡県史研究』第３号　静岡県
沼津市教育委員会編　1987『沼津市埋蔵文化財分布地図』

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　遺構と遺物の概要

調査では、大小合わせて205基の遺構が検出された。出土遺物からこれらの遺構の時期は、弥生時代と奈良・平安時代、近世以降に大きく分けられるが、僅かながら縄文時代以前と古墳時代、中世の遺物も出土している。このことから、西通北遺跡において縄文時代以前から近世に至るまで、断続的に人為的活動があったことが窺える。

本書で扱う遺構は、環濠・溝状遺構・土坑・小穴・土坑列・池状遺構の６種である。溝状の遺構の内、円弧状の平面形態、U字形ないしは逆台形の断面形態をもち、幅が２ｍ以上、深さが１ｍ以上の大規模なものを環濠とし、それ以外のものを溝状遺構とした。穴状の遺構の内、長径0.5m以上のものを土坑、長径0.5m未満のものを小穴とした。同一の覆土をもつ土坑・小穴群が並んだものを土坑列とした。周囲に木杭列をもち、溝状遺構と土坑を組み合わせたような不定形な形状を呈すものを池状遺構とした。なお、資料整理の過程で、遺構番号を付け直しているため、第５表に新旧遺構番号対照表を示した。

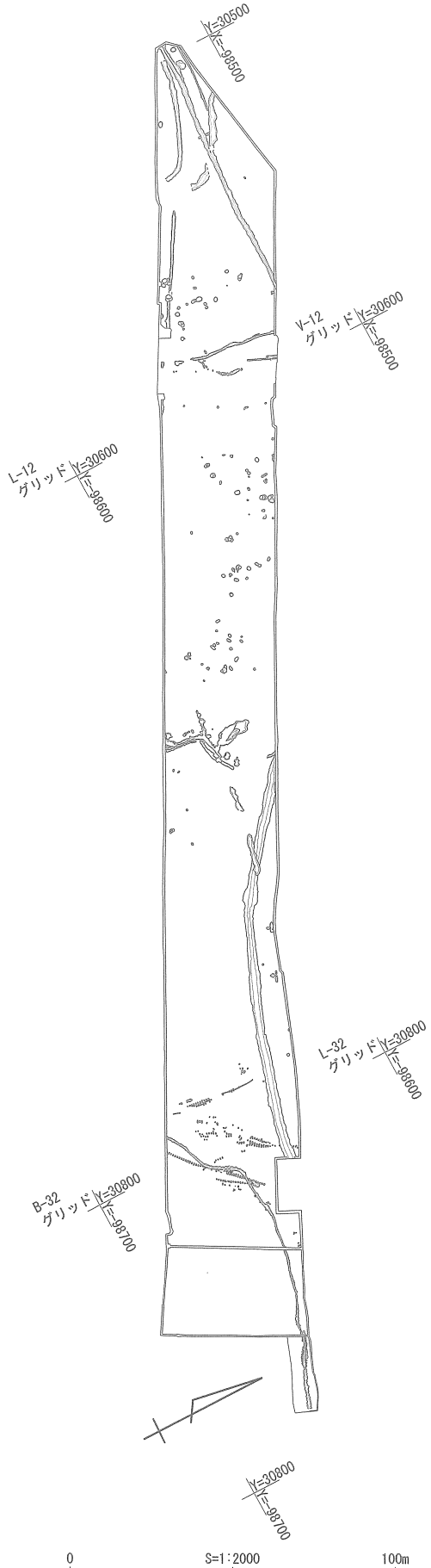
遺構は全て同一面上で検出され、遺構内覆土のみによって時期的な区分を行えるだけの差異は見出しがたい。また、土坑や小穴の並びから、明確に建物の平面形を捉えることはできなかった。したがって、ここでは出土遺物や遺構の切り合い関係等から帰属時期を捉えることができた遺構72基について報告する。帰属時期が判明した遺構の内、弥生時代の遺構としては、環濠１条・土坑５基・土坑列１基の計７基が認められた。奈良・平安時代の遺構としては、溝状遺構12条・土坑20基・土坑列７基の計39基が認められた。近世以降の遺構としては、池状遺構１基・溝状遺構９条・土坑15基・土坑列１基の計26基が認められた。帰属時期不明の土坑（41～157号土坑）と小穴（１～16号小穴）については個別に詳述しないが、弥生時代から近世以降の土坑とともに、計測値を第６表にまとめた。

出土した遺物は、現地にて収納用コンテナ25箱程を数えた。土器・土製品・石器・木製品・金属製品・炭化物の６種が出土し、図化し得たものは、土器431点、土製品３点、石器11点、木製品４点、金属製品10点の計459点である。また、図化し得なかった中世陶磁器の破片22点に関しては、巻頭図版８に写真を掲載した。これらを含めた481点の報告書掲載遺物に関する所見は全て第７～12表の観察表にまとめた。

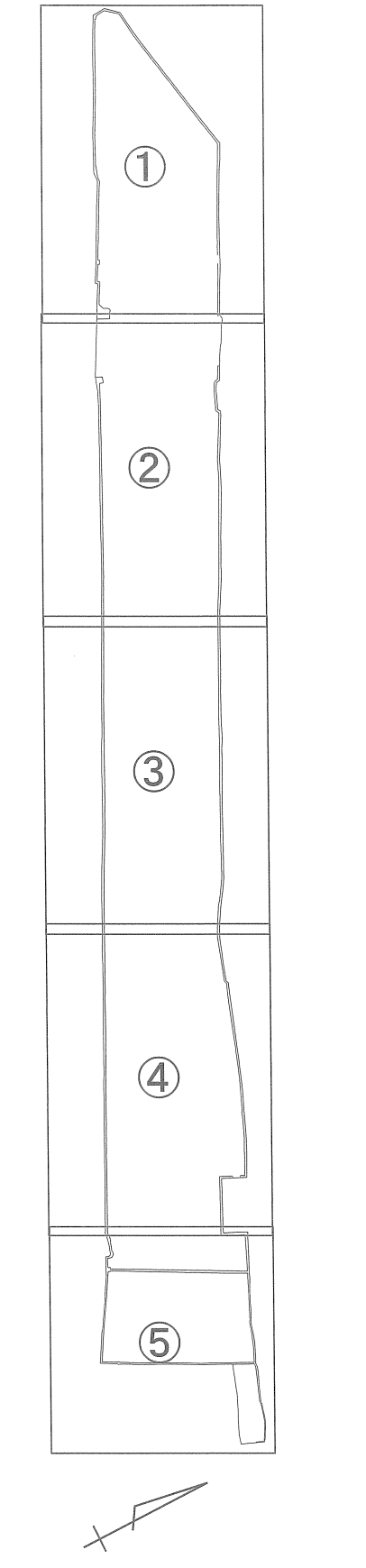
第14図は、遺構検出面直上や遺構の底直上で出土した土器の分布を示したものである。調査区内の出土土器には種別ごとに分布に偏りが認められることが分かる。調査区西側の１～５号溝状遺構付近では土師器と須恵器が濃密に分布している。一方、弥生土器の分布は調査区北側の環濠とその周辺での分布が顕著で、他の場所での出土はほぼ認められない。調査区西側は奈良・平安時代、東側は弥生時代を中心とした生活域であったことが考えられる。遺構の広がりや遺物の分布に関して、弥生時代と奈良・平安時代とで重なり合う領域がほとんど認められないことから、同一事業の発掘調査として便宜上１遺跡に括られてはいるものの、西通北遺跡は本来、時期も集落の中枢となる場所も全く異なる複数の遺跡に分かれている可能性が高い。環濠の位置や平面形態から、調査区のさらに北側には弥生時代中期中葉の環濠集落が、さらに西側には奈良・平安時代を中心とした集落が展開していたことが推定される。

遺構内で特に遺物が集中的に認められた箇所については「遺物集中」として取り扱い、遺物出土状況図（第24～27・45～47・52図）を作成した。対象となった遺構と箇所は、弥生時代の環濠（４箇所）、奈良・平安時代の３号溝状遺構（３箇所）と５号溝状遺構（１箇所）の３遺構８箇所である。遺物出土状況図は、環濠については平面分布図と垂直分布図（遺構の上端と下端はエレベーション）、溝状遺構については平面分布図とエレベーション図を掲載している。

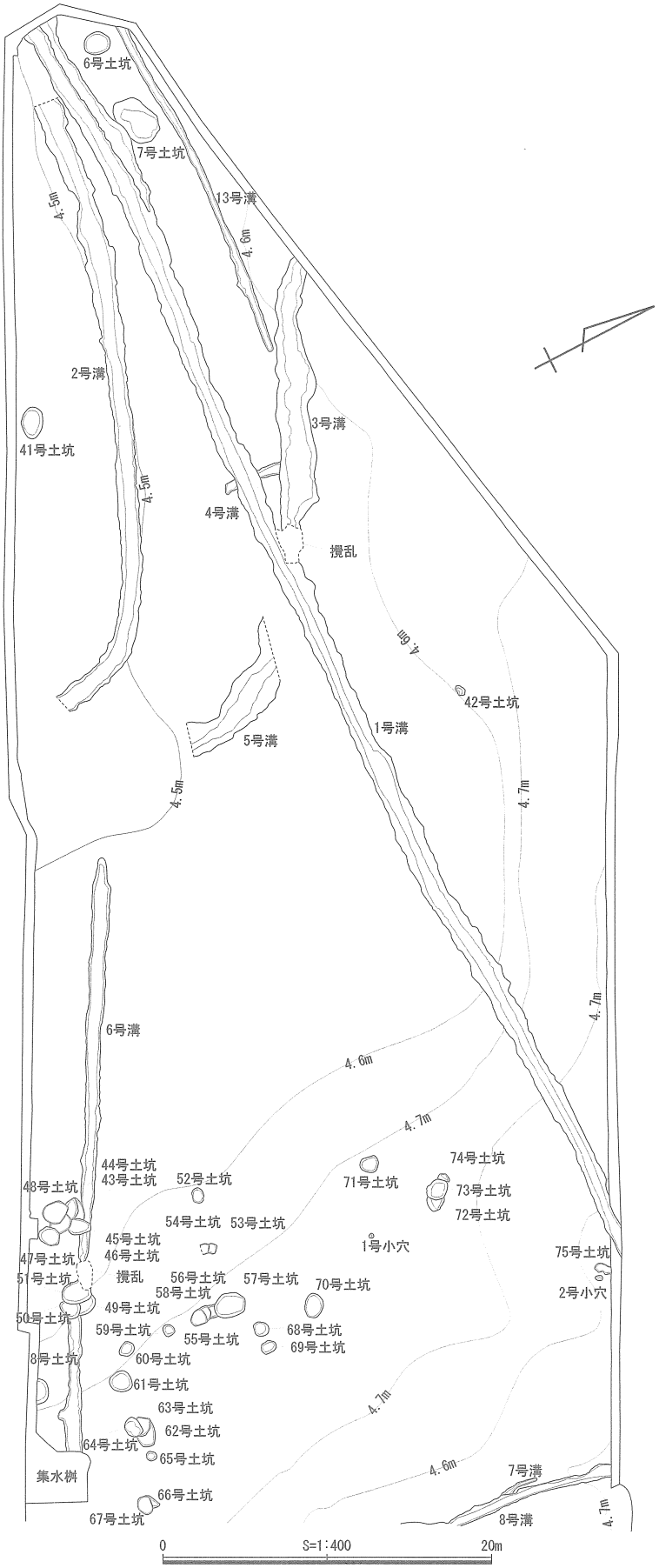
調査区内における遺構の分布は偏在しており、調査区西側および東側に奈良・平安時代の溝状遺構が、



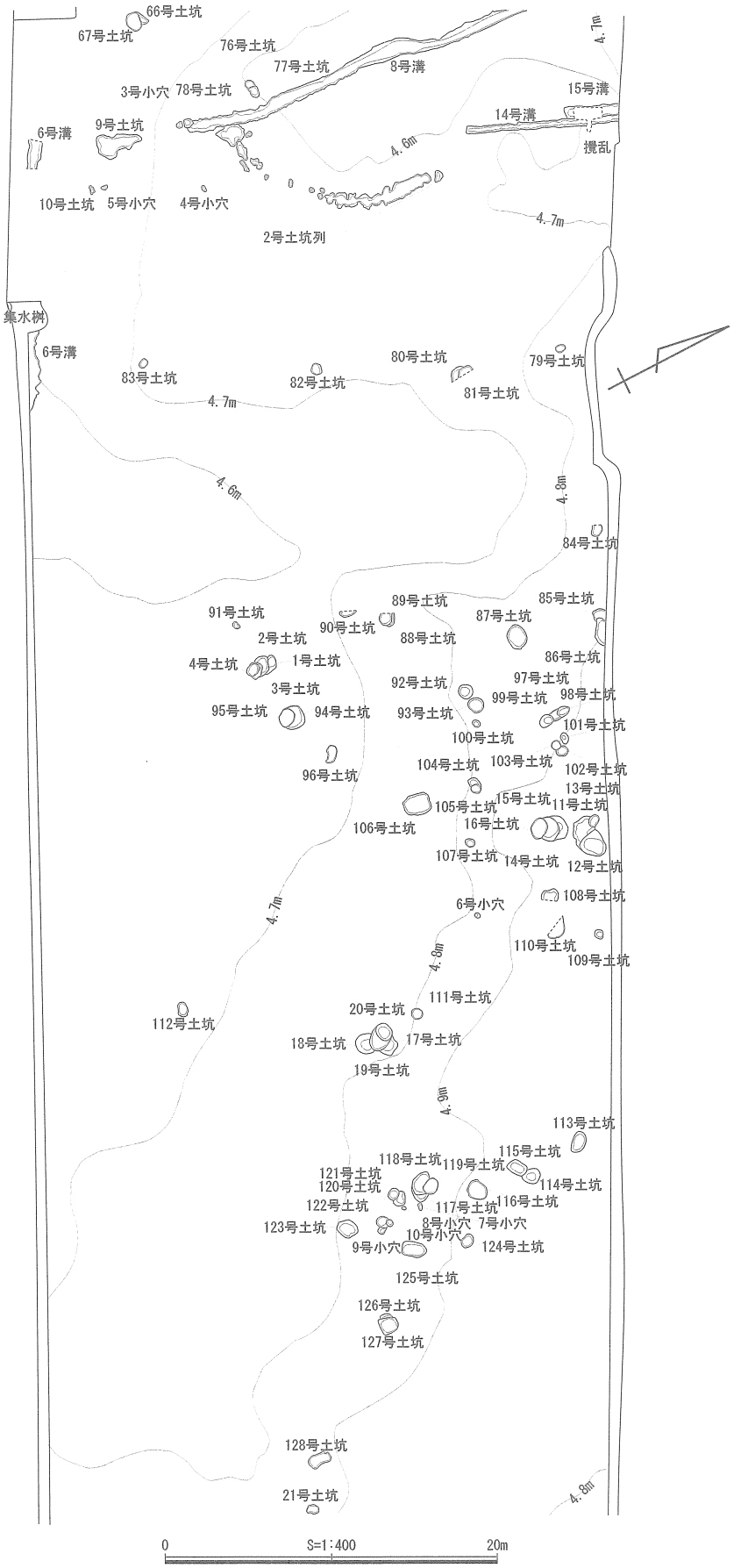
第７図　調査区全体図



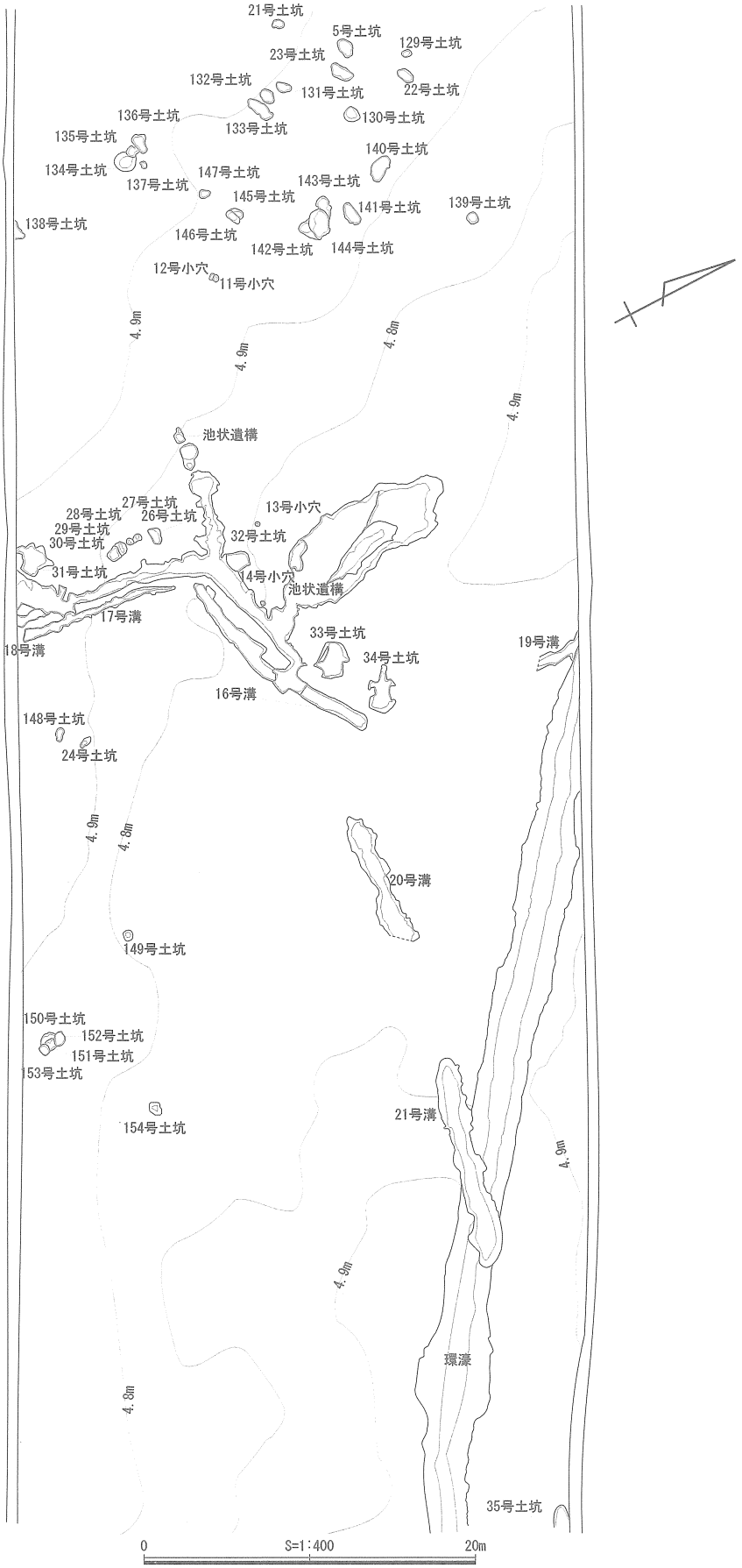
第８図　遺構配置図割付図


6号土坑
7号土坑
13号溝
4.6m
4.5m
2号溝
3号溝
41号土坑
4.5m
4号溝
攪乱
4.6m
42号土坑
1号溝
5号溝
4.5m
4.7m
6号溝
4.7m
4.6m
4.7m
74号土坑
44号土坑
43号土坑
52号土坑
71号土坑
73号土坑
48号土坑
72号土坑
54号土坑
53号土坑
45号土坑
1号小穴
75号土坑
46号土坑
47号土坑
攪乱
56号土坑
57号土坑
70号土坑
51号土坑
58号土坑
2号小穴
49号土坑
50号土坑
59号土坑
55号土坑
68号土坑
69号土坑
8号土坑
60号土坑
61号土坑
4.7m
63号土坑
62号土坑
64号土坑
65号土坑
集水桝
4.6m
7号溝
66号土坑
67号土坑
8号溝
4.7m
0
S=1:400
20m

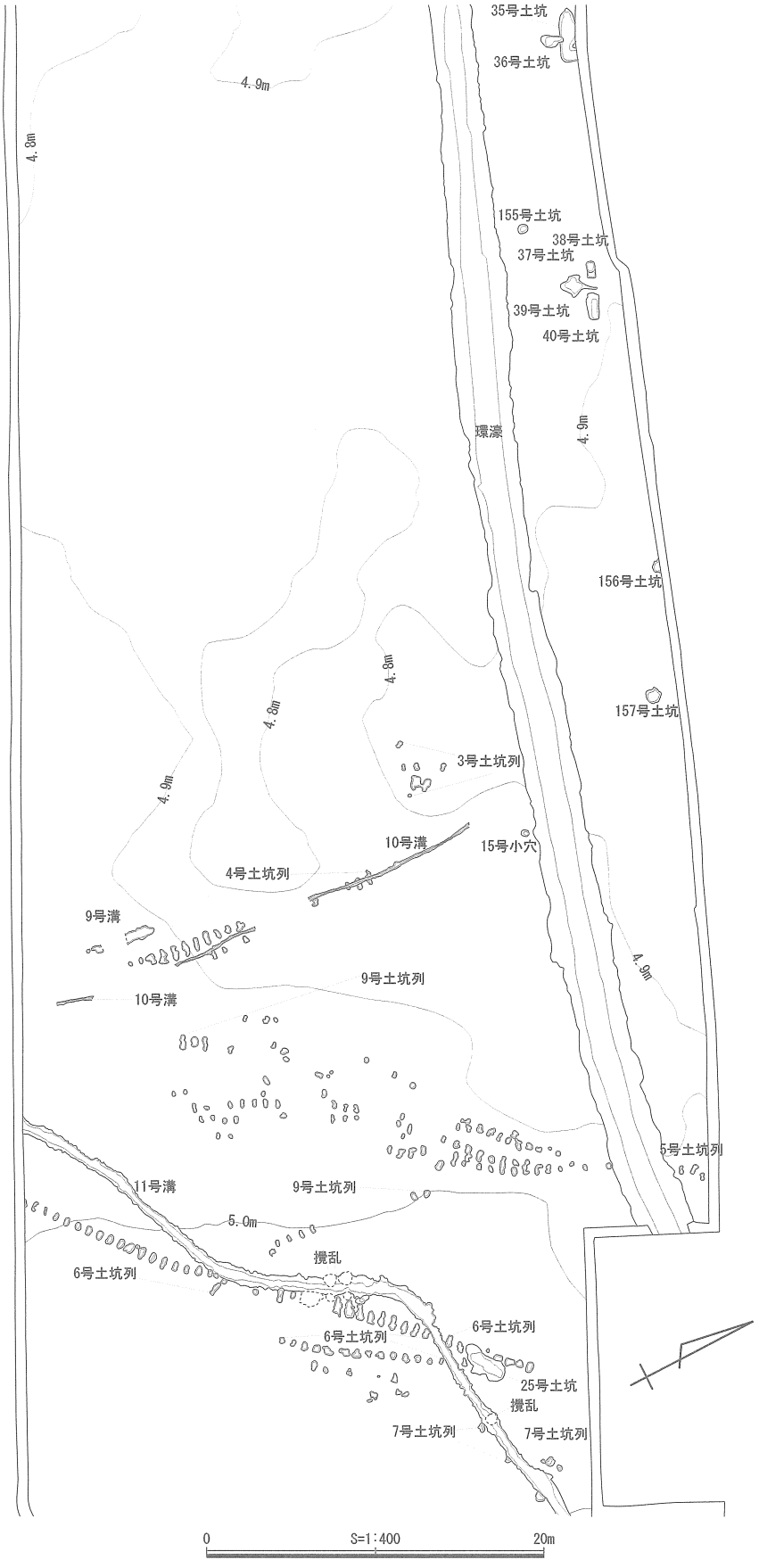
第９図　遺構配置図①


66号土坑
67号土坑
76号土坑
77号土坑
8号溝
3号小穴
78号土坑
15号溝
14号溝
6号溝
9号土坑
4.6m
攪乱
10号土坑
5号小穴
4号小穴
4.7m
2号土坑列
集水桝
6号溝
80号土坑
79号土坑
83号土坑
82号土坑
81号土坑
4.7m
4.6m
4.8m
84号土坑
89号土坑
85号土坑
91号土坑
87号土坑
90号土坑
2号土坑
88号土坑
86号土坑
4号土坑
1号土坑
97号土坑
92号土坑
3号土坑
99号土坑
98号土坑
95号土坑
94号土坑
93号土坑
101号土坑
100号土坑
96号土坑
104号土坑
103号土坑
102号土坑
13号土坑
15号土坑
105号土坑
11号土坑
106号土坑
16号土坑
107号土坑
14号土坑
12号土坑
108号土坑
6号小穴
4.7m
110号土坑
109号土坑
4.8m
111号土坑
20号土坑
112号土坑
18号土坑
17号土坑
19号土坑
4.6m
113号土坑
115号土坑
118号土坑
119号土坑
121号土坑
120号土坑
114号土坑
122号土坑
117号土坑
116号土坑
123号土坑
8号小穴
7号小穴
10号小穴
9号小穴
124号土坑
125号土坑
126号土坑
127号土坑
128号土坑
21号土坑
4.8m
0
S=1:400
20m

第10図　遺構配置図②


21号土坑
5号土坑
129号土坑
23号土坑
132号土坑
131号土坑
22号土坑
136号土坑
133号土坑
130号土坑
135号土坑
140号土坑
134号土坑
147号土坑
137号土坑
143号土坑
145号土坑
141号土坑
139号土坑
138号土坑
146号土坑
142号土坑
144号土坑
12号小穴
11号小穴
4.9m
4.9m
4.8m
4.9m
池状遺構
27号土坑
28号土坑
26号土坑
13号小穴
29号土坑
32号土坑
30号土坑
31号土坑
14号小穴
池状遺構
17号溝
18号溝
33号土坑
34号土坑
19号溝
16号溝
148号土坑
24号土坑
4.9m
4.8m
20号溝
149号土坑
150号土坑
152号土坑
151号土坑
153号土坑
154号土坑
21号溝
4.9m
4.9m
環濠
4.8m
35号土坑
0
S=1:400
20m

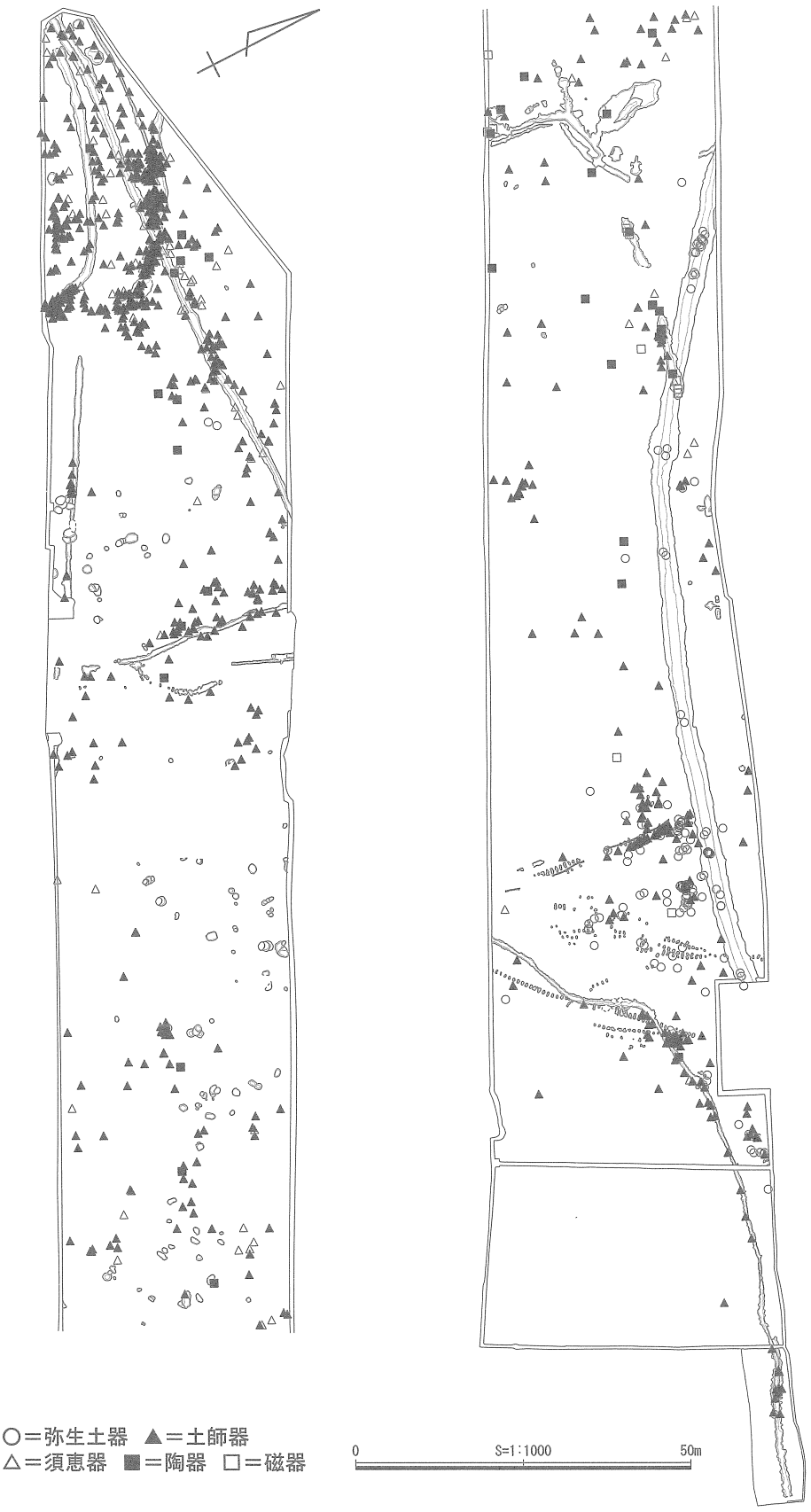
第11図　遺構配置図③


35号土坑
36号土坑
4.9m
4.8m
155号土坑
38号土坑
37号土坑
39号土坑
40号土坑
環濠
4.9m
156号土坑
4.9m
4.8m
157号土坑
3号土坑列
4.9m
10号溝
15号小穴
4号土坑列
9号溝
4.9m
9号土坑列
10号溝
5号土坑列
11号溝
9号土坑列
5.0m
攪乱
6号土坑列
6号土坑列
6号土坑列
25号土坑
攪乱
7号土坑列
7号土坑列
0
S=1:400
20m

第12図　遺構配置図④

第13図　遺構配置図⑤

調査区中央やや西寄りに土坑（帰属時期不明のものを含む）が、調査区中央やや東寄りに弥生時代の環濠と近世以降の池状遺構や溝状遺構が展開する。調査区西側では、１～６号溝状遺構が主に東西方向に延伸している。南北方向に延伸する８号溝状遺構付近を境に北西側には土坑の集中分布が認められる。ほとんどが出土遺物の認められない時期不明土坑であるが、土坑同士の切り合いは多く見受けられる。８号溝状遺構から東へ池状遺構に至るまでの間にも、調査区北側を中心に土坑や小穴の分布が目立つ。やはり時期不明土坑が多いが、１～５号土坑のように弥生時代に帰属する土坑も認められる。池状遺構の周辺には近世以降の溝状遺構や土坑が集中している。弥生時代の環濠は西端が近世以降の遺構の分布域とやや重なるものの、基本的には環濠周辺では、土坑や溝状遺構の分布は薄くなる。特に環濠の外側にあたる調査区南側はほぼ無遺構となる。環濠の東端付近から10号溝状遺構や９号土坑列といった奈良・平安時代や近世以降の遺構が認められ始め、環濠が調査区外へ姿を消す調査区東側では、11号溝状遺構やその周辺の土坑や土坑列など、主に奈良・平安時代の遺構が展開している。



第14図　調査区内出土土器分布図

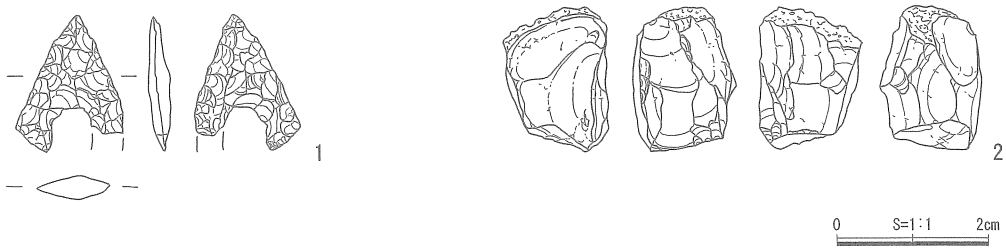
第２節　縄文時代以前の遺物

縄文時代以前の遺構は検出されず、遺物も石器が２点出土したのみである。第Ⅱ章第１節で触れたように、西通北遺跡周辺が2,000～3,000年前頃に海中から陸地化した経緯を踏まえれば、縄文時代以前の遺物の少なさも自然と言えよう。

石器（第15図）

１は凹基式の黒曜石製石鏃で、縄文時代早期以降の所産と考えられる。１号溝状遺構の底面付近から出土した。片翼が一部欠損するが、ほぼ完形である。

２は赤玉石製石核である。包含層より出土した。帰属する時期は判然としないが、旧石器時代にまで遡る可能性もある。各所に潰れた痕跡があり、楔形石器のような割り方をしていたのかもしれない。包含層より、同様の赤玉石製の剥片も１点出土していることから、赤玉石による石器製作を示す資料である可能性も考えられる。



第15図　縄文時代以前石器実測図

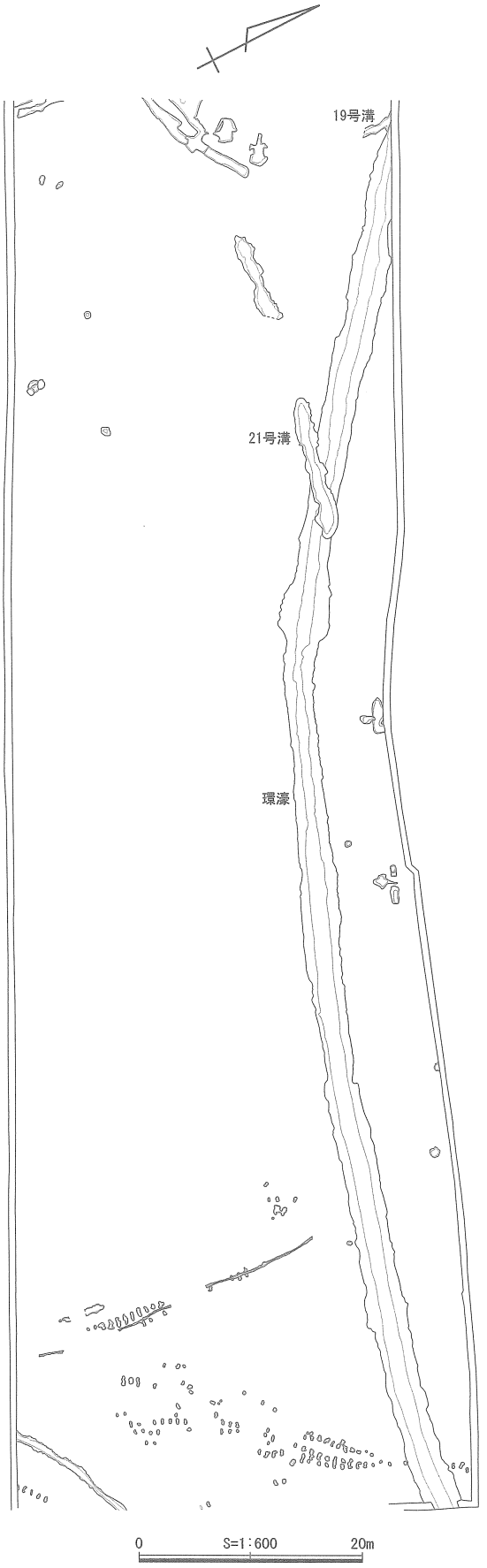
第３節　弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構として、環濠１条・土坑５基・土坑列１基を検出した。出土した弥生土器の年代は、『弥生土器の様式と編年』（加納・石黒編 2002）における西駿河地域における編年に従いながら、甕については伊藤淳史氏の論考（伊藤 1996）も参考にした。本来は遺跡の立地する東駿河地域における編年と対照させるべきところであろうが、当地域の弥生時代中期段階（東駿河Ⅱ・Ⅲ様式）の資料の少なさから、西駿河地域の編年に対照させることとした。

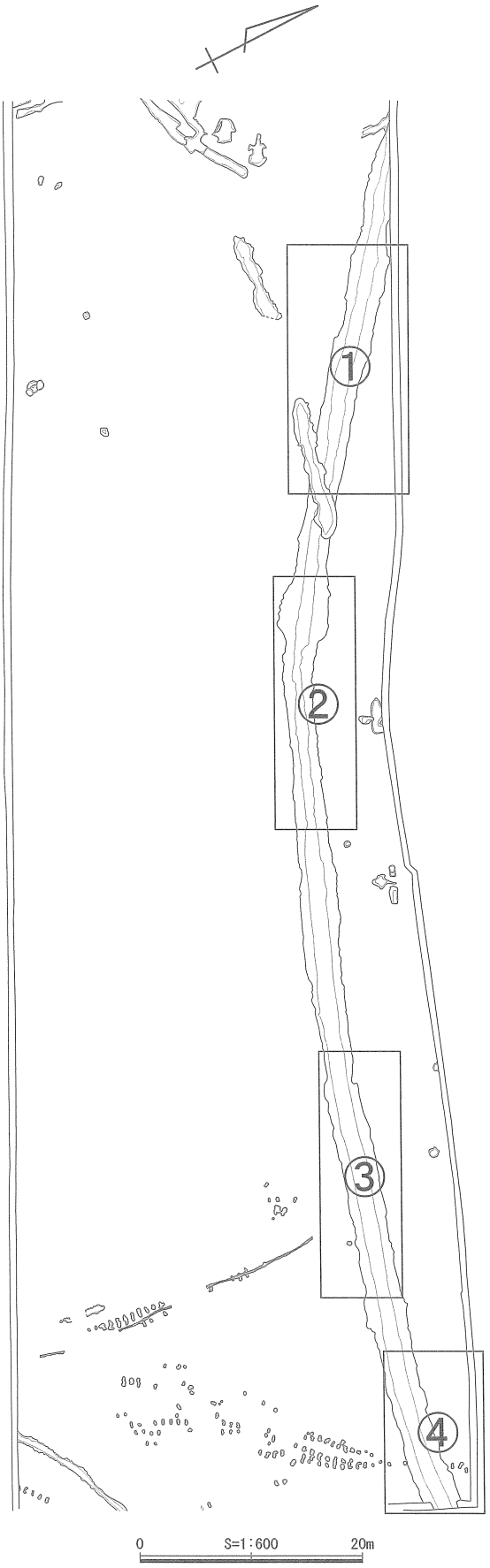
環濠（第16～27図）

環濠は調査区北側から南に向かって張り出すように緩やかな円弧を描き、東西方向に延伸する。総延長は調査区内で確認できただけでも、約120mを測る。環濠の北西隅は調査区北側へ続き、北東隅についても攪乱であるコンクリートブロックによって途切れた後、北側の調査区外へ続いていくようである。幅は概ね2.5m程であるが、幅広の中央部付近で、最大幅4.5mを測る。検出面からの深さは１m前後を測り、北西隅付近と北東隅付近で深く、中央部付近でやや浅くなる傾向にある。断面形態は緩やかなU字形ないしは逆台形を呈し、両端の底部からの立ち上がりの部分には抉れたような窪みをもつ箇所が多く認められた。

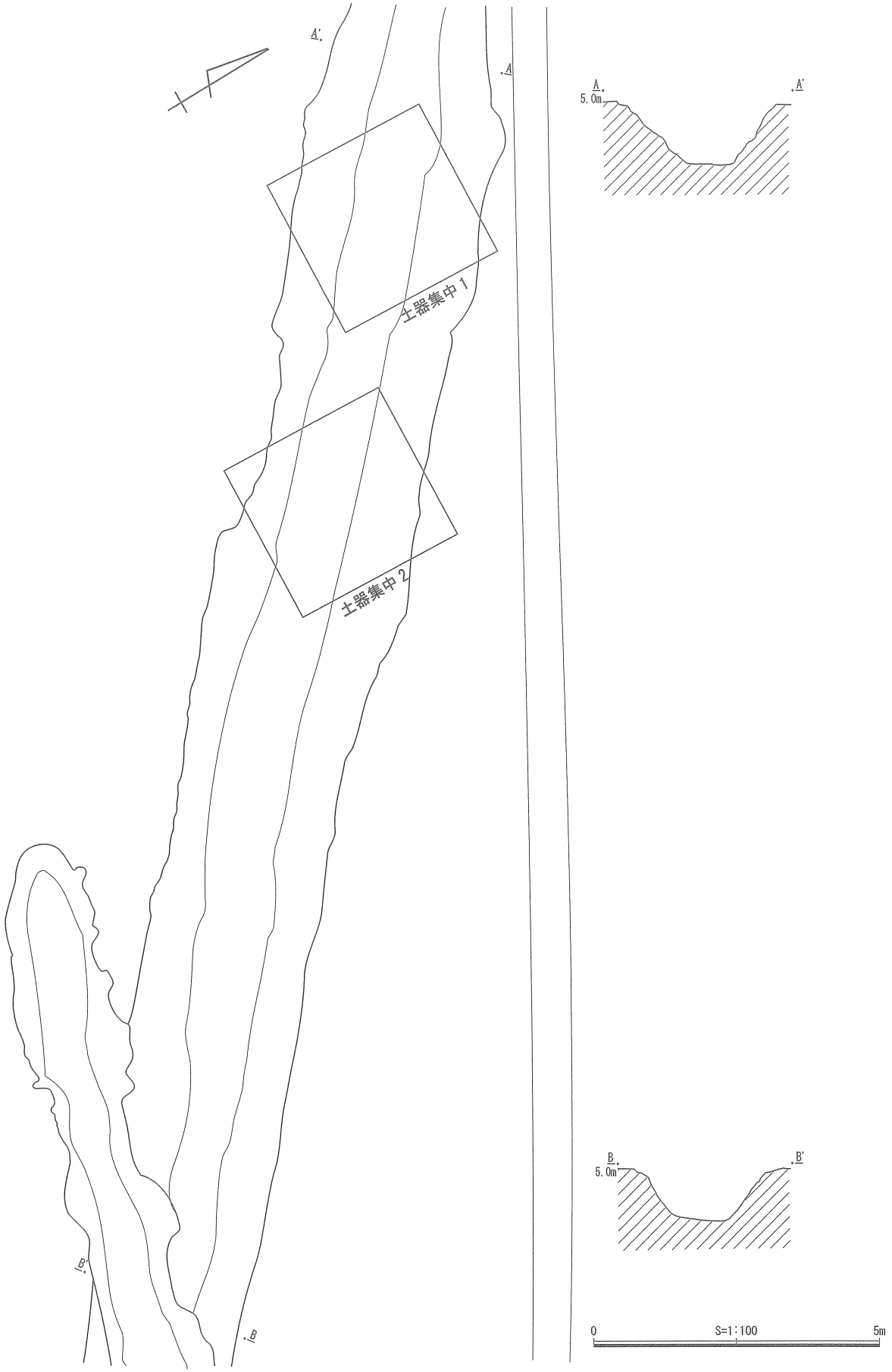
環濠は土層の堆積状態から６層に分層でき、第２層までは奈良・平安時代以降の遺物が混在するものの、第３層以下は弥生時代の遺物のみを包含している。第３層および第４層は弥生時代中期後葉を主体とする時期と考えられるが、第３層からは鉄鉇と思われる鉄製品が、第４層からは石鏃がそれぞれ出土している。また、環濠下部にあたる第５層および第６層は弥生時代中期中葉を主体とする土器が出土し



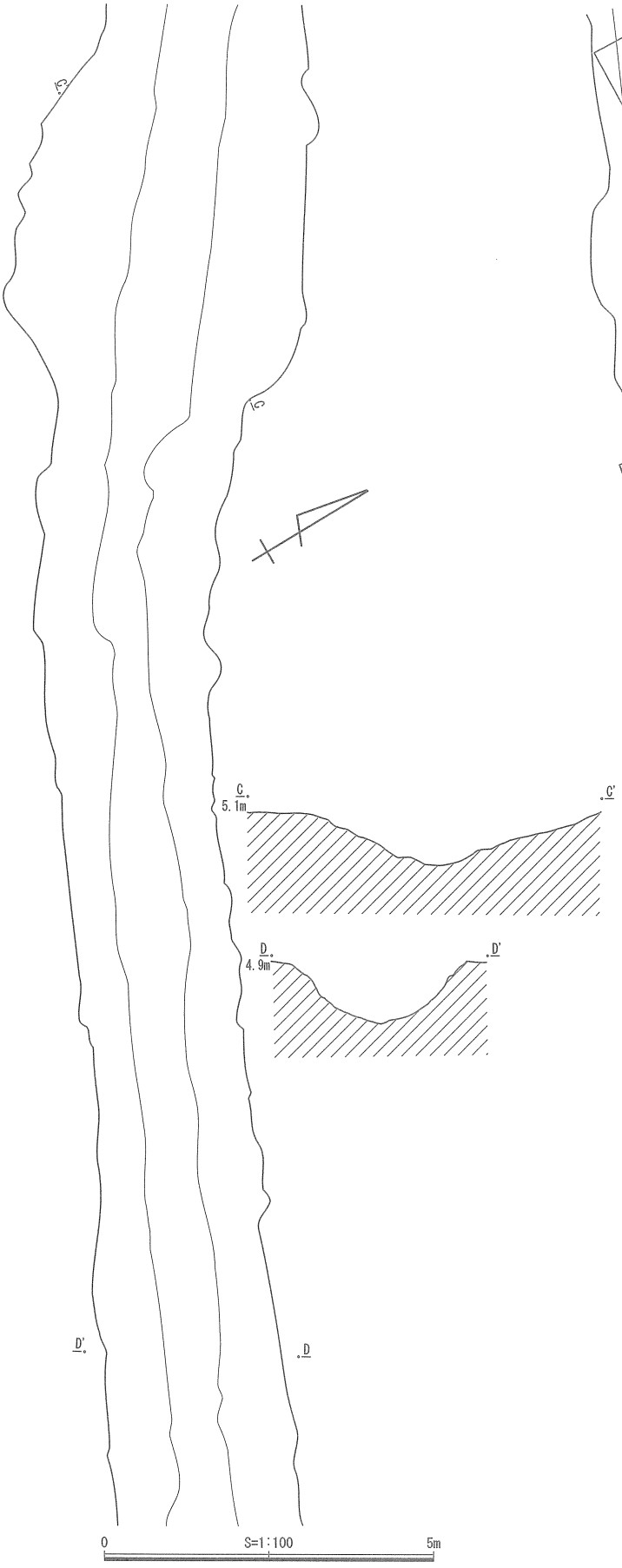
第16図　環濠平面図



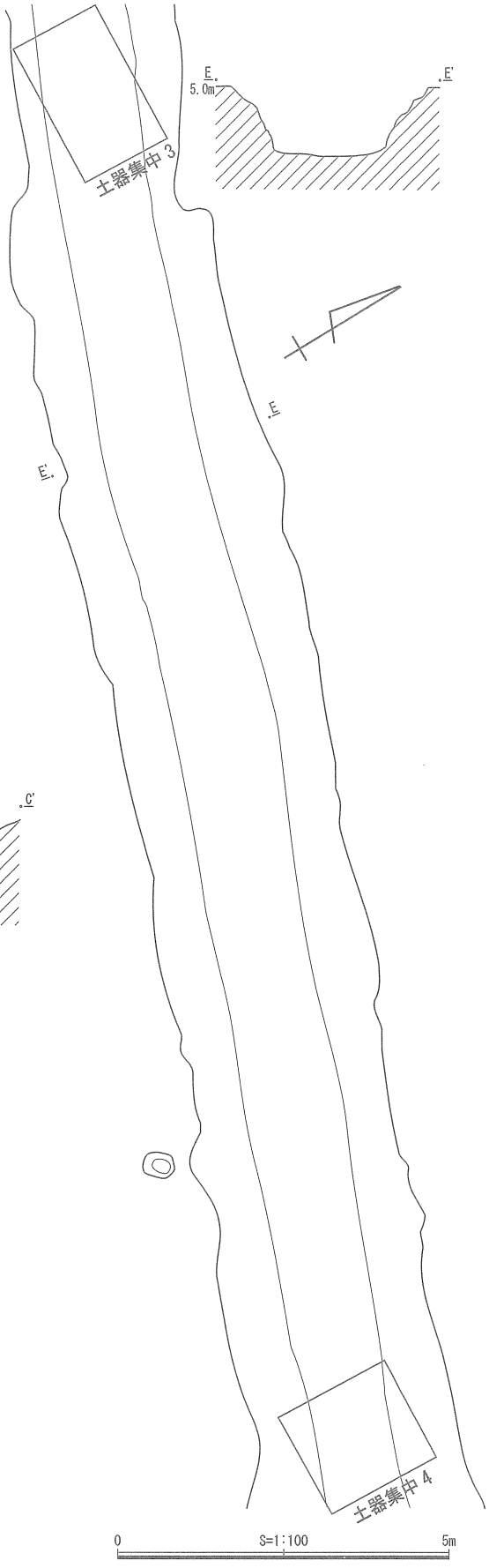
第17図　環濠図割付図



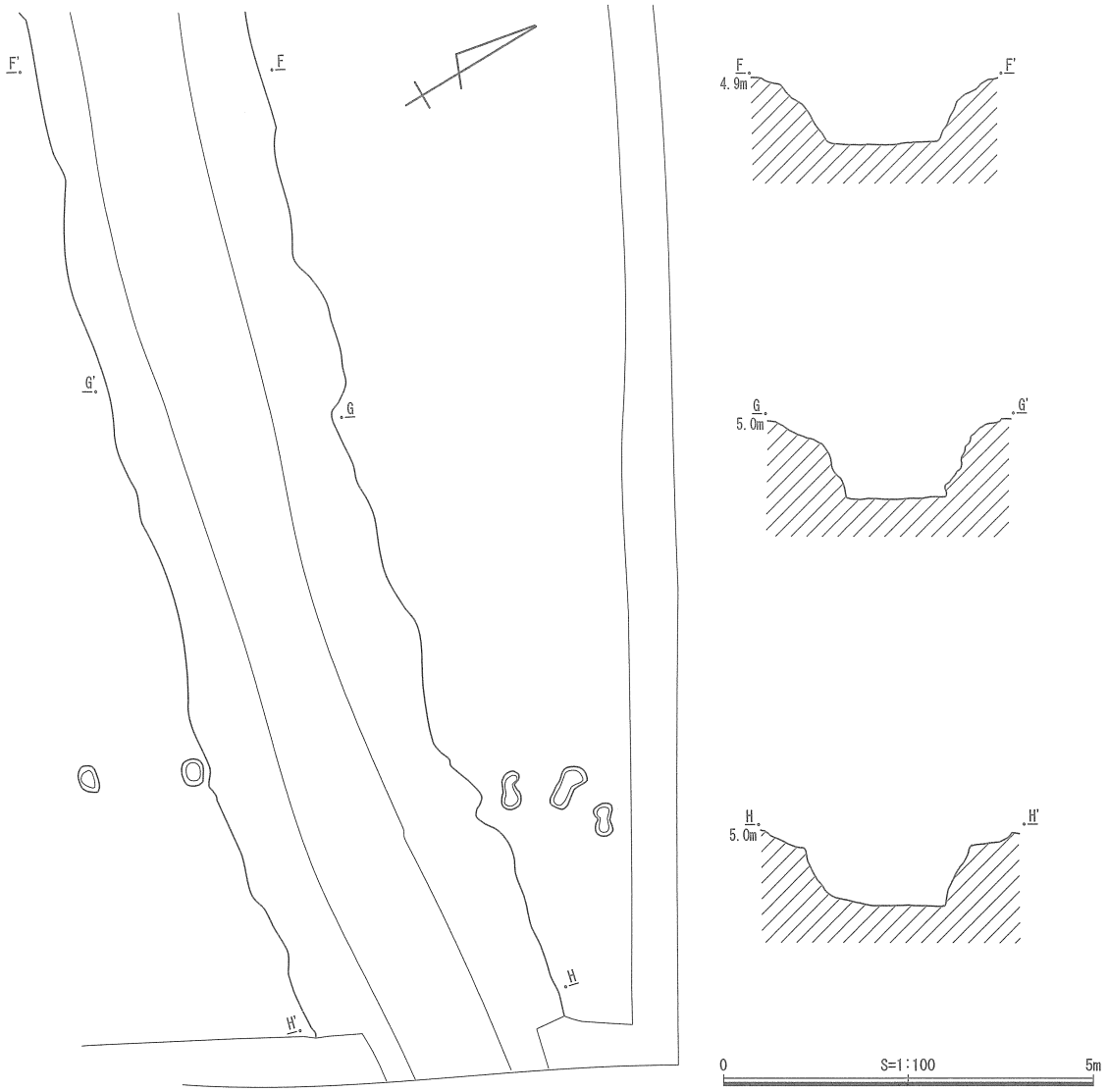
第18図　環濠平面・エレベーション図①



第19図　環濠平面・エレベーション図②



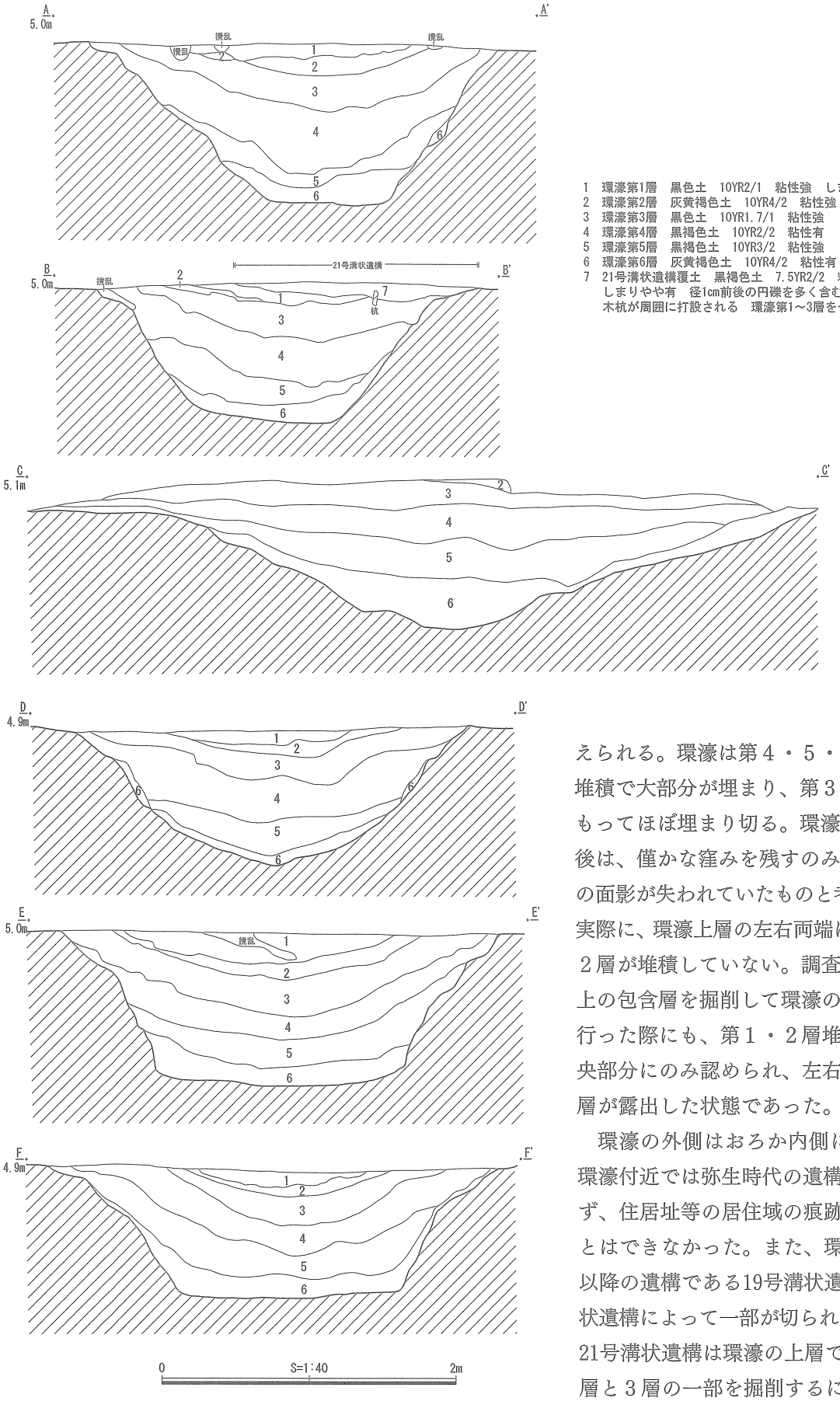
第20図　環濠平面・エレベーション図③



第21図　環濠平面・エレベーション図④

ている。特に環濠底部に近い第６層からは土器が集中して出土する地点が４箇所認められた。各土器集中では、壺や甕の破片がまとまって出土した。特に土器集中１では、集中内で接合する壺が多く認められたが、第33図の６に関しては、土器集中１と隣接する土器集中２で出土した破片同士が接合して、壺の胴部が組みあがった。土器集中３では甕の破片が多く出土し、第34図の９や10のように、接合によって甕の口縁部から胴部まで復原可能な資料を得ることができた。土器集中４で出土した土器片の大部分が接合し、第33図の２が組みあがった。上記のように、一見土器片が多数出土しているようにも見える土器集中であるが、接合作業の結果、各土器集中につき１～２点の完形に近い土器が割れて破片となっている資料が多く含まれていることが判明した。このように、土器数個体がその場で割れたような出土状況からは、土器が環濠内外から割れた状態で流れ着いたものではないことが考えられる。土器数個体が環濠の内側ないしは外側から転落あるいは廃棄された結果として、４箇所の土器集中が認められるに至ったものと推定される。

環濠内の堆積は土層観察の結果、どの箇所においても水平堆積であり、環濠内外の土塁の流出あるいは再掘削等の痕跡は認められなかった。覆土における地山土の混入は環濠下層の第５・６層特に第６層で多く認められた。これは環濠の埋没過程において両側壁から崩れた地山土が混入していた可能性が考

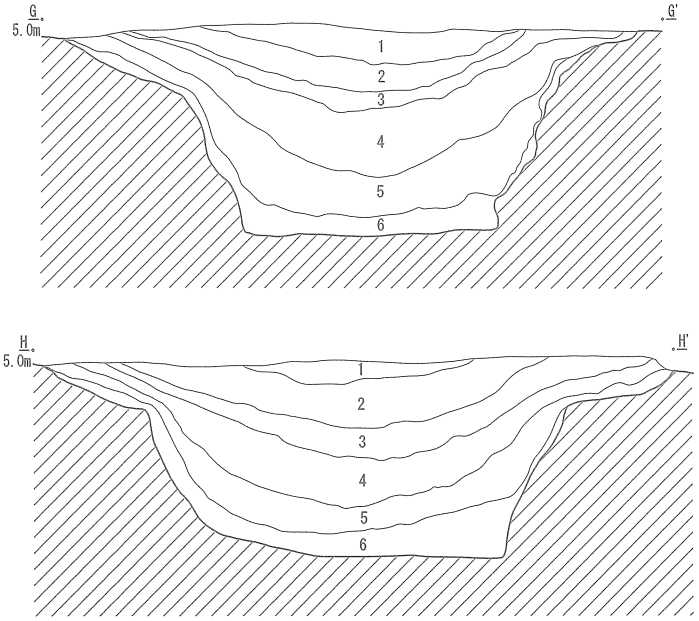


1　環濠第1層　黒色土　10YR2/1　粘性強　しまり強
2　環濠第2層　灰黄褐色土　10YR4/2　粘性強　しまり有
3　環濠第3層　黒色土　10YR1.7/1　粘性強　しまり強
4　環濠第4層　黒褐色土　10YR2/2　粘性有　しまり有
5　環濠第5層　黒褐色土　10YR3/2　粘性強　しまり強
6　環濠第6層　灰黄褐色土　10YR4/2　粘性有　しまり有
7　21号溝状遺構覆土　黒褐色土　7.5YR2/2　粘性やや有
　しまりやや有　径1cm前後の円礫を多く含む
　木杭が周囲に打設される　環濠第1～3層を一部切る

第22図　環濠断面図（A～F）

えられる。環濠は第４・５・６層までの堆積で大部分が埋まり、第３層の堆積をもってほぼ埋まり切る。環濠第３層堆積後は、僅かな窪みを残すのみで、ほぼ濠の面影が失われていたものと考えられる。実際に、環濠上層の左右両端には、第１・２層が堆積していない。調査中に環濠直上の包含層を掘削して環濠の遺構検出を行った際にも、第１・２層堆積は環濠中央部分にのみ認められ、左右両端は第３層が露出した状態であった。

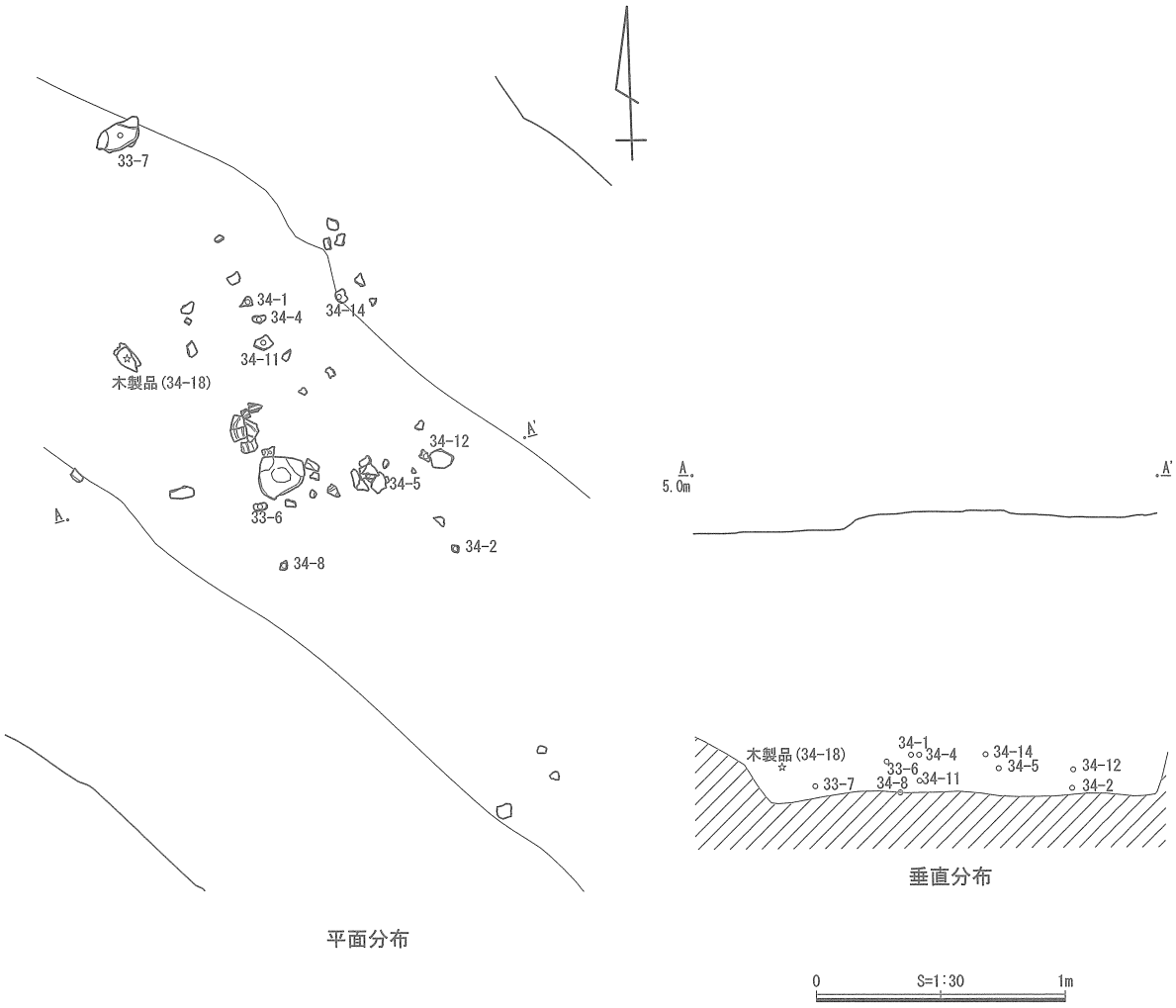
環濠の外側はおろか内側においても、環濠付近では弥生時代の遺構は確認されず、住居址等の居住域の痕跡を認めることはできなかった。また、環濠は、近世以降の遺構である19号溝状遺構と21号溝状遺構によって一部が切られている。19・21号溝状遺構は環濠の上層である１・２層と３層の一部を掘削するに止まっており、４層より下層には及んでいない。



1　環濠第1層　黒色土　10YR2/1　粘性強　しまり強
2　環濠第2層　灰黄褐色土　10YR4/2　粘性強　しまり有
3　環濠第3層　黒色土　10YR1.7/1　粘性強　しまり強
4　環濠第4層　黒褐色土　10YR2/2　粘性有　しまり有
5　環濠第5層　黒褐色土　10YR3/2　粘性強　しまり強
6　環濠第6層　灰黄褐色土　10YR4/2　粘性有　しまり有

0　S=1:40　2m

第23図　環濠断面図（G・H）

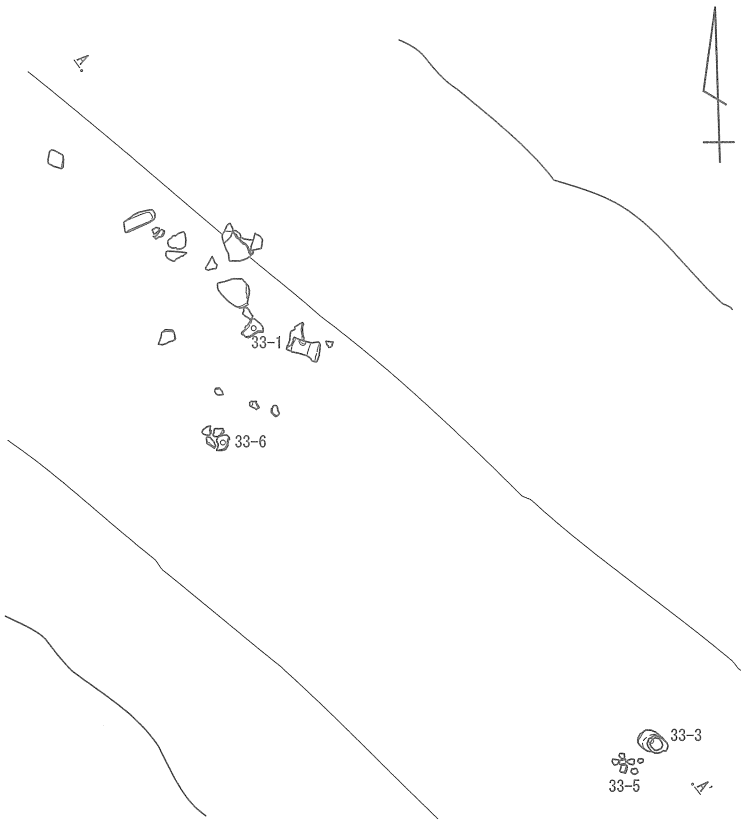


平面分布

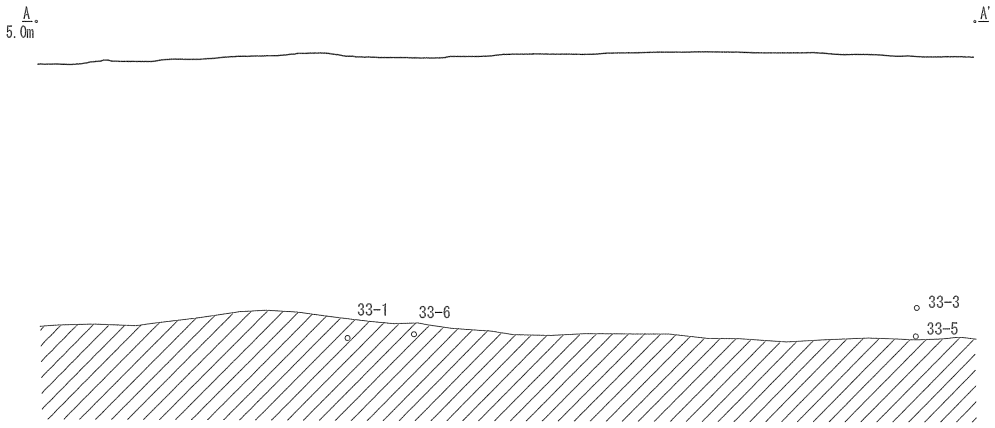
垂直分布

0　S=1:30　1m

第24図　環濠土器集中１出土状況図



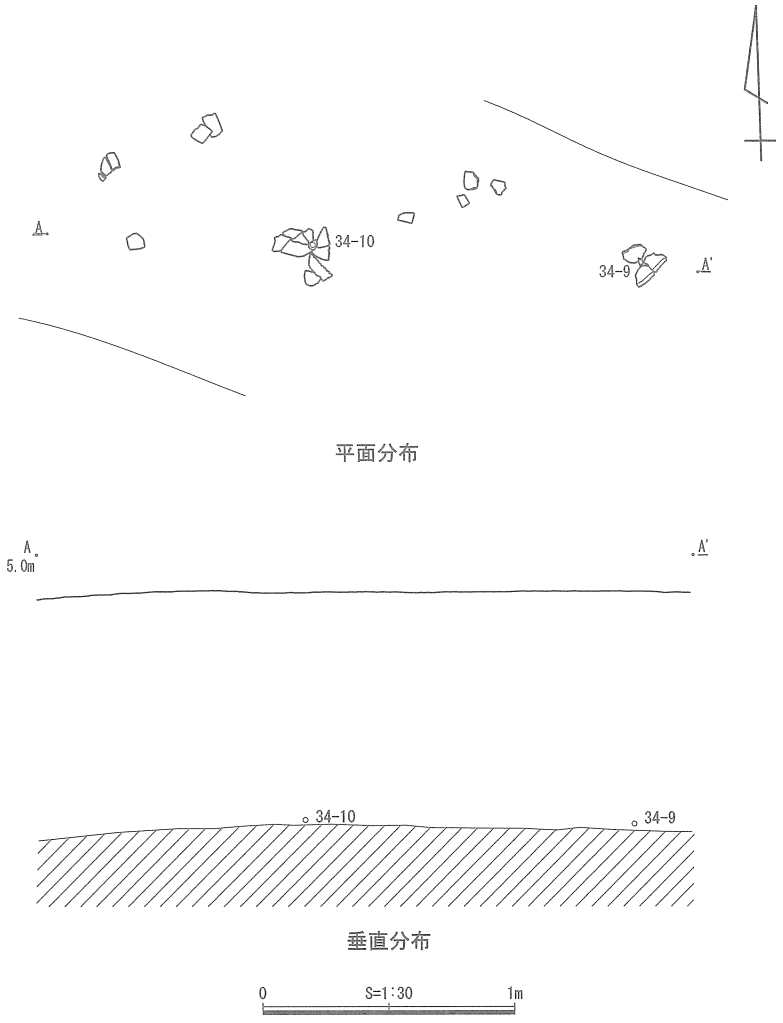
平面分布



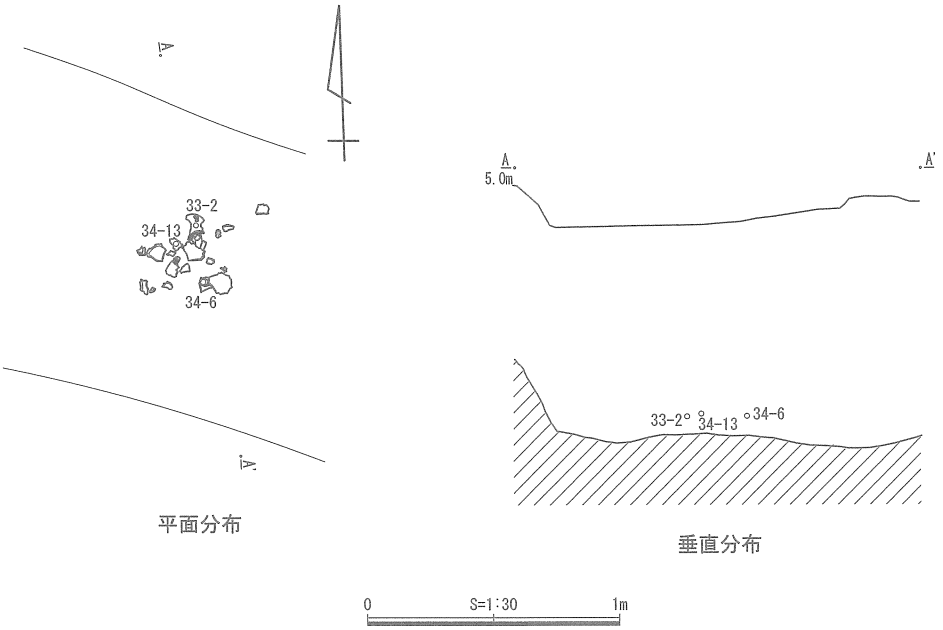
垂直分布

0　S=1:30　1m

第25図　環濠土器集中２出土状況図



第26図　環濠土器集中３出土状況図



第27図　環濠土器集中４出土状況図

環濠出土遺物（第28～34図）

①第１・２層出土遺物（第28図）

環濠第１層および第２層からは、弥生土器片の他に奈良・平安時代の土師器片も混在して出土した。

土器　１は第１層から出土した土師器椀の底部片である。底部に轆轤引きの痕跡が認められる。灰釉陶器椀の模倣品と考えられる。２は弥生土器壺の口縁～胴部片である。環濠出土の破片と環濠直上の包含層中から出土した破片が接合したことから、環濠埋没の最終段階で混入したものと思われる。頸部から肩部にかけてLR単節で横位の縄文が施される。細頸で口縁部がラッパ状に開く。Ⅳ－３～６様式の範疇で、弥生時代中期末から後期初頭にかけてのものと考えられる。３は弥生土器甕の口縁部破片、４は土師器坏の口縁～体部片である。５は土師器甕の底部片である。

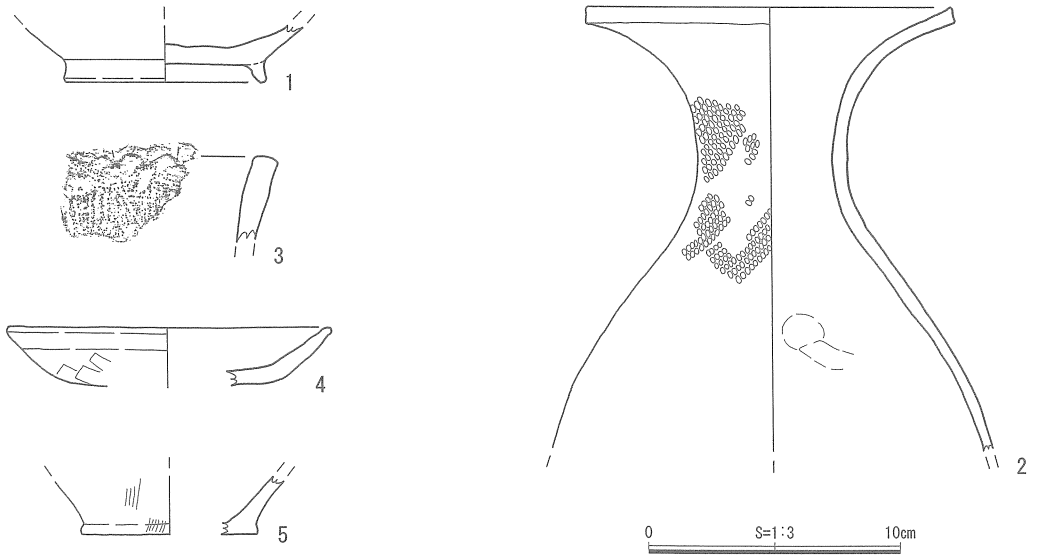
②第３層出土遺物（第29図）

環濠第３層以下は土師器片の混在もなく、純粋に弥生時代の遺物のみを包含していると考えられる。第３層では土器以外に特筆すべきものとして、鉄鉇の茎部片と思われる鉄器１点が出土している。

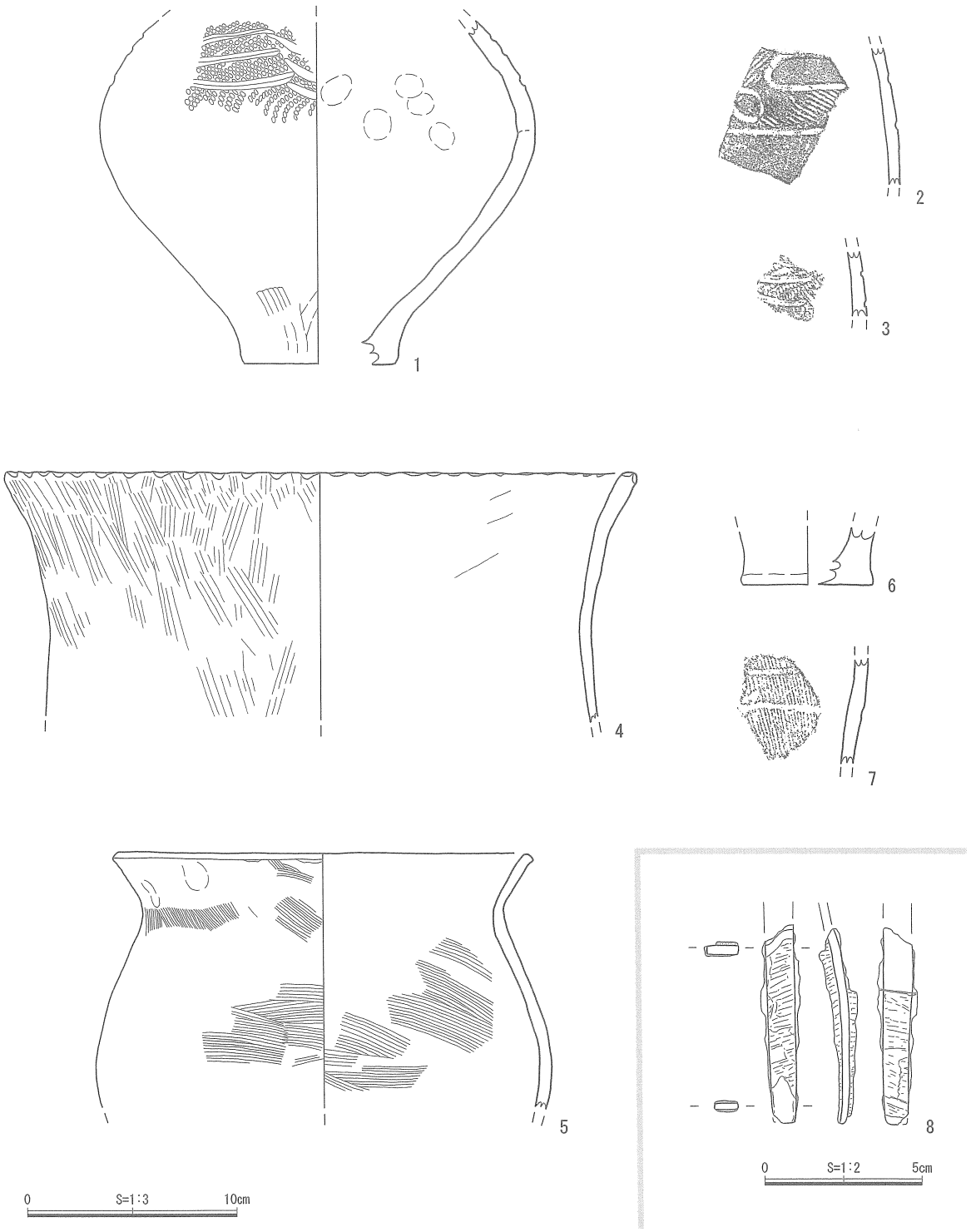
土器　１は壺の胴～底部片である。篦描きによる沈線文と縄文が施される。Ⅳ－２または３様式に相当する。２・３は壺の胴部破片である。沈線による区画と内区に充填された縄文が認められる。４・５は甕の口縁～胴部である。４は縦位の刷毛目調整を主体とする。胴部上半の残存状態より、最大径は口縁部に位置する。Ⅳ－４様式に主流となる無文甕にあたると思われる。５は胴部下半以下を欠損するが、台付甕であった可能性も考えられる。台付甕の本格的な出現は、西駿河ではⅤ様式から、東駿河ではⅣ様式からとなる。６は甕の底部片である。７は甕の胴部破片で、いわゆる磨消線文甕である。縦位を基調とする刷毛目調整の後、胴部に指頭によって横位の磨消線を施す。磨消線文甕の出現は伊藤編年中期Ⅱにあたり、中期Ⅲに盛行する。概ね中期ⅡがⅢ－３～Ⅳ－１様式に、中期ⅢがⅣ－１～２様式に該当する。

第３層出土土器は、５が弥生時代後期にまで時期が下る可能性を残すものの、概ね弥生時代中期後葉までに位置づけられる資料である。

鉄製品　８は環濠第３層より出土した鉄鉇の茎部片と考えられるものである。環濠から出土した唯一の金属製品である。上端はやや反り、断面形態は長方形を呈す。上端から下端に向かって幅・厚さともに徐々に減じていく。下端は一部僅かに欠損するものの、茎尻端まで残存している。両面に木質が付着しており、木柄の痕跡の可能性も考えられる。



第28図　環濠第１・２層出土土器実測図

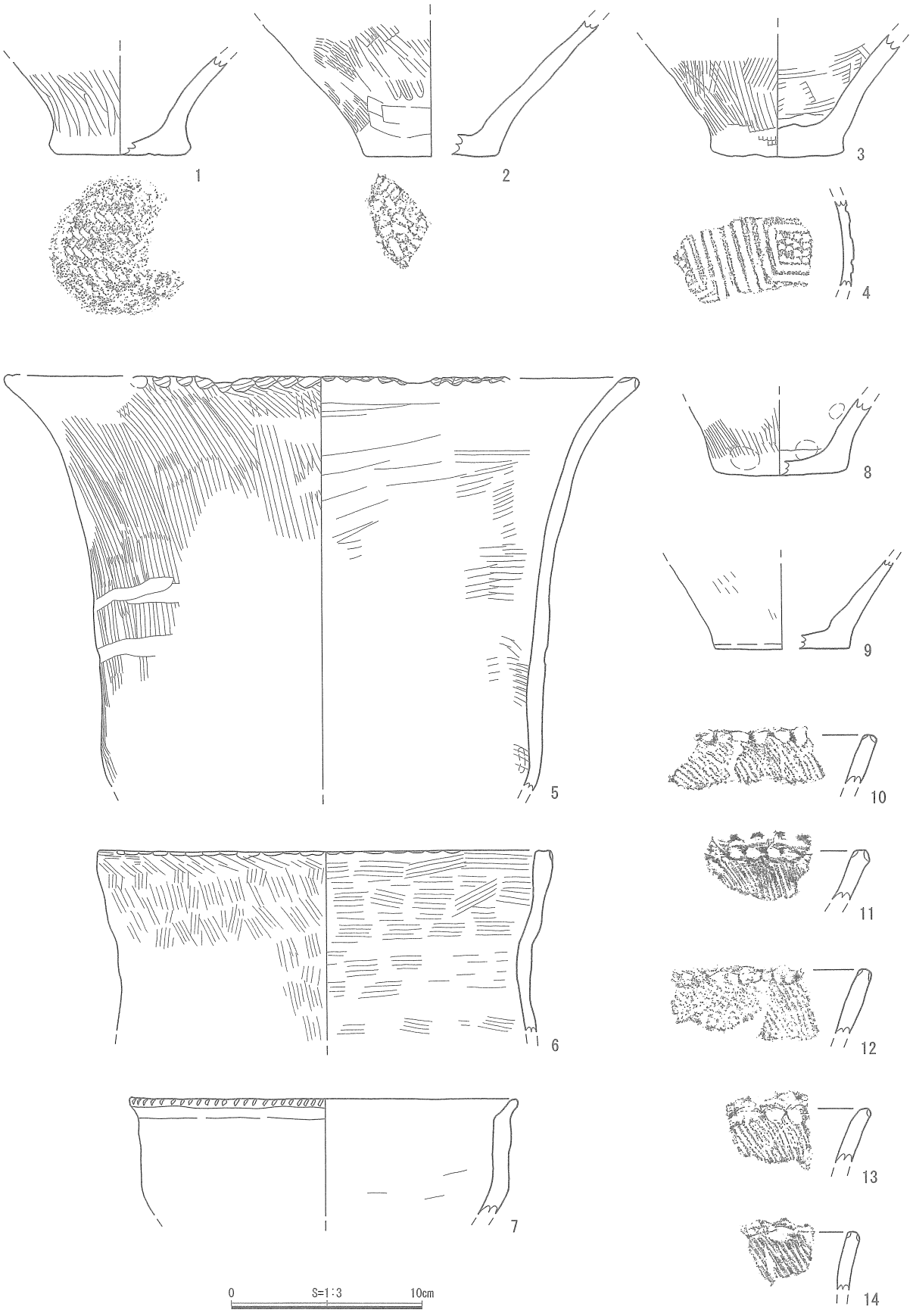


第29図　環濠第３層出土土器および鉄製品実測図

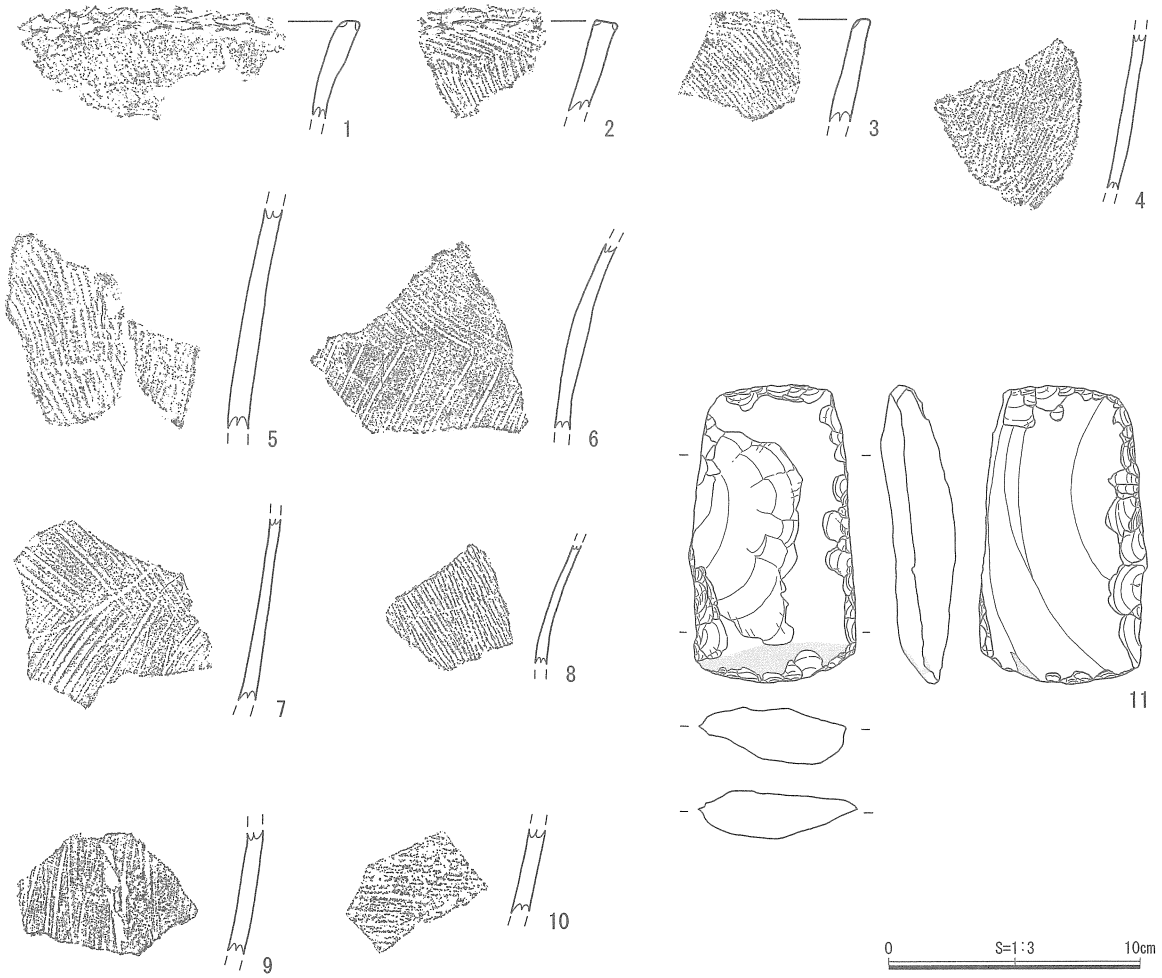
③第４層出土遺物（第30・31図）

環濠第４層は他の層と比べ、出土土器中の甕の割合が高かった。また、石鏃１点が出土している。

土器　第30図の１～３は壺の底部片である。Ⅳ様式にほぼ相当し従来の有東式に該当する。底部から胴部への立ち上がりから、Ⅳ－３様式であろうか。４は壺の胴部破片である。重四角文を重畳させた内区に棒状工具による刺突文が施される。Ⅲ－３様式から類例が認められ始める。５～７は甕の口縁～胴部片である。５は磨消線文甕である。刷毛目調整を横位２条の指頭による沈線で磨り消す。磨消線文を境



第30図　環濠第４層出土土器実測図



第31図　環濠第４層出土土器および石器実測図

に上半と下半とで、調整の工具や方向を違えることはなく、全面縦位を基本とする刷毛目調整のみが基調となる典型的磨消線文（伊藤分類Bb）である。６も外面縦位を基調とする刷毛目調整が施されるが、磨消線文甕ほど口縁部が開かず、刷毛の単位も短い。７とともに無文の刷毛甕でⅣ－４様式の資料であろう。８・９は甕の底部片である。10～14は甕の口縁部破片である。いずれも縦位の刷毛目調整が施される。

第31図の１～３は甕の口縁部破片である。４～10は甕の胴部破片である。５は胴部下半から底部付近の破片である。６・７は横位羽状文甕である。縦方向の刷毛目調整による横位羽状の装飾をもつ。横位羽状文甕は磨消線文甕よりも帰属時期が１段階遅れ、伊藤編年中期Ⅲ（Ⅳ－１～２様式）に出現し、中期Ⅳ（Ⅳ－３様式）に盛行する。10は刷毛目調整とは異なる横位の調整が施されており、条痕文調整の可能性がある。

第４層出土土器は弥生時代中期後葉の資料を主体に、重四角文の壺や典型的磨消線文甕など、弥生時代中期中葉から中期後葉の古段階に遡り得る資料が散見されるようになる。

石器　11は打製の石鏃である。環濠から出土した唯一の石器である。平面形は短冊形、刃部は平刃を呈する。表裏とも横方向からの大きな剥離面が残されている。刃部付近に一部研磨しているような痕跡が認められるため、磨石として転用された可能性が考えられる。石材はホルンフェルスである。

④第５層出土土器（第32図）

環濠第５層は土器のみの出土であるが、外来的要素をもつ壺が認められた。

土器　1は長頸壺の口縁～頸部片である。口縁端部外面が摩滅する。口縁部から頸部に至るまでの間に器形がなだらかにふくれ、有孔刻み目をもつ縦位の棒状突起が3箇所に等間隔で貼り付けられるものの、1箇所は落失している。ほぼ全面に沈線による区画と刺突文が施される。口縁部付近は横方向の弧状の沈線と縦方向の沈線が巡り、弧状の沈線の交点に直径0.9㎝の円形貼付文が施される。頸部付近は沈線によって区画された三角形の単位文の中に刺突文が充填される。三角文の交点には円形貼付文が施される。文様構成からⅢ－3様式に位置づけられる。刻み目をもつ突帯としては、田方郡函南町の仁田仲道遺跡A溝状遺構出土例（秋本 1976）などが類例としてあげられる。2は太頸壺の口縁部破片である。刻み目を境に口縁部は「く」の字状に屈曲する。口唇部は、横位の刷毛目調整後、四角形に篦描沈線文が施されるほか、棒状突起が貼り付けられる。刻み目下位には、縦位の刷毛目調整と横位の篦描沈線文が施される。駿河在来のものではなく、西の三河地域に分布する同時期の三河Ⅴ－3様式にあたると思われる。弥生時代中期中葉の新段階に比定できようか。胎土や色調に他との際立った違いは認められず、在地での模倣品であった可能性も考えられる。3～5は壺の胴部破片である。沈線による区画と縄文あるいは刺突文が認められる。

6・7は甕の底部片である。8～15は甕の口縁部破片である。8・9は磨消線文甕と思われる。16～23は甕の胴部破片である。16・17は磨消線文甕、18・19・21は横位羽状文甕である。23は条痕文が施された可能性がある。

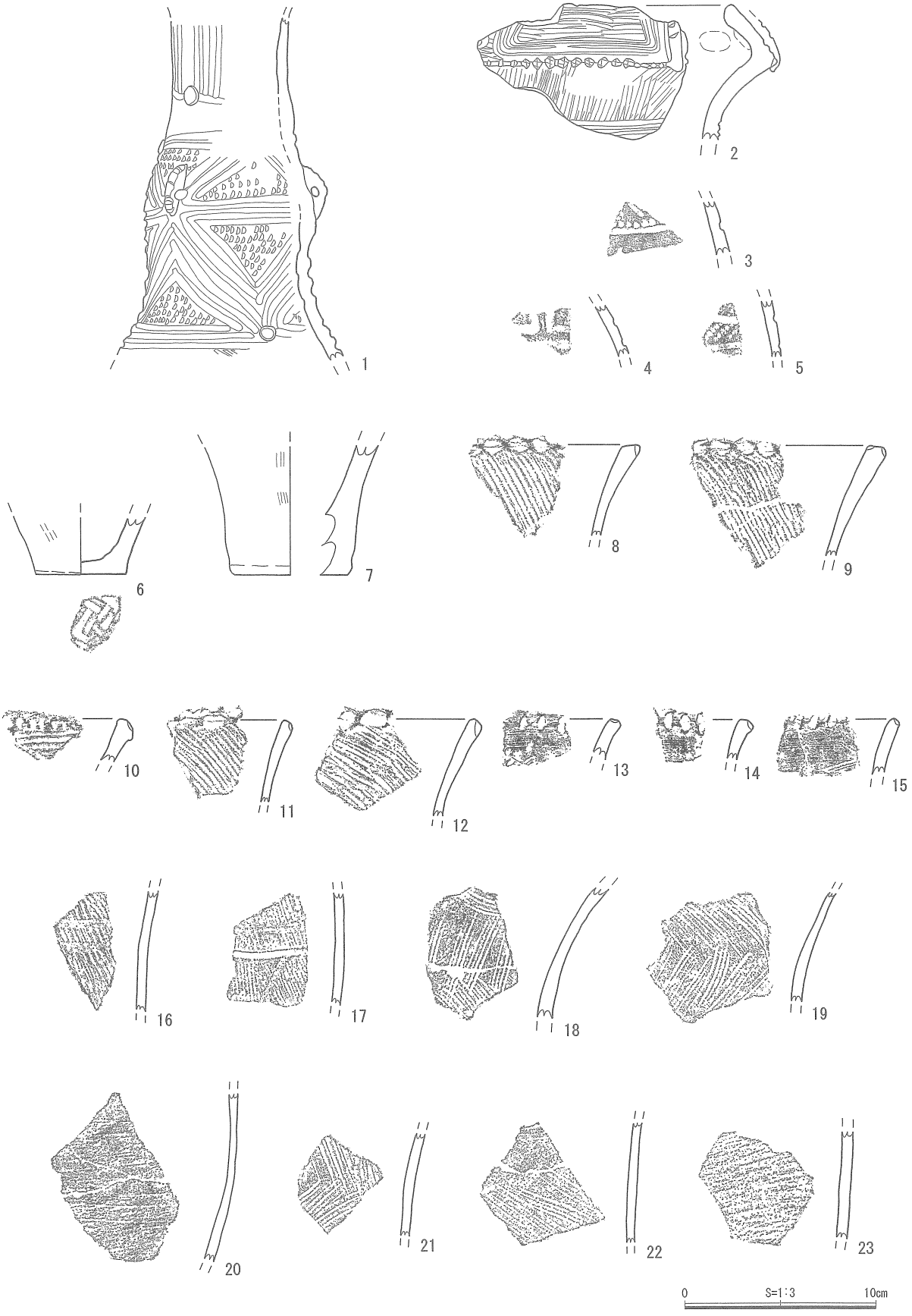
第5層出土土器は文様や調整から時期が判明するものについては、弥生時代中期中葉の新段階の資料が多いと言えよう。

⑤第6層出土土器（第33・34図）

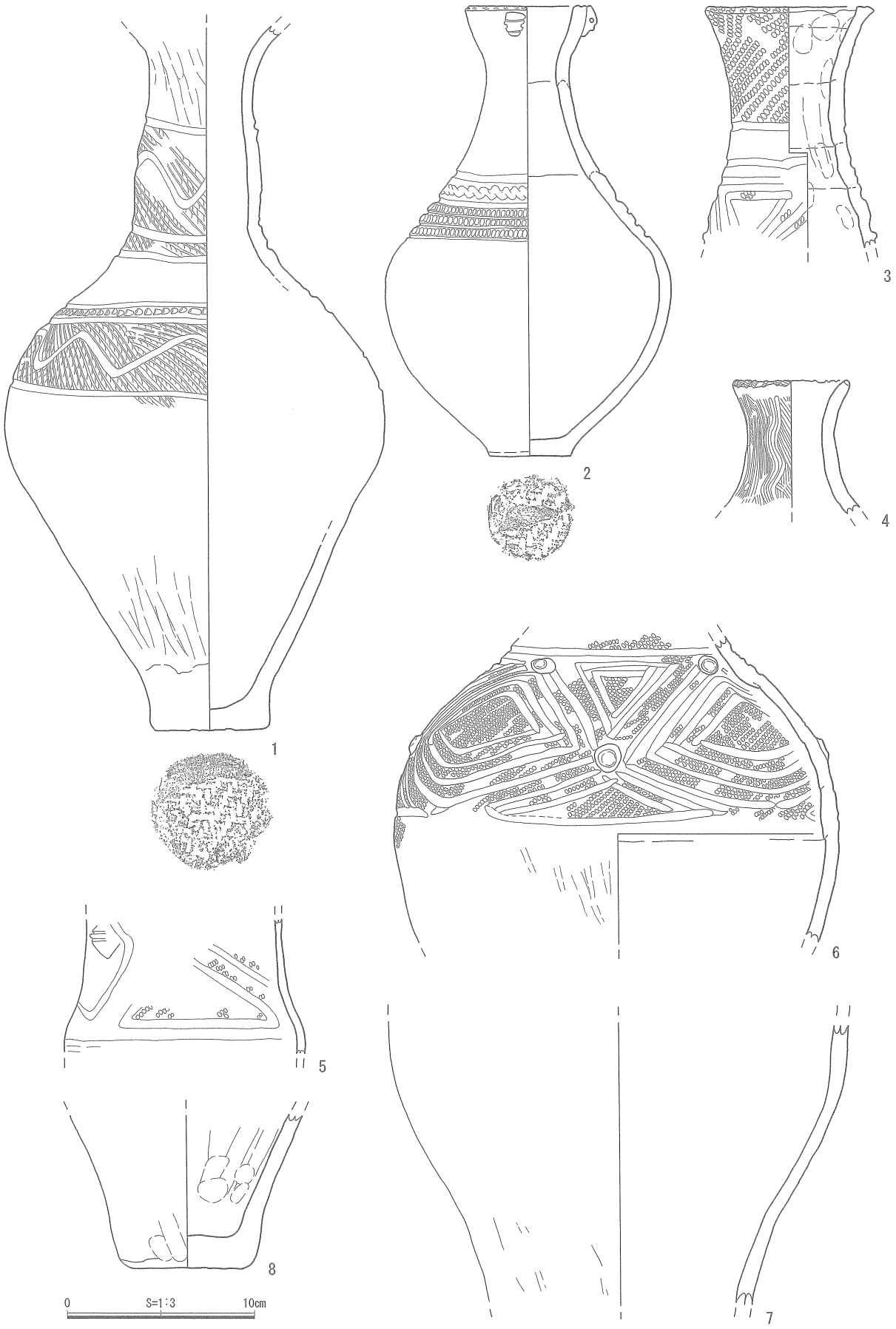
環濠第6層は第5層同様、外来的要素をもつ壺が認められたほか、用途不明の木製品が1点出土している。

土器　第33図の1は口縁端部が僅かに摩滅するほかは、ほぼ完形の長頸壺である。頸部と胴部上半に文様帯をもち、無節の縄文原体を転がして地文としている。縄文を横位の沈線や篦描波状文で磨り消しており、胴部中央では沈線の下位に一部地文の縄文が残っている。胴部上半には縄文のほか、沈線で区画された内区に刺突文が充填される。器形は南関東地方の弥生時代中期中葉のいわゆる須和田式土器に似る。ただし、文様帯の幅が広く無文の部分が目立つことから須和田式の新段階から中期後葉の宮ノ台式の古段階の間に位置づけられようか。Ⅲ－3様式に該当する。2は胴部中程を欠くが、口縁部から底部までの様相が分かる資料である。口縁端部に有孔刻み目をもつ突帯が等間隔で3箇所に貼り付けられ、口唇部には縄文が施される。肩部から胴部上半に文様帯をもち、横位の太い沈線を2条、細い沈線を3条巡らす。太い沈線で区画された内区には波状沈線文を、細い沈線で区画された内区には棒状工具の刺突による刻み目を施している。口縁端部への刻み目突起の貼り付けは、Ⅳ－1様式で認められる。

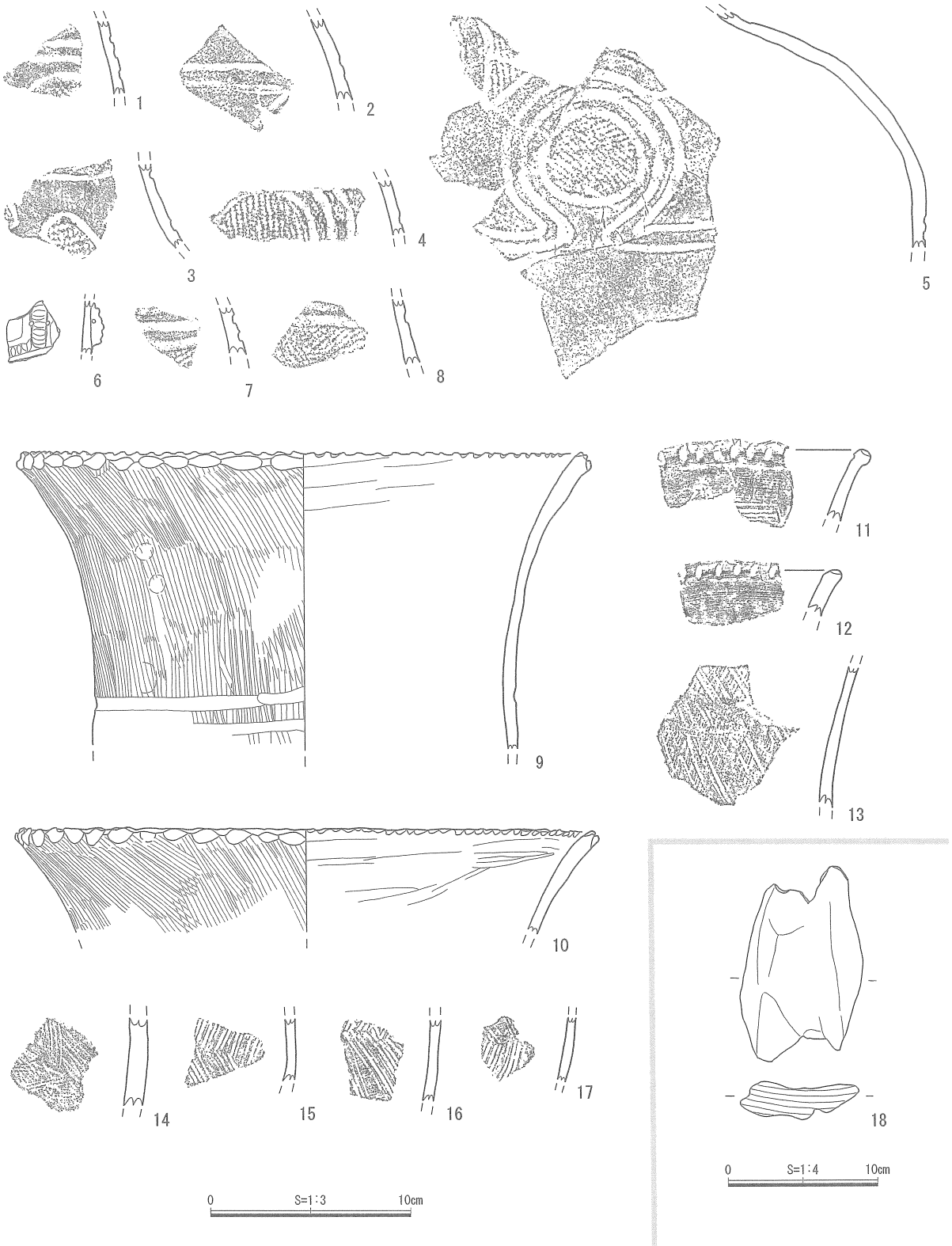
3・4は細頸壺の口縁部片である。3は第6層中でも最下部の環濠底面直上から出土した。口縁部直下にLR単節で横位の縄文が施されるほか、沈線によって三角形の文様を施す。Ⅲ－3様式に該当する。4は縦位の櫛描文の後に縦位の篦描波状文が施される。口唇部には刻み目が施されるなど、他とは異質な文様で構成される。櫛描文から三河や遠江といった地域からの影響を受けたものと思われるが、詳細な故地は特定できなかった。5は壺の頸部片で第6層中でも最下部の環濠底面直上から出土した。摩耗が著しいため、文様が判然としない部分も多いが、沈線による三角形の単位文と縄文、刻み目をもつ突起の貼り付けが認められる。6・7は壺の胴部片である。6は肩部から胴部上半にかけて文様が施される。縄文を地文とし、沈線によって横位に三角文と四角文（菱形に近い形状）を連続させる。三角文の交点には円形貼付文が施される。沈線より下位の縄文は磨き調整によって磨り消されている箇所が認められる。地文となる縄文の撚りはLR単節と考えられるが、回転方向は特定できなかった。同様の文様構



第32図　環濠第５層出土土器実測図



第33図　環濠第６層出土土器実測図



第34図　環濠第６層出土土器および木製品実測図

成をもつ壺は静岡市の有東遺跡第16次調査SK05出土例（岡村編 1997）で認められ、Ⅲ－３様式に該当する。８は壺の底部片で、第６層中でも最下部の環濠底面直上から出土した。底部には僅かに籾圧痕が認められる。７・８ともに長頸壺の一部であろう。

第34図の１～８は壺の胴部破片である。沈線による区画や縄文が認められる。５は沈線でΩ字状に区

画された内側の円形区画文内に縄文が充填される。６は沈線による区画と刺突文、有孔刻み目をもつ棒状突起の貼り付けが認められる。突起の貼り付け位置から察するに、胴部よりも頸部破片とした方が妥当であろうか。いずれもⅢ－３様式に位置づけられる。

９は甕の口縁部から胴部片である。２条の磨消文の下位も縦位の刷毛目調整が認められることから、典型的磨消線文甕であろう。10は甕の口縁部片である。胴部以下を欠くが、９と同様の磨消線文甕と考えられる。９・10ともⅢ－３～Ⅳ－１様式の範疇であろう。11・12は甕の口縁部破片、13～17は胴部破片である。14～17は横位羽状文甕である。Ⅳ－１～３様式に相当する。

第６層出土土器の内、壺と甕とではやや時期差が生じるようである。壺の年代は概ねⅢ－３～Ⅳ－１様式で、弥生時代中期中葉に遡る資料がほとんどであるが、甕の年代はⅢ－３～Ⅳ－３様式と、弥生時代中期後葉の古段階にあてはまる資料を含んでいる。前述した通り、ここでは東駿河地域の資料数の少なさから、西駿河地域の土器編年を援用している。また、伊藤編年も基本的には甕のみの編年であるため、東駿河地域における壺と甕とのセット関係が不明確であった点が、壺と甕との年代観の不一致の一因として考えられる。今後の資料の蓄積と研究の進展を俟ちたいところである。

木製品　18は用途不明の木製品である。環濠から出土した唯一の木製品である。第６層の土器集中部から出土した。樹木の外皮に近い部分に相当する。樹種はヒノキである。

１号土坑（第35図）

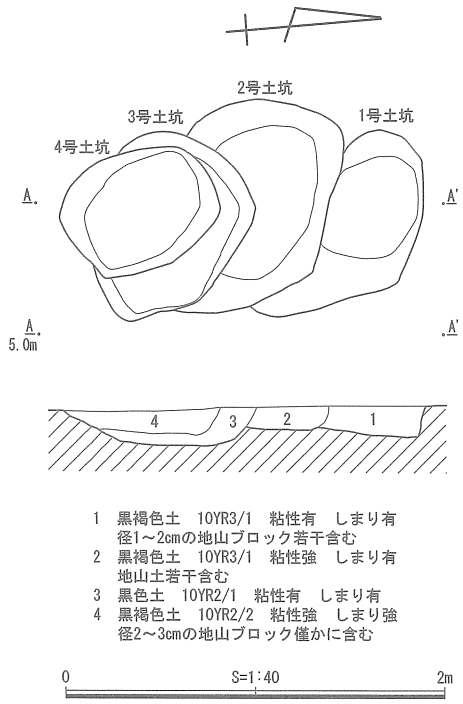
平面形は楕円形を呈し、長径1.14m、短径0.50mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.16mを測る。２号土坑に切られる。遺物の出土は認められなかったが、２号土坑を切る３号土坑から弥生土器が出土しており、切り合い関係から弥生時代に帰属するものとした。

２号土坑（第35図）

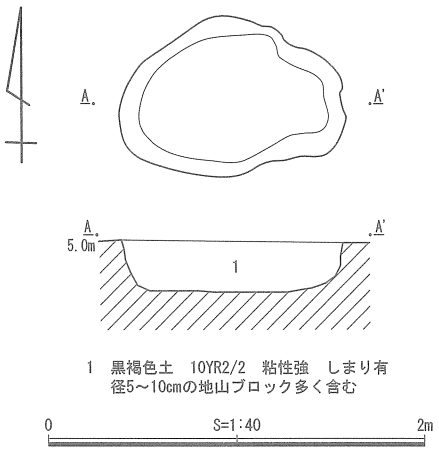
平面形は楕円形を呈し、長径1.22m、短径は残存部で0.44mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.12mを測る。１号土坑を切り、３号土坑に切られる。遺物の出土は認められなかったが、弥生土器が出土した３号土坑との切り合い関係から弥生時代に帰属するものとした。

３号土坑（第35図）

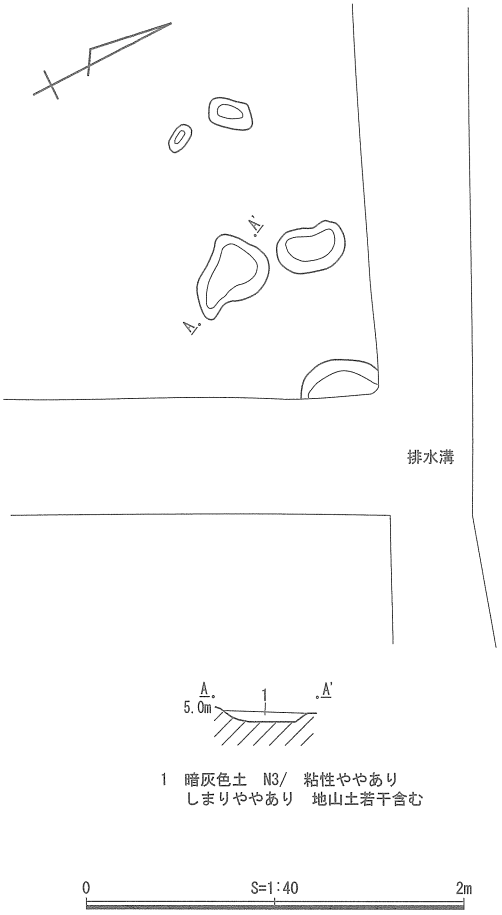
平面形は楕円形を呈し、長径0.94m、短径は残存部で0.22mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.18mを測る。２号土坑を切り、４号土坑に切られる。切り合い関係のある１～４号土坑



第35図　１～４号土坑平・断面図



第36図　５号土坑平・断面図



第37図　１号土坑列平・断面図

の中では、一番掘り込みが深く、北端が２号土坑の覆土南端を切っている。

３号土坑出土遺物（第38図）

土器　１は弥生土器甕の口縁部破片である。

４号土坑（第35図）

平面形は楕円形を呈し、長径0.86m、短径0.64mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.10mを測る。３号土坑を切る。

４号土坑出土遺物（第38図）

土器　２は弥生土器甕の口縁部破片である。

５号土坑（第36図）

平面形は楕円形を呈し、長径1.18m、短径0.88mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.26mを測る。図化し得なかったが、弥生時代後期の壺の小破片が出土したため、弥生時代に帰属するものとした。

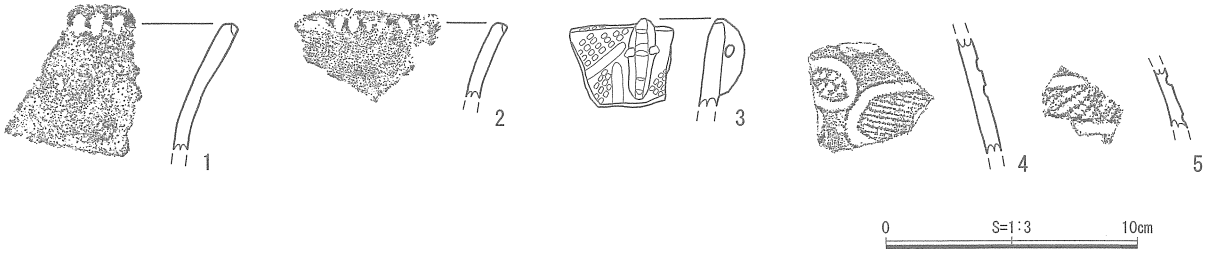
１号土坑列（第37図）

１基の土坑と４基の小穴群で構成される。同一の覆土をもち、いずれも単層である。今回は便宜上、土坑列としたが、土坑や小穴はさらに上層から掘り込まれていた可能性もあり、本来は１条の溝状遺構あるいは１基の土坑であった可能性も考えられる。

出土した弥生土器壺の文様構成が、環濠下層出土のものと類似しており、遺構の帰属時期は環濠同様、弥生時代中期中葉と考えられる。

１号土坑列出土遺物（第38図）

土器　３は壺の口縁部破片である。沈線による区画と縄文が認められ、刻み目のある突起が端部に貼り付けられる。第32図の１や第33図の２、第34図の６と同様に、突起のやや上部には穿孔が穿たれる。同様の突起と文様をもつものとして、静岡市の川合遺跡土坑SX11607出土広口壺（山田編 1992）があげられ、Ⅳ－１様式に位置づけられている。４・５は壺の胴部破片である。４は沈線によって区画された内区に縄文と刺突文の充填が認められ、５は沈線と縄文が確認できる。



第38図　３・４号土坑・１号土坑列出土土器実測図

遺構外出土遺物（第39・40図）

土器　１～３は弥生土器壺の口縁部片である。折り返し口縁で口唇部に縄文が施される。Ⅳ－６様式にあたろうか、弥生時代後期の範疇に収まるものである。４～９は弥生土器壺の底部片である。４は底部には明瞭な木葉痕が認められる。胴部への立ち上がりから、最大径が胴部下半に位置することが推測され、弥生時代後期のものと思われる。５～９の詳細な時期は不明である。10・11は弥生土器壺の胴部破片である。沈線による区画と内区に充填された縄文が認められる。12は台付甕の胴部片、13～18は台付甕の脚部片である。いずれも摩耗が著しく、詳細な時期は不明であるが、弥生時代後期から古墳時代前期の所産であろう。19～22は弥生土器甕の口縁部破片である。

石器　１～５は敲石である。１は環濠直上包含層より出土し、２～５も環濠付近の包含層あるいは遺構面直上より出土したことから、弥生時代の資料として扱った。素材とする礫は、平面形と横断面が楕円形を呈する。いずれも扁平な円礫に敲打痕を有するもので、敲打痕以外に人為的な磨痕や削痕は認められなかった。

１の石材は閃緑岩で、敲打痕が礫の上下端部に認められる。２の石材は細粒砂岩で、敲打痕が礫の上下端部に認められるほか、縁辺部に滑らかな面が認められる。しかし、これは特に人為的な磨面ではないようである。３の石材は中粒砂岩で、敲打痕が礫の上下端部に認められる。４の石材も中粒砂岩で、礫の両側縁部上半に敲打痕が認められる。また、上端部は敲打により明瞭な面が形成されている。５の石材は輝石安山岩で、礫の縁辺部や平坦面に敲打痕が認められる。

参考文献

秋本真澄　1976　「田方郡函南町仁田仲道遺跡発掘調査報告」『駿豆の遺跡研究』(2)　加藤学園沼津女子高等学校郷土研究部

石川日出志　2001　「関東地方弥生時代中期中葉の社会変動」『駿台史学』第113号　駿台史学会

石川日出志ほか編　2005　『南関東の弥生土器』考古学リーダー５　六一書房

伊藤淳史　1996　「太平洋沿岸における弥生文化の展開―駿河湾岸中期弥生土器からの検討―」『YAY！（やいっ！）弥生土器を語る会20回到達記念論文集』　弥生土器を語る会

伊藤淳史　1997　「太平洋沿岸における弥生文化の展開・補遺」『西相模考古』第６号　西相模考古学研究会

大島慎一　2000　「出土遺物の分析」『王子ノ台遺跡』第Ⅲ巻　弥生・古墳時代編　東海大学出版会

岡村渉編　1997　『有東遺跡第16次発掘調査報告書』静岡市埋蔵文化財調査報告39　静岡市教育委員会

葛西功　1984　「甕形土器の変遷（上）」『史館』第16号　弘文社

加納俊介・石黒立人編　2002　『弥生土器の様式と編年―東海編―』　木耳社

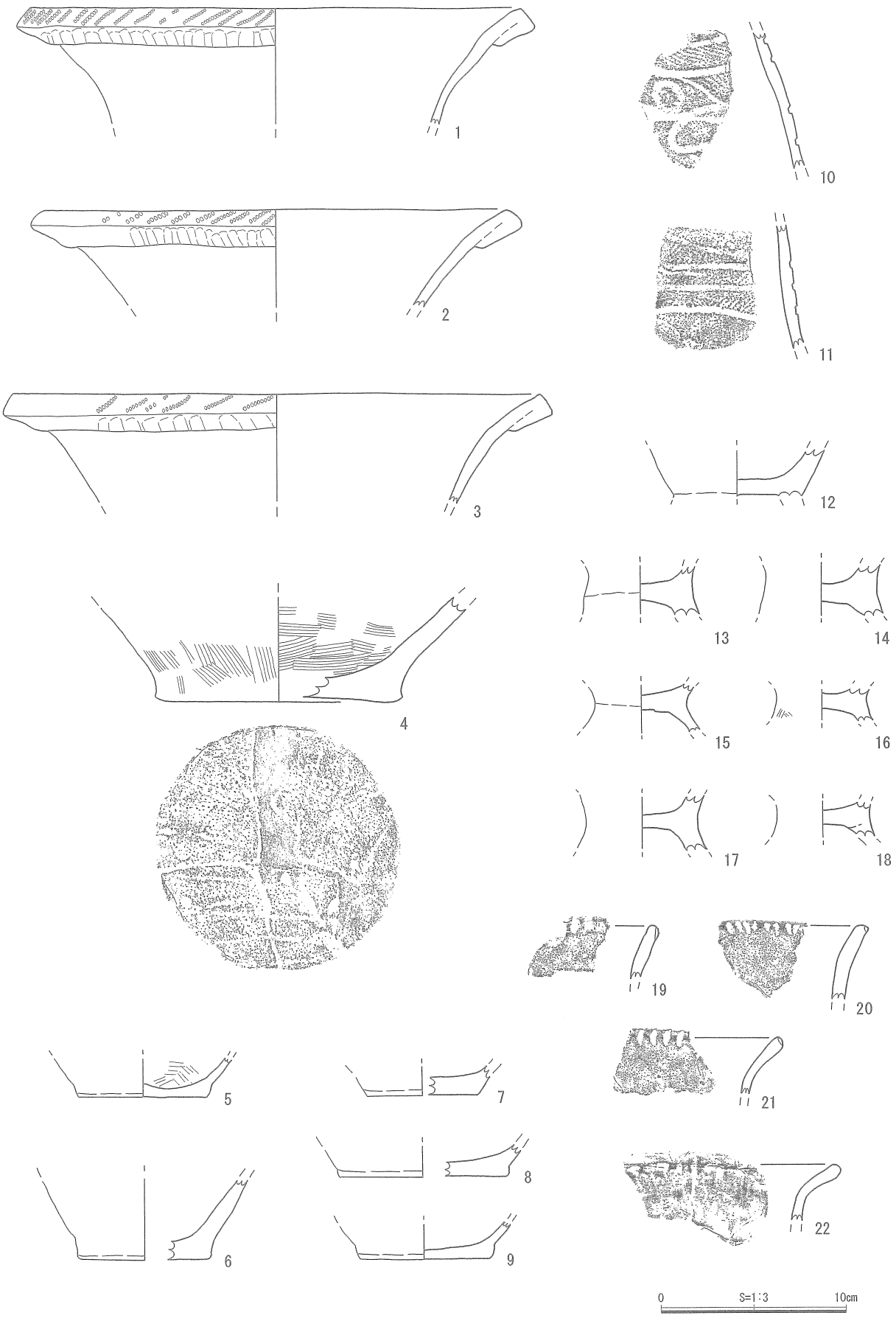
関義則　1983　「須和田式土器の再検討」『紀要』10　埼玉県立博物館

松井一明　1995　「弥生時代の石鍬について（上）」『弥生文化博物館研究報告』第４集　大阪府立弥生文化博物館

宮原俊一編　2003　『撚りと結びの考古学』第12回足もとに眠る歴史展示解説書　東海大学校地内遺跡調査団

山田成洋編　1992　『川合遺跡』遺物編１（土器・土製品図版編）静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第41集　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

渡辺外　2003　「弥生時代中期における打製石斧の地域性」『神奈川考古』第39号　神奈川考古同人会



第39図　弥生時代遺構外出土土器実測図

第40図　弥生時代遺構外出土石器実測図

第４節　古墳時代の遺物

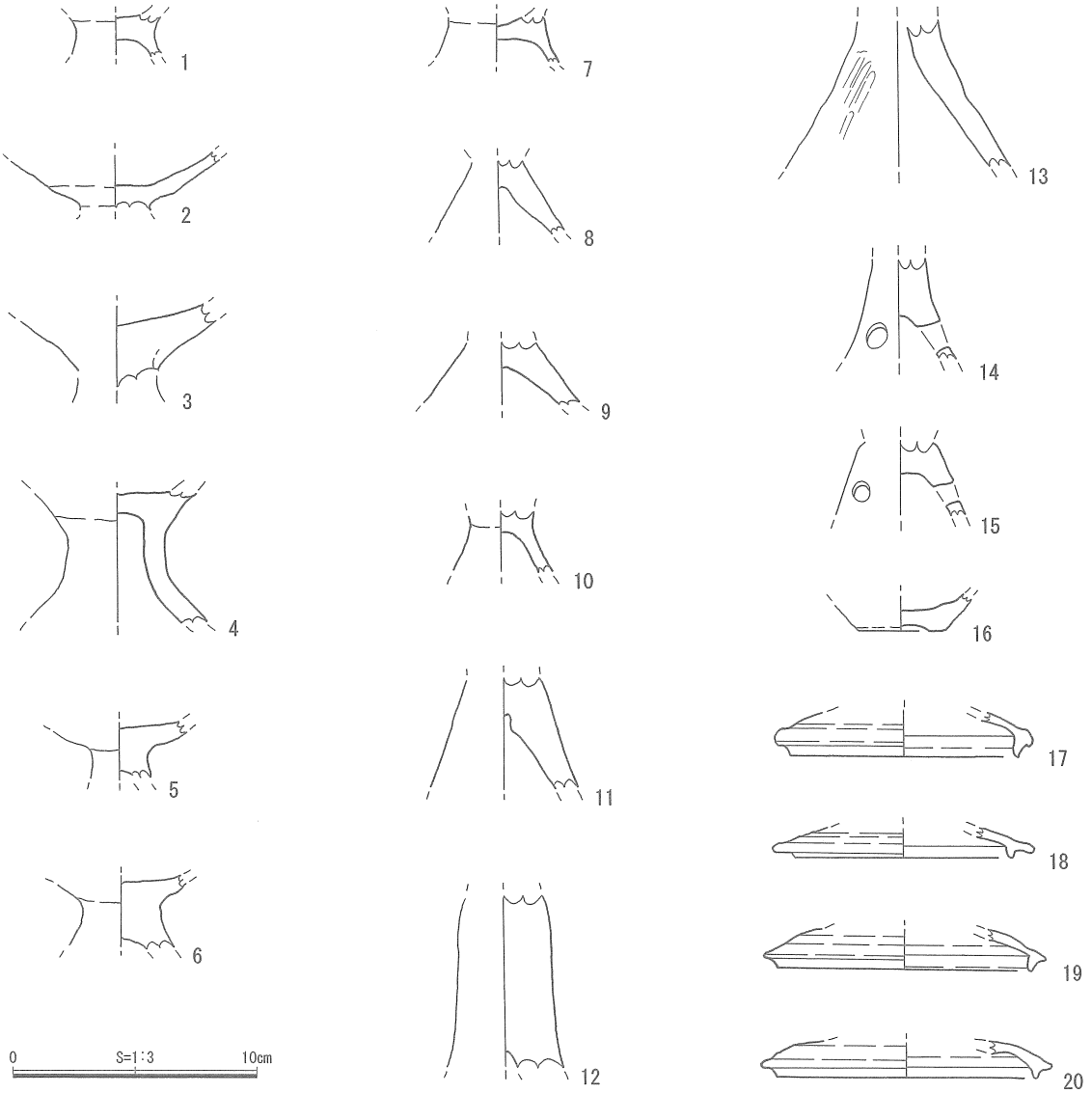
古墳時代に属する遺構は検出されず、土器片が少量出土したのみである。本調査で検出された遺構の内、弥生時代後期から古墳時代後期までの間に属すものは皆無で、同時期に比定される遺物の出土量も極端に少ないと言える。

土器（第41図）

１～16は土師器である。１はS字状口縁台付甕、いわゆる古墳時代前期のS字甕の脚部片である。２・３は高坏の坏部片、４・５は坏～脚部片、６～15は脚部片である。４は脚部の開き方が比較的なだらか

である。対して、８・９の脚部は開き気味で、やや踏ん張るような形態を呈している。12は上端から下端までが直線的な形態であるが、おそらく脚部の軸の部分であろう。13には外面に磨き調整が施される。14・15には透孔が認められ、14は赤彩が施される。高坏は全般的に器面の摩耗が著しく調整等は定かではない。加えて部分的な資料が多いため、判断が難しいところであるが、本遺跡の弥生土器と比較すると胎土や色調に若干の違いが認められることから、概ね古墳時代前期に帰属される資料と理解した。16は坩の底部片である。部分的な資料のため、詳細な時期比定は困難であるが、古墳時代前期から中期の資料と思われる。

17～20は須恵器の坏蓋の口縁部である。いずれも口縁端部に返りをもち、口径は10㎝前後を測る。返り蓋の出現は鈴木敏則氏の編年（鈴木 2004）におけるⅣ期前葉以降とされ、７世紀後半頃のものと考えられる。



第41図　古墳時代土器実測図

参考文献

鈴木敏則　2004　「静岡県下の須恵器編年」『有玉古窯』　浜松市教育委員会

第５節　奈良・平安時代の遺構と遺物

奈良・平安時代の遺構として、溝状遺構12条・土坑20基・土坑列７基を検出した。出土した土師器・須恵器・灰釉陶器については、植松章八氏の分類と編年（植松 2008）に従っている。また、須恵器については贄元洋氏の論考（贄 1998）を、甕については山本悳一氏の論考（山本 1988）も参考にした。

１号溝状遺構（第42・61図）

やや蛇行するものの、ほぼ東西方位に延伸する。調査区内で確認できた長さは80m程であるが、西端・東端ともさらに調査区外へと続く。幅は概ね1.5mであるが、西隅付近で北側にテラス状の落ち込みを伴う箇所があり、テラス部を含めた幅は２ｍを超える。検出面からの深さは地点によって異なるが、平均0.25mである。土層の堆積状態から３層に分層されるが、地点によっては第３層を含まない箇所もある。４号溝状遺構・７号土坑を切るが、一部攪乱によって切られる部分がある。

１号溝状遺構出土遺物（第43図）

土器　第43図の１～９は土師器である。１は坏でほぼ完形である。非轆轤系の丸底坏で、口唇部が細く直立する点や体部外面の篦削り等の特徴から、坏Ａ１類にあたる。坏Ａ１類は第Ⅰ～Ⅱ期に確認される。２は坏の口縁～底部片、３は口縁～体部片である。２は丸底、３も丸底の可能性がある。４～６は坏の底部片である。坏Ａ１類が平底化した坏Ａ２類と思われる。坏Ａ２類は第Ⅲ～Ⅳ期に確認される。７は有台坏の底部片である。有台坏は須恵器と同様に７世紀後葉から出現するとされる（鈴木・向坂編 1998）。８は高坏の脚部片、９は堝の口縁部破片である。堝の出現はⅣ期後葉からである。

10～17は須恵器である。10・11は坏の底部片である。無台で腰がやや丸い。12・13は有台坏の底部片である。13は丸底の底部が高台よりも突出した形態で、湖西窯製品に特徴的な形態とされる。第Ⅰ～Ⅱ期に認められる。14・15は坏蓋の口縁部片である。頂部を欠くが、平頂ではなく宝珠摘みがつくものと思われる。14は８世紀前葉以降、15は８世紀後葉以降に帰属されよう。16は坏蓋の摘み部片である。17は壺の底部片と思われる。

土師器・須恵器ともに８世紀前葉にまで遡る資料も出土したが、８世紀後葉とすべき資料も混在している。１号溝状遺構の帰属時期は８世紀頃に位置づけられ、９世紀代までは下らない可能性が高い。

木製品　18は板状の木製品である。１号溝状遺構底面直上より出土した。用途は不明であるが、構築物の部材の可能性もある。樹種はイヌマキである。

２号溝状遺構（第42図）

東端付近で弧を描くように南に向かってカーブする。長さは36m程を測るが、東西両端は攪乱によって失われている。幅は平均1.5m、検出面からの深さは0.2m程である。土層の堆積状態から２層に分層され、円礫や砂粒が多く認められることから、何らかの流路であった可能性が考えられる。

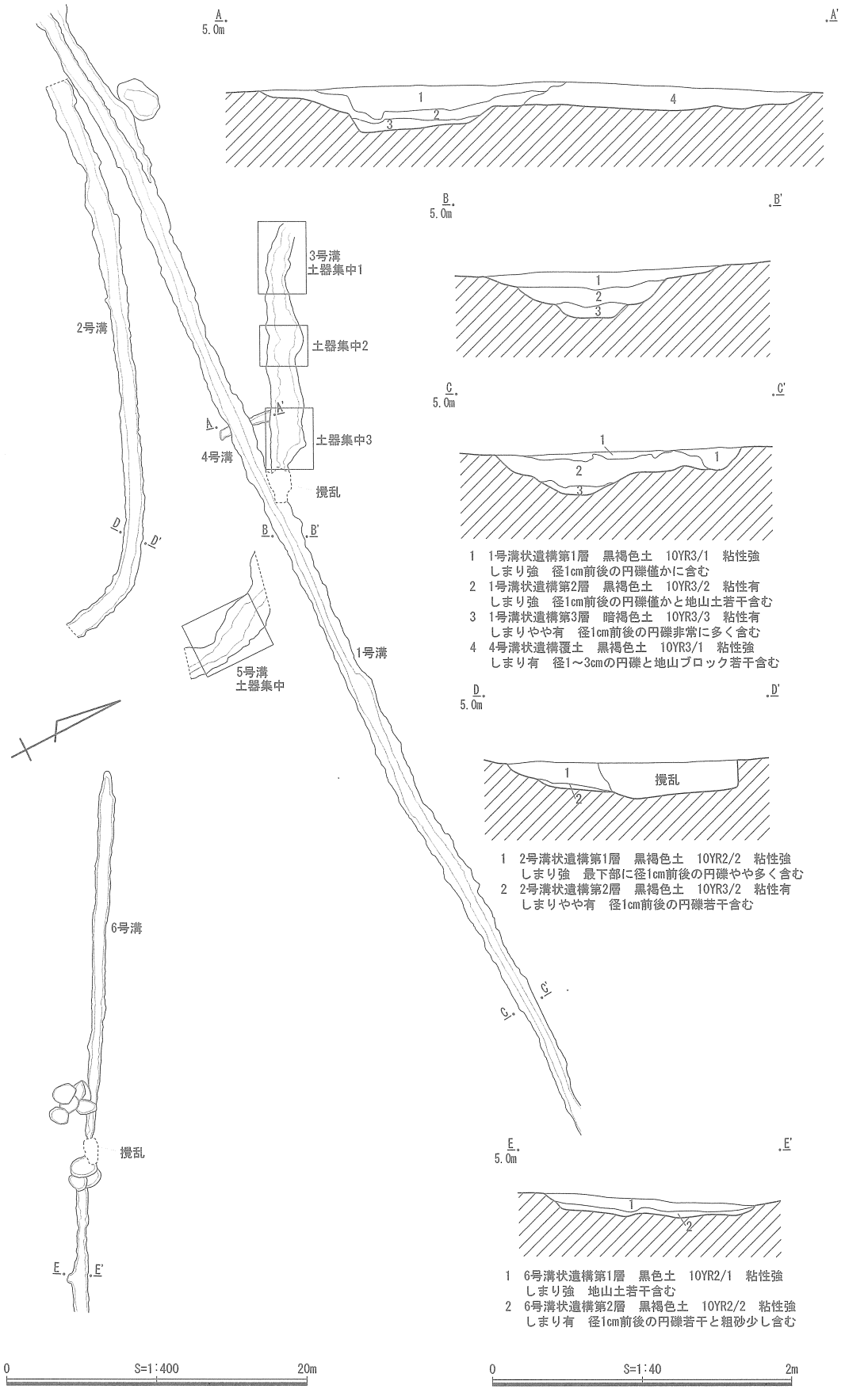
２号溝状遺構出土遺物（第44図）

土器　１は土師器坏の底部片で、平底である。２は須恵器坏の口縁～体部片である。体部から口縁部まで直線的に立ち上がる。底部を欠くため定かではないが、大型箱坏あるいは埦形坏と考えられる。９世紀前後に比定されよう。なお、本資料は４号溝状遺構出土の破片と接合した。３は須恵器甕の口縁部破片である。口唇部が厚く、波状に櫛描文が巡る。４・５は灰釉陶器埦の底部片である。高台内側下半が内傾する三日月高台をもつ。定型化した三日月高台を有する埦は、猿投窯編年の黒笹90号窯式２型式に相当し、９世紀後半に帰属する。

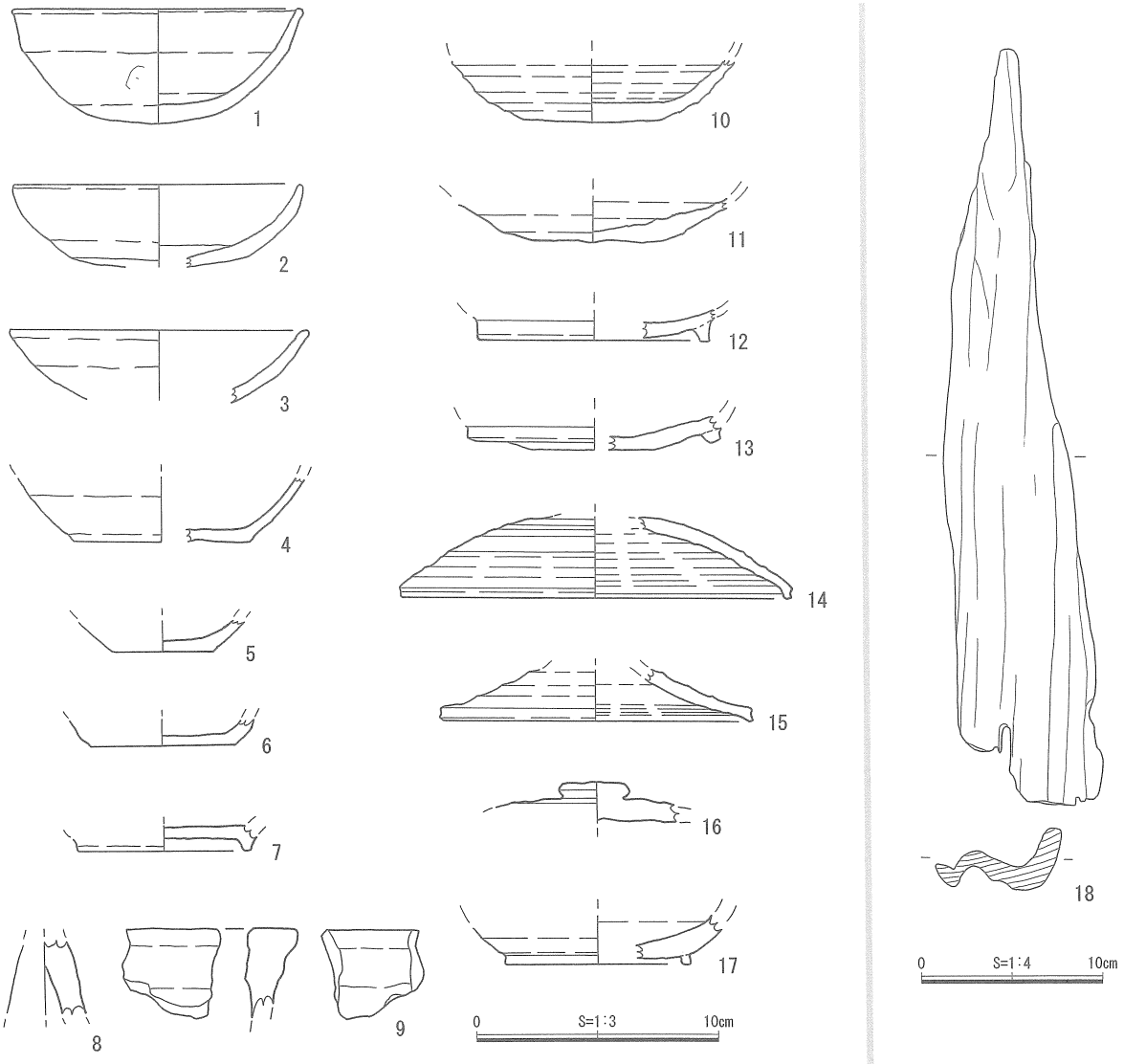
出土した灰釉陶器の年代などから、２号溝状遺構の帰属時期は９世紀頃と考えられる。

３号溝状遺構（第42・45～47図）

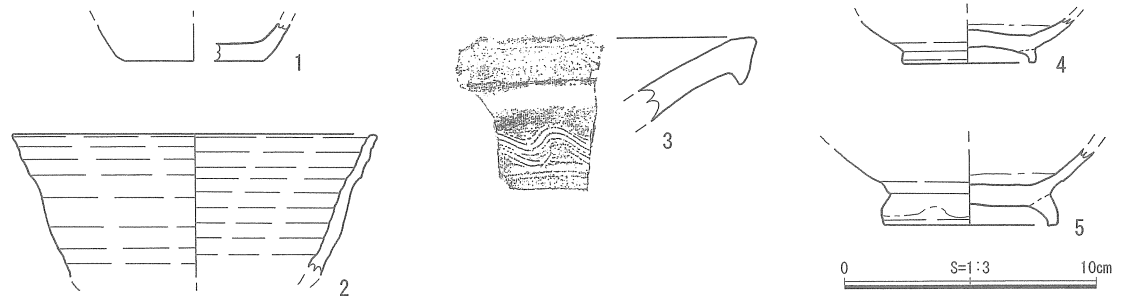
非常に浅い遺構であるが、遺構の上端や底面直上から多くの土師器・須恵器・木片が集中して出土し



第42図　１～６号溝状遺構平・断面図



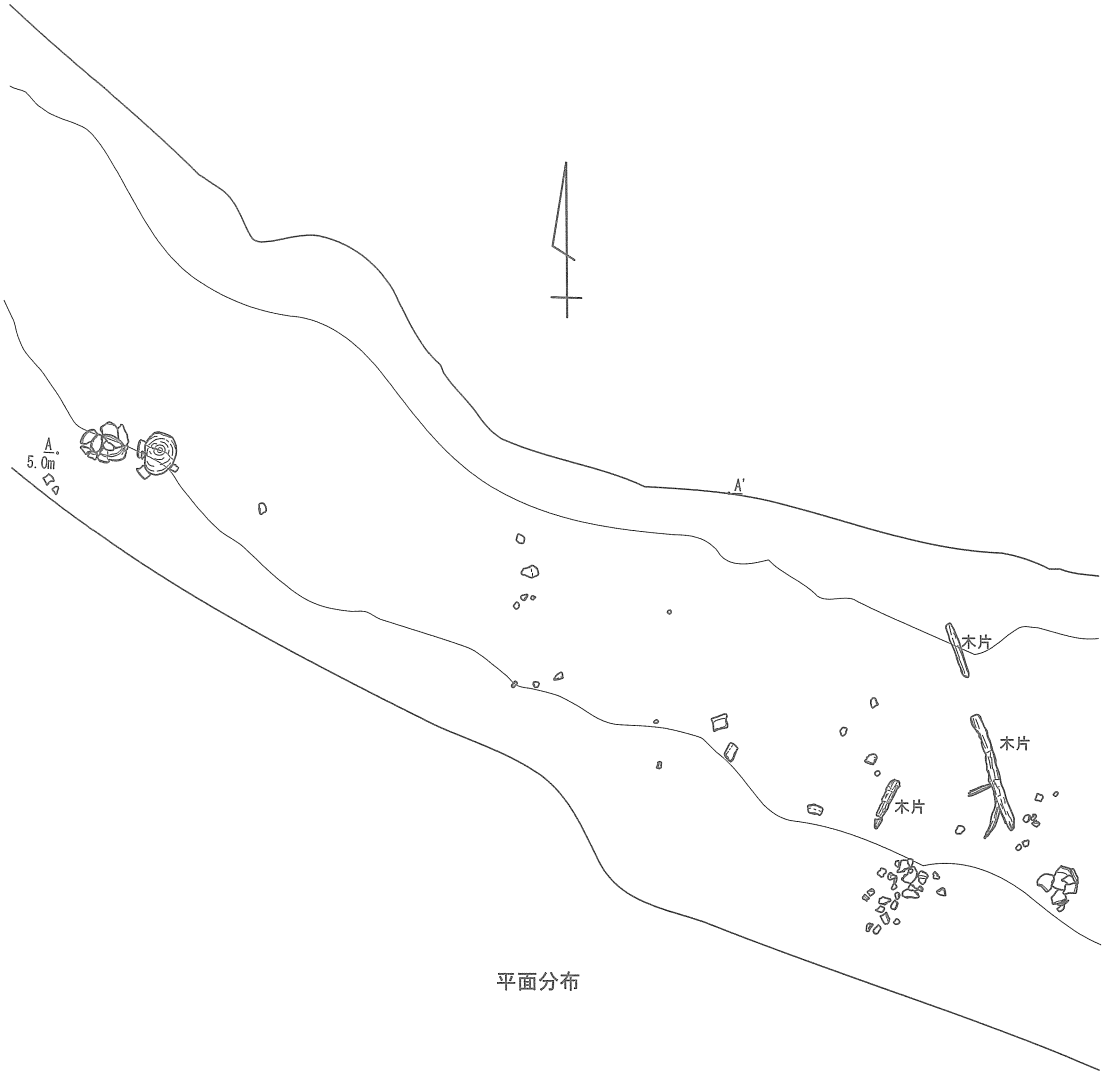
第43図　１号溝状遺構出土土器および木製品実測図



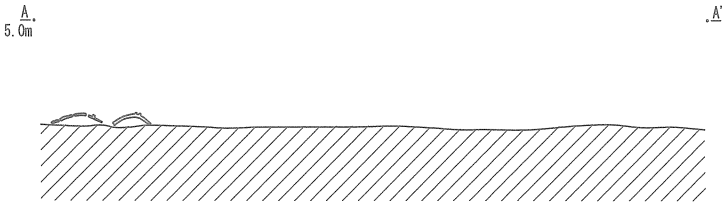
第44図　２号溝状遺構出土土器実測図

た。調査区内での長さは16m程で、西端はさらに調査区外へと続く。幅は西端付近で1.5m、東端付近2.5mを測り、検出面からの深さは平均して0.1mである。覆土は単層で黒褐色（10YR2/2)、粘性・しまりともに有り、粒の細かい円礫を多く含んでいる。

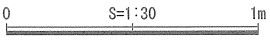
４号溝状遺構を切るが、攪乱に切られる。３号溝状遺構西端の延長線上には５号溝状遺構が存在する。覆土の状態や土器の集中、深さや幅といった規模の類似性から、本来は５号溝状遺構と連結する同一の



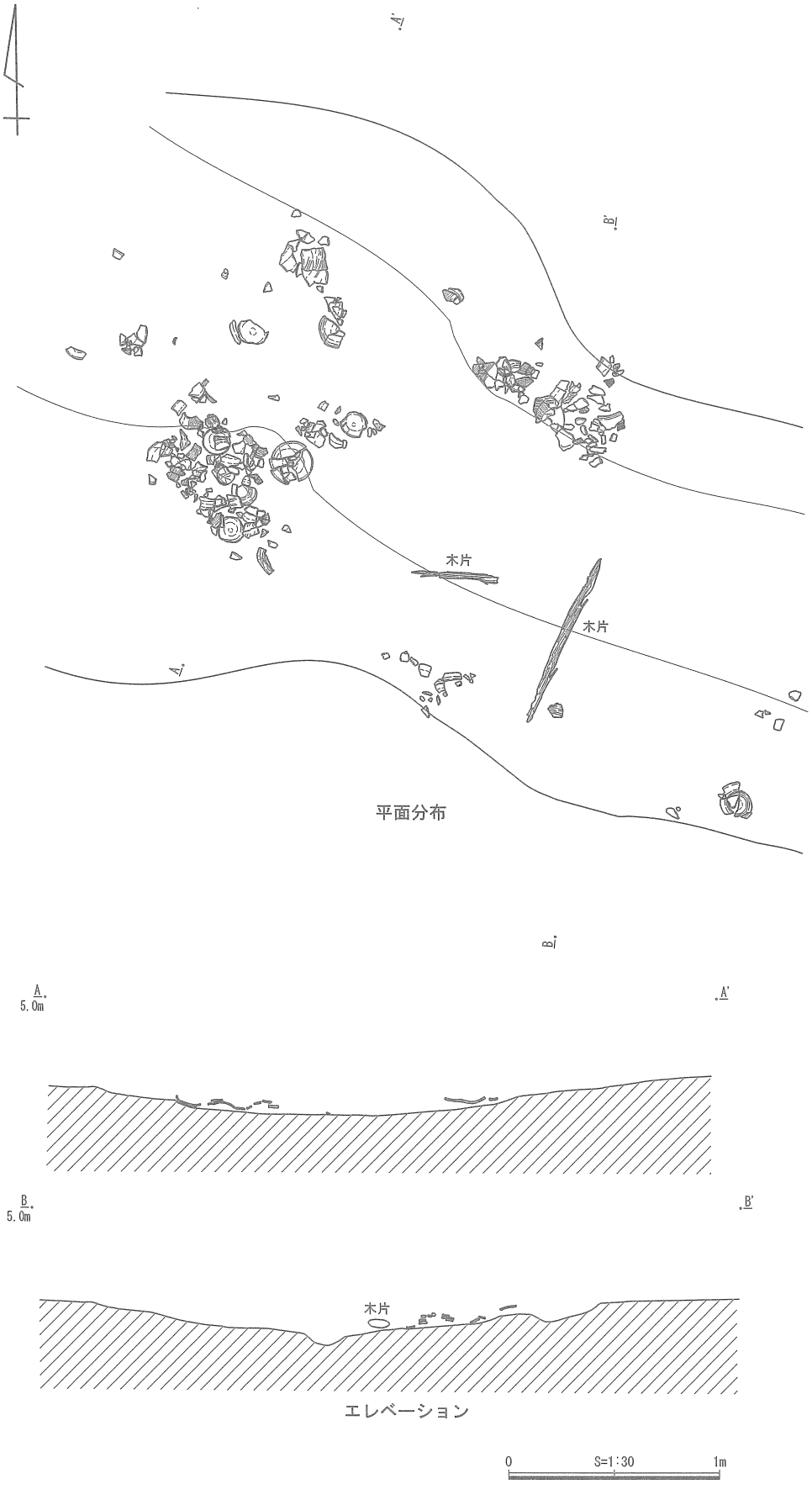
平面分布



エレベーション

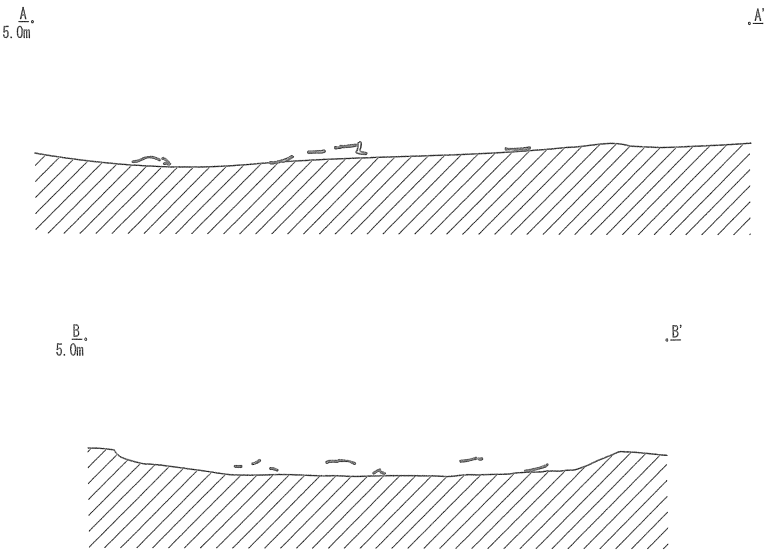


第45図　３号溝状遺構土器集中１出土状況図



第46図　３号溝状遺構土器集中２出土状況図

平面分布



エレベーション

0　S=1:30　1m

第47図　３号溝状遺構土器集中３出土状況図

遺構であった可能性が考えられる。３・５号溝状遺構が連結していた場合、１号溝状遺構によって切られていたことになる。

出土土器は破面が鋭く、個体別にそのまとまりを把握できるような出土状況を示している。このことから、出土土器は他所から流れ着いたものではなく、付近で廃棄された可能性が高い。また、土器とともに検出された木片は用途等不明である。

３号溝状遺構出土遺物（第48～51図）

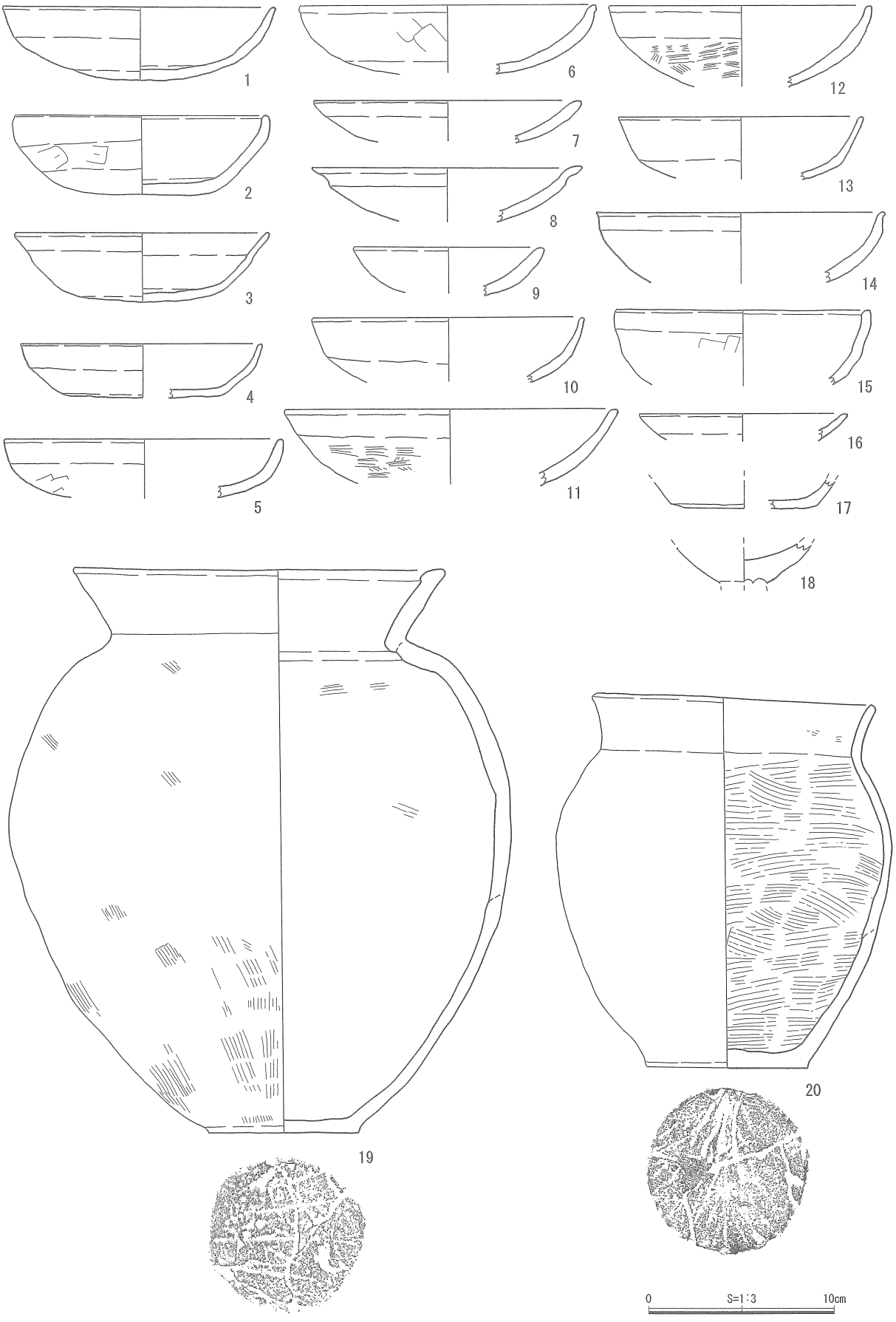
土器　第48図の１～17は土師器坏である。１・２はほぼ完形、３～６は口縁～底部片である。１～６は体部が篦削りで、平底に近い丸底を呈する。坏Ａ１類で第Ⅰ～Ⅱ期に位置づけられよう。２は口縁部がやや内傾し、古墳時代後期（７世紀）に遡る可能性もある。７～15は口縁～体部片、16は口縁部片、17は底部片である。７・８は器高が低く、皿に近い形状を呈する。８は口縁端部が外反する。11・12は体部外面に刷毛目が認められ、胎土が粗い。17は平底で第Ⅲ期以降の資料と考えられる。18は高坏の坏部片である。19・20は土師器甕で、ほぼ完形である。19はいわゆる駿東型甕で甕Ａ類にあたる。古墳時代の系譜を引く球胴系で、口縁部と器壁が厚い。茶褐色を呈するものが多いが、本資料は赤橙でやや赤みがかった色調である。器面の摩耗が著しいため、外面刷毛目調整後に施されたであろう篦磨きの痕跡は認められなかった。最大径が胴部中位よりもやや上半である点、口唇部に粘土帯を貼り付けて肥厚させている点など、山本編年４段階と５段階の要素を併せもつことから、７世紀末から８世紀初頭の所産であると考えた。20は小型の甕で内面に粗い刷毛目調整を施す。胴部下半は横位の刷毛目が主体だが、胴部上半から斜位の刷毛目が加わるようになる。摩耗が著しいが、外面にも刷毛目調整が施された可能性がある。平底で胴部中位よりやや上半で最大径を測る。第Ⅲ～Ⅳ期の範疇で捉えられよう。

第49図の１～10は土師器甕である。１～４が口縁～胴部片、５～７が胴～底部片、８～10が底部片である。１～９が駿東型甕と考えられる。１は外面に刷毛目調整後の篦磨き調整の痕跡が確認できる。１・２は口唇部の粘土帯貼り付けや胴部の形状から、山本編年４～５段階の範疇で、７世紀末から８世紀第１四半期の間に位置づけられよう。３は最大径が胴部上半ではなく、胴部中位に位置する可能性が高く、口径と胴部径との差が小さい。口縁部は単純口縁に近い。山本編年６段階に相当し、８世紀第２四半期に位置づけられる。４は口唇部内面に、断面三角形状を呈す明確な稜線が認められ、山本編年４段階の可能性が高い。７世紀末に位置づけられよう。５は胴部下半から底部までの窄まりが急で、胴部径に対して底径が小さくなることが推定される。また、４と５は出土状況や胎土等から同一個体である可能性が高い。６は胴部上半を欠くが、３同様に最大径が胴部中位に位置する可能性が高く、山本編年６段階、８世紀第２四半期に位置づけられよう。８は外面に篦磨き調整が施される。

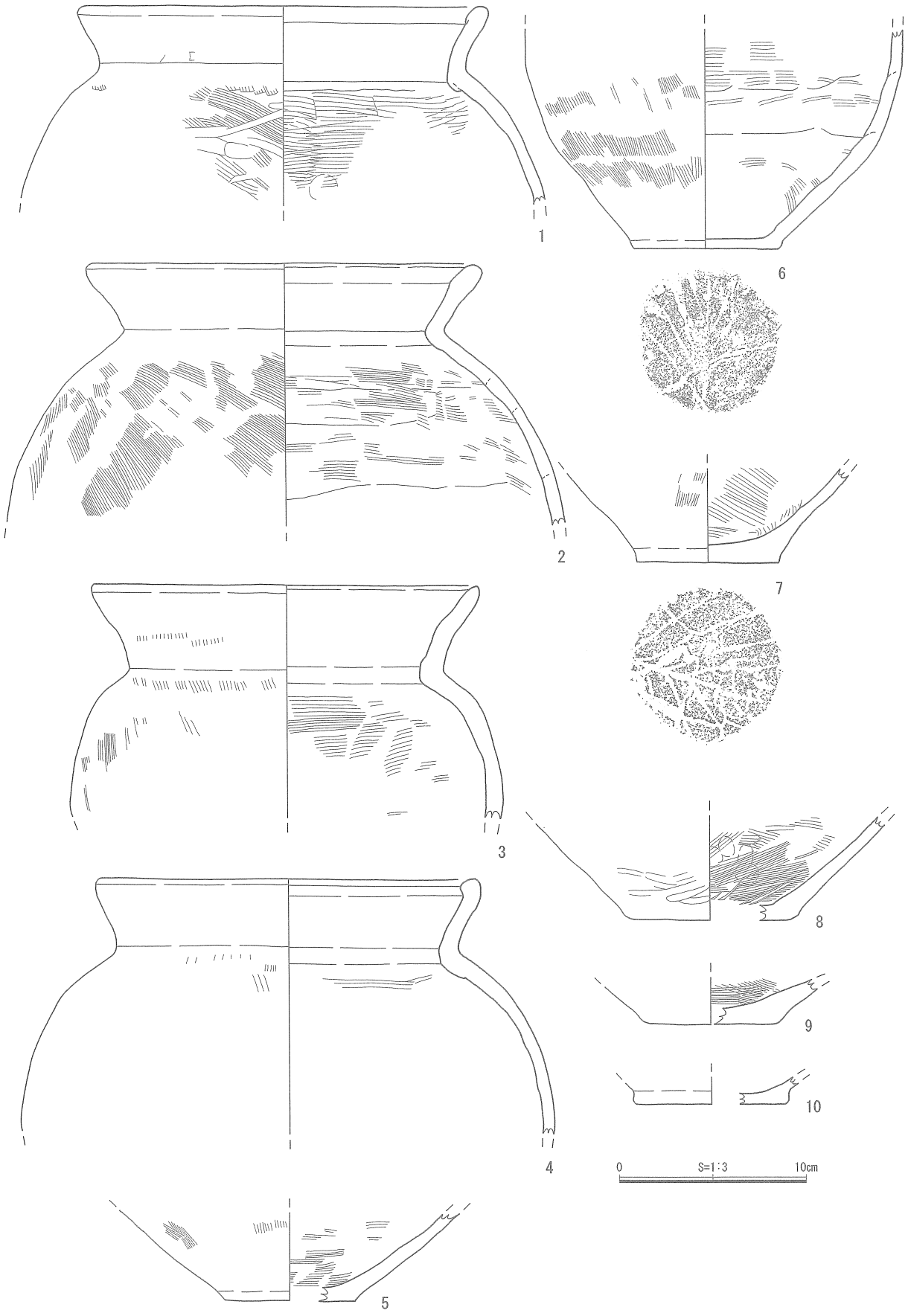
第50図の１～８は土師器である。１～５は駿東型甕と考えられる。１は口縁～胴部片で、口唇部の粘土帯貼り付けによる稜が浅い。山本編年５段階、８世紀第１四半期に位置づけられようか。２～４は口縁部片、５は頸～胴部片である。６はほぼ完形の鉢である。坏よりも甕に近い粗い胎土で成形される。７・８は坩堝のような形態を呈す。手捏ねによるミニチュア土器と理解した。

９～19は須恵器坏である。９～11は無台でほぼ完形、12・13は口縁～底部片である。いずれも丸底に近い平底である。11は口縁部を中心に焼け歪みが認められる。14～15は口縁～体部片、16は体～底部片である。14は丸碗に近い形態を呈す。概ね８世紀代の資料と考えられる。17～19はほぼ完形の有台坏である。18・19は焼成の加減か器面が瓦質化し、黒い光沢を発する。19は突出した底部が高台からはみ出ており、第Ⅰ～Ⅱ期に帰属される。17・18は19よりもやや時期が下る。

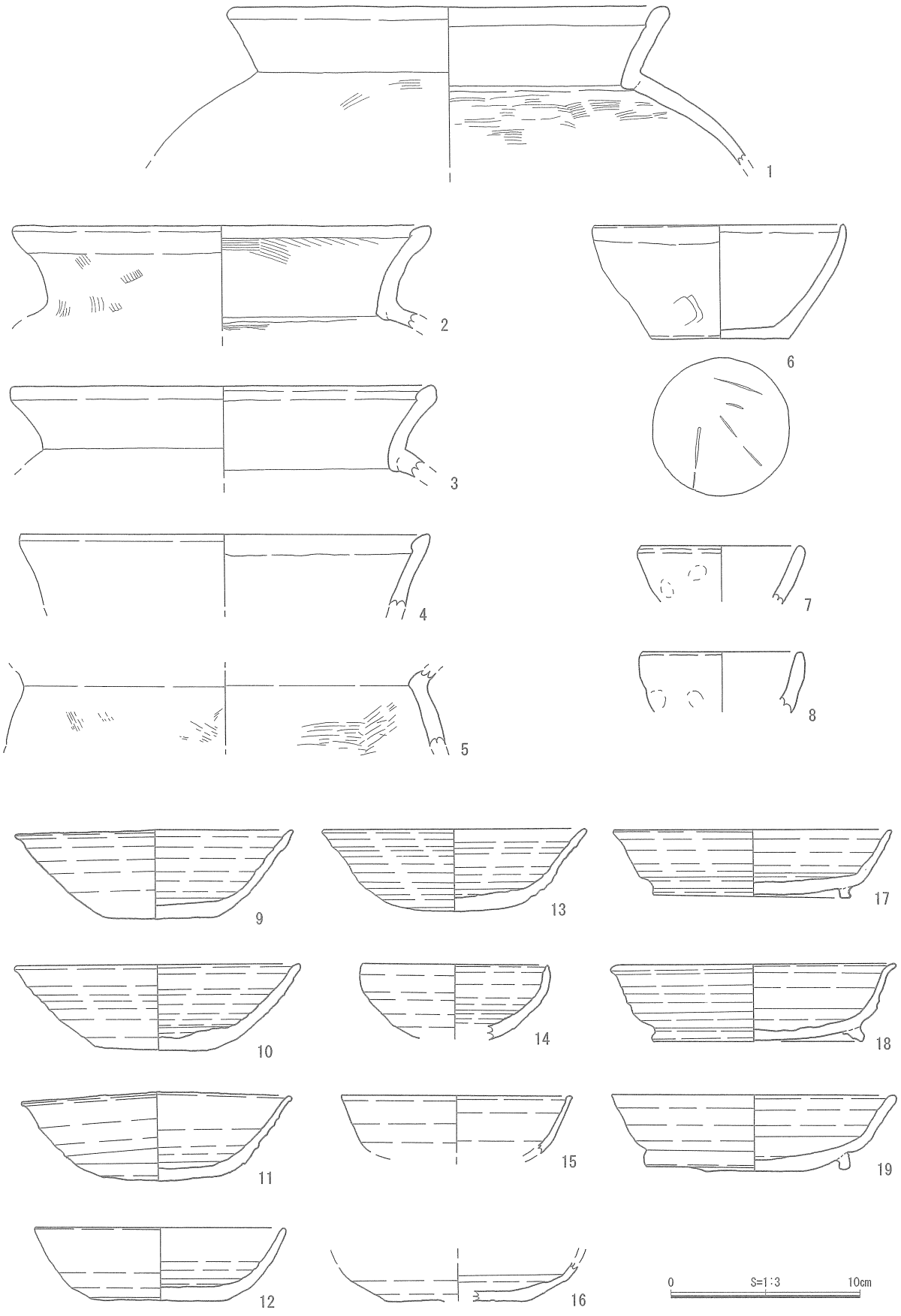
第51図の１～12は須恵器有台坏である。１は完形、２はほぼ完形、３～11は口縁～底部片、12は底部片である。１は底部から口縁部まで緩やかに立ち上がり、箱形に近い形態を呈す。器高が高く坏部もやや深めに作られる。形態的特徴から助宗窯産の可能性が高い。しかし、助宗窯産有台坏は篦による削り



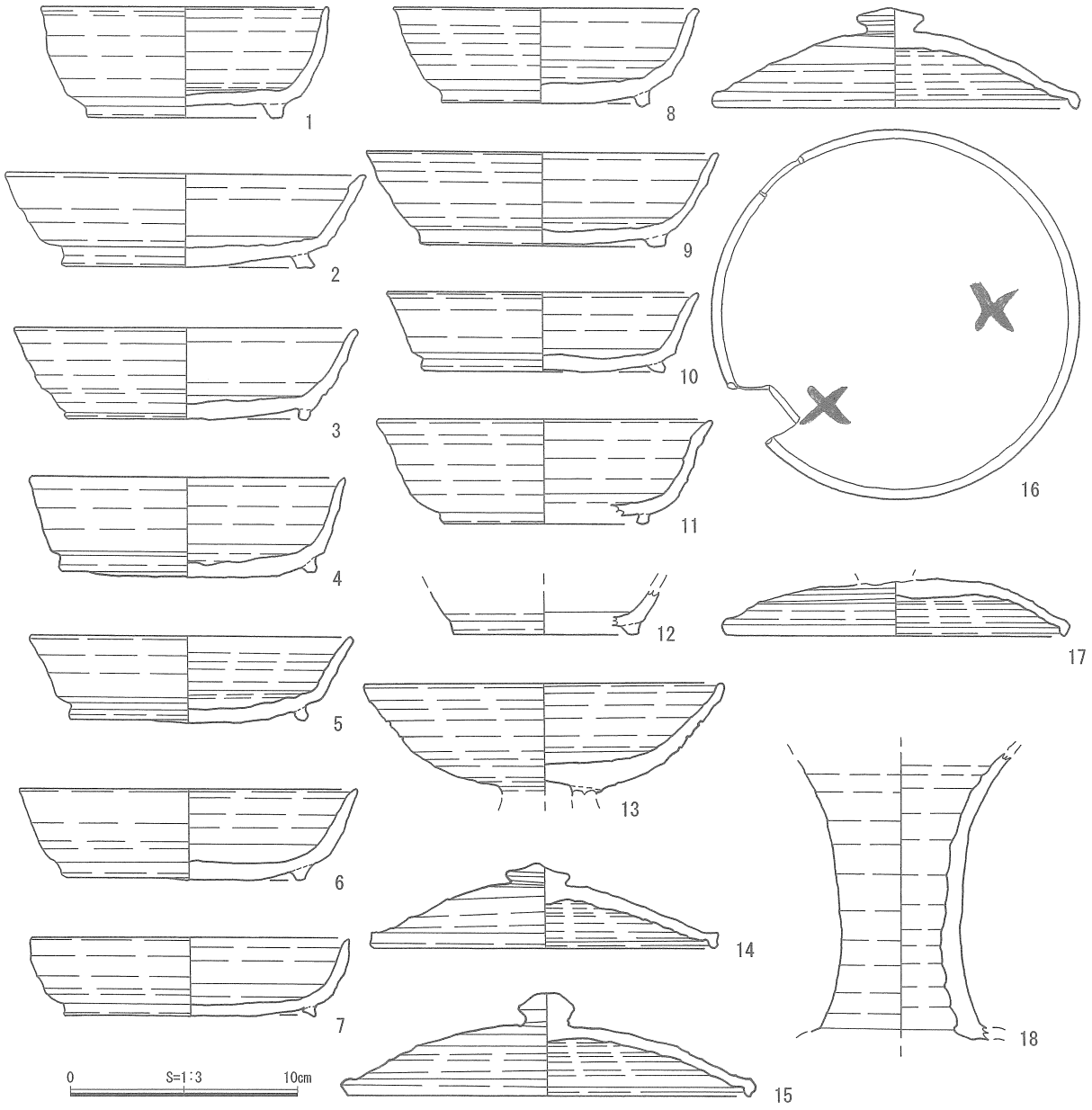
第48図　3号溝状遺構出土土器実測図①



第49図　３号溝状遺構出土土器実測図②



第50図　３号溝状遺構出土土器実測図③



第51図　３号溝状遺構出土土器実測図④

出し高台を特徴とするが、本資料は貼り付け高台である点、疑問が残る。２～７は丸底の底部が高台よりも突出する湖西窯製品に特徴的な形態である。７世紀末から８世紀初頭に位置づけられる。８～10は７までよりは底部の張りが弱まり、平底に近い形態を呈している。８世紀初頭から前葉に位置づけられよう。13は須恵器無蓋高坏の坏部片である。坏部が深く、椀に近い形態を呈する。坏底に僅かに残る脚部の痕跡は摩滅しており、無台の丸底坏として転用されていた可能性が高い。高坏は８世紀初頭まで存在するが、以降は消滅するとされる。14～17は須恵器坏蓋である。14～16はほぼ完形で、17は頂部の摘みを欠く。14・16は頂部から口縁部に掛けての形態や、摘みの形態などから、８世紀前葉に位置づけられる。15は摘みが小型化するなど、14・16よりもやや時期が下る。16の内面には２箇所に「十」の字の墨書が認められた。18は長頸壺の頸部片である。頸部から口縁部に向かって大きく開く。頸部の下端から肩部にかけては、折れて明瞭な稜になる。８世紀前後の所産と思われる。

土師器は坏Ａ１類や山本編年４段階の駿東型甕など、８世紀前後、７世紀末まで遡り得る資料も認め

られる。須恵器は助宗窯産の可能性がある第51図の１を除き、形状や胎土からほぼ全て湖西窯産であると考えられる。７世紀末から８世紀前葉までの間に位置づけられる資料が多いようである。総じて、３号溝状遺構の帰属時期も、７世紀末から８世紀前葉に位置づけられよう。

４号溝状遺構（第42図）

検出した部分で長さ3.5m程、幅0.6m程、深さ0.15m程を測る。覆土は単層である。１・３号溝状遺構に切られる。

遺物は土師器や須恵器の破片が数点出土したが、図化に耐え得る資料は認められなかった。１・３号溝状遺構に両端を切られることから、両遺構よりも相対的に若干古いことが分かり、奈良・平安時代に帰属するものとした。

５号溝状遺構（第42・52図）

３号溝状遺構同様に多くの土師器・須恵器・木片が集中して出土した。長さは８m程で、南北両端は攪乱によって失われている。幅は北端付近で2.5m、南端付近２mを測り、検出面からの深さは平均して0.1mである。覆土は単層で黒褐色（10YR2/2)、粘性・しまりともに強く、粒の細かい円礫を多く含んでいる。第53図の９が３号溝状遺構出土の破片と接合したことなどからも、本来は３号溝状遺構と連結する同一の遺構であった可能性が考えられる。出土土器についても、３号溝状遺構同様に数個体がその場で割れたような出土状況を示している。

５号溝状遺構出土遺物（第53・54図）

第53図の１～７は土師器坏である。１・２はほぼ完形、３～６は口縁～底部片、７は底部片である。１・３～６は坏Ａ１類で第Ⅰ～Ⅱ期、２・７はＡ２類で第Ⅲ～Ⅳ期に位置づけられる。５は黒色、７は内黒土器である。８～15は土師器甕である。８は口縁部片、９は頸～胴部片、10・11は胴～底部片、12～15は底部片である。８・10・11は駿東型甕と考えられる。９は器面の摩耗が著しいため断定できないが、口縁部と胴部接合部に突き出しが認められるなど、駿東型甕の特徴をもつ。16・17は須恵器坏である。16は口縁～底部片、17は体～底部片である。概ね８世紀代の資料と考えられる。

第54図の１～５は須恵器有台坏である。１は口縁～底部片、２・３は体～底部片、４・５は底部片である。２・４・５は底部が高台よりも突出する７世紀末から８世紀初頭に特徴的な形態である。１・３・５は底部の張りが弱く、２・４よりもやや時期が下ると考えられる。６・７は須恵器坏蓋である。６は口縁部の一部を欠く。８世紀前葉に位置づけられようか。７は頂部を欠く。

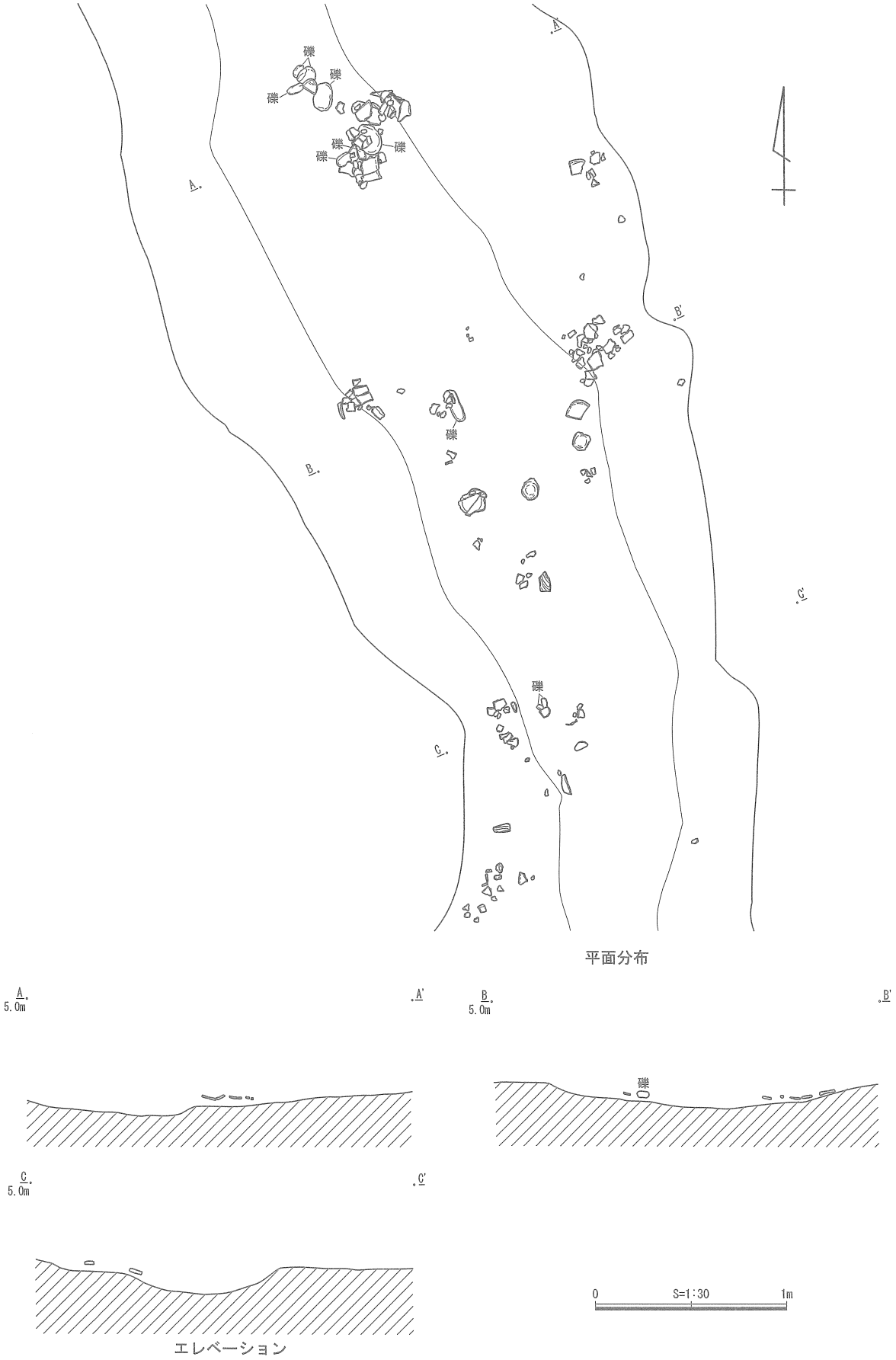
５号溝状遺構出土土器は土師器が坏と甕、須恵器が坏と坏蓋など、器種が３号溝状遺構出土資料と一致している。土器の年代観も３号溝状遺構と同様に７世紀末から８世紀前葉に位置づけられる資料が認められる。出土土器の検討からも、３号溝状遺構と５号溝状遺構は同一遺構であった可能性は高く、５号溝状遺構の帰属時期も３号溝状遺構同様、７世紀末から８世紀前葉に位置づけられよう。

６号溝状遺構（第42図）

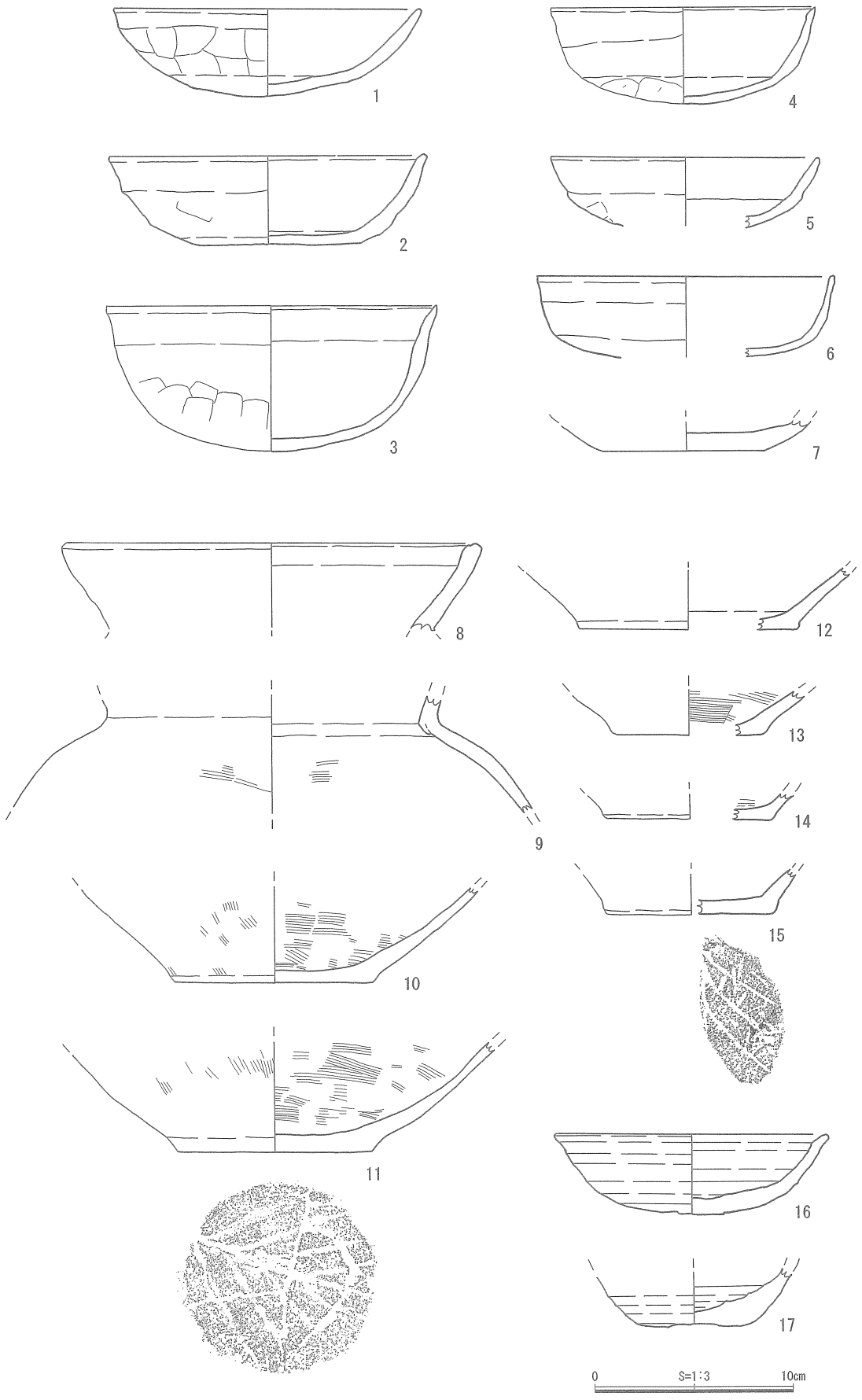
部分的に浅くなることから所々途切れるものの、調査区内での長さは推定62m程延伸することが見込まれ、東端はさらに調査区外へと続く。幅は１m程で、深さは西側で0.15mだが、東側では0.05mとなり、東ほど浅くなる傾向にある。西から東まで、ほぼ直線的に延伸する。土層の堆積状態から２層に分層されるが、掘り込みの浅い東側では第２層しか残存していなかった。43・45・49・50・51号土坑と攪乱によって一部が切られている。

６号溝状遺構出土遺物（第57図）

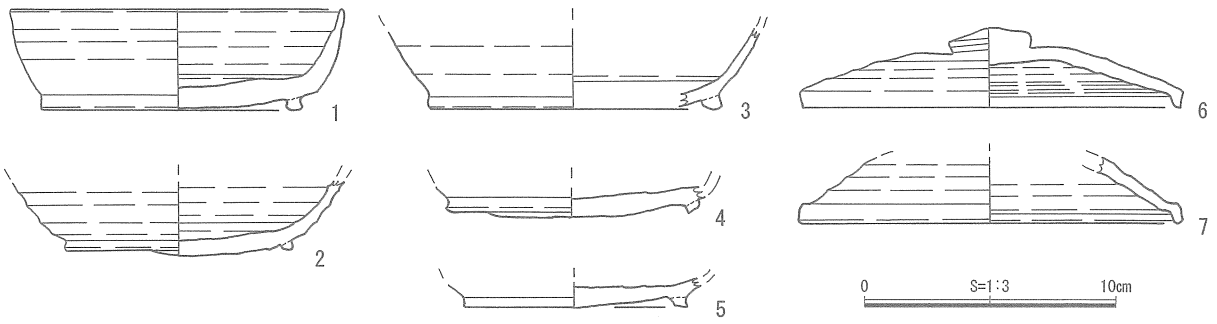
土器　１は土師器甕の底部片である。２は灰釉陶器埦の底部片である。三日月高台の内側下半の内傾がやや弱いことから、猿投窯編年の黒笹90号窯式３型式から折戸53号窯式１型式の間に位置づけられ、９世紀末から10世紀初頭に帰属する。



第52図　５号溝状遺構土器集中出土状況



第53図　５号溝状遺構出土土器実測図①



第54図　５号溝状遺構出土土器実測図②

７号溝状遺構（第55図）

長さ２m程、幅0.5m程、深さ0.08m程を測る。覆土は単層である。遺物の出土は認められなかったが、南端を８号溝状遺構によって切られていることから、８号溝状遺構よりも相対的に若干古いことが分かり、奈良・平安時代に帰属するものとした。

８号溝状遺構（第55図）

蛇行しながらも、概ね南北方位に延伸するようである。調査区内での長さは26m程を測り、北端はさらに調査区外へと続く。幅は平均１m、深さは南側が深い傾向にあり、0.16m程を測る。覆土は単層である。７号溝状遺構を切るが、78号土坑・２号土坑列によって切られる。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器甕や須恵器甕の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

９号溝状遺構（第56図）

攪乱によって所々寸断されるが、長さは推定４m程を測る。北側で幅0.8m、深さ0.1mを測る。覆土は単層である。

９号溝状遺構出土遺物（第57図）

土器　３は灰釉陶器埦の底部片である。高台が外側に張り出すものの、三日月高台の内側下半の内傾がやや弱いことから、猿投窯編年の黒笹90号窯式３型式に相当し、９世紀末の資料と考えられる。

10号溝状遺構（第56図）

非常に細長く、やや蛇行しながらも南北方位に延伸するようである。攪乱によって所々寸断されるが、長さは推定27m程を測る。幅は平均0.2m、深さは0.05mを測る。覆土は単層で円礫を多く含む。４号土坑列を切る。底面出土の木片の樹種同定を実施した結果、樹種はヒノキであった。

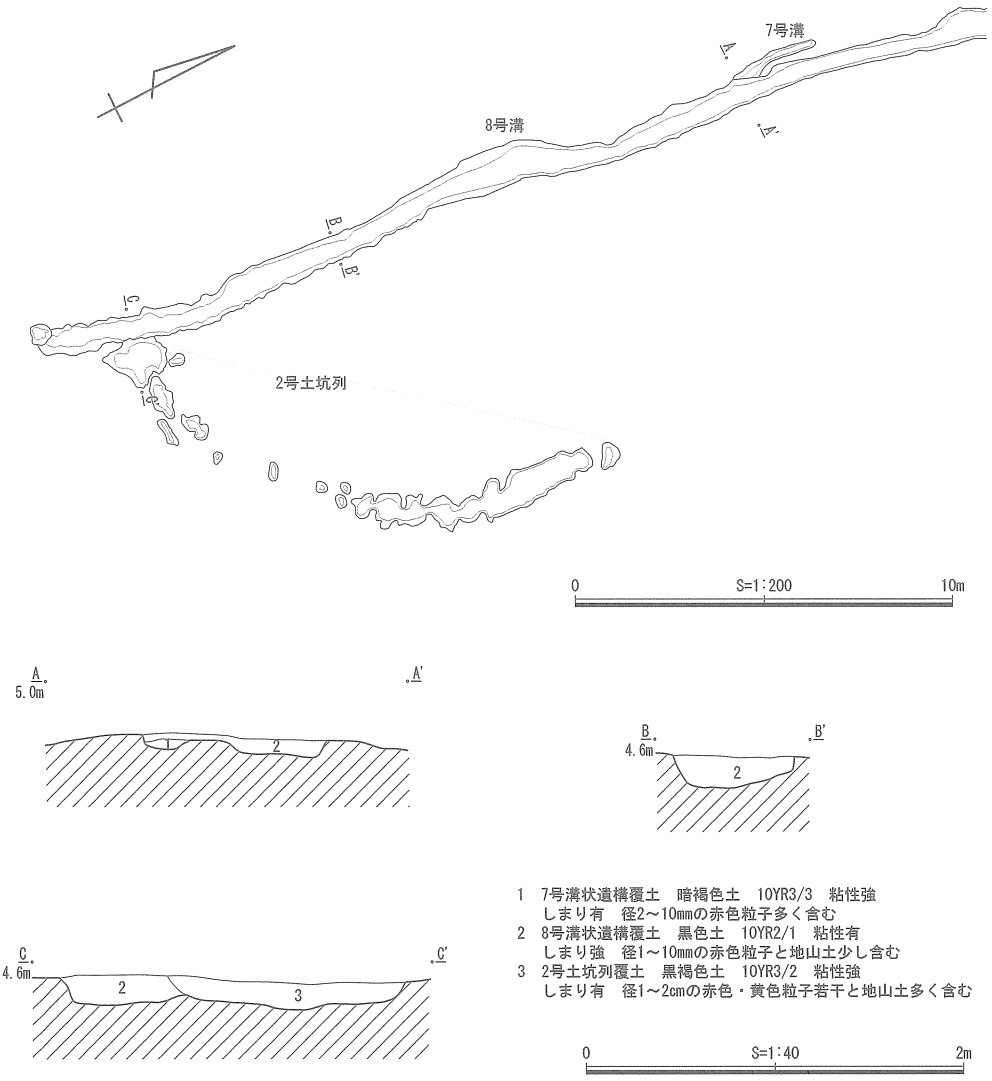
図化し得なかったが、土師器坏破片が出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

10号溝状遺構出土遺物（第57図）

石器　４は敲石である。石材は中粒砂岩で、敲打痕が縁辺部に認められる。

11号溝状遺構（第58・59図）

大きく蛇行しながら東西方向に延伸する。調査区内での長さは102m程を測り、南西隅はさらに調査区外へと続く。北東隅は攪乱によって切られている。最大幅は1.5mを測るが、南西隅は0.5mと幅を狭める。深さは西側で深く0.25mを測るが、東側では0.1m前後と浅くなる。土層の堆積状態から２層に分層され、第２層に砂粒が認められる。出土土器は破面に角のない隅丸な小破片ばかりで、流れの中でローリングを受け土器破面が摩滅したものと考えられる。また、遺構がほぼ東西方向に向かって延伸するものの、小さな蛇行を繰り返していることから、奈良・平安時代における自然流路か、またはそれを用いて人為的に造られた何らかの流路であった可能性が高い。12号溝状遺構と７号土坑列を切るが、６号土



第55図　７・８号溝状遺構・２号土坑列平・断面図

坑列と攪乱に一部切られる。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器甕の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

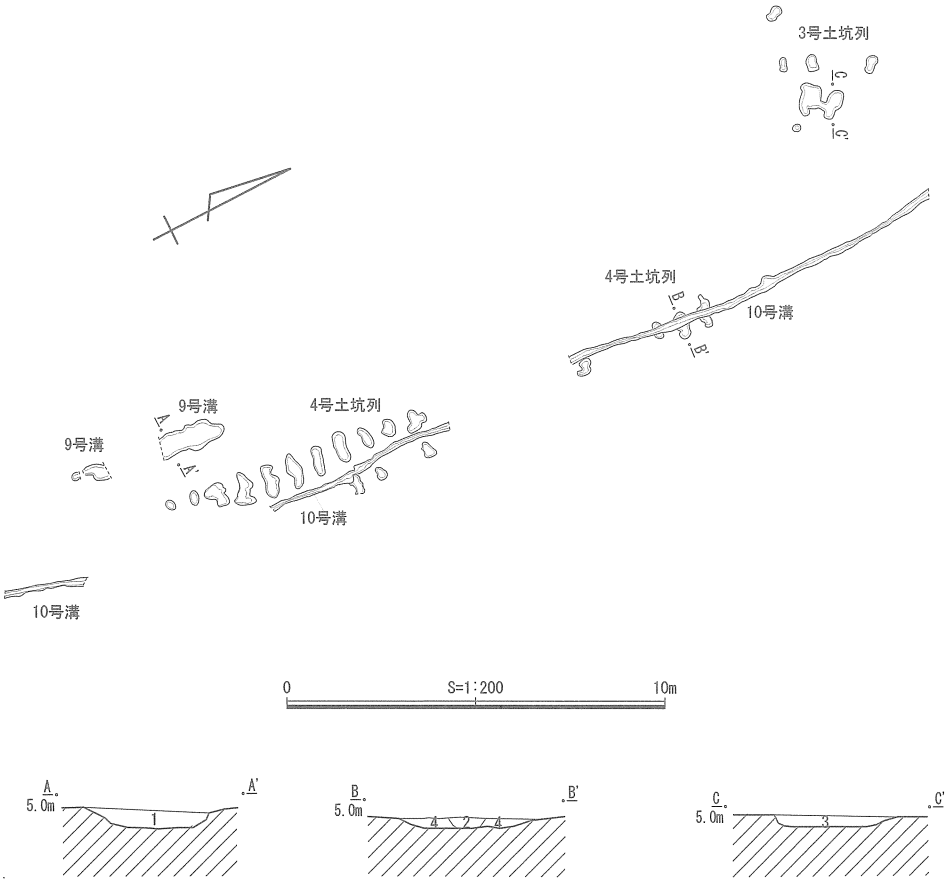
12号溝状遺構（第59図）

長さは11m程であるが、本来もっと長く延びていた部分が、11号溝状遺構に切られている可能性もある。幅は２m程、深さは0.1m前後を測り、覆土は単層である。11号溝状遺構よりやや幅広だが、11号溝状遺構とほぼ同一方向に延伸するため、中央部を大きく切られている。12号溝状遺構の埋没した箇所を11号溝状遺構として掘り直していた可能性も考えられる。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器坏の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

６号土坑（第60図）

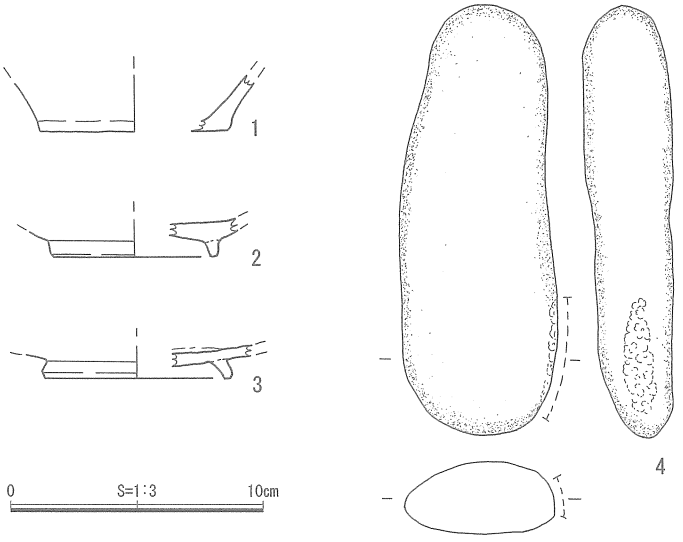
平面形は楕円形を呈し、長径1.64m、短径1.36mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.14mを測る。



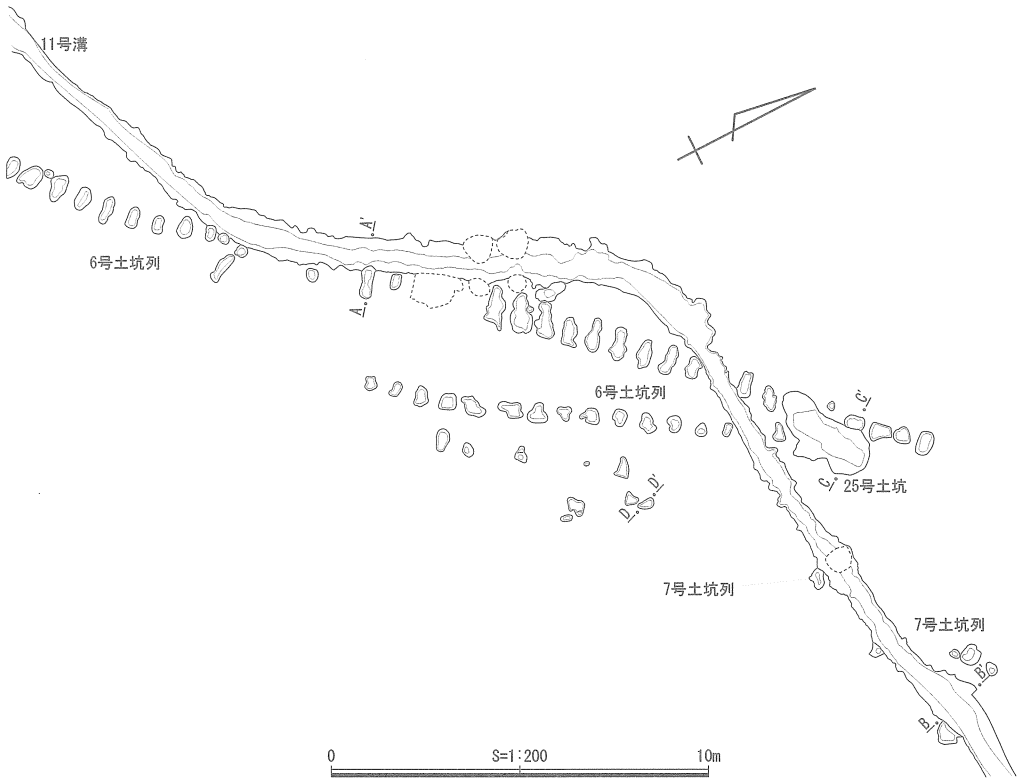
1　9号溝状遺構覆土　黒色土　10YR2/1　粘性強
　しまり強　径5～10㎜の円礫少し含む
2　10号溝状遺構覆土　黒色土　10YR1.7/1　粘性有
　しまり弱　径5～10㎜の円礫多くと径5㎜前後の赤色粒子若干含む
3　3号土坑列覆土　黒褐色土　10YR3/1　粘性有
　しまり有　径1～3cmの円礫と径5㎜前後の赤色粒子若干含む
4　4号土坑列覆土　黒色土　10YR2/1　粘性強
　しまり強　径1～3cmの地山ブロック若干と径5～10㎜の円礫少し含む

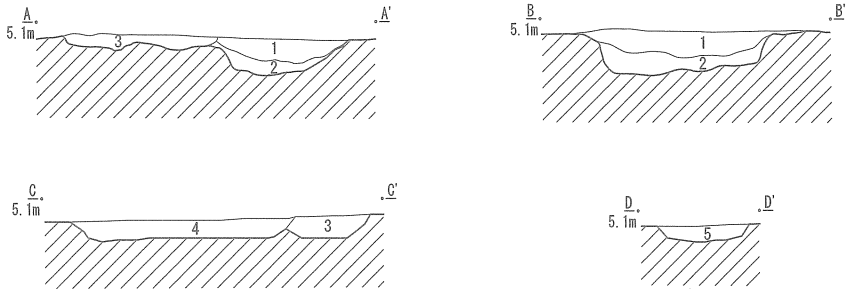
0　S=1:40　2m

第56図　９・10号溝状遺構・３・４号土坑列平・断面図



第57図　６・９・10号溝状遺構出土土器および石器実測図





1　11号溝状遺構第1層　黒褐色土　10YR3/2　粘性強
　しまり有　径5～10mmの地山ブロック若干含む
2　11号溝状遺構第2層　暗褐色土　10YR3/3　粘性有
　しまり有　径3mm前後の角礫僅かに含む
3　6号土坑列覆土　黒褐色土　10YR3/1　粘性強
　しまり強　径1mm以下の白色粒子若干含む
4　25号土坑覆土　黒色土　7.5YR2/1　粘性有　しまり有
　径1～5cmの地山ブロックと径1～3mmの白色・赤色粒子若干含む
5　7号土坑列覆土　黒褐色土　5YR2/1　粘性弱
　しまり有　径1～3mmの白色・赤色粒子少し含む

0　S=1:40　2m

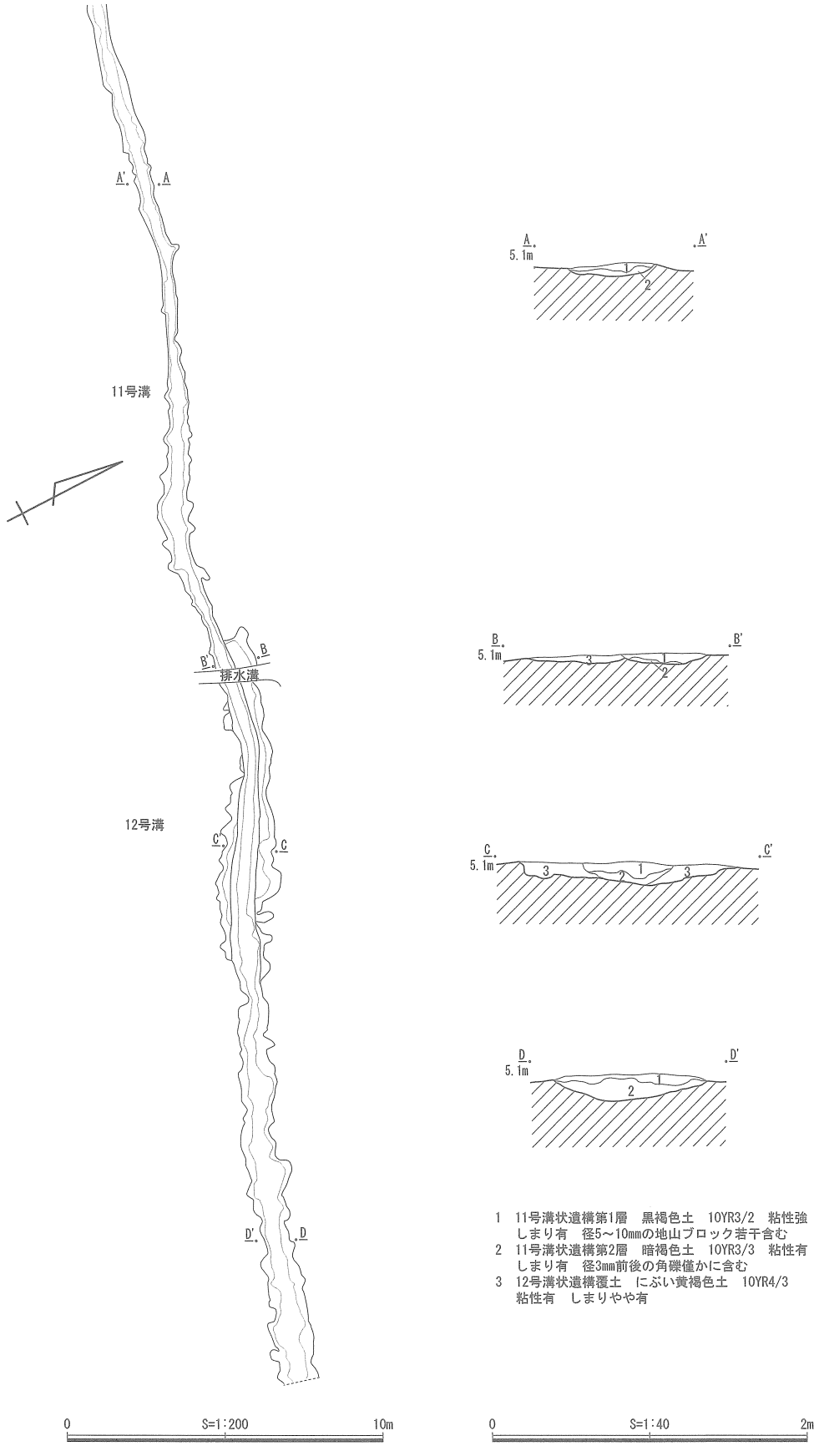
第58図　11号溝状遺構・６・７号土坑列・25号土坑平・断面図

６号土坑出土遺物（第74図）

土器　１は須恵器壺の胴～底部片で、有台の無蓋長頸壺と思われる。ややいびつな形態で、８世紀後半の所産であろうか。２は須恵器甕の胴部破片である。内面に当て具痕である青海波文が認められる。

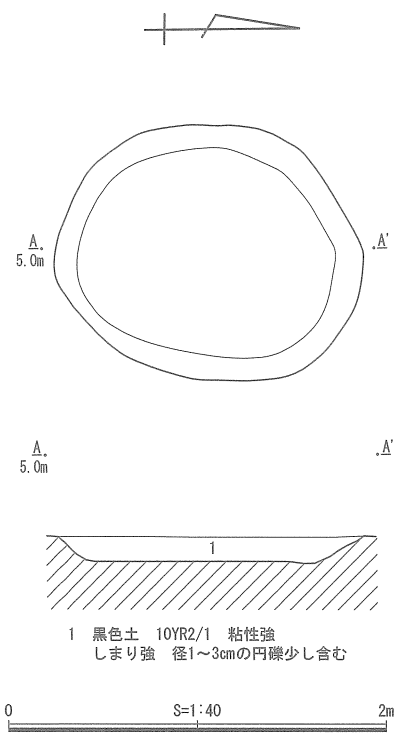
７号土坑（第61図）

平面形は楕円形を呈し、長径3.12m、短径1.92mを測る。覆土は土層の堆積から２層に分層され、検出面からの深さは0.10mを測る。１号溝状遺構に切られる。



1　11号溝状遺構第1層　黒褐色土　10YR3/2　粘性強
　しまり有　径5～10㎜の地山ブロック若干含む
2　11号溝状遺構第2層　暗褐色土　10YR3/3　粘性有
　しまり有　径3㎜前後の角礫僅かに含む
3　12号溝状遺構覆土　にぶい黄褐色土　10YR4/3
　粘性有　しまりやや有

第59図　11・12号溝状遺構平・断面図



第60図　６号土坑平・断面図

７号土坑出土遺物（第74図）

土器　３は土師器坏の底部片である。４は須恵器坏の底部片である。無台で底径が小さい。５は須恵器坏蓋の口縁部片である。外面に貼り付いている高台は、焼成時に有台坏の一部と融着したものと考えられる。

８号土坑（第62図）

平面形は楕円形を呈し、長径1.62m、短径は残存部で0.72mを測る。覆土は土層の堆積から２層に分層され、検出面からの深さは0.34mを測る。調査区際で検出された。

８号土坑出土遺物（第74図）

土器　６は須恵器有台坏の底部片である。丸底の底部がやや張り出す。

９号土坑（第63図）

いびつな平面形を呈し、非常に浅いが、覆土に円礫を多く含むため、判別が可能である。長径2.70m、短径1.56mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.04mを測る。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

10号土坑（第64図）

平面形はいびつな楕円形を呈し、長径0.48m、短径0.24mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.04mを測る。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器甕の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

11号土坑（第65図）

平面形は楕円形を呈し、長径1.52m、短径1.04mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.14mを測る。12・13号土坑に切られる。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器甕の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

12号土坑（第65図）

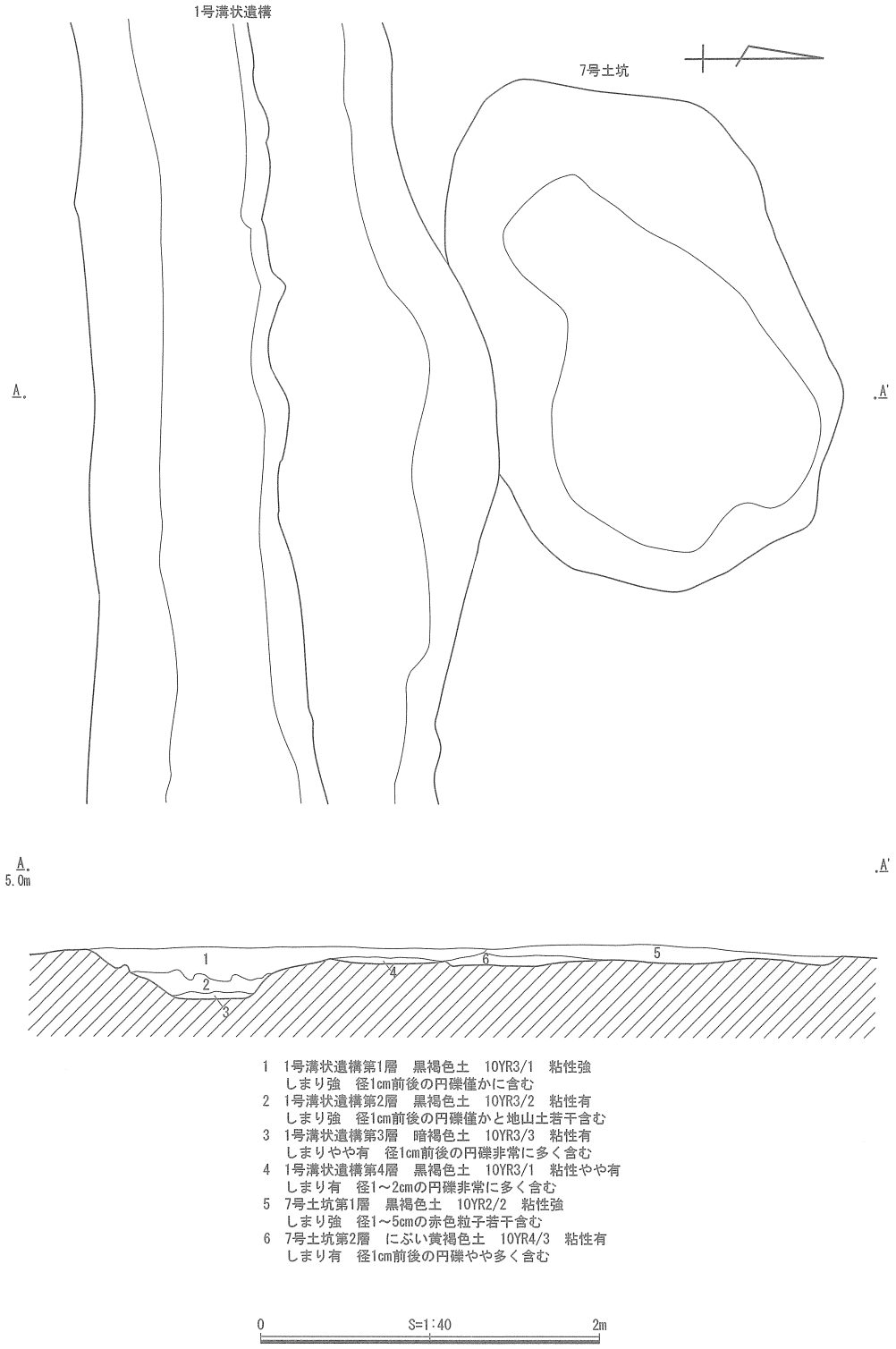
平面形は楕円形を呈し、長径1.60m、短径1.48mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.22mを測る。11号土坑を切る。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器甕の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

13号土坑（第65図）

平面形は楕円形を呈し、長径0.76m、短径0.58mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.08mを測る。11号土坑を切る。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器甕の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

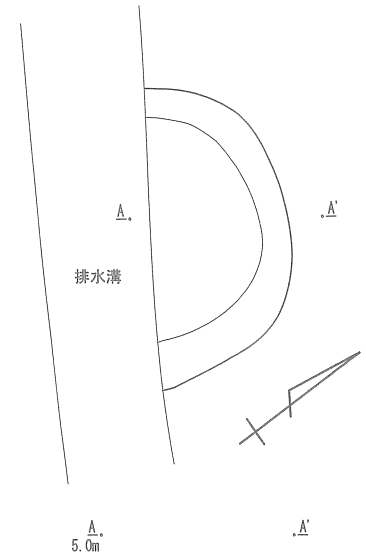


第61図　７号土坑・１号溝状遺構平・断面図

14号土坑（第66図）

平面形は楕円形を呈し、長径1.44m、短径は残存部で0.54mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.44mを測る。15号土坑に切られる。

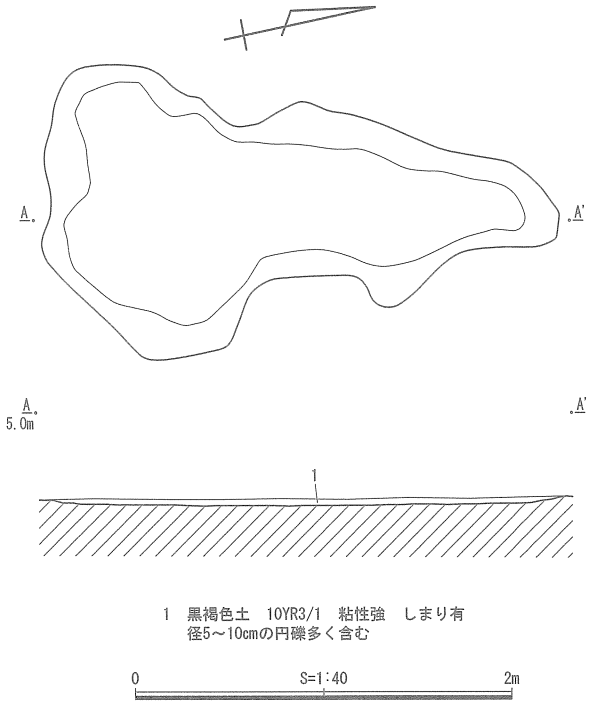
遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器甕の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。



1　黒色土　10YR2/1　粘性強　しまり有
　径1cm前後の円礫多く含む
2　黒褐色土　10YR3/1　粘性強　しまり強
　地山土少し含む

0　S=1:40　2m

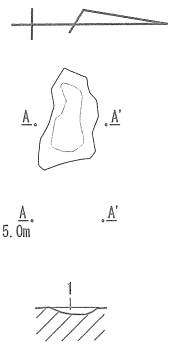
第62図　８号土坑平・断面図



1　黒褐色土　10YR3/1　粘性強　しまり有
　径5～10cmの円礫多く含む

0　S=1:40　2m

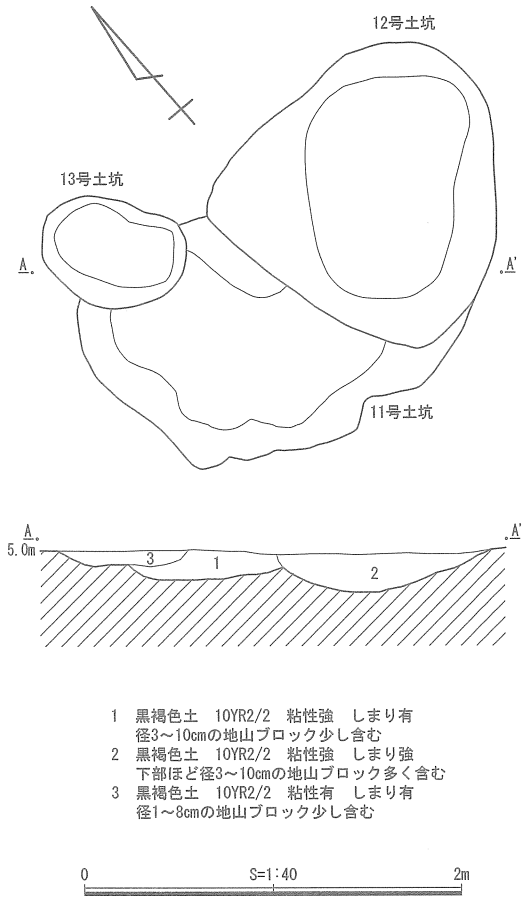
第63図　９号土坑平・断面図



1　黒褐色土　10YR3/1　粘性強　しまり強
　径1mm以下の赤色粒子と地山土若干含む

0　S=1:40　2m

第64図　10号土坑平・断面図



1　黒褐色土　10YR2/2　粘性強　しまり有
　径3～10cmの地山ブロック少し含む
2　黒褐色土　10YR2/2　粘性強　しまり強
　下部ほど径3～10cmの地山ブロック多く含む
3　黒褐色土　10YR2/2　粘性有　しまり有
　径1～8cmの地山ブロック少し含む

0　S=1:40　2m

第65図　11～13号土坑土坑平・断面図

15号土坑（第66図）

平面形は楕円形を呈し、長径1.50m、短径は残存部で0.68mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.12mを測る。14号土坑を切り、16号土坑に切られる。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器甕の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

16号土坑（第66図）

平面形は楕円形を呈し、長径1.30m、短径0.96mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.16mを測る。15号土坑を切る。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器甕の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

17号土坑（第67図）

平面形は楕円形を呈し、長径1.26m、短径は残存部で0.54mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.28mを測る。19号土坑に切られる。

遺物の出土は認められなかったが、19号土坑によって切られていることから、19号土坑よりも相対的に若干古いことが分かり、奈良・平安時代に帰属するものとした。

18号土坑（第67図）

平面形は楕円形を呈し、長径1.24m、短径0.86mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.42mを測る。19号土坑に切られる。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器甕の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

19号土坑（第67図）

平面形は楕円形を呈し、長径1.48m、短径1.20mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.16mを測る。17・18号土坑を切り、20号土坑に切られる。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器甕の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

20号土坑（第67図）

平面形は楕円形を呈し、長径1.08m、短径0.88mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.22mを測る。19号土坑を切る。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器甕の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

21号土坑（第68図）

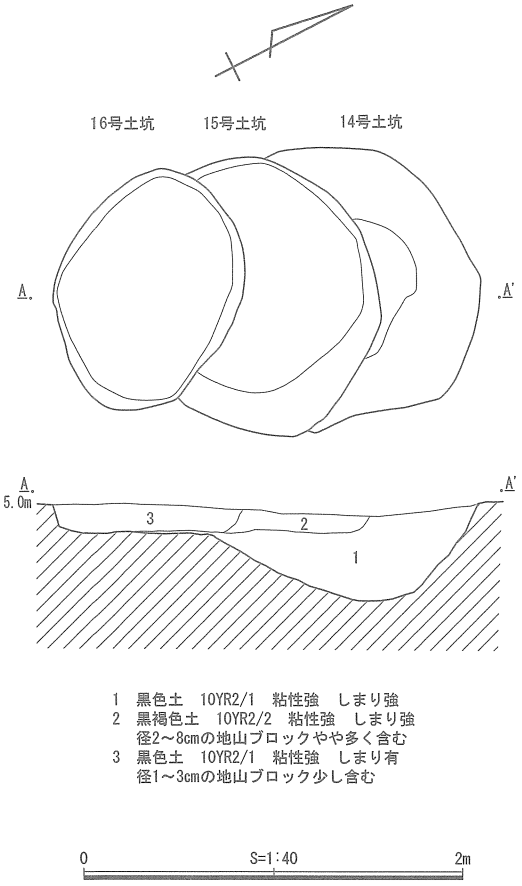
平面形は楕円形を呈し、長径0.72m、短径0.56mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.08mを測る。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器甕の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

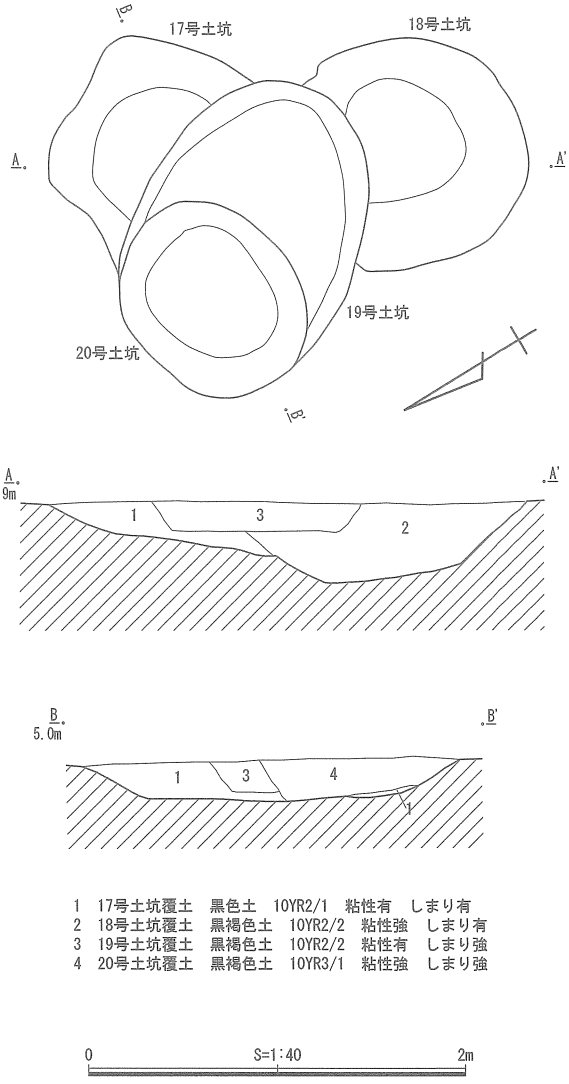
22号土坑（第69図）

平面形は楕円形を呈し、長径1.10m、短径0.64mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.10mを測る。

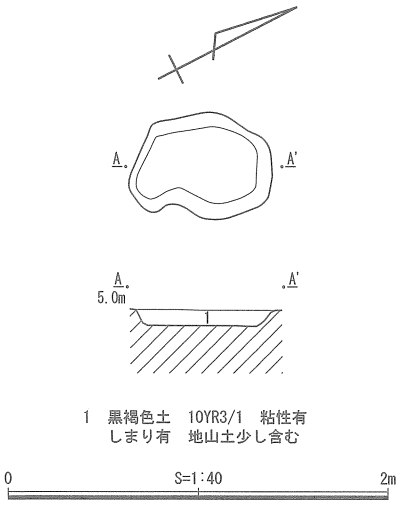
遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器甕の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。



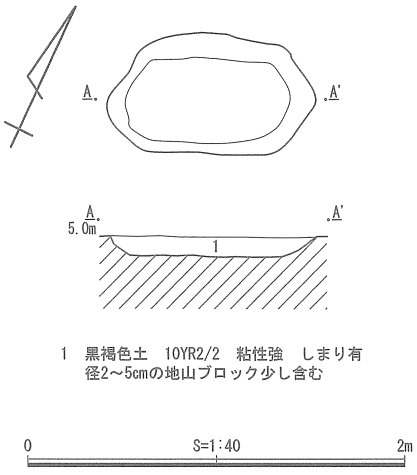
第66図　14～16号土坑平・断面図



第67図　17～20号土坑平・断面図



第68図　21号土坑平・断面図



第69図　22号土坑平・断面図

23号土坑（第70図）

平面形は楕円形を呈し、長径1.46m、短径0.78mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.06mを測る。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器甕の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

24号土坑（第71図）

平面形は楕円形を呈し、長径0.84m、短径0.42mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.08mを測る。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器甕の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

25号土坑（第58図）

平面形はいびつな楕円形を呈し、長径2.90m、短径1.18mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.10mを測る。６号土坑列を切る。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器甕の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

２号土坑列（第55図）

５基の土坑群と６基の小穴群、不定形な細長い遺構１基によって構成される。不定形な遺構は土坑を連ねたような形態を呈している。同一の覆土をもち、いずれも単層である。土坑や不定形遺構は弧を描くように列状に並び、本来は１条の溝状遺構であった可能性が高い。全般的に浅いが、西端の最深部では深さ0.15mを測り、８号溝状遺構を切る。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器坏の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

３号土坑列（第56図）

４基の小穴群と不定形な土坑１基で構成される。同一の覆土をもち、いずれも単層である。土坑や小穴はさらに上層から掘り込まれていた可能性もあり、本来は１基の土坑であった可能性も考えられる。

３号土坑列出土遺物（第74図）

土器　７は土師器坩の底部片である。古墳時代にまで遡る可能性がある資料であるが、３号土坑列覆土内からは土師器甕の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

４号土坑列（第56図）

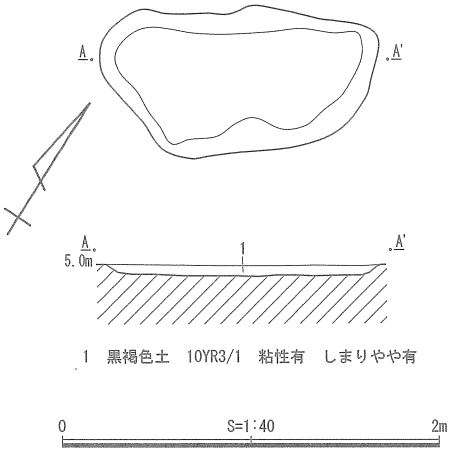
13基の土坑群と５基の小穴群で構成される。同一の覆土をもち、いずれも単層である。南北方向に列状に並び、本来は１条の溝状遺構であった可能性が高い。その場合、10号溝状遺構と並行して延伸することになろう。深さは0.05mを測り、10号溝状遺構と同規模である。10号溝状遺構と攪乱によって一部が切られる。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、須恵器坏の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

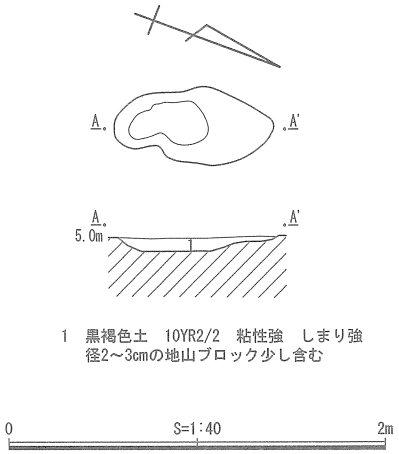
５号土坑列（第72図）

２基の土坑群と１基の小穴で構成される。同一の覆土をもち、いずれも単層である。土坑や小穴はさらに上層から掘り込まれていた可能性もあり、本来は１条の溝状遺構あるいは１基の土坑であった可能性も考えられる。

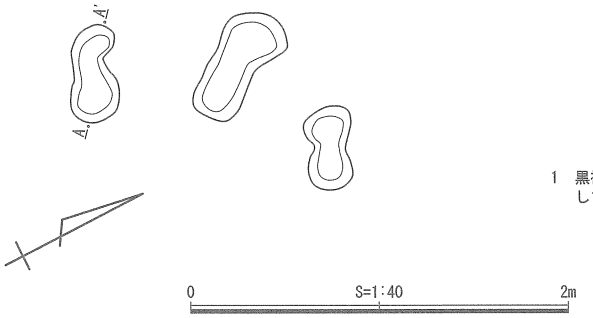
遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器甕の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。



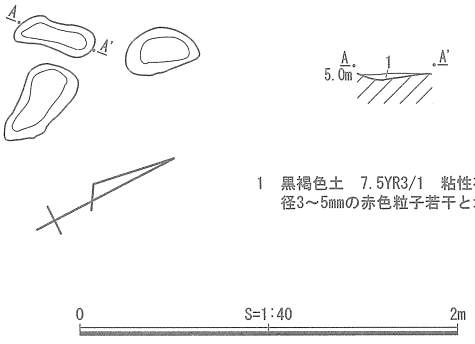
第70図　23号土坑平・断面図



第71図　24号土坑平・断面図



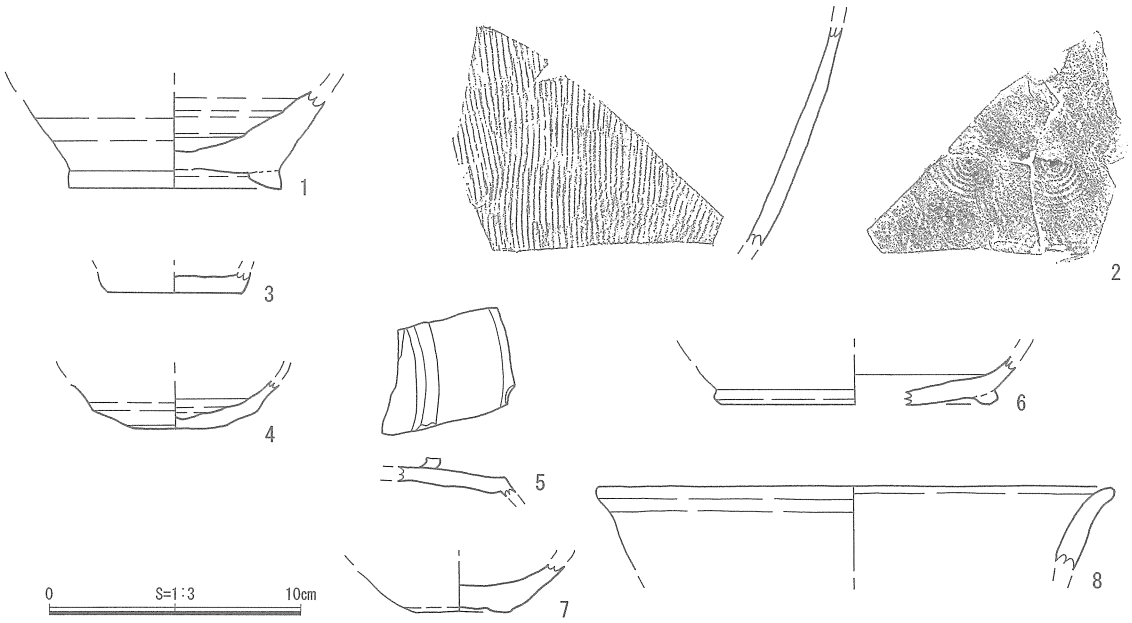
第72図　５号土坑列平・断面図



第73図　８号土坑列平・断面図

６号土坑列（第58図）

46基の土坑群と18基の小穴群で構成される。同一の覆土をもち、いずれも単層である。直線的に南北方向に並んでおり、本来は１条ないしは２条の溝状遺構であった可能性が考えられる。一部の土坑の覆土から木片が出土しており、溝状遺構ではなく杭列であった可能性も想定されるが、明確な木杭の痕跡等は認められなかった。11号溝状遺構を切るが、25号土坑に切られる。



第74図　６～８号土坑・３・６号土坑列出土土器実測図

６号土坑列出土遺物（第74図）

土器　８は土師器甕の口縁部片である。

７号土坑列（第58図）

４基の土坑群と７基の小穴群で構成される。同一の覆土をもち、いずれも単層である。本来は11号溝状遺構と交わるように延びる１条の溝状遺構であった可能性が考えられる。11号溝状遺構に切られる。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器甕の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

８号土坑列（第73図）

１基の土坑と２基の小穴群で構成される。同一の覆土をもち、いずれも単層である。土坑や小穴はさらに上層から掘り込まれていた可能性もあり、本来は１基の土坑であった可能性も考えられる。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器甕の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

遺構外出土遺物（第75～79図）

土器　第75図の１～39は土師器坏である。１はほぼ完形、２～６は口縁～底部片、７～18が口縁～体部片、19～23が口縁部片、24～39が底部片である。１は丸底で口縁部が僅かに内傾する。半円球の形態を呈し、内面には篦磨き調整が施される。３・４はいぶし焼きにより器表面に炭素を吸着させた黒色土器である。３は内外面とも器面に磨き調整の痕跡が認められ、丸底で体部から口縁部にかけて緩やかに内外面に屈曲する。１・３の帰属時期は６世紀後半から７世紀前半頃まで遡る可能性がある。５は平底で底部から口縁部まで直線的に立ち上がり、箱形を呈す。６は口径に対して器高が低く、皿かあるいはかわらけの可能性もある。７～13は底部を欠くが、体部下半の形態から丸底になる可能性が高い。24～39の底部片は全て平底である。40～42は土師器有台坏である。40が口縁～底部片、41・42が底部片である。須恵器有台坏を模したような形態を呈する。須恵器有台坏自体が８世紀後半から９世紀にかけて激減することから、８世紀中頃あるいはそれ以降の所産と考えられる。

第76図の１～３は土師器有台坏の底部片である。４～19は土師器甕である。４～６が口縁～胴部片、

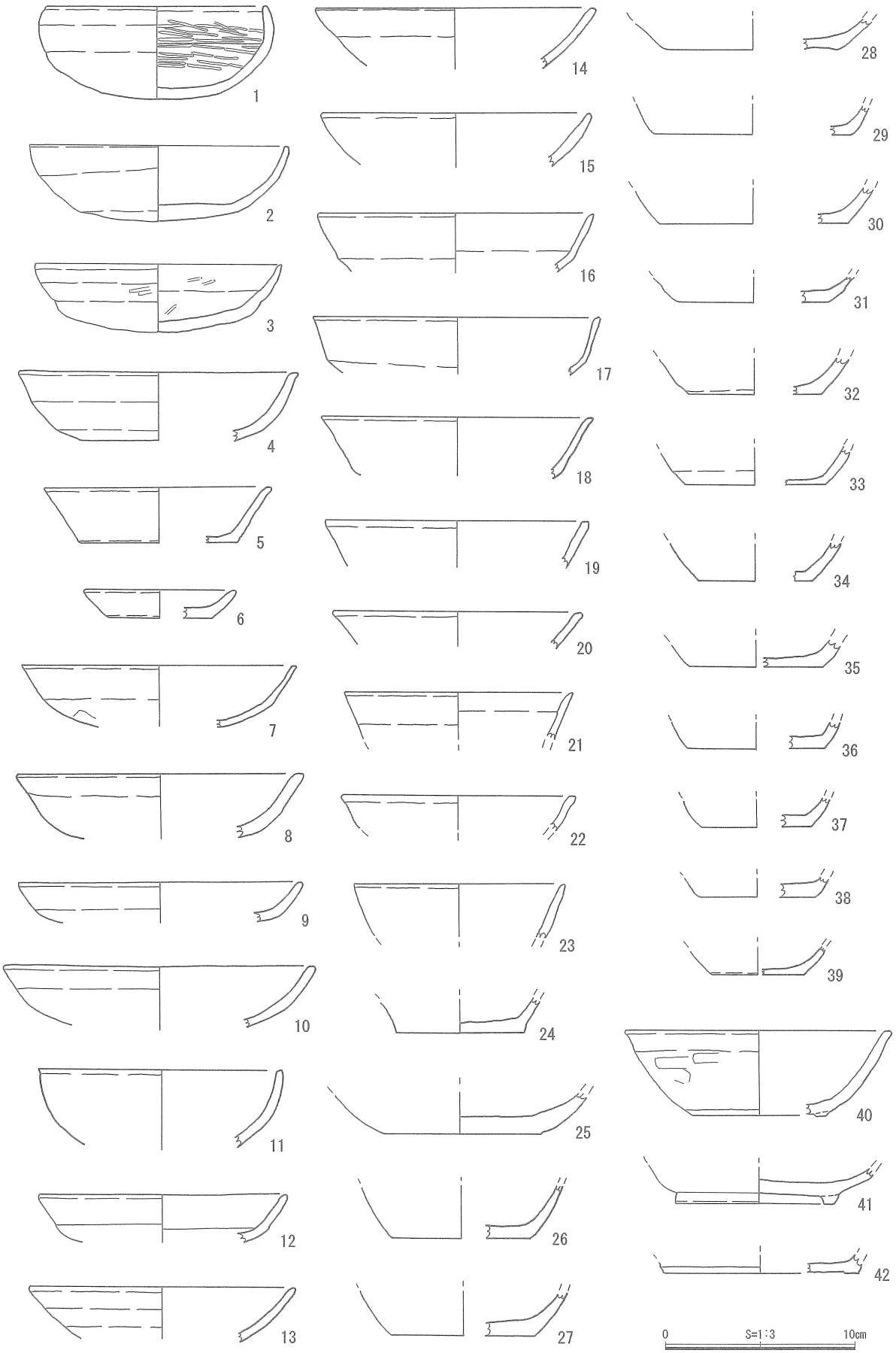
７～13が口縁部片、14・15が胴～底部片、16～19は底部片である。４～10・14は駿東型甕と考えられる。９・10の胎土は茶褐色を呈することが多い古代の駿東型甕にあって、白みがかった橙色を呈する。赤みがかった駿東型甕との胎土の違い、ひいては生産地の違いに結びつく可能性も考えられる。６は口縁部と胴部の接合部に突き出しが認められる。山本編年４段階にあたり７世紀末に比定されよう。11・12は器壁が薄く、口縁部が内面に折り返されたうえで外反気味に大きく開く。平安時代から中世にかけて認められる伊勢型鍋（新田 1985）と思われる。14・15は底部から胴部中央にかけての立ち上がりが緩やかである。20は土師器甕の底部片としたが、胎土や焼成から古墳時代の壺の可能性もある。

第77図の１～19は土師器甕の底部片である。５・７・10～12は駿東型甕と考えられる。10・12の胎土は白みがかった橙色あるいは明褐灰色を呈する。20は鉢の口縁～底部片である。口径に対して器高が低い。全面摩耗が著しく、調整等は判別できなかったが、底部に木葉痕が僅かに残る。21～29は土師器鍋の口縁部破片である。口径を推し量れる資料は認められなかった。口縁部が肥厚し外側に膨らむ。23・25のように、外面に刷毛目が残るものも見受けられた。鍋はⅣ期後葉から出現する。鍋は、奥駿河湾で漁獲される大型回遊魚を加熱調理するための煮炊具としての用途が考えられている（瀬川 1980、瀬川・小池 1990）。近隣では狩野川の対岸となるが、沼津市の藤井原遺跡での出土が目立つ。30は羽釜の口縁部片である。

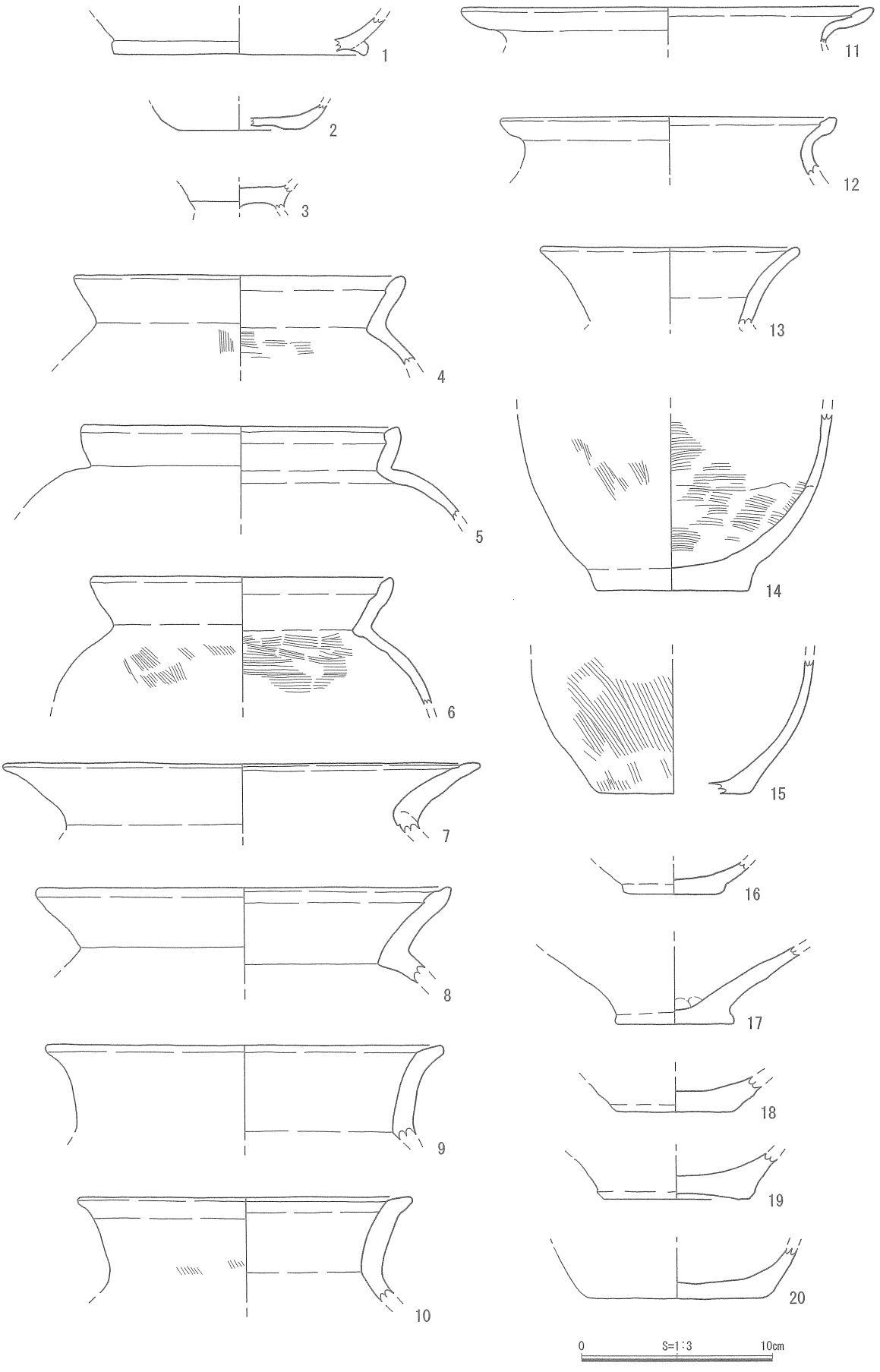
第78図の１～10は須恵器坏である。１はほぼ完形、２は口縁～底部片、３～６は口縁～体部片、７～10は底部片である。１・２・８～10は無台で腰が丸い平底である。７世紀末から８世紀前葉に位置づけられよう。11～21は須恵器有台坏である。11・12はほぼ完形、13・14は口縁～底部片、15は体～底部片、16～21は底部片である。11・12は丸底の底部が高台からはみ出る７世紀末から８世紀初頭に特徴的な形態である。13・14は11・12よりはやや時期が下り、８世紀前葉以降の所産であろう。15は底部から体部上半にかけて直線的に立ち上がる。有台箱坏の可能性が高く、８世紀中葉以降の資料と考えられる。22～27は須恵器坏蓋である。22はほぼ完形だが摘み部を一部欠く。23～26は口縁部片、27は摘み部片である。概ね８世紀中葉から後葉に位置づけられるが、26は口縁部から頂部への立ち上がりが緩やかで、やや時期を遡る可能性がある。28～30は須恵器甕の胴部破片である。28・29は内面に当て具痕である青海波文が認められる。30の内面には篦削りのような削痕が縦横に残る。

第79図の１は須恵器短頸壺の口縁～底部片である。全体に丸みを帯びて、肩がやや張って丸くなる。湖西窯製品で一般的に見られる短頸壺よりも器高が低く、楕円に近い形態を呈する。２は須恵器長頸壺の頸部片である。頸部上半は口縁部に向かって大きく開く。３は須恵器鉢の口縁部片である。いわゆる鉄鉢で９世紀の所産である。４～10は灰釉陶器埦である。４は口縁～底部片、５～10は底部片である。４は体部の内外面に刷毛によって釉薬が塗布される。口縁部の外反は緩やかで、三日月高台の内傾も弱い。猿投窯編年の黒笹90号窯式３型式に位置づけられると考えられ、９世紀後半の所産であろう。５～10も施釉方法が確認できるものは刷毛塗りで、浸け掛けによるものは認められなかった。高台の形態から、定型化した三日月高台出現以降のものと考えられ、黒笹90号窯式２型式以降に位置づけられる。11は灰釉陶器皿の口縁～底部片である。薄手で口縁部が外反する。底部は貼り付け高台である。猿投窯編年の折戸53号窯式に位置づけられ、10世紀前半に比定される。12は緑釉陶器の破片である。埦の底部付近の破片と思われる。釉薬の色調等から中世以降ではなく古代の猿投窯産の緑釉陶器と判断した。トチンを用いて焼成した際の目跡が内面に認められる。

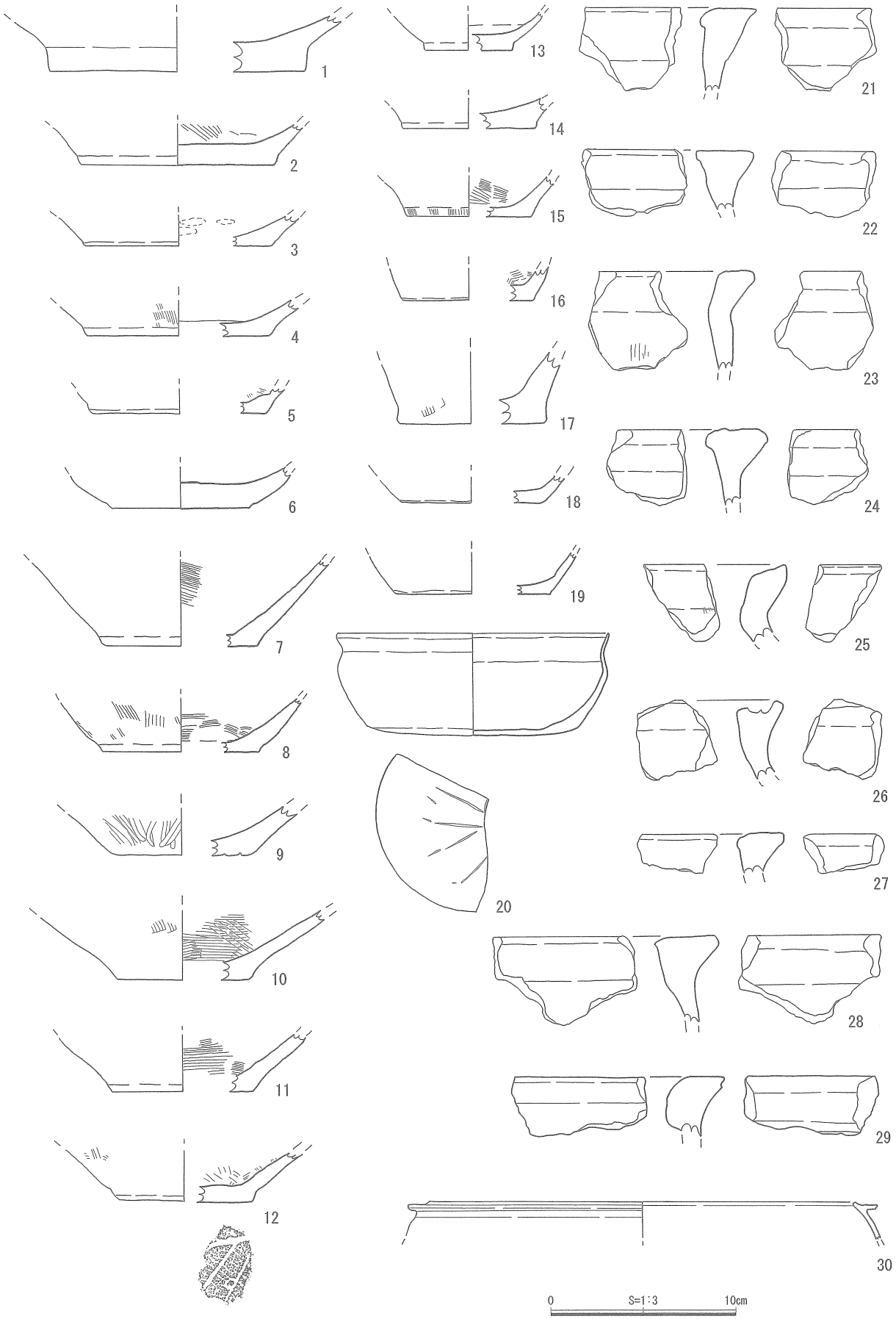
土製品　13は土錘で端部を欠く。直径0.7㎝程の孔が貫通しているため中空である。上端からやや斜め方向に穿孔される。



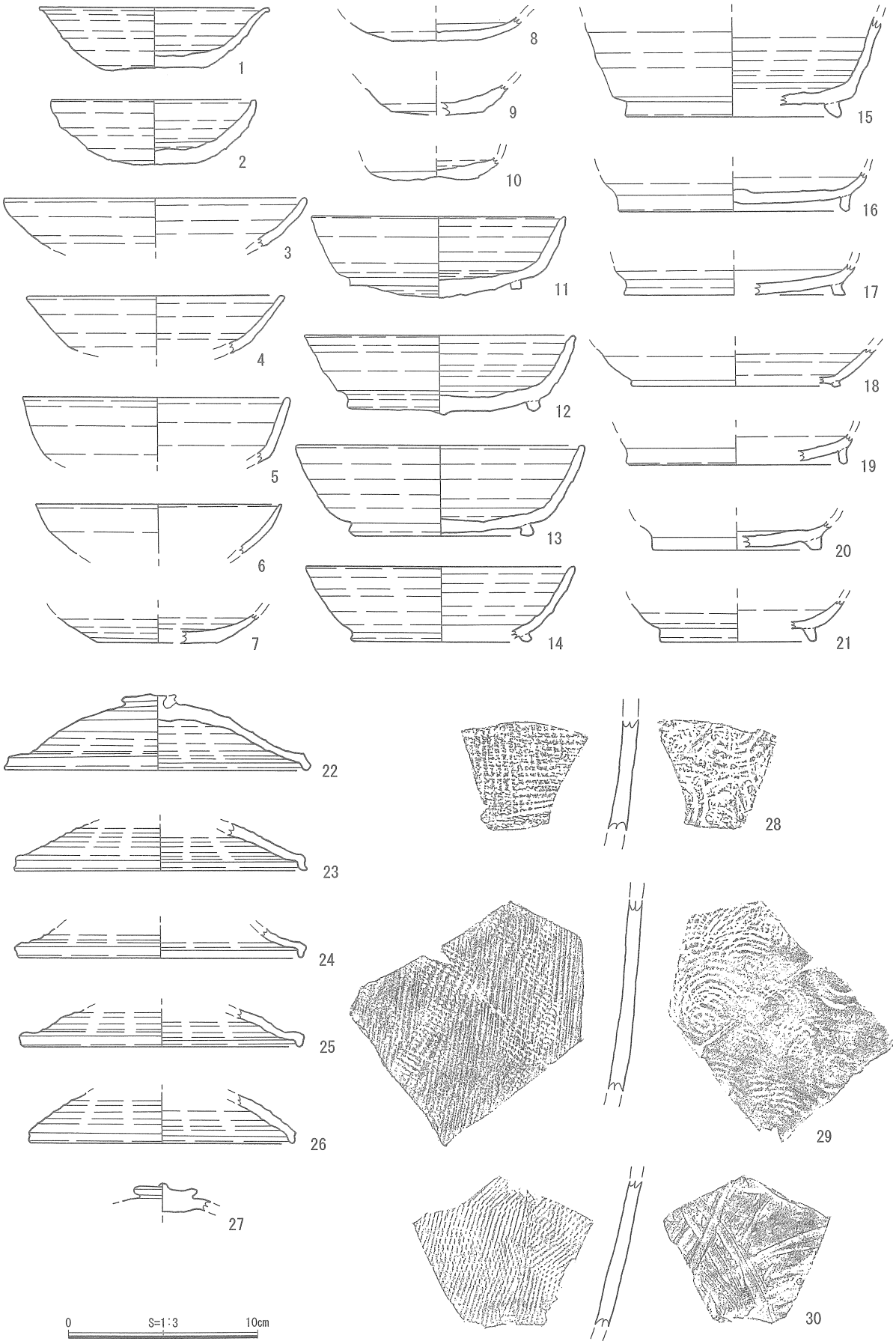
第75図　奈良・平安時代遺構外出土土器実測図①



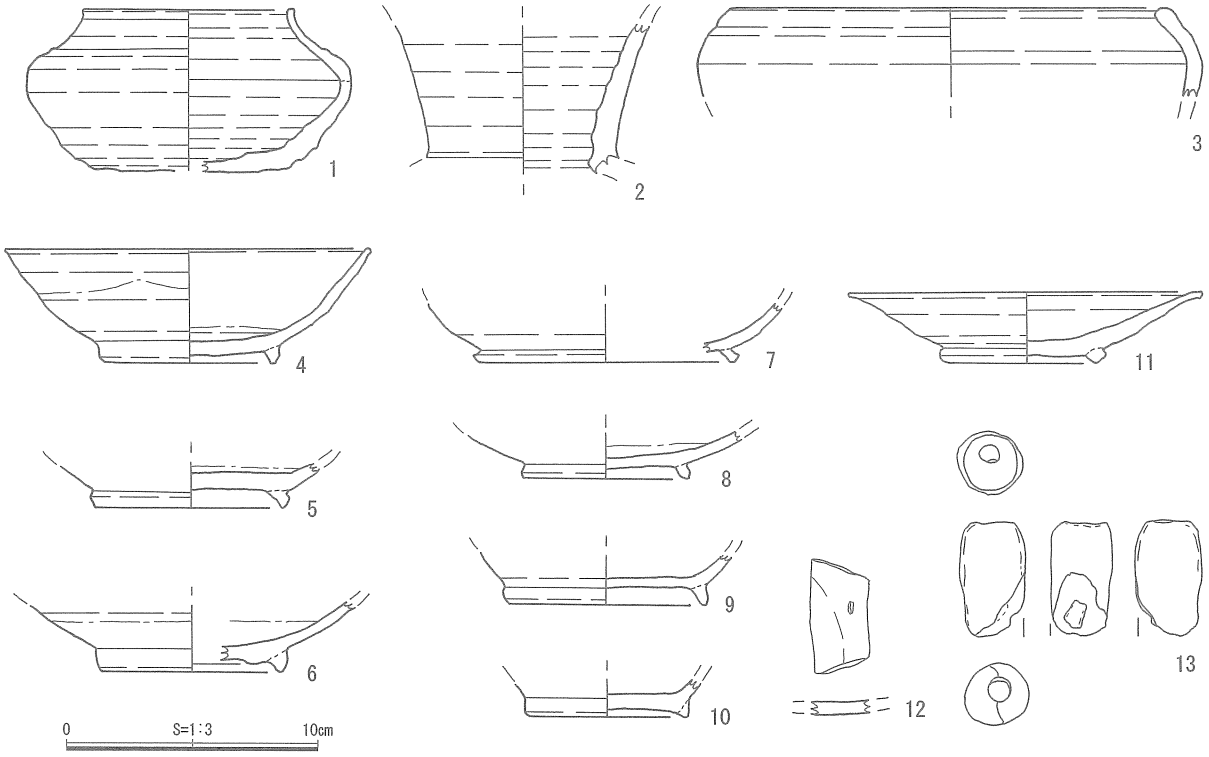
第76図　奈良・平安時代遺構外出土土器実測図②



第77図　奈良・平安時代遺構外出土土器実測図③



第78図　奈良・平安時代遺構外出土土器実測図④



第79図　奈良・平安時代遺構外出土土器および土製品実測図

参考文献

植松章八　2008　「東駿河の奈良・平安時代遺跡と土器」『祢宜ノ前遺跡』　富士市教育委員会

佐野五十三　1994a　「遠江・駿河・伊豆の古代集落の土器―土師器を主として―」『静岡県史研究』第10号　静岡県

佐野五十三　1994b　「駿河国における官衙・集落の土器―須恵器を中心として―」『地域と考古学』向坂鋼二先生還暦記念論集　向坂鋼二先生還暦記念論集刊行会

鈴木敏則・向坂鋼二編　1998　『梶子北遺跡』遺物編（本文）　財団法人浜松市文化協会

瀬川裕市郎　1980　「藤井原の大鉢―律令時代堝形土器の変遷―」『沼津市歴史民俗資料館紀要』4　沼津市歴史民俗資料館

瀬川裕市郎　1983　「駿河型の杯」『静岡県考古学研究』14　静岡県考古学会

瀬川裕市郎・小池裕子　1990　「煮堅魚と堝形土器・覚え書き」『沼津市博物館紀要』14　沼津市歴史民俗資料館・沼津市明治史料館

贄元洋　1998　「湖西窯編年の再検討」『静岡県考古学研究』30　静岡県考古学会

新田洋　1985　「平安時代～中世における煮炊用具―「伊勢型」鍋―に関する若干の覚書」『三重考古学研究』1　三重考古学談話会

平野吾郎　1991　「遠江・駿河における歴史時代土器の成立と展開」『古代探叢Ⅲ―早稲田大学考古学会創立40周年記念考古学論集―』　早稲田大学出版部

宮崎泰史・藤永正明編　2006　『年代のものさし―陶邑の須恵器―』　大阪府立近つ飛鳥博物館

山本（北川）惠一　1988　「「駿東型の甕」初現と終末について」『沼津市博物館紀要』12　沼津市歴史民俗資料館・沼津市明治史料館

山本惠一　1995　「静岡県下の６～７Ｃの土師器―主に駿河東部・伊豆北部の現状について―」『東国土器研究』第４号　東国土器研究会

第６節　中世の遺物

中世の遺物は包含層や遺構検出面直上からの出土が多く、中世に帰属される遺構は検出されなかった。遺物としては総破片数119点の中世陶磁器が出土した。その全ては第２～４表に破片数をまとめている。なお、出土陶磁器の数値化に際しては、『陶磁器から見る静岡県の中世社会』（菊川シンポジウム実行委員会編 2005）に示されている集計表に準拠して表を作成した。特筆すべき点として、貿易陶磁の出土数が比較的多い点があげられる。貿易陶磁の出土破片数は47点を数え、総数に対する割合は39.4％を占める。中でも龍泉窯系の青磁碗の出土が目立つ。

以下、貿易陶磁については小野正敏氏（小野 1994）の、瀬戸・美濃製品については藤沢良祐氏（藤沢 1991・2002）の編年に準じている。また、松井一明氏の論考（松井 1993）や『概説 中世の土器・陶磁器』（中世土器研究会編 1995）も参考にしている。

総数が少なく、詳細な分類を行えなかった資料も多いため、時期別の数値化は実施しなかった。13世紀中葉から14世紀前葉、15世紀後葉から16世紀前葉、そして16世紀後葉に比定される資料が多いという出土傾向がある。13世紀中葉から14世紀前葉にかけての資料は龍泉窯系Ｂ１類青磁碗を中心とする。15世紀後葉から16世紀前葉にかけての資料は、古瀬戸後期から大窯にかけての瀬戸・美濃製品が多い。16世紀後葉の資料として多いのは、大窯４段階の志野丸皿である。

土器（第80図）

１～５は貿易陶磁である。１～４は龍泉窯系青磁碗で、１が口縁～体部片、２・３が底部片、４が口縁部破片である。１は体部外面に半肉彫りの鎬蓮弁文が配される。龍泉窯系Ｂ１類に相当し、13世紀中葉から14世紀前葉に位置づけられる。２は底部内面付近に劃花文が施される。龍泉窯系Ａ２類から４類の間に位置づけられ、12世紀後葉から13世紀前葉の所産である。３は外面の底部付近に鎬蓮弁文が認め

第２表　出土遺物破片数量表（貿易陶磁）

種別	器種名	分類	年代	破片数
青磁	碗類	龍泉窯系A2～4類	12後～13前葉	5
		龍泉窯系B1類	13中～14前葉	16
		龍泉窯系B2類	14末～15初	1
		不明		16
	皿類	無文折縁Ⅲ類	13～14	1
白磁	碗類	Ⅳ類	12後	2
		不明		1
青白磁	瓶類	梅瓶	14～15	3
染付	皿類	B1群	15中	2
合計				47

第３表　出土遺物破片数量表（瀬戸・美濃製品）

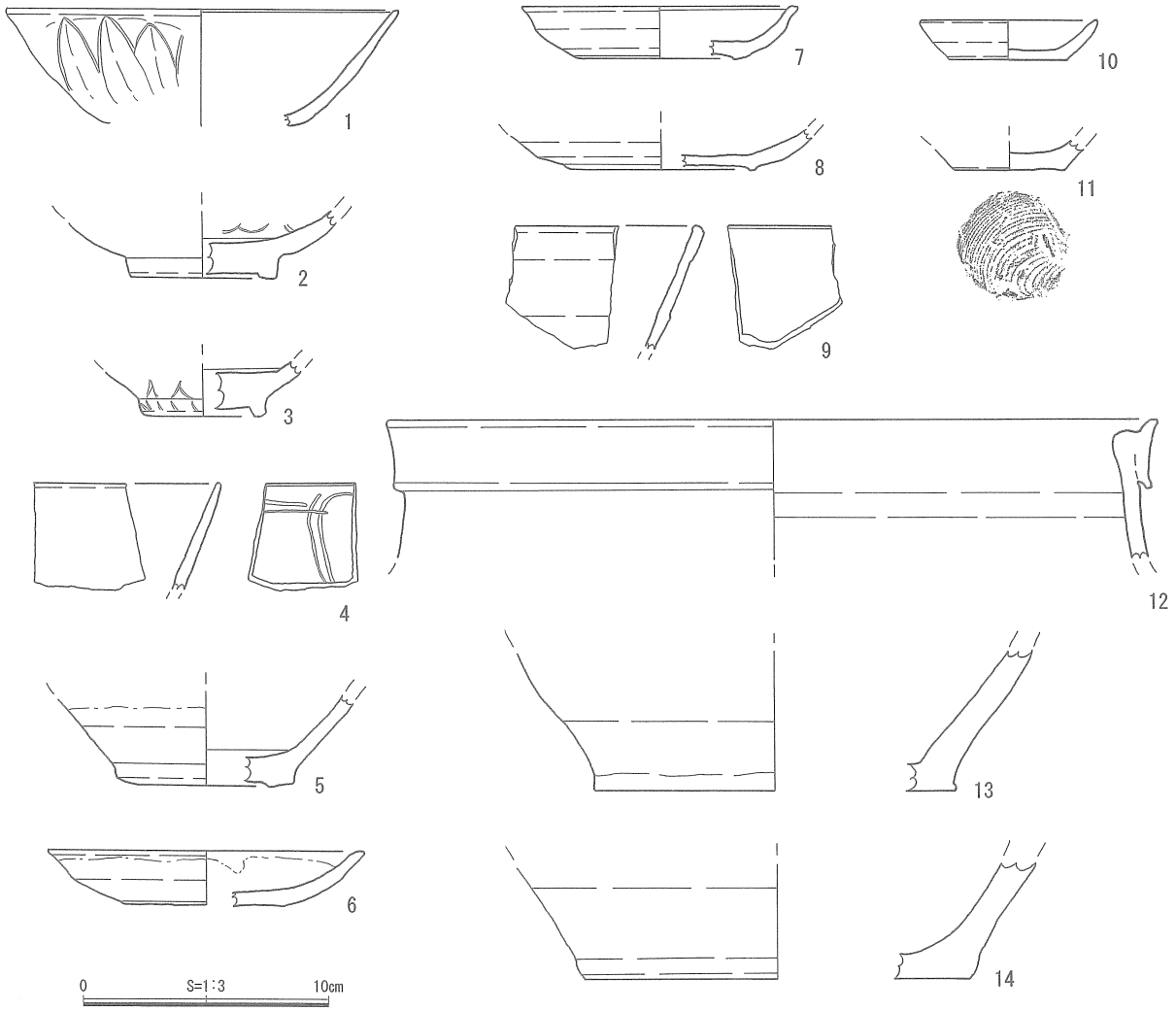
器種名		古瀬戸後期	古瀬戸～大窯	大窯製品				合計
		Ⅳ		1	2	3	4	
天目	天目茶碗		1					1
碗類	灰釉平碗	2						2
皿類	灰釉丸皿		6			1		7
	灰釉縁釉皿	1						1
	志野丸皿						8	8
盤類	灰釉直縁大皿	3						3
	灰釉盤類		1					1
擂鉢	擂鉢		4				1	5
合計		6	12			1	9	28

第４表　出土遺物破片数量表（その他の陶器）

種別	器種名	分類	破片数
山茶碗類	山茶碗	尾張系３～４型式	1
	小　皿	東遠江系Ⅲ期	3
合　計			4
常滑製品	甕	９型式	1
		不明	14
	鉢	８～９型式	1
		10～11型式	2
		不明	5
合　計			23
渥美製品	甕	不明	12
	鉢	不明	5
合　計			17

られ、１同様に龍泉窯系Ｂ１類、13世紀中葉から14世紀前葉の所産である。４は内面に劃花文が施され、龍泉窯系Ａ２類から４類の間、12世紀後葉から13世紀前葉に比定される。５は白磁碗の体～底部片である。削り出し高台をもち、内面および外面体部上半に施釉される。Ⅳ類に相当し、12世紀後葉の所産である。

６～８は瀬戸美濃製品である。６は灰釉縁釉小皿の口縁～底部片である。古瀬戸後期Ⅳ期古段階にあたり、15世紀中葉に位置づけられる。７・８は志野丸皿で、７が口縁～底部片、８が体～底部片である。高台は削り出し輪高台である。体部下半は直線的に開き、中央付近に稜が入る。７の口縁部は緩やかに外反する。いずれも大窯４期段階にあたり、16世紀後葉の所産である。９～11は山茶碗である。９は常滑の碗の口縁部破片である。尾張系３型式から４型式の間に位置づけられ、12世紀の所産である。10・11は小皿で、10



第80図　中世土器実測図

は口縁～底部片、11は底部片である。底部は糸切未調整の平底である。いずれも東遠江系Ⅲ期にあたり、13世紀に比定される。12は常滑製品の甕の口縁部である。口縁の縁帯が垂下して頸部に接合し、厚い口縁部を形成しているが、折り返した部分は僅かに隙間が残る。９型式にあたり、14世紀末から15世紀前半の所産である。13・14は渥美製品の甕の底部片である。底部から胴部への立ち上がりから、12世紀中葉から後葉の所産と思われる。

参考文献

小野正敏　1994『日本出土の貿易陶磁』東日本編　国立歴史民俗博物館資料調査報告書５　国立歴史民俗博物館

藤澤良祐　1991「瀬戸古窯址群Ⅱ―古瀬戸後期様式の編年―」『研究紀要』Ⅹ　瀬戸市歴史民俗資料館

藤澤良祐　2002「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『研究紀要』第10輯　財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター

松井一明　1993「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究』25　静岡県考古学会

菊川シンポジウム実行委員会編　2005『陶磁器から見る静岡県の中世社会』

中世土器研究会編　1995『概説 中世の土器・陶磁器』

第７節　近世以降の遺構と遺物

近世以降の遺構として、池状遺構１基・溝状遺構９条・土坑15基・土坑列１基を検出した。池状遺構等、近世以降の遺構の覆土の特徴として、径10㎜前後の砂利が多く含まれる点が挙げられる。

池状遺構（第81図）

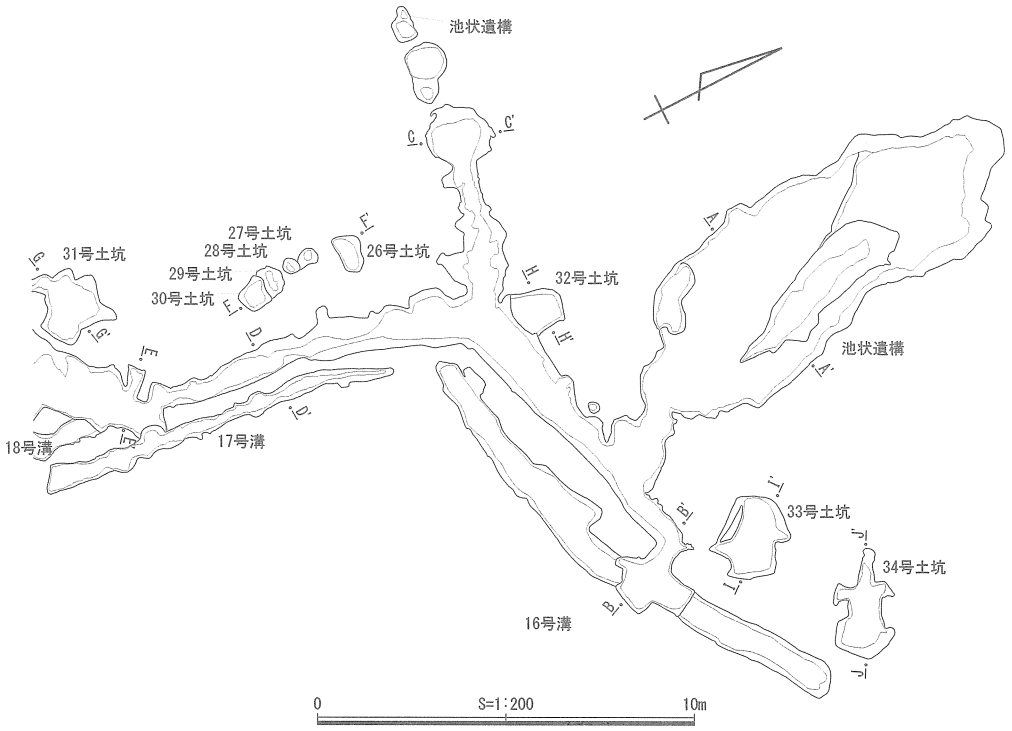
溝状遺構と土坑を組み合わせたような複雑な平面形を呈す。32号土坑付近を基点に三方向へ直線状に広がり、北側では幅広で深い張り出し部と繋がっている。南端はさらに調査区外へと続く。北側の張り出し部での最大幅は4.2m、最大深は0.5mを測る。土層の堆積から５層に分層されるが、遺構の南側は堆積が薄くなり、第５層や第４層、地点によっては第３層の堆積も認められなくなる。このことから、第４・５層の堆積が認められる北側の張り出し部が先行して埋没していったことが想定されよう。16・18号溝状遺構と32号土坑を切るが、17号溝状遺構に切られる。遺構内と遺構周辺に夥しい数の木杭が打設される。検出された木杭の内、大小３点について樹種同定を実施した結果、いずれも二葉マツ類でアカマツまたはクロマツであった。

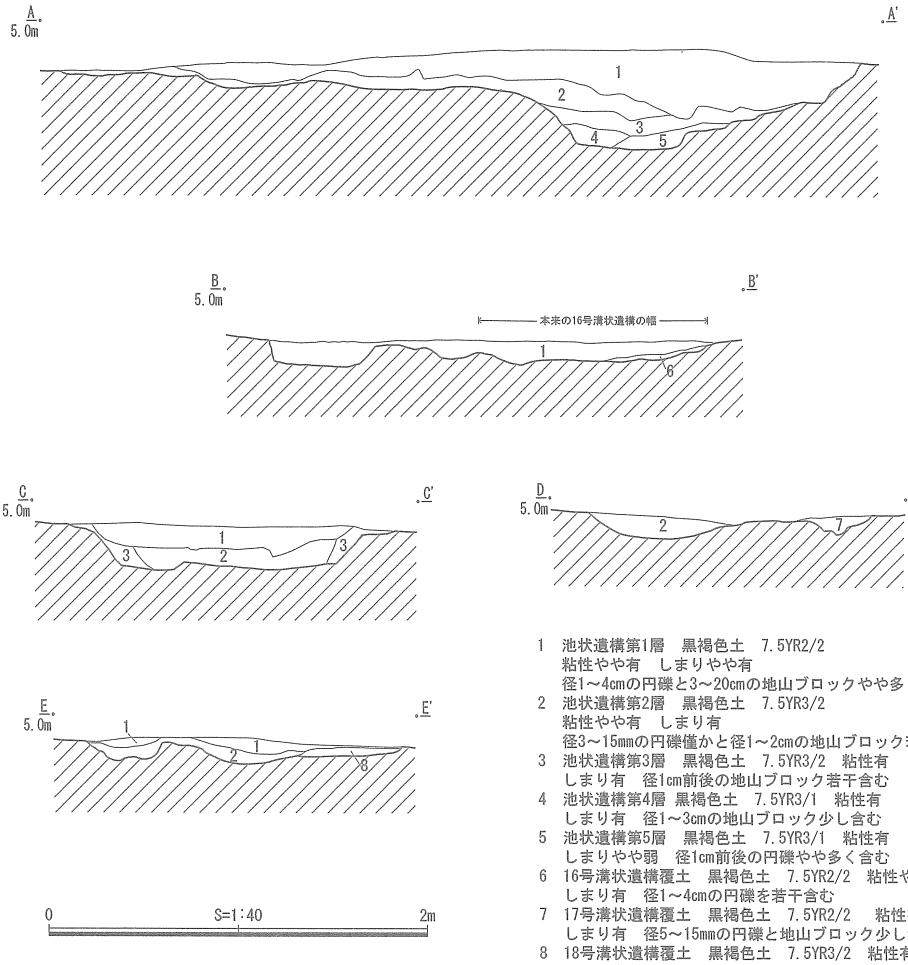
32号土坑付近を基点に東・西・南の三方位に向かって直線状に広がっており、正方位を意識して溝を掘り、周囲に木杭を打設したものと考えられる。北側の張り出し部には、一部水が堆積していたような痕跡が認められており、北側に水を溜める、あるいは北側から水を流すための流路としての機能が想定される。また、他に畑の区画や通路等の機能も考えられよう。北側の張り出し部の底面付近から昭和14年の一銭アルミ貨が出土していることや、覆土出土の陶磁器の年代観からも、近代以降の遺構であろう。

池状遺構出土遺物（第83・92図）

土器　第83図の１は陶器皿の口縁～底部片である。浅黄色の釉薬が器面に塗布される。２は陶器擂鉢の底部片である。底部は糸切未調整の平底である。底部内面にも擂目が確認される。釉薬は鉄釉の全面施釉である。近世瀬戸系の擂鉢と考えられる。他に青磁碗・青白磁梅瓶・瀬戸美濃擂鉢などの中世陶磁器や、図化し得なかったが、近世以降の瓦片が数点出土した。

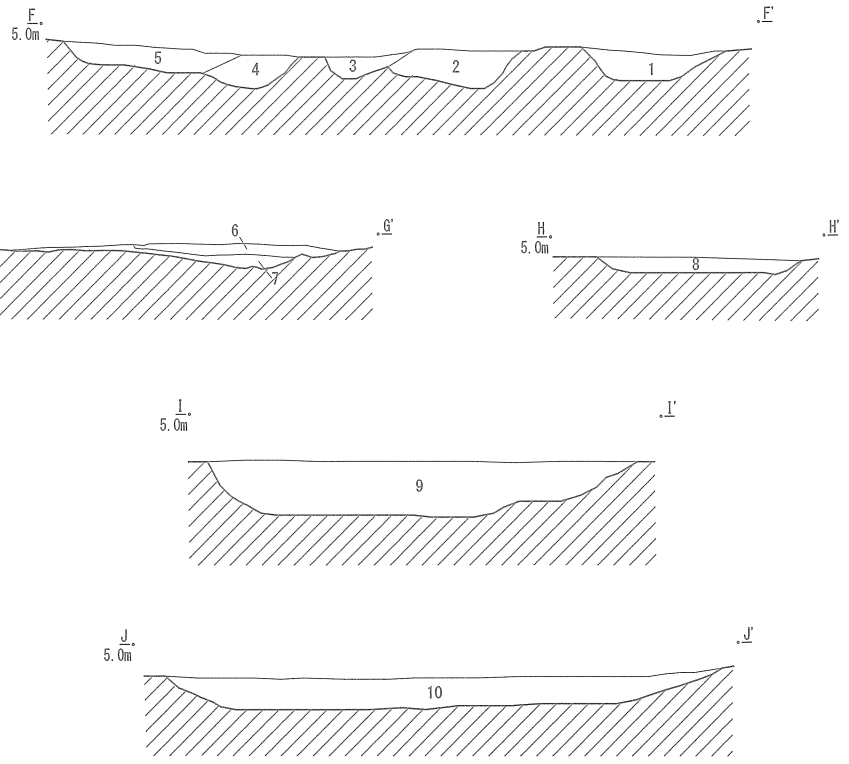
木製品　３は用途不明の木製品である。赤色の顔料が片面に塗布されていた。樹種はクリである。４は又鍬状の木製品である。下半を中心に加工を施した痕跡が認められる。農具などの木製品や構築部材の





1　池状遺構第1層　黒褐色土　7.5YR2/2
粘性やや有　しまりやや有
径1～4cmの円礫と3～20cmの地山ブロックやや多く含む
2　池状遺構第2層　黒褐色土　7.5YR3/2
粘性やや有　しまり有
径3～15mmの円礫僅かと径1～2cmの地山ブロック若干含む
3　池状遺構第3層　黒褐色土　7.5YR3/2　粘性有
しまり有　径1cm前後の地山ブロック若干含む
4　池状遺構第4層　黒褐色土　7.5YR3/1　粘性有
しまり有　径1～3cmの地山ブロック少し含む
5　池状遺構第5層　黒褐色土　7.5YR3/1　粘性有
しまりやや弱　径1cm前後の円礫やや多く含む
6　16号溝状遺構覆土　黒褐色土　7.5YR2/2　粘性やや有
しまり有　径1～4cmの円礫を若干含む
7　17号溝状遺構覆土　黒褐色土　7.5YR2/2　粘性有
しまり有　径5～15mmの円礫と地山ブロック少し含む
8　18号溝状遺構覆土　黒褐色土　7.5YR3/2　粘性有
しまり有　径1cm前後の円礫僅かに含む

第81図　池状遺構・16～18号溝状遺構・26～34号土坑平・断面図（A～E）



1　26号土坑覆土　黒褐色土　10YR3/1　粘性強　しまり有　径1～3cmの円礫少し含む
2　27号土坑覆土　黒色土　10YR2/1　粘性やや有　しまり強　径2～3cmの地山ブロック若干含む
3　28号土坑覆土　黒色土　10YR2/1　粘性強　しまり強　径5cm前後の円礫若干含む
4　29号土坑覆土　黒褐色土　10YR2/2　粘性有　しまり有
5　30号土坑覆土　黒褐色土　10YR3/1　粘性有　しまり有
6　31号土坑第1層　黒褐色土　7.5YR2/2　粘性有　しまり有　径1～5cmの円礫をやや多く含む
7　31号土坑第2層　黒褐色土　7.5YR3/2　粘性有　しまりやや有
8　32号土坑覆土　黒色土　10YR2/1　粘性強　しまり強　径2～3cmの地山ブロック僅かに含む
9　33号土坑覆土　黒色土　7.5YR2/1　粘性有　しまりやや弱　径1～5cmの円礫多く含む
10　34号土坑覆土　黒褐色土　7.5YR2/2　粘性やや有　しまり有　上部ほど径1～3cmの円礫多く含む

0　S=1:40　2m

第82図　26～34号土坑断面図（F～J）

未成品の可能性が考えられる。樹種は二葉マツ類でアカマツあるいはクロマツである。３・４の他に細片であったため図化し得なかったが、漆椀の破片が出土している。暗赤色（10R3/6）の漆が塗布されていた。樹種はケヤキである。

銅製品　５は棒状銅製品である。欠損しておらず、完形と思われる。断面は楕円形の中空で、両端部が僅かに外側に広がる。X線撮影写真では中央横方向に継ぎ目のようなラインが認められた。用途は不明だが、その形態から煙管吸口等の未成品である可能性も考えられる。

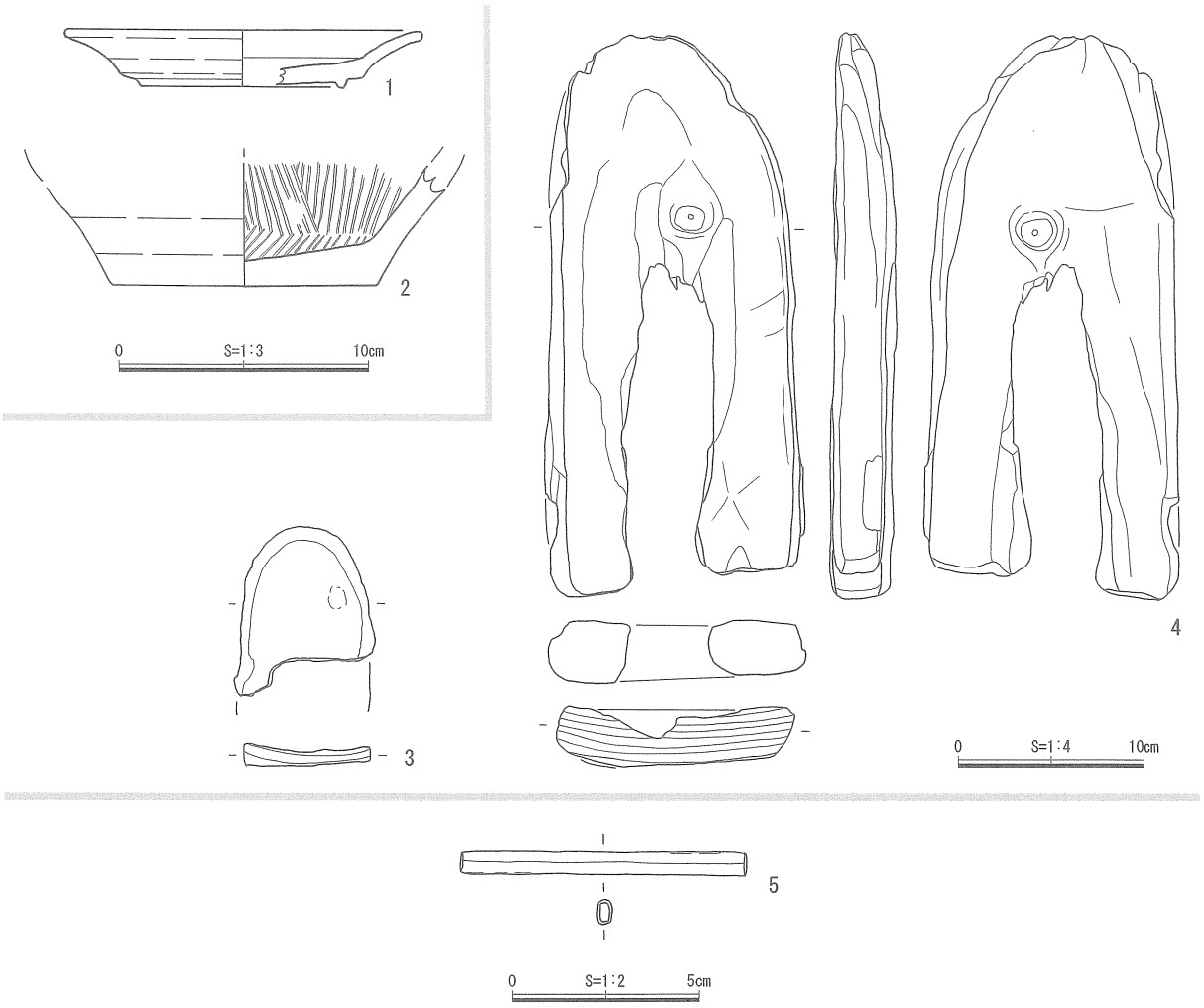
銭貨　第92図の１は昭和14年（1939年）発行のカラス一銭アルミ貨である。池状遺構覆土の底面付近から出土した。昭和14年のカラス一銭アルミ貨には、「四」の字に「ル四」と「角四」の２種があるが、本資料は「ル四」にあたる。

13号溝状遺構（第84図）

東西方向に細長く直線状に延伸する。調査区内での長さは21.5m程を測り、西端はさらに調査区外へと続く。幅は平均0.4m、深さは0.2mを測り、土層の堆積状態から２層に分層される。現地では、細長く直線的な形態から近代以降の暗渠の可能性が検討された。

13号溝状遺構出土遺物（第90図）

土器　１は土師器坏の底部片で13号溝状遺構覆土上端から出土した。２は土師器塝の口縁～胴部片であ



第83図　池状遺構出土土器・木製品・銅製品実測図

る。口縁部が肥厚するとともに外反する。胴部内外面に刷毛目の痕跡が認められる。他に図化し得なかったが、近世陶磁器の破片が数点出土した。

14号溝状遺構（第85図）

15号溝状遺構と並行するように直線状に延伸する。調査区内での長さは9.2m程を測り、北端はさらに調査区外へと続く。幅は平均0.4m、深さは0.15mを測り、覆土は単層である。15号溝状遺構と攪乱に切られる。遺物の出土は認められなかったが、近世陶磁器が出土した15号溝状遺構との切り合い関係から近世以降に帰属するものとした。また、細長く直線的な形態から13号溝状遺構同様、近代以降の暗渠の可能性が考えられる。

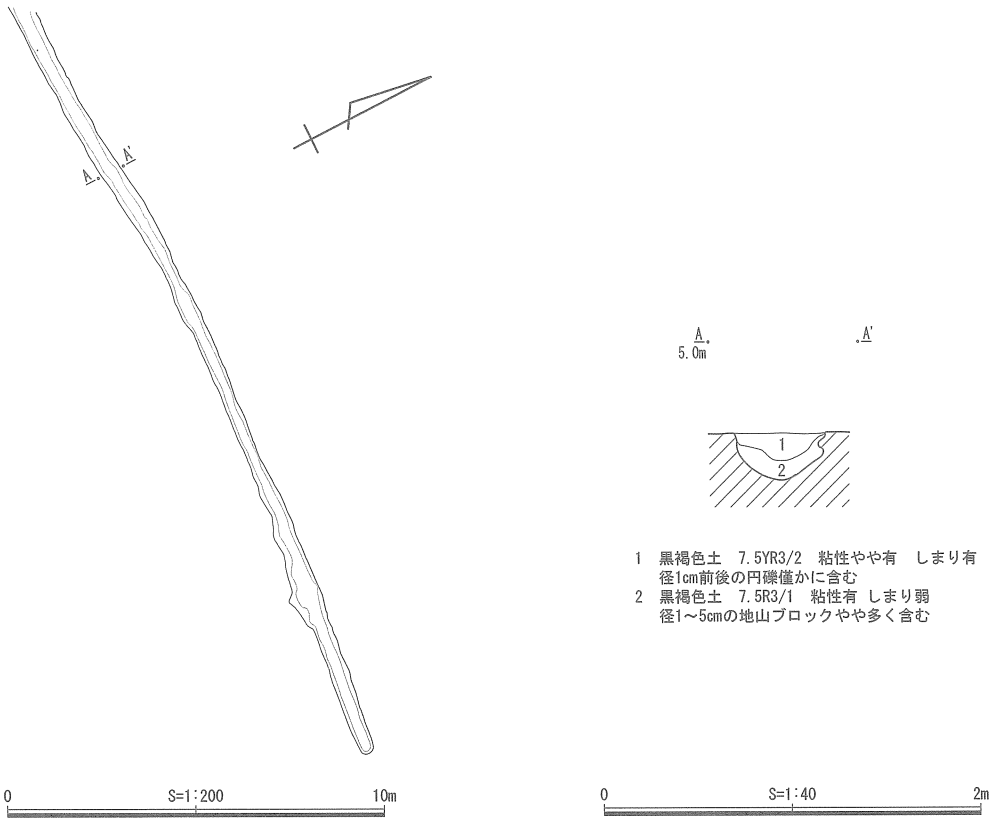
15号溝状遺構（第85図）

14号溝状遺構と並行するように直線状に延伸する。調査区内での長さは3.2m程を測り、北端はさらに調査区外へと続く。幅は平均0.6m、深さは0.2mを測り、覆土は単層である。14号溝状遺構を切り、攪乱に切られる。

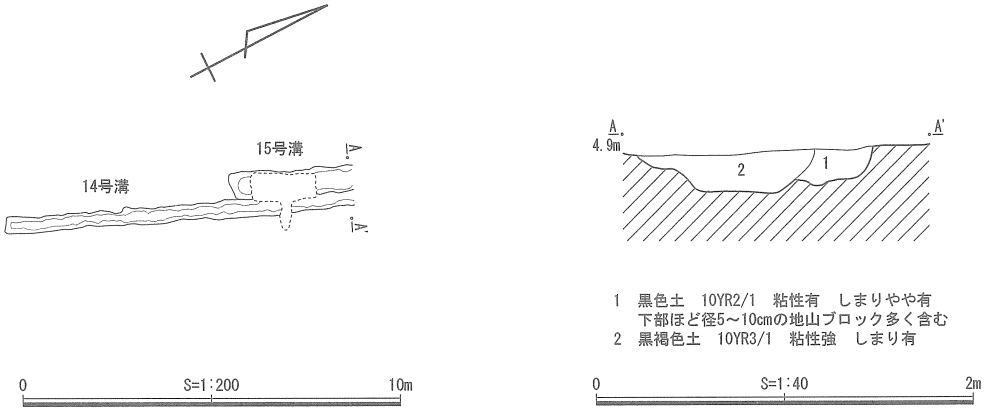
遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、近世陶磁器の破片が数点出土したことから、近世以降に帰属するものとした。

16号溝状遺構（第81図）

池状遺構の一部と並行するように東西方向に延伸する。長さ13m程、幅１m程、深さ0.1m程を測る。



第84図　13号溝状遺構平・断面図



第85図　14・15号溝状遺構平・断面図

覆土は単層である。池状遺構に切られる。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、近世磁器碗の破片が数点出土したことから、近世以降に帰属するものとした。

17号溝状遺構（第81図）

池状遺構の一部と並行するように南北方向に延伸する。長さ９ｍ程、幅0.4m程、深さ0.08m程を測る。覆土は単層である。池状遺構を切る。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、近世陶器の破片が数点出土したことから、近世以降に帰属するものとした。

18号溝状遺構（第81図）

17号溝状遺構の一部と並行するように南北方向に延伸する。調査区内での長さは２ｍ程を測り、南端はさらに調査区外へと続く。幅は0.4m程、深さ0.08m程を測る。覆土は単層である。池状遺構に切られる。遺物の出土は認められなかったが、覆土の所見や池状遺構との切り合い関係から近世以降に帰属するものとした。

19号溝状遺構（第86図）

調査区内での長さは５ｍ程を測り、北端はさらに調査区外へと続く。幅1.5m程、深さ0.05m程を測る。覆土は単層である。南北方向に延伸することや、木杭が周囲に打設されることから、池状遺構に伴う何らかの機能を有していた可能性がある。北端は環濠の北西隅を切り、南端を攪乱に切られる。

19号溝状遺構出土遺物（第90図）

土器　３は磁器碗の体～底部片である。外面には桐の染付が配される。

20号溝状遺構（第86図）

長さは16m程を測るが、西端を攪乱によって失われている。幅は西端付近で３ｍ程、深さ0.2m程を測り、覆土は単層である。覆土の状態や深さや幅といった規模の類似性から、本来は21号溝状遺構と連結する同一の遺構であった可能性が考えられる。また、東西方向に延伸することや、木杭が周囲に打設されることから、池状遺構に伴う何らかの機能を有していた可能性がある。

20号溝状遺構出土遺物（第90図）

土器　４は須恵器壺の底部片である。５は陶器の底部片である。器種は平碗あるいは皿であろう。胴部付近に釉薬の付着が認められる。近世瀬戸美濃系の製品である。６・７は磁器碗で、６はほぼ完形、７は体～底部片である。いずれも外面に梅の染付が配される。８は磁器筒形碗の口縁～体部片である。肥前系の染付筒形碗で、19世紀前後の所産である。

石器　９は凹石である。中央が人為的に落ち窪められている。また、凹面の下半と凸面のほぼ全面が磨面として利用されており、磨痕や削痕が認められる。石材は軽石である。

21号溝状遺構（第86図）

長さ25m程、幅３ｍ程、深さ0.05m程を測る。覆土は単層である。本来は20号溝状遺構と連結する同一の遺構であった可能性が考えられる。また、東西方向に延伸することや、木杭が周囲に打設されることから、池状遺構に伴う何らかの機能を有していた可能性がある。東端は環濠の上層を切る。

21号溝状遺構出土遺物（第90図）

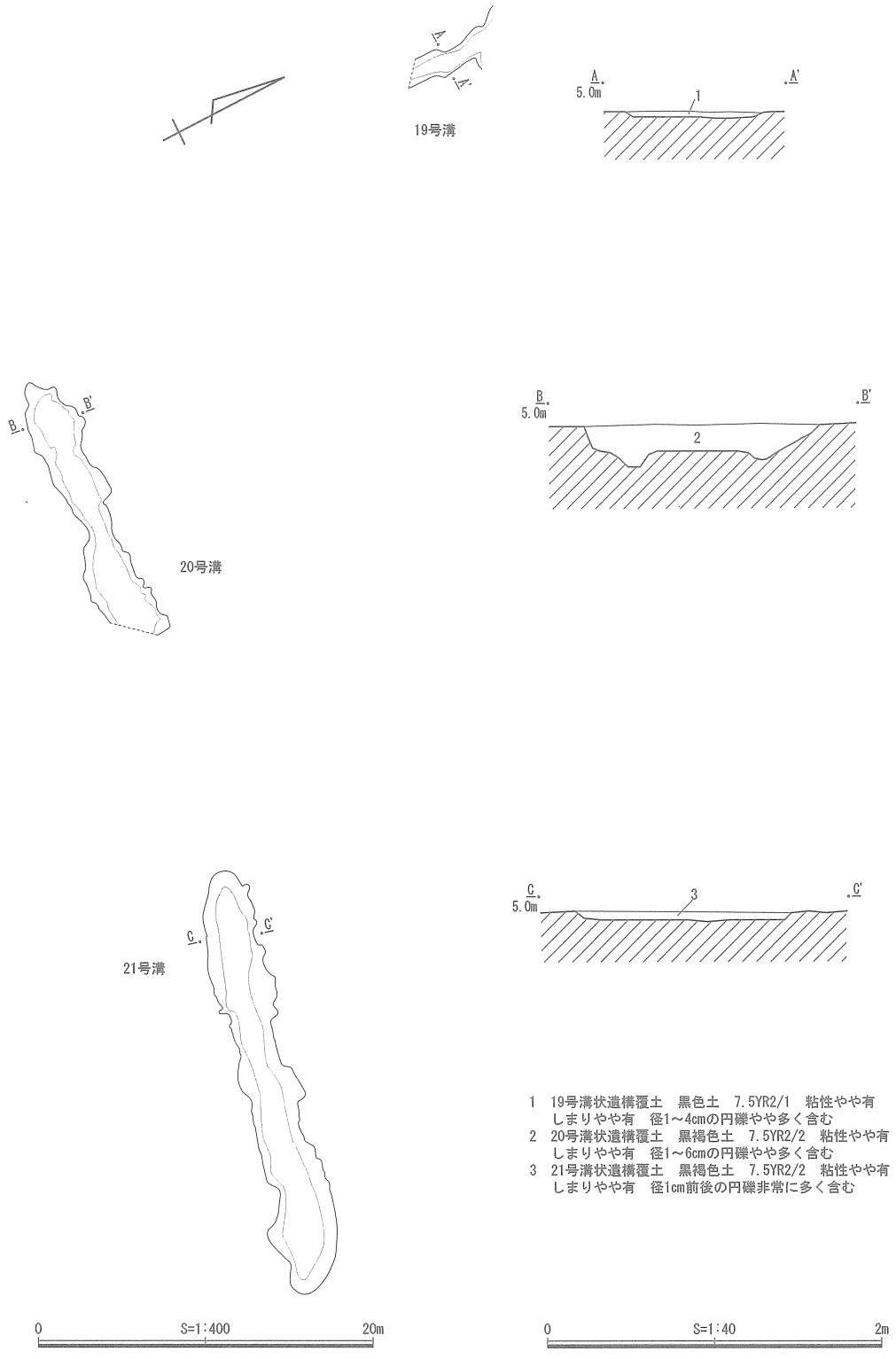
土器　10は陶器皿で口縁～体部片である。志野小皿で17世紀の所産である。11～13は磁器碗で、11はほぼ完形、12は口縁～底部片、13は口縁～体部片である。いずれも外面の体部や底部に染付が施される。14は磁器筒形碗での口縁～体部片である。外面には紅葉の染付が配される。他に染付皿・志野丸皿などの中世陶磁器が出土した。

26号土坑（第81・82図）

平面形は楕円形を呈し、長径1.10m、短径0.80mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.16mを測る。覆土に池上遺構同様の木杭が認められた。27～30号土坑とともに池状遺構に並列するように配置されていることから、池状遺構に伴う何らかの機能を有していた可能性がある。遺物の出土は認められなかったが、覆土の所見や池状遺構との関連性を窺わせる配置上、近世以降に帰属するものとした。

27号土坑（第81・82図）

平面形は楕円形を呈し、長径0.60m、短径0.40mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.20mを測る。28号土坑に切られる。26・28～30号土坑とともに池状遺構に並列するように配置されていることから、池状遺構に伴う何らかの機能を有していた可能性がある。遺物の出土は認められなかったが、



第86図　19～21号溝状遺構平・断面図

覆土の所見や池状遺構との関連性を窺わせる配置上、近世以降に帰属するものとした。

28号土坑（第81・82図）

平面形は楕円形を呈し、長径0.46m、短径0.40mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.12mを測る。27号土坑を切る。26・27・29・30号土坑とともに池状遺構に並列するように配置されていることから、池状遺構に伴う何らかの機能を有していた可能性がある。遺物の出土は認められなかったが、

覆土の所見や池状遺構との関連性を窺わせる配置上、近世以降に帰属するものとした。

29号土坑（第81・82図）

平面形は楕円形を呈し、長径0.80m、短径0.72mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.18mを測る。30号土坑に切られる。26～28・30号土坑とともに池状遺構に並列するように配置されていることから、池状遺構に伴う何らかの機能を有していた可能性がある。遺物の出土は認められなかったが、覆土の所見や池状遺構との関連性を窺わせる配置上、近世以降に帰属するものとした。

30号土坑（第81・82図）

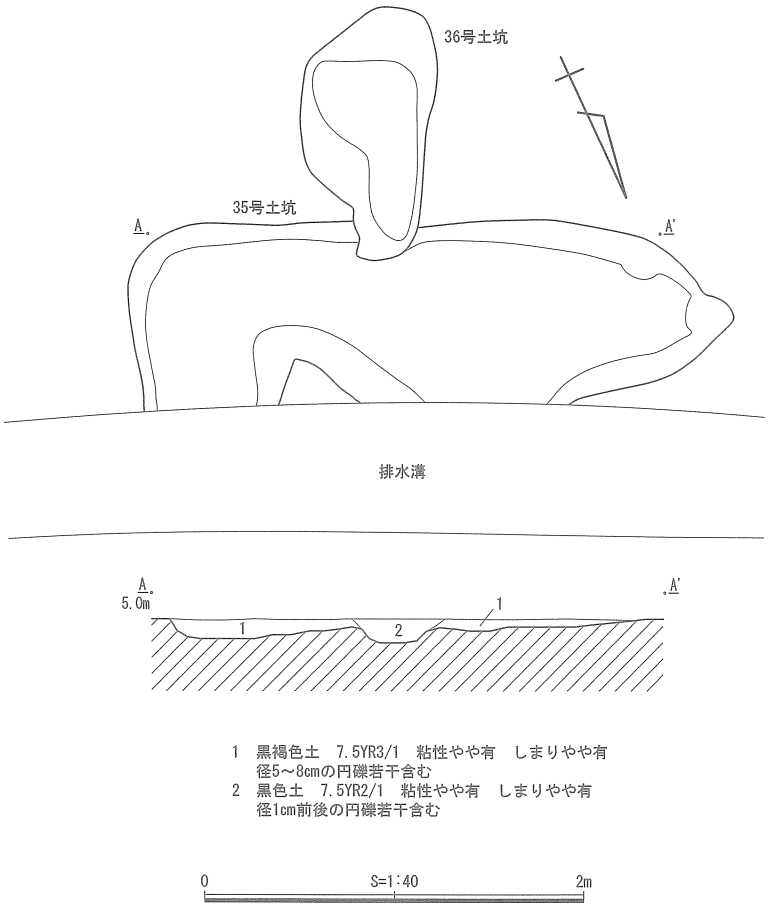
平面形は楕円形を呈し、長径0.94m、短径0.80mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.12mを測る。29号土坑を切る。26～29号土坑とともに池状遺構に並列するように配置されていることから、池状遺構に伴う何らかの機能を有していた可能性がある。遺物の出土は認められなかったが、覆土の所見や池状遺構との関連性を窺わせる配置上、近世以降に帰属するものとした。

31号土坑（第81・82図）

いびつな平面形を呈し、長径2.88m、短径2.00mを測る。覆土は土層の堆積から2層に分層され、検出面からの深さは0.14mを測る。調査区際で検出された。遺物の出土は認められなかったが、覆土の所見や池状遺構との関連性を窺わせる配置上、近世以降に帰属するものとした。

32号土坑（第81・82図）

平面形は楕円形を呈し、長径1.40m、短径1.08mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.08mを測る。池状遺構に切られる。遺物の出土は認められなかったが、覆土の所見や池状遺構との切り合い関係から近世以降に帰属するものとした。



第87図　35・36号土坑平・断面図

33号土坑（第81・82図）

いびつな平面形を呈し、長径2.28m、短径1.70mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.30mを測る。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、近世陶器の破片が数点出土したことから、近世以降に帰属するものとした。

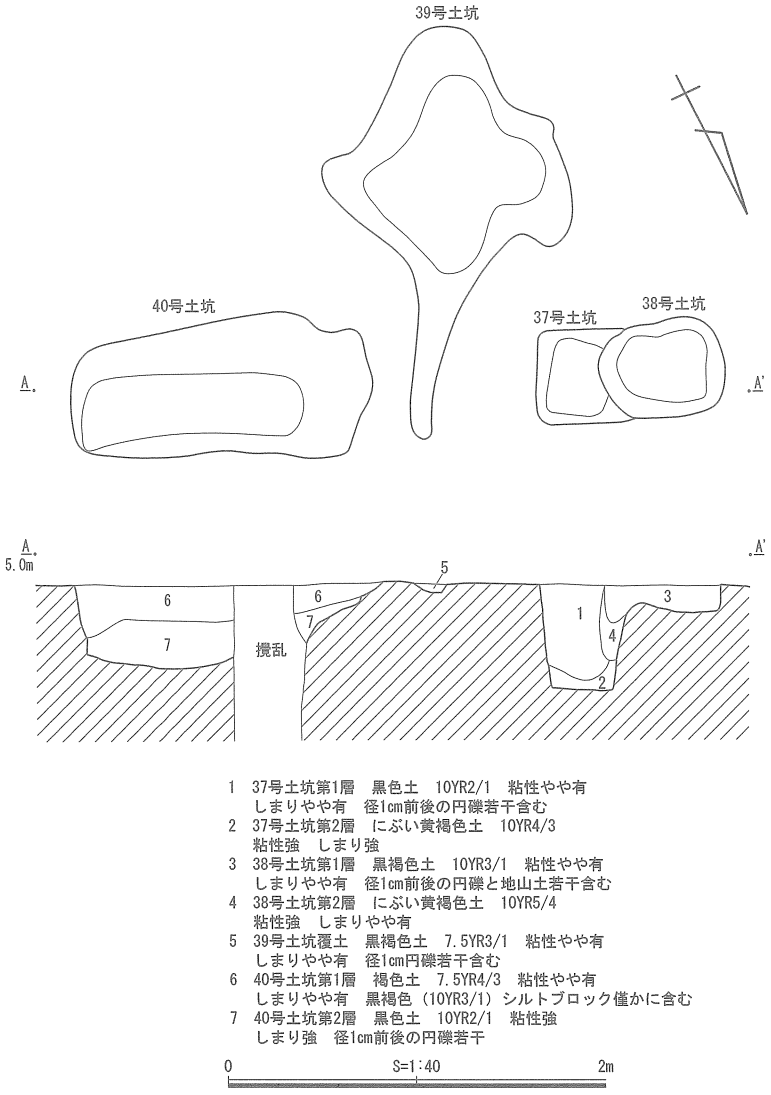
34号土坑（第81・82図）

いびつな平面形を呈し、長径2.98m、短径1.60mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.16mを測る。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、近世陶器の破片が数点出土したことから、近世以降に帰属するものとした。

35号土坑（第87図）

いびつな平面形を呈し、長径3.20m、短径0.98mを測る。覆土



第88図　37～40号土坑平・断面図

は単層で、検出面からの深さは0.10mを測る。36号土坑に南端を一部切られる。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、近世陶器の破片が数点出土したことから、近世以降に帰属するものとした。

36号土坑（第87図）

平面形は楕円形を呈し、長径1.34m、短径0.70mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.12mを測る。35号土坑を切る。

36号土坑出土遺物（第90図）

土器　15は陶器の口縁部片である。器種は碗あるいは皿であろう。

37号土坑（第88図）

正方形に近い平面形を呈し、長径0.64m、短径は残存部で0.40mを測る。覆土は土層の堆積から２層に分層され、検出面からの深さは0.56mを測る。その平面形態から柱穴の可能性を想定したが、柱痕は確認できなかった。38号土坑に切られる。遺物の出土は認められなかったが、覆土の所見から近世以降に帰属するものとした。

38号土坑（第88図）

平面形は楕円形を呈し、長径0.68m、短径0.52mを測る。覆土は土層の堆積から２層に分層され、検出面からの深さは0.40mを測る。東端が一部深くなっており、落ち込むようにして堆積している。37号土坑同様、平面形態から柱穴の可能性を想定したが、柱痕は確認できなかった。37号土坑を切る。遺物の出土は認められなかったが、覆土の所見から近世以降に帰属するものとした。

39号土坑（第88図）

いびつな平面形を呈し、長径2.20m、短径1.32mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.05mを測る。38号土坑に切られる。遺物の出土は認められなかったが、覆土の所見から近世以降に帰属するものとした。

40号土坑（第88図）

長方形に近い平面形を呈し、長径1.60m、短径0.76mを測る。覆土は土層の堆積から２層に分層され、検出面からの深さは0.44mを測る。攪乱に一部を深く切られる。覆土の所見から近世以降に帰属するものとした。

40号土坑出土遺物（第90図）

土器　16は灰釉陶器埦の底部片である。

第89図　９号土坑列平・断面図

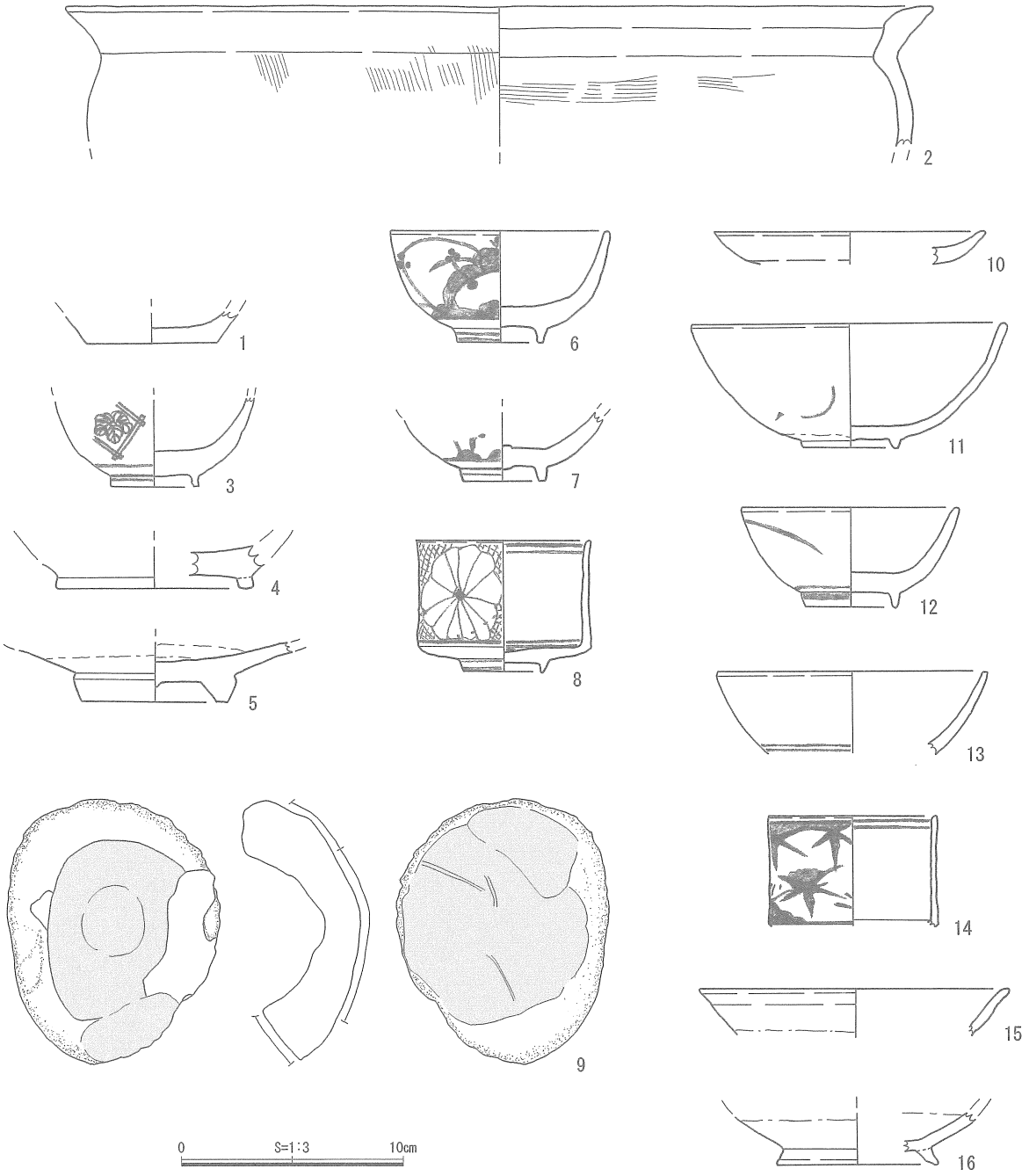
９号土坑列（第89図）

22基の土坑群と67基の小穴群で構成される。北東方向から南西方向に放射状に並んでいる。性格は不明であるが、本来は１～３条の溝状遺構であった可能性も考えられる。深さは地点によって異なるが、平均0.1mを測る。覆土から出土した炭化物の放射性炭素年代測定結果（第Ⅳ章第３節参照）から、近代の遺構と考えられる。

遺構外出土遺物（第91・92図）

土器　１は陶器碗の体～底部片である。内面と外面体部に釉薬が塗布される。近世美濃系の丸碗と考えられる。２は陶器灯明皿の口縁～底部片である。釉薬は鉄釉の全面施釉である。近世瀬戸系の灯明皿と考えられる。３は陶器鉢類の胴～底部片である。内面と外面胴部に明黄褐色の釉薬が塗される。近世瀬戸・美濃系の鉢類であろう。４～６は陶器擂鉢で、４は口縁部片、５・６は底部片である。４の口縁端部は丸くおさまっている。５・６の底部は糸切未調整の平底である。底部内面にも擂目が確認される。釉薬は鉄釉の全面施釉である。いずれも近世瀬戸系の擂鉢と考えられる。７・８は磁器碗の口縁～底部片である。７は内面に染付が施される。８は外面に矢羽文の染付が施される。肥前系の染付碗で、19世紀の所産である。９～10は磁器小碗で、９がほぼ完形、10が口縁～底部片である。９は口縁部外面に雨降文の染付が施される。10の高台は二重高台である。11は磁器筒形碗の口縁～底部片である。外面に矢羽文の染付が施される。肥前系の染付筒形碗で、19世紀の所産である。

土製品　12は丸瓦の破片である。凸面に丁寧な撫で調整が施され、凹面には布目痕が残る。13も瓦の破片としたが、扁平な形態で焼成も甘いことから、瓦以外の土製品の可能性も考えられる。片面に叩き目が残る。

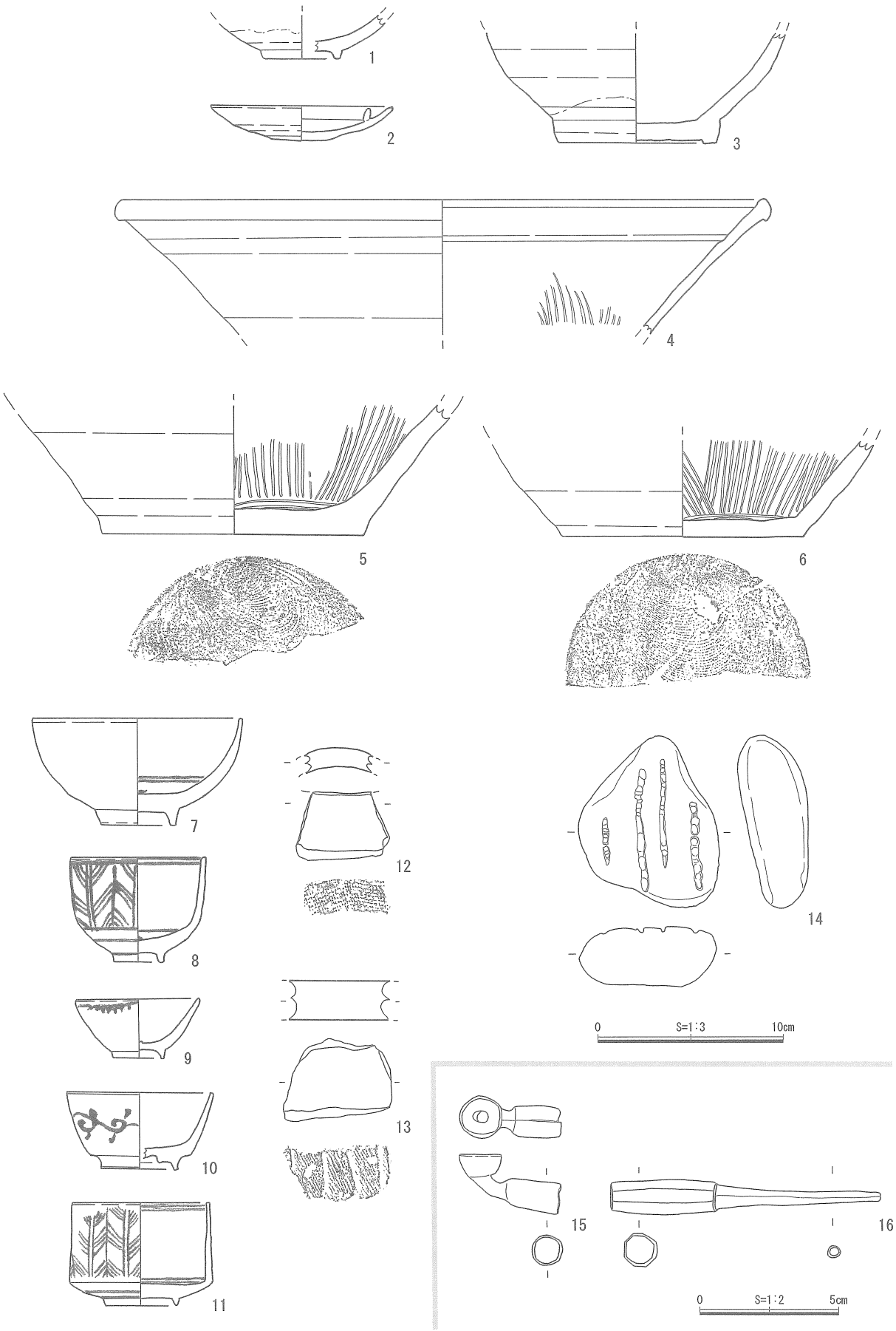


第90図　13・19～21号溝状遺構・36・40号土坑土器および石器実測図

石器　14は線刻が施された礫である。扁平な礫の表面に４条の線刻が認められる。線はいくつもの穿孔が列状に並ぶ列点によって形成されており、擦痕や削痕ではなく意図的に刻まれたものと判断した。石材はホルンフェルスである。用途や時期等は不明である。

銅製品　15は遺構面直上より出土した銅製の煙管の雁首である。火皿口径1.5㎝、管幅1.1㎝を測る。16は銅製の煙管の吸口である。やや砂利混じりの包含層中より出土した。15・16とも明確な稜が認められる形態であることから、17世紀代の所産と考えられる。

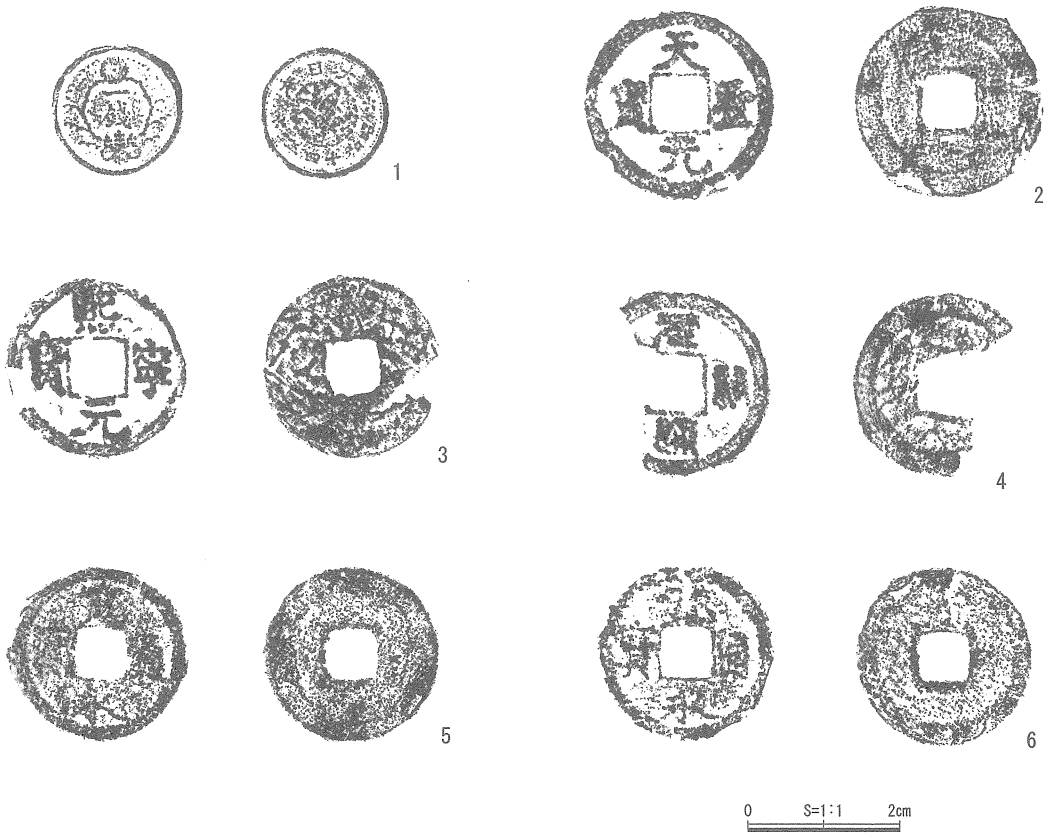
銭貨　３点の北宋銭の出土が認められた。最古銭は天聖元寶で初鋳年は1023年、最新銭は元豊通寶で初鋳年は1078年である。第92図の２は天聖元寶で銭文の書体は真書である。３は熙寧元寶（初鋳1068年）



第91図　近世以降遺構外出土土器・土製品・石器・銅製品実測図

で、銭文の書体は真書である。４は全体の１／４程を欠くが、元豊通寶で銭文の書体は篆書である。

５・６は寛永通寶である。摩耗が著しく銭文が明確でないが、「寛」の字の12画と13画の頭が離れる点や、「寶」の貝画末尾がハの字を呈する点から、寛文８年（1668年）以降に鋳造された俗に新寛永と呼ばれるものと考えられる。



第92図　銭貨拓影図

参考文献

岡本直久・青木修編　2002『江戸時代の瀬戸窯』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター

青木修ほか編　2003『江戸時代の美濃窯』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター

岡本直久・青木修編　2004『江戸時代の瀬戸・美濃窯』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター

山下峰司・金子健一編　2006『江戸時代のやきもの―生産と流通―』(財)瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター

日本貨幣商協同組合編　2010『日本貨幣カタログ2010』

第５表　新旧遺構番号対照表

旧遺構番号	新遺構番号
S001	8号溝状遺構
S002	7号溝状遺構
S003	6号溝状遺構
S004	67号土坑
S005	66号土坑
S006	60号土坑
S007	59号土坑
S008	65号土坑
S009	8号土坑
S010	64号土坑
S011	63号土坑
S012	62号土坑
S013	61号土坑
S014	68号土坑
S015	69号土坑
S016	58号土坑
S017	57号土坑
S018	56号土坑
S019	70号土坑
S020	54号土坑
S021	53号土坑
S022	52号土坑
S023	49号土坑
S024	50号土坑
S025	51号土坑
S026	47号土坑
S027	48号土坑
S028	46号土坑
S029	44号土坑
S030	45号土坑
S031	55号土坑
S032	1号小穴
S033	73号土坑
S034	72号土坑
S035	74号土坑
S036	1号溝状遺構
S037	2号小穴
S038	75号土坑
S039	71号土坑
S040	42号土坑
S041	43号土坑
S042	3号溝状遺構
S043	4号溝状遺構
S044	5号溝状遺構
S045	2号溝状遺構
S046	13号溝状遺構
S047	41号土坑
S048	7号土坑
S049	6号土坑
S050	79号土坑
S051	82号土坑
S052	83号土坑
S053	84号土坑
S054	81号土坑
S055	80号土坑
S056	86号土坑
S057	85号土坑
S058	87号土坑
S059	101号土坑
S060	103号土坑
S061	102号土坑

旧遺構番号	新遺構番号
S062	89号土坑
S063	88号土坑
S064	97号土坑
S065	13号土坑
S066	105号土坑
S067	104号土坑
S068	107号土坑
S069	100号土坑
S070	93号土坑
S071	92号土坑
S072	98号土坑
S073	99号土坑
S074	12号土坑
S075	9号土坑
S076	16号土坑
S077	15号土坑
S078	14号土坑
S079	91号土坑
S080	4号土坑
S081	3号土坑
S082	2号土坑
S083	1号土坑
S084	142号土坑
S085	95号土坑
S086	94号土坑
S087	108号土坑
S088	109号土坑
S089	6号小穴
S090	欠番
S091	欠番
S092	112号土坑
S093	110号土坑
S094	125号土坑
S095	113号土坑
S096	106号土坑
S097	20号土坑
S098	18号土坑
S099	17号土坑
S100	111号土坑
S101	116号土坑
S102	129号土坑
S103	124号土坑
S104	115号土坑
S105	114号土坑
S106	19号土坑
S107	8号小穴
S108	7号小穴
S109	119号土坑
S110	118号土坑
S111	117号土坑
S112	121号土坑
S113	120号土坑
S114	123号土坑
S115	10号小穴
S116	122号土坑
S117	9号小穴
S118	127号土坑
S119	126号土坑
S120	22号土坑
S121	5号土坑
S122	141号土坑

旧遺構番号	新遺構番号
S123	23号土坑
S124	139号土坑
S125	130号土坑
S126	143号土坑
S127	140号土坑
S128	144号土坑
S129	21号土坑
S130	132号土坑
S131	133号土坑
S132	146号土坑
S133	145号土坑
S134	131号土坑
S135	147号土坑
S136	136号土坑
S137	135号土坑
S138	134号土坑
S139	137号土坑
S140	11号小穴
S141	12号小穴
S142	138号土坑
S143	26号土坑
S144	28号土坑
S145	30号土坑
S146	96号土坑
S147	27号土坑
S148	池状遺構
S149	29号土坑
S150	環濠
S151	18号溝状遺構
S152	17号溝状遺構
S153	128号土坑
S154	13号小穴
S155	14号小穴
S156	16号溝状遺構
S157	32号土坑
S158	33号土坑
S159	34号土坑
S160	20号溝状遺構
S161	24号土坑
S162	148号土坑
S163	149号土坑
S164	154号土坑
S165	152号土坑
S166	153号土坑
S167	151号土坑
S168	150号土坑
S169	31号土坑
S170	90号土坑
S171	9号溝状遺構
S172	21号溝状遺構
S173	19号溝状遺構
S174	36号土坑
S175	155号土坑
S176	35号土坑
S177	39号土坑
S178	38号土坑
S179	37号土坑
S180	40号土坑
S181	7号土坑
S182	11号土坑
S183	76号土坑

旧遺構番号	新遺構番号
S184	5号小穴
S185	10号土坑
S186	4号小穴
S187	3号小穴
S188	78号土坑
S189	2号土坑列
S190	14号溝状遺構
S191	15号溝状遺構
S192	156号土坑

旧遺構番号	新遺構番号
S193	157号土坑
S194	5号土坑列
S195	16号小穴
S196	1号土坑列
S197	8号土坑列
S198	7号土坑列
S199	6号土坑列
S200	25号土坑
S201	10号溝状遺構

旧遺構番号	新遺構番号
S202	3号土坑列
S203	15号小穴
S204	4号土坑列
S205	11号溝状遺構
S206	9号土坑列
S207	12号溝状遺構
S208	欠番
S209	欠番

第６表　土坑・小穴計測表

（　）は残存値　単位＝m

遺構番号	時　期	長さ(長径)	幅(短径)	深　さ	切り合い関係
1号 土坑	弥生	1.14	(0.50)	0.16	2号土坑に切られる
2号 土坑	弥生	1.22	(0.44)	0.12	1号土坑を切り、3号土坑に切られる
3号 土坑	弥生	(0.94)	(0.22)	0.18	2号土坑を切り、4号土坑に切られる
4号 土坑	弥生	0.86	0.64	0.10	3号土坑を切る
5号 土坑	弥生	1.18	0.88	0.26	
6号 土坑	奈良・平安	1.64	1.36	0.14	
7号 土坑	奈良・平安	3.12	1.92	0.10	1号溝に切られる
8号 土坑	奈良・平安	1.62	(0.72)	0.34	
9号 土坑	奈良・平安	2.70	1.56	0.04	
10号 土坑	奈良・平安	0.48	0.24	0.04	
11号 土坑	奈良・平安	(1.52)	(1.04)	0.14	12・13号土坑に切られる
12号 土坑	奈良・平安	1.60	1.48	0.22	11号土坑を切る
13号 土坑	奈良・平安	0.76	0.58	0.08	11号土坑を切る
14号 土坑	奈良・平安	(1.44)	(0.54)	0.44	15号土坑に切られる
15号 土坑	奈良・平安	(1.50)	(0.68)	0.12	14号土坑を切り、16号土坑に切られる
16号 土坑	奈良・平安	1.30	0.96	0.16	15号土坑を切る
17号 土坑	奈良・平安	(1.26)	(0.54)	0.28	19号土坑に切られる
18号 土坑	奈良・平安	1.24	0.86	0.42	19号土坑に切られる
19号 土坑	奈良・平安	(1.48)	1.20	0.16	17・18号土坑を切り、20号土坑に切られる
20号 土坑	奈良・平安	1.08	0.88	0.22	19号土坑を切る
21号 土坑	奈良・平安	0.72	0.56	0.08	
22号 土坑	奈良・平安	1.10	0.64	0.10	
23号 土坑	奈良・平安	1.46	0.78	0.06	
24号 土坑	奈良・平安	0.84	0.42	0.08	
25号 土坑	奈良・平安	2.90	1.18	0.10	
26号 土坑	近世以降	1.10	0.80	0.16	
27号 土坑	近世以降	(0.60)	0.40	0.20	28号土坑に切られる
28号 土坑	近世以降	0.46	0.40	0.12	27号土坑を切る
29号 土坑	近世以降	0.80	(0.72)	0.18	30号土坑に切られる
30号 土坑	近世以降	0.94	0.80	0.12	29号土坑を切る
31号 土坑	近世以降	(2.88)	2.00	0.14	
32号 土坑	近世以降	(1.40)	1.08	0.08	池状遺構に切られる
33号 土坑	近世以降	2.28	1.70	0.30	
34号 土坑	近世以降	2.98	1.60	0.16	
35号 土坑	近世以降	3.20	(0.98)	0.10	36号土坑に切られる
36号 土坑	近世以降	1.34	0.70	0.12	35号土坑を切る
37号 土坑	近世以降	(0.64)	(0.40)	0.56	38号土坑に切られる
38号 土坑	近世以降	0.68	0.52	0.40	37号土坑を切る
39号 土坑	近世以降	2.20	1.32	0.05	
40号 土坑	近世以降	1.60	0.76	0.44	攪乱に切られる
41号 土坑	不明	1.92	1.30	0.30	
42号 土坑	不明	0.69	0.40	0.17	
43号 土坑	不明	1.48	0.70	0.15	6号溝を切り、44・45号土坑に切られる
44号 土坑	不明	(1.34)	(0.88)	0.15	43号土坑を切り、45・46・48号土坑に切られる
45号 土坑	不明	(1.27)	1.02	0.10	6号溝・43・44号土坑を切り、46号土坑に切られる
46号 土坑	不明	(1.30)	(1.26)	0.09	44・45号土坑を切り、47・48号土坑に切られる
47号 土坑	不明	1.30	1.06	0.10	46号土坑を切る
48号 土坑	不明	1.60	1.32	0.16	44・46号土坑を切る

遺構番号	時　期	長さ(長径)	幅(短径)	深　さ	切り合い関係
49号 土坑	不明	(1.81)	1.32	0.20	6号溝を切り、50・51号土坑に切られる
50号 土坑	不明	1.30	(1.02)	0.21	6号溝・49号土坑を切り、51号土坑に切られる
51号 土坑	不明	(1.34)	(0.96)	0.26	6号溝・49・50号土坑を切り、攪乱に切られる
52号 土坑	不明	0.92	0.68	0.16	
53号 土坑	不明	0.69	(0.64)	0.16	54号土坑と攪乱に切られる
54号 土坑	不明	(0.70)	(0.56)	0.12	53号土坑を切り、攪乱に切られる
55号 土坑	不明	(0.78)	(0.24)	0.16	56・57号土坑に切られる
56号 土坑	不明	(0.98)	(0.78)	0.20	55号土坑を切り、58号土坑に切られる
57号 土坑	不明	1.97	1.50	0.22	55号土坑を切る
58号 土坑	不明	1.10	0.98	0.31	56号土坑を切る
59号 土坑	不明	0.70	0.66	0.19	
60号 土坑	不明	1.02	0.80	0.12	
61号 土坑	不明	1.30	1.30	0.23	
62号 土坑	不明	(1.60)	(1.14)	0.16	63・64号土坑に切られる
63号 土坑	不明	(1.20)	(1.00)	0.16	62号土坑を切り、64号土坑に切られる
64号 土坑	不明	1.22	0.96	0.17	62・63号土坑を切る
65号 土坑	不明	0.64	0.54	0.16	
66号 土坑	不明	1.13	0.84	0.10	67号土坑に切られる
67号 土坑	不明	(0.70)	(0.46)	0.09	66号土坑を切る
68号 土坑	不明	1.00	0.88	0.11	
69号 土坑	不明	0.98	0.70	0.15	
70号 土坑	不明	1.44	1.06	0.16	
71号 土坑	不明	1.15	0.96	0.12	
72号 土坑	不明	1.02	(0.70)	0.23	73号土坑に切られる
73号 土坑	不明	0.71	0.42	0.15	72号土坑を切り、74号土坑に切られる
74号 土坑	不明	(1.32)	1.16	0.21	73号土坑を切る
75号 土坑	不明	(1.04)	0.54	0.08	
76号 土坑	不明	(0.66)	0.54	0.18	77号土坑に切られる
77号 土坑	不明	0.70	0.54	0.21	76号土坑を切る
78号 土坑	不明	0.60	0.54	0.13	8号溝を切る
79号 土坑	不明	0.70	0.64	0.14	
80号 土坑	不明	(0.70)	(0.24)	0.25	81号土坑と攪乱に切られる
81号 土坑	不明	(0.70)	(0.12)	0.17	80号土坑を切り、攪乱に切られる
82号 土坑	不明	0.70	0.62	0.15	
83号 土坑	不明	0.59	0.42	0.13	
84号 土坑	不明	(0.70)	0.64	0.06	攪乱に切られる
85号 土坑	不明	(1.00)	(0.50)	0.20	86号土坑に切られる
86号 土坑	不明	1.50	(0.53)	0.19	85号土坑を切る
87号 土坑	不明	1.52	1.20	0.21	
88号 土坑	不明	(0.44)	(0.20)	0.10	89号土坑に切られる
89号 土坑	不明	0.78	(0.44)	0.12	88号土坑を切る
90号 土坑	不明	1.04	0.29	0.21	攪乱に切られる
91号 土坑	不明	0.50	0.04	0.23	
92号 土坑	不明	0.90	0.84	0.20	
93号 土坑	不明	0.96	0.84	0.18	
94号 土坑	不明	(1.14)	(0.64)	0.09	95号土坑に切られる
95号 土坑	不明	1.12	0.92	0.06	94号土坑を切る
96号 土坑	不明	1.10	0.62	0.08	
97号 土坑	不明	0.52	(0.38)	0.20	98・99号土坑に切られる
98号 土坑	不明	0.76	0.48	0.20	97号土坑を切る
99号 土坑	不明	0.88	0.60	0.21	97号土坑を切る
100号 土坑	不明	(0.90)	(0.88)	0.11	
101号 土坑	不明	0.69	0.48	0.21	
102号 土坑	不明	0.80	(0.56)	0.16	103号土坑に切られる
103号 土坑	不明	0.56	0.54	0.09	102号土坑を切る
104号 土坑	不明	(0.90)	(0.60)	0.12	105号土坑に切られる
105号 土坑	不明	0.70	0.60	0.12	104号土坑を切る
106号 土坑	不明	1.56	1.26	0.12	
107号 土坑	不明	0.60	0.50	0.13	
108号 土坑	不明	(1.06)	(0.64)	0.24	攪乱に切られる
109号 土坑	不明	0.61	0.52	0.18	
110号 土坑	不明	(1.60)	(0.66)	0.09	攪乱に切られる
111号 土坑	不明	0.67	0.66	0.05	

遺構番号	時　期	長さ(長径)	幅(短径)	深　さ	切り合い関係
112号 土坑	不明	0.88	0.58	0.13	
113号 土坑	不明	1.30	0.79	0.23	
114号 土坑	不明	(1.12)	0.90	0.29	115号土坑に切られる
115号 土坑	不明	1.00	0.74	0.29	114号土坑を切る
116号 土坑	不明	1.20	1.04	0.07	
117号 土坑	不明	(0.90)	(0.44)	0.16	118・119号土坑に切られる
118号 土坑	不明	1.48	(0.74)	0.16	117号土坑を切り、119号土坑に切られる
119号 土坑	不明	1.00	0.80	0.09	117・118号土坑を切る
120号 土坑	不明	(0.88)	(0.50)	0.19	121号土坑に切られる
121号 土坑	不明	0.64	0.60	0.29	120号土坑を切る
122号 土坑	不明	(0.76)	0.40	0.22	9号小穴を切り、10号小穴に切られる
123号 土坑	不明	1.28	1.08	0.23	
124号 土坑	不明	0.82	0.66	0.03	
125号 土坑	不明	1.49	0.88	0.07	
126号 土坑	不明	(0.77)	(0.26)	0.11	127号土坑に切られる
127号 土坑	不明	1.22	1.20	0.14	126号土坑を切る
128号 土坑	不明	1.40	0.70	0.11	
129号 土坑	不明	0.58	0.43	0.07	
130号 土坑	不明	0.98	0.96	0.19	
131号 土坑	不明	0.94	0.60	0.22	
132号 土坑	不明	0.98	0.72	0.13	
133号 土坑	不明	1.78	0.76	0.10	
134号 土坑	不明	(13.6)	12.4	0.13	135号土坑に切られる
135号 土坑	不明	(0.72)	0.71	0.31	134号土坑を切り、136号土坑に切られる
136号 土坑	不明	1.24	0.87	0.17	135号土坑を切る
137号 土坑	不明	0.50	0.41	0.16	
138号 土坑	不明	(1.12)	(0.58)	0.07	
139号 土坑	不明	0.72	0.70	0.13	
140号 土坑	不明	1.40	1.10	0.05	
141号 土坑	不明	1.47	0.76	0.11	
142号 土坑	不明	(1.14)	(0.68)	0.13	144号土坑に切られる
143号 土坑	不明	(1.14)	(0.68)	0.10	144号土坑に切られる
144号 土坑	不明	1.80	1.20	0.14	142・143号土坑を切る
145号 土坑	不明	(0.80)	(0.40)	0.12	146号土坑に切られる
146号 土坑	不明	1.00	0.44	0.11	145号土坑を切る
147号 土坑	不明	0.70	0.50	0.11	
148号 土坑	不明	1.00	0.44	0.07	
149号 土坑	不明	0.64	0.56	0.25	
150号 土坑	不明	(0.18)	(0.40)	0.10	151～153号土坑に切られる
151号 土坑	不明	0.64	(0.44)	0.13	150号土坑を切り、152・153号土坑に切られる
152号 土坑	不明	0.92	0.64	0.05	150・151号土坑を切る
153号 土坑	不明	0.67	0.58	0.12	150・151号土坑を切る
154号 土坑	不明	0.80	0.70	0.05	
155号 土坑	不明	0.62	0.54	0.17	
156号 土坑	不明	0.86	(0.48)	0.12	
157号 土坑	不明	0.90	0.70	0.13	
1号 小穴	不明	0.30	0.28	0.09	
2号 小穴	不明	0.45	0.30	0.08	
3号 小穴	不明	0.42	0.34	0.08	
4号 小穴	不明	0.40	0.20	0.08	
5号 小穴	不明	0.40	0.26	0.10	
6号 小穴	不明	0.36	0.30	0.13	
7号 小穴	不明	0.46	0.24	0.09	
8号 小穴	不明	0.28	0.20	0.12	
9号 小穴	不明	(0.41)	0.41	0.20	122号土坑に切られる
10号 小穴	不明	0.44	0.40	0.21	122号土坑を切る
11号 小穴	不明	0.45	0.36	0.11	12号小穴に切られる
12号 小穴	不明	0.41	(0.20)	0.10	11号小穴を切る
13号 小穴	不明	0.30	0.28	0.08	
14号 小穴	不明	0.29	0.28	0.12	
15号 小穴	不明	0.48	0.38	0.05	
16号 小穴	不明	0.26	0.22	0.04	

第７表　出土土器観察表

※（　）は復原値

図版番号	挿図番号	種別 器種	出土遺構 出土位置	残存部位	口径 (cm)	器高 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	内面技法	外面技法	胎土	焼成	色調	備考
28	1	土師器 塊	環濠 第１層	底部片	－	2.2	－	(8.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	普通　石英・長石・ 白色粒子やや多	良好	明赤褐 2.5YR5/6	
28	2	弥生土器 壺	環濠 第２層	口縁～胴部片	(14.6)	17.3	－	－	指頭圧痕有	頸部縄文	普通　輝石少・ 白色・赤色粒子	普通	にぶい橙 5YR7/4	内外面とも摩滅
28	3	弥生土器 甕	環濠 第２層	口縁部破片	－	3.2	－	－	ヨコハケ	ハケ 口唇部キザミ	普通 白色粒子少	良好	浅黄橙 7.5YR8/4	
28	4	土師器 坏	環濠 第２層	口縁～体部片	(12.8)	2.3	－	－	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ後ヨコナデ	普通 長石・白色粒子	普通	淡橙 5YR8/4	
28	5	土師器 甕	環濠 第２層	底部片	－	2.3	－	(7.0)	ヨコナデ	タテハケ	密　長石・角閃石・ 輝石少・白色粒子	良好	明赤褐 5YR5/8	底部木葉痕僅か
29	1	弥生土器 壺	環濠 第３層	胴～底部片	－	16.3	(20.7)	(7.1)	ナデ 指頭圧痕有	胴部縄文後沈線文 底部タテハケ後ミガキ	やや粗　雲母多・石英・ 長石・白色粒子・粗砂粒	普通	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面とも摩滅
29	2	弥生土器 壺	環濠 第３層	胴部破片	－	6.5	－	－	ナデ	沈線区画・縄文	普通 雲母・白色粒子	良好	橙 5YR7/6	
29	3	弥生土器 壺	環濠 第３層	胴部破片	－	3.0	－	－	ナデ	沈線区画・縄文	普通 雲母多・白色粒子多	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	
29	4	弥生土器 甕	環濠 第３層	口縁～胴部片	(30.0)	11.8	－	－	ヘラナデ	タテハケ 口唇部ハケ後キザミ	普通 白色粒子多	普通	にぶい黄橙 10YR7/3	
29	5	弥生土器 甕	環濠 第３層	口縁～胴部片	(20.0)	12.1	(21.6)	－	ヨコハケ	頸部タテハケ 胴部ヨコハケ	普通　石英・長石・ 輝石・赤色粒子・粗砂粒	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	外面煤付着 内面摩滅
29	6	弥生土器 甕	環濠 第３層	底部片	－	2.7	－	(6.3)	摩滅	摩滅	粗 石英・白色粒子多	やや不良	赤灰 2.5YR4/1	底部網代痕僅か 外面はにぶい黄橙 2.5YR5/6
29	7	弥生土器 甕	環濠 第３層	胴部破片	－	5.0	－	－	ナデ	タテハケ後磨消線文	普通 白色粒子少	良好	浅黄橙 7.5YR8/4	磨消線文甕
30	1	弥生土器 壺	環濠 第４層	底部片	－	4.8	－	(7.4)	摩滅	タテハケ	普通　雲母・石英・ 長石・輝石・粗砂粒	良好	にぶい黄橙 10YR7/2	底部網代痕 外面は橙 5YR6/6
30	2	弥生土器 壺	環濠 第４層	胴～底部片	－	6.9	－	(7.1)	摩滅	タテハケ後ヨコナデ	普通　輝石少・ 白色・赤色粒子・粗砂粒	良好	浅黄橙 7.5YR8/3	底部網代痕 外面はにぶい橙 7.5YR7/4
30	3	弥生土器 壺	環濠 第４層	底部片	－	6.4	－	7.0	ヨコハケ	タテハケ後ヨコナデ	普通　石英・長石・ 輝石・赤色粒子	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	
30	4	弥生土器 壺	環濠 第４層	胴部破片	－	4.5	－	－	ナデ	沈線区画・刺突文	普通 雲母多・白色粒子多	良好	浅黄橙 10YR8/3	
30	5	弥生土器 甕	環濠 第４層	口縁～胴部片	(33.2)	21.4	－	－	ヨコハケ後ナデ 口唇部キザミ	タテハケ　口唇部ハケ後キザミ 胴部ハケ後磨消線文	普通 白色粒子・粗砂粒少	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	磨消線文甕　外面煤付着 外面はにぶい橙 10YR6/3
30	6	弥生土器 甕	環濠 第４層	口縁～胴部片	(23.6)	10.0	－	－	ヨコハケ	タテハケ 口唇部キザミ後ハケ	普通 白色粒子	普通	にぶい黄橙 10YR6/4	
30	7	弥生土器 甕	環濠 第４層	口縁～胴部片	(22.2)	6.1	－	－	ナデ	タテハケ 口唇部キザミ	普通 白色・黒色粒子	普通	浅黄橙 10YR8/4	内外面とも摩滅
30	8	弥生土器 甕	環濠 第４層	底部片	－	4.0	－	7.0	ナデ 指頭圧痕有	タテハケ 指頭圧痕有	普通　石英・長石・ 赤色粒子少・粗砂粒	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	底部網代痕？ 外面はにぶい橙 10YR6/4
30	9	弥生土器 甕	環濠 第４層	底部片	－	4.6	－	(7.2)	ナデ	ハケ	普通 白色・黒色粒子多	普通	にぶい橙 5YR7/4	
30	10	弥生土器 甕	環濠 第４層	口縁部破片	－	2.5	－	－	ナデ	ハケ 口唇部キザミ	普通 石英少・白色粒子少	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	
30	11	弥生土器 甕	環濠 第４層	口縁部破片	－	2.7	－	－	ナデ	ハケ 口唇部キザミ	普通 白色粒子	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	
30	12	弥生土器 甕	環濠 第４層	口縁部破片	－	3.3	－	－	ナデ	ハケ 口唇部キザミ	普通 白色粒子少	良好	明黄褐 10YR7/6	
30	13	弥生土器 甕	環濠 第４層	口縁部破片	－	2.8	－	－	ナデ	ハケ 口唇部キザミ	普通 白色粒子	良好	浅黄橙 10YR8/4	
30	14	弥生土器 甕	環濠 第４層	口縁部破片	－	3.0	－	－	ヨコハケ	ハケ 口唇部キザミ	普通 白色粒子少	良好	橙 5YR7/6	

図版番号	挿図番号	種別 器種	出土遺構 出土位置	残存部位	口径 (cm)	器高 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	内面技法	外面技法	胎土	焼成	色調	備考
31	1	弥生土器 甕	環濠 第４層	口縁部破片	－	3.8	－	－	ナデ	ハケ 口唇部キザミ	普通 白色粒子	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	
31	2	弥生土器 甕	環濠 第４層	口縁部破片	－	3.5	－	－	ヨコハケ	ハケ 口唇部キザミ	普通 白色粒子少	良好	浅黄橙 10YR8/4	
31	3	弥生土器 甕	環濠 第４層	口縁部破片	－	4.0	－	－	ヨコハケ	ハケ	普通 白色粒子少	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	
31	4	弥生土器 甕	環濠 第４層	胴部破片	－	6.0	－	－	ナデ	ハケ	普通　雲母・ 白色・黒色粒子	良好	橙 7.5YR7/6	
31	5	弥生土器 甕	環濠 第４層	胴部破片	－	8.6	－	－	ナデ	ハケ	普通 雲母・白色粒子	良好	浅黄橙 7.5YR8/4	
31	6	弥生土器 甕	環濠 第４層	胴部破片	－	7.2	－	－	ナデ	ハケ	普通　雲母・ 白色・黒色粒子	良好	灰白 10YR8/2	横位羽状文甕
31	7	弥生土器 甕	環濠 第４層	胴部破片	－	7.2	－	－	ナデ	ハケ	普通　雲母・ 白色・黒色粒子	良好	にぶい橙 7.5YR6/4	横位羽状文甕
31	8	弥生土器 甕	環濠 第４層	胴部破片	－	4.7	－	－	ヨコハケ	ハケ	普通 白色粒子少	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	
31	9	弥生土器 甕	環濠 第４層	胴部破片	－	4.9	－	－	ナデ	ハケ	普通 白色粒子	良好	にぶい黄橙 10YR6/4	
31	10	弥生土器 甕	環濠 第４層	胴部破片	－	3.2	－	－	ナデ	条痕文？	普通 白色・黒色粒子	良好	橙 5YR7/6	
32	1	弥生土器 壺	環濠 第５層	口縁～頸部片	(6.1)	17.8	－	－	輪積痕顕著 指頭圧痕有	ナデ・沈線区画・ 貼付文・刺突文	普通　雲母・石英・長石・ 白色・赤色粒子	良好	褐灰 5YR6/1	外面は橙 5YR7/6
32	2	弥生土器 壺	環濠 第５層	口縁部破片	－	7.0	－	－	ナデ 指頭圧痕有	タテハケ後沈線文・貼付文 口唇部ヨコハケ後沈線文	普通　雲母・輝石・ 角閃石・白色・赤色粒子	良好	褐灰 7.5YR3/1	外面は灰褐 7.5YR6/2
32	3	弥生土器 壺	環濠 第５層	胴部破片	－	2.8	－	－	ナデ	沈線区画・刺突文	普通　雲母多・ 長石多・白色粒子多	良好	にぶい橙 7.5YR6/4	
32	4	弥生土器 壺	環濠 第５層	胴部破片	－	2.5	－	－	ナデ	沈線区画・縄文	普通　雲母多・ 長石多・白色粒子多	良好	橙 2.5YR6/8	
32	5	弥生土器 壺	環濠 第５層	胴部破片	－	2.9	－	－	ナデ	沈線区画・刺突文	普通 白色粒子	良好	橙 5YR6/6	
32	6	弥生土器 甕	環濠 第５層	底部片	－	3.0	－	(4.8)	ナデ	ハケ	普通 石英・白色粒子	普通	赤橙 10YR6/8	底部網代痕
32	7	弥生土器 甕	環濠 第５層	胴～底部片	－	6.7	－	(5.8)	ナデ	ハケ	普通 白色粒子	普通	明赤灰 2.5YR7/1	底部木葉痕僅か 外面は淡赤橙 2.5YR7/4
32	8	弥生土器 甕	環濠 第５層	口縁部破片	－	4.8	－	－	ナデ	タテハケ 口唇部キザミ	普通 白色粒子少	良好	にぶい黄褐 10YR7/4	磨消線文甕
32	9	弥生土器 甕	環濠 第５層	口縁部破片	－	5.7	－	－	ナデ	タテハケ 口唇部キザミ	普通 白色粒子	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	磨消線文甕
32	10	弥生土器 甕	環濠 第５層	口縁部破片	－	2.2	－	－	ナデ	ヨコハケ 口唇部キザミ	普通 石英少・白色粒子少	良好	にぶい橙 5YR6/3	
32	11	弥生土器 甕	環濠 第５層	口縁部破片	－	4.3	－	－	ヨコハケ	ハケ 口唇部キザミ	普通 白色粒子多	良好	橙 5YR7/6	
32	12	弥生土器 甕	環濠 第５層	口縁部破片	－	5.0	－	－	ナデ	ハケ 口唇部キザミ	普通 白色・黒色粒子少	良好	にぶい褐 7.5YR6/3	
32	13	弥生土器 甕	環濠 第５層	口縁部破片	－	2.0	－	－	ナデ	ハケ 口唇部キザミ	普通　石英・ 長石・白色粒子	良好	にぶい橙 2.5YR6/4	
32	14	弥生土器 甕	環濠 第５層	口縁部破片	－	2.0	－	－	ナデ	口唇部キザミ	普通 長石・白色粒子	良好	にぶい橙 2.5YR6/4	
32	15	弥生土器 甕	環濠 第５層	口縁部破片	－	2.9	－	－	ナデ	ハケ 口唇部キザミ	普通 長石・白色粒子	良好	にぶい橙 2.5YR6/4	
32	16	弥生土器 甕	環濠 第５層	胴部破片	－	6.3	－	－	ヨコハケ	タテハケ 後磨消線文	普通 白色粒子	良好	橙 5YR7/6	磨消線文甕
32	17	弥生土器 甕	環濠 第５層	胴部破片	－	5.9	－	－	ヨコハケ	タテハケ後磨消線文	普通 白色・赤色粒子	良好	橙 5YR7/6	磨消線文甕

図版番号	挿図番号	種別 器種	出土遺構 出土位置	残存部位	口径 (cm)	器高 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	内面技法	外面技法	胎土	焼成	色調	備考
32	18	弥生土器 甕	環濠 第５層	胴部破片	－	6.7	－	－	ナデ	ハケ	普通 白色粒子多	良好	褐灰 10YR4/1	横位羽状文甕
32	19	弥生土器 甕	環濠 第５層	胴部破片	－	5.5	－	－	ナデ	ハケ	普通 白色粒子多	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	横位羽状文甕
32	20	弥生土器 甕	環濠 第５層	胴部破片	－	8.2	－	－	ナデ	ヨコハケ	普通 白色粒子多	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	
32	21	弥生土器 甕	環濠 第５層	胴部破片	－	5.3	－	－	ナデ	ハケ	普通 白色・赤色粒子	良好	にぶい橙 7.5YR6/4	横位羽状文甕
32	22	弥生土器 甕	環濠 第５層	胴部破片	－	6.3	－	－	ナデ	ハケ	普通 白色粒子多	良好	褐灰 10YR4/1	
32	23	弥生土器 甕	環濠 第５層	胴部破片	－	5.5	－	－	ナデ	条痕文？	普通　石英・長石・ 白色・黒色粒子少	良好	橙 2.5YR6/6	
33	1	弥生土器 壺	環濠 第６層	ほぼ完形	8.0	37.2	20.3	6.5	摩滅	タテミガキ後ナデ 口縁～胴部 沈線区画・刺突文・縄文	普通　雲母・石英・長石・ 輝石・赤色粒子・粗砂粒	良好	にぶい橙 7.5YR7/3	底部網代痕 外面はにぶい橙 5YR6/4
33	2	弥生土器 壺	環濠 第６層	ほぼ完形	6.4	24.0	15.2	4.4	ナデ	ナデ 口縁部貼付文・縄文 肩部沈線区画・刺突文	普通　雲母多・ 白色・赤色粒子少	良好	灰褐 5YR6/2	外面はにぶい赤褐 5YR5/4
33	3	弥生土器 壺	環濠 第６層	口縁～頸部片	9.0	12.7	－	－	輪積痕顕著 指頭圧痕有	ナデ・沈線区画・縄文	普通　雲母少・石英・ 長石・輝石・赤色粒子	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	環濠底面直上から出土
33	4	弥生土器 壺	環濠 第６層	口縁～頸部片	(6.2)	6.7	－	－	ナデ	櫛描文後沈線文 口唇部ハケ後ナデ・キザミ	普通　輝石少・ 白色・赤色粒子	良好	にぶい褐 7.5YR6/3	外面はにぶい橙 7.5YR6/4
33	5	弥生土器 壺	環濠 第６層	頸部片	－	7.1	－	－	ナデ	ナデ・沈線区画・ 貼付文・縄文	やや粗　雲母少・ 白色粒子・粗砂粒多	普通	にぶい黄橙 10YR6/3	環濠底面直上から出土
33	6	弥生土器 壺	環濠 第６層	胴部片	－	16.3	23.7	－	ナデ 指頭圧痕有	タテミガキ・ナデ 沈線区画・ 貼付文・縄文・赤彩	普通　雲母多・ 白色・赤色粒子少	良好	灰褐 5YR6/2	外面はにぶい赤褐 5YR5/4
33	7	弥生土器 壺	環濠 第６層	胴部片	－	15.0	－	－	摩滅	タテハケ	普通　雲母・ 白色・赤色・黒色粒子多	普通	にぶい黄橙 10YR7/2	
33	8	弥生土器 壺	環濠 第６層	底部片	－	8.2	－	7.1	指頭圧痕有	指頭圧痕有	普通　雲母・石英多・ 長石・輝石・赤色粒子	良好	褐灰 5YR4/1	外面はにぶい橙 5YR6/4 環濠底面直上から出土
34	1	弥生土器 壺	環濠 第６層	胴部破片	－	3.7	－	－	ナデ	沈線区画・縄文	普通　雲母多・石英多・ 白色・赤色粒子多	良好	明赤褐 2.5YR5/8	
34	2	弥生土器 壺	環濠 第６層	胴部破片	－	4.0	－	－	ナデ	沈線区画	普通　雲母多・ 長石多・白色粒子多	良好	橙 5YR7/6	
34	3	弥生土器 壺	環濠 第６層	胴部破片	－	4.3	－	－	ナデ	沈線区画・縄文	普通　雲母・ 白色・赤色粒子	良好	浅黄橙 7.5YR8/6	
34	4	弥生土器 壺	環濠 第６層	胴部破片	－	2.8	－	－	ナデ	沈線区画・縄文	普通　雲母多・ 長石多・白色粒子多	良好	にぶい橙 5YR7/4	
34	5	弥生土器 壺	環濠 第６層	胴部破片	－	11.7	－	－	ナデ	沈線区画・縄文	普通　雲母多・ 長石多・白色粒子多	良好	にぶい橙 5YR7/4	
34	6	弥生土器 壺	環濠 第６層	頸部破片	－	3.1	－	－	ナデ	沈線区画・貼付文・刺突文	普通 雲母多・白色粒子多	良好	褐灰 7.5YR4/1	
34	7	弥生土器 壺	環濠 第６層	胴部破片	－	2.3	－	－	ナデ	沈線区画・縄文	普通　雲母多・ 白色・赤色粒子多	良好	橙 2.5YR6/8	
34	8	弥生土器 壺	環濠 第６層	胴部破片	－	3.2	－	－	ナデ	沈線区画・縄文	普通　雲母多・長石多・ 白色・赤色粒子多	良好	橙 5YR7/6	
34	9	弥生土器 甕	環濠 第６層	口縁～胴部片	(28.6)	14.7	－	－	ヘラナデ後ナデ 口唇部キザミ	タテハケ　口唇部ハケ後キザミ 胴部ハケ後磨消線文	普通　輝石・ 白色・赤色粒子	良好	にぶい橙 5YR6/4	磨消線文甕外面煤付着
34	10	弥生土器 甕	環濠 第６層	口縁部片	(29.2)	5.2	－	－	ヘラナデ 口唇部キザミ	タテハケ 口唇部ハケ後キザミ	普通　角閃石・ 白色・赤色粒子	良好	にぶい橙 7.5YR6/4	磨消線文甕　外面煤付着 外面は灰褐 7.5YR4/2
34	11	弥生土器 甕	環濠 第６層	口縁部破片	－	3.5	－	－	ナデ	ハケ 口唇部キザミ	普通・雲母 長石・白色粒子	良好	橙 2.5YR6/6	
34	12	弥生土器 甕	環濠 第６層	口縁部破片	－	2.2	－	－	ナデ	口唇部キザミ	普通・雲母 長石・白色粒子	良好	橙 2.5YR7/6	
34	13	弥生土器 甕	環濠 第６層	胴部破片	－	6.9	－	－	ナデ	ハケ	普通 白色粒子少	良好	橙 2.5YR7/6	

図版番号	挿図番号	種別 器種	出土遺構 出土位置	残存部位	口径 (cm)	器高 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	内面技法	外面技法	胎土	焼成	色調	備考
34	14	弥生土器 甕	環濠 第６層	胴部破片	－	4.5	－	－	ヨコハケ	ハケ	普通 白色粒子	良好	浅黄橙 7.5YR8/6	
34	15	弥生土器 甕	環濠 第６層	胴部破片	－	3.1	－	－	ナデ	ハケ	普通・雲母 長石・白色粒子	良好	橙 2.5YR7/8	
34	16	弥生土器 甕	環濠 第６層	胴部破片	－	4.0	－	－	ナデ	ハケ	普通・雲母 長石・白色粒子	良好	橙 2.5YR7/6	
34	17	弥生土器 甕	環濠 第６層	胴部破片	－	3.1	－	－	ナデ	ハケ	普通・雲母 長石・白色粒子	良好	赤橙 10YR6/8	
38	1	弥生土器 甕	３号土坑 覆土	口縁部破片	－	5.0	－	－	ナデ	口唇部キザミ	普通 白色・黒色粒子少	良好	黄橙 7.5YR7/8	
38	2	弥生土器 甕	４号土坑 覆土	口縁部破片	－	3.0	－	－	ナデ	口唇部キザミ	普通 白色粒子	良好	橙 2.5YR7/6	
38	3	弥生土器 壺	１号土坑列 覆土	口縁部破片	－	3.4	－	－	ナデ	沈線区画・貼付文・縄文	普通 雲母多・白色粒子多	普通	にぶい黄橙 10YR6/4	
38	4	弥生土器 壺	１号土坑列 覆土	胴部破片	－	4.5	－	－	ナデ	沈線区画・刺突文・縄文	普通 雲母・白色粒子	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	
38	5	弥生土器 壺	１号土坑列 覆土	胴部破片	－	2.4	－	－	ナデ	沈線区画・縄文	普通 雲母・白色粒子	良好	浅黄橙 7.5YR8/6	
39	1	弥生土器 壺	遺構面直上	口縁部片	(26.4)	6.2	－	－	摩滅	ケズリ 口唇部縄文	普通 白色・黒色粒子多	普通	淡橙 5YR8/4	内外面とも摩滅
39	2	弥生土器 壺	遺構面直上	口縁部片	(24.8)	5.2	－	－	摩滅	ケズリ 口唇部縄文	普通 白色・黒色粒子多	普通	淡橙 5YR8/4	内外面とも摩滅
39	3	弥生土器 壺	包含層	口縁部片	(28.3)	5.8	－	－	摩滅	ケズリ 口唇部縄文	普通 白色・黒色粒子多	普通	淡橙 5YR8/4	内外面とも摩滅
39	4	弥生土器 壺	遺構面直上	底部片	－	5.0	－	(13.3)	ヨコハケ	タテハケ	普通　石英多・長石・輝石・ 白色・赤色粒子・粗砂粒多	普通	橙 7.5YR7/6	底部木葉痕 外面は浅黄橙 7.5YR8/4
39	5	弥生土器 壺	包含層	底部片	－	2.1	－	(7.0)	ハケ	摩滅	普通 白色・黒色粒子	普通	浅黄橙 7.5YR8/3	
39	6	弥生土器 壺	包含層	底部片	－	4.3	－	(6.7)	摩滅	摩滅	普通 白色・赤色粒子	普通	明赤灰 2.5YR7/1	外面は橙 2.5YR7/6
39	7	弥生土器 壺	包含層	底部片	－	1.6	－	(6.0)	摩滅	摩滅	普通 白色・黒色粒子	やや不良	橙 5YR8/4	
39	8	弥生土器 壺	遺構面直上	底部片	－	1.7	－	7.0	摩滅	摩滅	普通 白色・黒色粒子	普通	浅黄橙 7.5YR8/4	
39	9	弥生土壺 器	遺構面直上	底部片	－	1.9	－	(7.0)	摩滅	摩滅	普通 白色粒子	普通	赤灰 2.5YR5/1	外面は淡赤橙 2.5YR7/3 内外面とも摩滅
39	10	弥生土器 壺	環濠 直上包含層	胴部破片	－	7.1	－	－	ナデ	沈線区画・縄文	普通　雲母・ 長石・白色粒子	良好	橙 7.5YR7/6	
39	11	弥生土器 壺	遺構面直上	胴部破片	－	6.5	－	－	ナデ	沈線区画・縄文	普通　雲母多・ 長石多・白色粒子多	良好	灰黄 2.5YR7/2	
39	12	弥生土器 台付甕	包含層	胴部片	－	2.5	－	－	摩滅	摩滅	普通 白色粒子多	やや不良	橙 5YR7/6	
39	13	弥生土器 台付甕	遺構面直上	脚部片	－	2.7	－	－	摩滅	摩滅	やや粗　石英・ 白色粒子・粗砂粒	やや不良	橙 2.5YR7/6	
39	14	弥生土器 台付甕	遺構面直上	脚部片	－	2.9	－	－	摩滅	摩滅	やや粗 白色粒子	不良	橙 2.5YR7/6	
39	15	弥生土器 台付甕	包含層	脚部片	－	2.6	－	－	摩滅	摩滅	普通 白色・赤色粒子多	普通	橙 5YR6/6	
39	16	弥生土器 台付甕	包含層	脚部片	－	1.7	－	－	摩滅	ハケ	普通 白色粒子多	やや不良	橙 5YR7/6	
39	17	弥生土器 台付甕	包含層	脚部片	－	2.9	－	－	摩滅	摩滅	やや粗 石英・白色・黒色粒子	やや不良	橙 5YR7/6	
39	18	弥生土器 台付甕	包含層	脚部片	－	2.0	－	－	摩滅	摩滅	普通 白色粒子多	やや不良	橙 5YR7/6	

図版番号	挿図番号	種別 器種	出土遺構 出土位置	残存部位	口径 (cm)	器高 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	内面技法	外面技法	胎土	焼成	色調	備考
39	19	弥生土器 甕	遺構面直上	口縁部破片	－	2.9	－	－	ナデ	口唇部キザミ	普通 白色粒子多	良好	橙 5YR7/6	
39	20	弥生土器 甕	遺構面直上	口縁部破片	－	4.0	－	－	ナデ	口唇部キザミ	普通 白色粒子	良好	浅黄橙 7.5YR8/6	
39	21	弥生土器 甕	環濠 直上包含層	口縁部破片	－	3.0	－	－	ナデ	口唇部キザミ	普通 白色粒子多	良好	にぶい橙 5YR7/4	
39	22	弥生土器 甕	包含層	口縁部破片	－	3.0	－	－	ナデ	口唇部キザミ	普通 白色・黒色粒子少	良好	橙 2.5YR6/8	
41	1	土師器 台付甕	包含層	脚部片	－	2.0	－	－	摩滅	摩滅	密　雲母・長石・ 白色粒子多	良好	橙 5YR7/6	S字甕
41	2	土師器 高坏	包含層	坏部片	－	2.2	－	－	摩滅	摩滅	普通 長石・白色粒子	良好	にぶい赤褐 5YR4/4	
41	3	土師器 高坏	遺構面直上	坏部片	－	3.3	－	－	摩滅	摩滅	普通　石英 白色・赤色粒子	良好	明赤褐 5YR5/6	
41	4	土師器 高坏	遺構面直上	坏～脚部片	－	5.3	－	－	摩滅	摩滅	普通 石英・白色粒子	やや不良	橙 2.5YR6/8	
41	5	土師器 高坏	遺構面直上	坏～脚部片	－	2.4	－	－	摩滅	摩滅	普通 白色粒子・粗砂粒	やや不良	橙 5YR7/6	
41	6	土師器 高坏	遺構面直上	脚部片	－	3.0	－	－	摩滅	摩滅	普通 白色・赤色粒子多	やや不良	橙 2.5YR7/8	
41	7	土師器 高坏	包含層	脚部片	－	1.7	－	－	摩滅	摩滅	普通　石英・長石・ 白色粒子	やや不良	橙 5YR7/6	
41	8	土師器 高坏	遺構面直上	脚部片	－	3.0	－	－	摩滅	摩滅	普通 白色粒子多	やや不良	橙 2.5YR6/8	
41	9	土師器 高坏	遺構面直上	脚部片	－	2.5	－	－	摩滅	摩滅	普通 白色粒子多	やや不良	黄橙 7.5YR7/8	
41	10	土師器 高坏	遺構面直上	脚部片	－	2.5	－	－	摩滅	摩滅	普通 白色粒子	やや不良	橙 5YR7/8	
41	11	土師器 高坏	遺構面直上	脚部片	－	4.5	－	－	摩滅	摩滅	普通 白色粒子	普通	橙5YR6/8	
41	12	土師器 高坏	遺構面直上	脚部片	－	7.0	－	－	摩滅	摩滅	普通 白色粒子多	やや不良	橙 5YR7/8	脚部の軸
41	13	土師器 高坏	遺構面直上	脚部片	－	6.0	－	－	摩滅	ミガキ痕僅か	密 長石・白色粒子	良好	橙 5YR6/8	
41	14	土師器 高坏	遺構面直上	脚部片	－	4.0	－	－	摩滅	赤彩	普通 白色・赤色粒子多	良好	淡橙 5YR8/4	透孔3孔
41	15	土師器 高坏	遺構面直上	脚部片	－	3.0	－	－	摩滅	摩滅	普通 白色・赤色粒子多	やや不良	淡橙 5YR8/4	透孔有
41	16	土師器 坩	遺構面直上	底部片	－	1.5	－	3.6	摩滅	摩滅	普通 白色・赤色粒子多	やや不良	橙 7.5YR7/8	
41	17	須恵器 蓋	包含層	口縁部片	(9.4)	1.8	(10.6)	－	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰 7.5Y5/1	
41	18	須恵器 蓋	遺構面直上	口縁部片	(9.0)	1.2	(10.8)	－	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰白 7.5Y7/1	
41	19	須恵器 蓋	遺構面直上	口縁部片	(10.4)	1.6	(11.6)	－	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰 7.5Y5/1	
41	20	須恵器 蓋	遺構面直上	口縁部片	(10.6)	1.5	(12.0)	－	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰 7.5Y5/1	
43	1	土師器 坏	1号溝状遺構 底面直上	ほぼ完形	12.0	4.8	－	6.7	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 体部・底部ヘラケズリ	普通 粗砂粒少	普通	浅黄橙 10YR8/6	
43	2	土師器 坏	1号溝状遺構 底面直上	口縁～底部片	(12.0)	3.4	－	(7.2)	ヨコナデ	摩滅	普通 白色粒子少	やや不良	橙 5YR7/6	
43	3	土師器 坏	1号溝状遺構 底面直上	口縁～体部片	(12.4)	3.0	－	－	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ後ヨコナデ	普通 白色粒子少	やや不良	にぶい橙 7.5YR7/4	

図版番号	挿図番号	種別 器種	出土遺構 出土位置	残存部位	口径 (cm)	器高 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	内面技法	外面技法	胎土	焼成	色調	備考
43	4	土師器 坏	1号溝状遺構 覆土上層	底部片	－	2.7	－	(7.3)	ヨコナデ	ヘラケズリ後ヨコナデ	普通 白色粒子多	良好	橙 5YR6/6	
43	5	土師器 坏	1号溝状遺構 底面直上	底部片	－	1.4	－	(4.1)	ヨコナデ	ヨコナデ	普通　石英・長石・ 白色粒子	良好	橙 2.5YR7/6	
43	6	土師器 坏	1号溝状遺構 底面直上	底部片	－	1.1	－	(6.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	普通　石英・長石・ 白色粒子	普通	橙 2.5YR7/8	
43	7	土師器 有台坏	1号溝状遺構 覆土上層	底部片	－	1.0	－	(7.2)	摩滅	摩滅	普通 白色粒子	良好	橙 5YR6/6	
43	8	土師器 高坏	1号溝状遺構 底面直上	脚部片	－	3.0	－	－	摩滅	摩滅	普通 長石・白色粒子	普通	赤10R5/8	
43	9	土師器 鍋	1号溝状遺構 底面直上	口縁部破片	－	3.7	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	やや粗　石英・長石・ 角閃石・赤色粒子やや多	良好	にぶい赤褐 2.5YR5/4	
43	10	須恵器 坏	1号溝状遺構 底面直上	体～底部片	－	2.7	－	5.8	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケズリ	密 白色粒子	堅緻	灰 7.5Y6/1	
43	11	須恵器 坏	1号溝状遺構 底面直上	体～底部片	－	1.8	－	(4.6)	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケズリ	密 白色・黒色粒子	堅緻	灰 7.5Y6/1	
43	12	須恵器 有台坏	1号溝状遺構 底面直上	底部片	－	1.3	－	(9.6)	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子	良好	灰 N4/	
43	13	須恵器 有台坏	1号溝状遺構 底面直上	底部片	－	1.4	－	(10.4)	ヨコナデ	ヘラケズリ後ヨコナデ	密 白色・黒色粒子	堅緻	灰 7.5Y6/1	
43	14	須恵器 盞	1号溝状遺構 底面直上	口縁部片	(16.3)	3.3	－	－	ヨコナデ	ヘラケズリ後ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰 白N7/	
43	15	須恵器 盞	1号溝状遺構 第1層	口縁部片	(12.9)	2.1	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰 白N7/	
43	16	須恵器 盞	1号溝状遺構 底面直上	摘み部片	－	1.7	－	－	ヨコナデ	ヘラケズリ後ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰 5Y6/1	
43	17	須恵器 壺	1号溝状遺構 覆土	底部片	－	2.0	－	(7.6)	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色・黒色粒子	堅緻	灰白 2.5Y7/1	内面に自然釉付着
44	1	土師器 坏	2号溝状遺構 第1層	底部片	－	1.5	－	(5.5)	ヨコナデ	ヘラケズリ後ヨコナデ	普通 石英・白色粒子	良好	橙 5YR6/6	
44	2	須恵器 坏	2号溝状遺構 第1層	口縁～体部片	(14.4)	5.7	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰 7.5Y5/1	
44	3	須恵器 甕	2号溝状遺構 底面直上	口縁部破片	－	3.3	－	－	ヨコナデ	沈線文・櫛描文	密 白色粒子少	堅緻	黒褐 2.5Y3/1	
44	4	灰釉陶器 埦	2号溝状遺構 底面直上	底部片	－	1.7	－	5.2	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色・黒色粒子	堅緻	灰白 2.5Y8/1	釉は灰オリーブ 5Y6/2
44	5	灰釉陶器 埦	2号溝状遺構 覆土	底部片	－	3.0	－	6.9	ヨコナデ	ヨコナデ	密　白色・黒色粒子・ 粗砂粒少	堅緻	灰白 2.5Y8/1	釉はオリーブ黄 5Y6/3
48	1	土師器 坏	3号溝状遺構 底面直上	ほぼ完形	14.6	4.0	－	8.0	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 体部・底部摩滅	普通 白色粒子少	普通	橙 7.5YR6/8	
48	2	土師器 坏	3号溝状遺構 底面直上	ほぼ完形	13.6	4.3	13.8	10.6	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 体部・底部ヘラケズリ	普通 白色粒子少	良好	黄橙 7.5YR7/8	
48	3	土師器 坏	3号溝状遺構 底面直上	口縁～底部片	(13.6)	3.7	－	(7.0)	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ 後ヨコナデ 底部ヘラケズリ	普通 白色粒子少	普通	橙 7.5YR7/6	
48	4	土師器 坏	3号溝状遺構 底面直上	口縁～底部片	(12.9)	2.9	－	(8.6)	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 石英・白色粒子少	やや 不良	橙 7.5YR7/6	
48	5	土師器 坏	3号溝状遺構 覆土上層	口縁～底部片	(14.9)	3.2	－	(10.0)	ヨコナデ	ヘラケズリ後ヨコナデ	普通　石英・長石・ 白色粒子・粗砂粒	普通	橙 7.5YR7/6	
48	6	土師器 坏	3号溝状遺構 底面直上	口縁～底部片	(16.0)	3.7	－	(11.0)	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 体部・底部ヘラケズリ後ヨコナデ	粗 長石・白色粒子多	脆弱	赤 10R5/8	
48	7	土師器 坏か皿	3号溝状遺構 覆土上層	口縁～体部片	(14.4)	2.2	－	－	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ後ヨコナデ	普通 白色粒子少	普通	橙 7.5YR7/6	
48	8	土師器 坏か皿	3号溝状遺構 底面直上	口縁～体部片	(14.4)	2.9	－	－	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ後ヨコナデ	普通 石英・白色粒子	普通	橙 2.5YR7/6	

図版番号	挿図番号	種別 器種	出土遺構 出土位置	残存部位	口径 (cm)	器高 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	内面技法	外面技法	胎土	焼成	色調	備考
48	9	土師器 坏	3号溝状遺構 底面直上	口縁～体部片	(10.2)	2.5	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 白色粒子	やや不良	橙 2.5R6/8	
48	10	土師器 坏	3号溝状遺構 底面直上	口縁～体部片	(14.6)	3.5	－	－	摩滅	ヨコナデ	普通 石英・白色粒子	やや不良	黄橙 7.5YR8/8	
48	11	土師器 坏	3号溝状遺構 覆土上端	口縁～体部片	(17.9)	4.0	－	－	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 体部ハケ後ヨコナデ	やや粗　石英・ 白色・赤色粒子	やや不良	赤 10R4/8	
48	12	土師器 坏	3号溝状遺構 底面直上	口縁～体部片	(14.0)	4.4	－	－	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 体部ハケ後ヨコナデ	粗 白色・黒色粒子多	やや不良	赤黒 10R2/1	外面は赤色 10R4/6
48	13	土師器 坏	3号溝状遺構 底面直上	口縁～体部片	(13.1)	3.3	－	－	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ後ヨコナデ	普通 白色粒子少	普通	橙 7.5YR7/6	
48	14	土師器 坏	3号溝状遺構 覆土上端	口縁～体部片	(15.5)	3.8	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	普通　石英・長石・ 白色粒子	やや不良	橙 7.5YR7/6	内外面とも摩滅
48	15	土師器 坏	3号溝状遺構 底面直上	口縁～体部片	(13.8)	4.0	－	－	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ後ヨコナデ	普通 白色粒子少	普通	浅黄橙 7.5YR8/6	
48	16	土師器 坏	3号溝状遺構 底面直上	口縁部片	(11.1)	1.5	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 白色粒子	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	
48	17	土師器 坏	3号溝状遺構 底面直上	底部片	－	1.5	－	(6.4)	摩滅	摩滅	普通 白色・赤色粒子	やや不良	浅黄橙 7.5R8/6	
48	18	土師器 高坏	3号溝状遺構 覆土上層	坏部片	－	1.9	－	－	摩滅	摩滅	普通 白色粒子少	普通	淡橙 5YR8/4	
48	19	土師器 甕	3号溝状遺構 底面直上	ほぼ完形	20.0	30.0	26.9	8.0	口縁部ヨコナデ 胴部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ 胴部タテハケ	やや粗 白色・赤色粒子	良好	赤橙 10R6/8	底部木葉痕　駿東型甕 内外面とも摩滅
48	20	土師器 甕	3号溝状遺構 覆土上端	ほぼ完形	15.2	20.2	18.0	8.5	口縁部ハケ後ヨコナデ 胴部ヨコハケ	摩滅	普通　石英・長石・ 白色粒子	やや不良	橙 2.5YR7/6	
49	1	土師器 甕	3号溝状遺構 覆土上端	口縁～胴部片	(21.8)	10.2	－	－	口縁部ヨコナデ 胴部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ 胴部タテハケ後ミガキ	普通　輝石・白色・ 赤色粒子多・粗砂粒	普通	橙 5YR6/6	駿東型甕
49	2	土師器 甕	3号溝状遺構 底面直上	口縁～胴部片	(20.4)	13.9	－	－	口縁部ヨコナデ 胴部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ 胴部タテハケ	普通　石英少・長石・白 色・赤色粒子・粗砂粒	良好	にぶい赤褐 5YR5/4	駿東型甕外面は明赤褐 5YR5/6
49	3	土師器 甕	3号溝状遺構 底面直上	口縁～胴部片	(20.4)	12.3	(23.0)	－	口縁部ヨコナデ 胴部ヨコハケ	口縁部タテハケ後ヨコナデ 胴部タテハケ	やや粗　石英少・長石多・ 白色・赤色粒子・粗砂粒	良好	にぶい赤褐 5YR4/3	駿東型甕 外面はにぶい赤褐 5YR4/4
49	4	土師器 甕	3号溝状遺構 底面直上	口縁～胴部片	20.0	13.5	28.2	－	口縁部ヨコナデ 胴部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ 胴部タテハケ	普通　長石・白色・ 赤色粒子・粗砂粒	良好	明赤褐 5YR5/6	駿東型甕
49	5	土師器 甕	3号溝状遺構 底面直上	胴～底部	－	4.7	－	(6.6)	ヨコハケ	タテハケ	普通 長石・赤色粒子	良好	明褐 7.5YR5/6	駿東型甕 外面は黒褐 7.5YR2/2
49	6	土師器 甕	3号溝状遺構 底面直上	胴～底部	－	11.7	－	7.6	ヨコハケ	タテハケ	普通　長石多・ 白色・赤色粒子	普通	にぶい赤褐 5YR5/4	駿東型甕 外面煤付着
49	7	土師器 甕	3号溝状遺構 底面直上	胴～底部	－	5.0	－	7.6	ヨコハケ	タテハケ	普通　長石・ 白色・赤色粒子	良好	にぶい赤褐 5YR4/4	底部木葉痕 駿東型甕
49	8	土師器 甕	3号溝状遺構 底面直上	底部片	－	5.1	－	(9.4)	ヨコハケ	ヨコミガキ	普通 白色・赤色粒子・粗砂粒	良好	明赤褐 5YR5/6	駿東型甕
49	9	土師器 甕	3号溝状遺構 底面直上	底部片	－	2.5	－	(7.2)	ヨコハケ	ヨコナデ	普通 白色粒子・粗砂粒多	良好	灰褐 5YR5/2	底部木葉痕僅か　駿東型甕 外面は明赤褐　5YR5/6
49	10	土師器 甕	3号溝状遺構 底面直上	底部片	－	1.5	－	(8.3)	摩滅	摩滅	普通 白色・赤色粒子少	良好	明褐灰 7.5YR7/1	外面は浅黄橙 7.5YR8/4
50	1	土師器 甕	3号溝状遺構 底面直上	口縁～胴部片	(23.2)	8.4	－	－	口縁部ヨコナデ 胴部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ 胴部ヨコハケ	普通　石英少・ 長石・赤色粒子	良好	にぶい赤褐 5YR4/4	駿東型甕
50	2	土師器 甕	3号溝状遺構 覆土上端	口縁部片	(22.0)	4.7	－	－	ヨコハケ後ヨコナデ	タテハケ後ヨコナデ	普通　石英・輝石・ 白色・赤色粒子・粗砂粒	普通	にぶい橙 7.5YR5/3	駿東型甕 外面はにぶい橙 7.5YR6/4
50	3	土師器 甕	3号溝状遺構 底面直上	口縁部片	(22.2)	4.8	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	普通　石英少・長石・ 角閃石・輝石・赤色粒子	良好	赤褐 2.5YR4/6	駿東型甕
50	4	土師器 甕	3号溝状遺構 底面直上	口縁部片	(21.5)	3.8	－	－	ヨコナデ	ハケ後ヨコナデ	普通　石英・長石・ 白色・赤色粒子	普通	にぶい橙 2.5YR6/4	駿東型甕
50	5	土師器 甕	3号溝状遺構 覆土上端	頸～胴部片	－	3.9	－	－	ヨコハケ	ハケ後ヨコナデ	普通　長石・白色・ 赤色粒子	良好	橙 2.5YR6/6	駿東型甕

図版番号	挿図番号	種別 器種	出土遺構 出土位置	残存部位	口径 (cm)	器高 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	内面技法	外面技法	胎土	焼成	色調	備考
50	6	土師器 鉢	3号溝状遺構 底面直上	ほぼ完形	13.4	6.0	－	7.2	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ後ヨコナデ	粗 白色粒子多	普通	橙 .5YR6/6	底部木葉痕
50	7	土師器 ミニチュア	3号溝状遺構 覆土上端	口縁～体部片	(8.6)	3.0	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ 体部指頭圧痕有	普通 白色・赤色粒子	普通	橙 7.5YR6/1	手捏ね土器か？
50	8	土師器 ミニチュア	3号溝状遺構 覆土上層	口縁～体部片	(8.4)	3.2	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ 体部指頭圧痕有	普通 白色・赤色粒子	普通	褐灰 5YR6/1	手捏ね土器か？
50	9	須恵器 坏	3号溝状遺構 底面直上	ほぼ完形	14.6	4.7	－	6.0	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケズリ	密 白色・黒色粒子	堅緻	灰白 7.5Y7/1	
50	10	須恵器 坏	3号溝状遺構 覆土上端	ほぼ完形	15.0	4.5	－	5.9	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケズリ	密 白色粒子	良好	灰 .5Y6/1	
50	11	須恵器 坏	3号溝状遺構 底面直上	ほぼ完形	14.2	4.7	－	6.2	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケズリ	密 白色・黒色粒子	堅緻	灰 7.5Y4/1	
50	12	須恵器 坏	3号溝状遺構 底面直上	口縁～底部片	(13.2)	3.8	－	7.4	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケズリ	密 白色・黒色粒子	良好	灰白 7.5Y7/1	外面摩滅
50	13	須恵器 坏	3号溝状遺構 底面直上	口縁～底部片	(14.0)	4.3	－	5.7	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケズリ	密 白色・黒色粒子・粗砂粒	堅緻	灰 7.5Y6/1	
50	14	須恵器 坏	3号溝状遺構 底面直上	口縁～体部片	(9.8)	3.9	(10.0)	－	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰 7.5Y5/1	
50	15	須恵器 坏	3号溝状遺構 底面直上	口縁～体部片	(12.2)	3.0	－	－	ヨコナデ	ヘラケズリ後ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰白 N7/	
50	16	須恵器 坏	3号溝状遺構 底面直上	体～底部片	－	2.1	－	(7.8)	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケズリ	密 白色・黒色粒子	堅緻	灰 7.5Y5/1	
50	17	須恵器 有台坏	3号溝状遺構 底面直上	ほぼ完形	14.6	3.6	－	10.4	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケズリ	密 白色・黒色粒子	堅緻	灰 7.5Y6/1	
50	18	須恵器 有台坏	3号溝状遺構 底面直上	ほぼ完形	15.0	4.1	－	11.2	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケズリ	密 白色・黒色粒子	堅緻	灰 7.5Y6/1	外面は灰 7.5Y5/1
50	19	須恵器 有台坏	3号溝状遺構 覆土上端	ほぼ完形	15.0	4.0	－	10.8	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケズリ	密 白色粒子	堅緻	灰 7.5Y5/1	
51	1	須恵器 有台坏	3号溝状遺構 底面直上	完形	12.6	4.9	－	8.6	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケズリ	密 白色粒子・粗砂粒	堅緻	灰 7.5Y6/1	助宗窯産か？
51	2	須恵器 有台坏	3号溝状遺構 底面直上	ほぼ完形	15.8	4.1	－	11.1	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケズリ	密 白色粒子	堅緻	灰 7.5Y6/1	
51	3	須恵器 有台坏	3号溝状遺構 底面直上	口縁～底部片	(15.2)	4.0	－	(10.7)	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケズリ	密 白色粒子	堅緻	灰 N4/	
51	4	須恵器 有台坏	3号溝状遺構 底面直上	口縁～底部片	(13.8)	4.4	－	(11.2)	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケズリ	密 白色・黒色粒子	堅緻	灰 7.5Y6/1	
51	5	須恵器 有台坏	3号溝状遺構 底面直上	口縁～底部片	(14.1)	3.8	－	10.5	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケズリ	密 白色粒子	堅緻	灰 7.5Y6/1	
51	6	須恵器 有台坏	3号溝状遺構 底面直上	口縁～底部片	(14.8)	4.0	－	10.7	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケズリ	密 白色粒子	堅緻	灰 7.5Y5/1	
51	7	須恵器 有台坏	3号溝状遺構 底面直上	口縁～底部片	(14.0)	3.4	－	(11.0)	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケズリ	密 白色・黒色粒子少	堅緻	灰 7.5Y6/1	
51	8	須恵器 有台坏	3号溝状遺構 底面直上	口縁～底部片	(13.4)	4.3	－	9.1	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケズリ	密 白色・黒色粒子	堅緻	灰白 7.5Y7/1	外面は灰 7.5Y4/1
51	9	須恵器 有台坏	3号溝状遺構 底面直上	口縁～底部片	(15.4)	4.1	－	(10.4)	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケズリ	密 白色・黒色粒子・粗砂粒	堅緻	灰 7.5Y6/1	
51	10	須恵器 有台坏	3号溝状遺構 底面直上	口縁～底部片	(13.6)	3.5	－	(10.6)	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケズリ	密 白色・黒色粒子・粗砂粒	堅緻	灰 7.5Y6/1	
51	11	須恵器 有台坏	3号溝状遺構 底面直上	口縁～底部片	(15.2)	4.6	－	(9.2)	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰 7.5Y6/1	外面は灰 7.5Y4/1
51	12	須恵器 有台坏	3号溝状遺構 底面直上	底部片	－	2.0	－	(8.1)	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子	良好	灰 N4/	
51	13	須恵器 高坏	3号溝状遺構 底面直上	坏部片	(15.8)	4.8	－	(4.1)	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色・黒色粒子・粗砂粒	堅緻	灰 7.5Y6/1	

図版番号	挿図番号	種別 器種	出土遺構 出土位置	残存部位	口径 (cm)	器高 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	内面技法	外面技法	胎土	焼成	色調	備考
51	14	須恵器 甕	3号溝状遺構 底面直上	ほぼ完形	15.2	3.7	－	－	ヨコナデ	ヘラケズリ後ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰 N6/	
51	15	須恵器 甕	3号溝状遺構 底面直上	完形	18.2	4.5	－	－	ヨコナデ	ヘラケズリ後ヨコナデ	密 白色粒子・粗砂粒	堅緻	灰白 N7/	
51	16	須恵器 甕	3号溝状遺構 底面直上	ほぼ完形	16.3	4.4	－	－	ヨコナデ	ヘラケズリ後ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰白 5Y7/1	内面に墨書「十」2箇所
51	17	須恵器 甕	3号溝状遺構 覆土上端	口縁部片	(15.4)	2.3	－	－	ヨコナデ	ヘラケズリ後ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰 N6/	
51	18	須恵器 壺	3号溝状遺構 覆土上端	頸部片	－	12.6	(5.2)	－	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子・粗砂粒	堅緻	灰 7.5Y6/1	
53	1	土師器 坏	5号溝状遺構 底面直上	ほぼ完形	15.5	4.5	－	9.4	ヨコナデ	口縁部・底部ヨコナデ 体部ヘラケズリ後ヨコナデ	普通 白色粒子少	普通	橙 7.5YR7/6	
53	2	土師器 坏	5号溝状遺構 底面直上	ほぼ完形	16.0	4.5	－	9.0	摩滅	口縁部ヨコナデ 体部・底部ヘラケズリ後ヨコナデ	普通 白色粒子少	普通	橙 7.5YR6/8	
53	3	土師器 坏	5号溝状遺構 第1層	口縁～底部片	(16.6)	7.3	－	(11.0)	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 体部・底部ヘラケズリ後ヨコナデ	普通 長石・白色粒子少	良好	橙 2.5YR6/8	
53	4	土師器 坏	5号溝状遺構 底面直上	口縁～底部片	(13.4)	4.8	－	(10.4)	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 体部・底部ヘラケズリ後ヨコナデ	普通 白色粒子多	脆弱	黄橙 7.5YR7/8	
53	5	土師器 坏	5号溝状遺構 第1層	口縁～底部片	(13.6)	3.5	－	(9.0)	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ後ヨコナデ	普通 白色粒子	普通	浅黄橙 10YR8/4	黒色土器
53	6	土師器 坏	5号溝状遺構 底面直上	口縁～底部片	(15.0)	4.1	－	(13.0)	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 体部・底部ヘラケズリ後ヨコナデ	普通 白色粒子	やや 不良	橙 5YR7/6	
53	7	土師器 坏	5号溝状遺構 底面直上	底部片	－	1.5	－	(8.2)	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 白色粒子	良好	灰白 7.5YR8/2	内黒土器
53	8	土師器 甕	5号溝状遺構 第2層	口縁部片	(21.0)	4.3	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 長石・白色粒子	良好	にぶい赤褐 2.5YR5/4	駿東型甕
53	9	土師器 甕	5号溝状遺構 底面直上	頸～胴部片	－	5.9	－	－	ヨコハケ	ヨコハケ	やや粗　石英・長石・ 角閃石・輝石・白色粒子	良好	にぶい褐 7.5YR6/3	外面は橙 7.5YR6/6
53	10	土師器 甕	5号溝状遺構 底面直上	胴～底部	－	4.8	－	(9.8)	ヨコハケ	タテハケ	やや粗　雲母・石英少・ 長石・白色・赤色粒子多	良好	にぶい赤褐 5YR4/4	駿東型甕
53	11	土師器 甕	5号溝状遺構 底面直上	胴～底部	－	5.4	－	(9.6)	ヨコハケ	タテハケ	普通　石英少・長石多・ 白色・赤色粒子	普通	褐 7.5YR4/6	底部木葉痕駿東型甕
53	12	土師器 甕	5号溝状遺構 底面直上	底部片	－	3.1	－	(10.8)	摩滅	摩滅	普通　石英・長石・ 白色・赤色粒子・粗砂粒	良好	明赤褐 5YR5/6	底部木葉痕僅か
53	13	土師器 甕	5号溝状遺構 底面直上	底部片	－	2.2	－	(7.8)	ヨコハケ	ヨコナデ	普通 白色・赤色粒子・粗砂粒	良好	にぶい橙 5YR6/3	底部木葉痕僅か 外面は明赤褐　5YR5/6
53	14	土師器 甕	5号溝状遺構 底面直上	底部片	－	1.3	－	(8.4)	ハケ	摩滅	普通 白色粒子	普通	赤橙 5YR4/6	底部木葉痕僅か
53	15	土師器 甕	5号溝状遺構 第1層	底部片	－	2.0	－	(8.4)	摩滅	摩滅	普通　石英・ 白色・赤色粒子多	やや 不良	淡橙 5YR8/3	底部木葉痕 外面は黒褐 5YR3/1
53	16	須恵器 坏	5号溝状遺構 第1層	口縁～底部片	(13.8)	4.0	－	(7.3)	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケズリ	密 白色粒子	堅緻	灰黄 2.5Y7/2	
53	17	須恵器 坏	5号溝状遺構 第1層	体～底部片	－	2.9	－	(5.6)	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケズリ	密 白色粒子	堅緻	灰黄 2.5Y7/2	
54	1	須恵器 有台坏	5号溝状遺構 底面直上	口縁～底部片	(13.2)	4.0	－	10.3	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケズリ	密 白色粒子・粗砂粒多	堅緻	灰白 7.5Y7/1	外面は灰 7.5Y6/1
54	2	須恵器 有台坏	5号溝状遺構 底面直上	体～底部片	－	3.0	－	9.0	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケズリ	密 白色・黒色粒子	堅緻	灰白 7.5Y7/1	外面は灰 7.5Y5/1
54	3	須恵器 有台坏	5号溝状遺構 覆土	体～底部片	－	3.2	－	(11.6)	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子・粗砂粒	良好	灰白 7.5Y7/1	外面は灰 7.5Y4/1
54	4	須恵器 有台坏	5号溝状遺構 底面直上	底部片	－	1.3	－	10.0	摩滅	摩滅	密 黒色粒子少	堅緻	灰白 7.5Y7/1	
54	5	須恵器 有台坏	5号溝状遺構 底面直上	底部片	－	1.2	－	(8.8)	ヨコナデ	ヘラケズリ	密 白色粒子・粗砂粒	堅緻	灰 7.5Y5/1	

図版番号	挿図番号	種別 器種	出土遺構 出土位置	残存部位	口径 (cm)	器高 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	内面技法	外面技法	胎土	焼成	色調	備考
54	6	須恵器 甕	5号溝状遺構 底面直上	口縁部片	(15.2)	3.2	—	—	ヨコナデ	ヘラケズリ後ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	明青灰 5PB7/1	
54	7	須恵器 甕	5号溝状遺構 覆土	口縁部片	(15.2)	2.6	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰白 7.5Y1/8	
57	1	土師器 甕	6号溝状遺構 覆土	底部片	—	2.2	—	(7.4)	ヨコナデ	タテハケ	普通　石英少・長石・ 角閃石・輝石少・白色粒子	良好	橙 5YR6/6	
57	2	灰釉陶器 埦	6号溝状遺構 覆土	底部片	—	1.5	—	(6.6)	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色・黒色粒子	良好	灰白 5Y7/1	
57	3	灰釉陶器 埦	9号溝状遺構 覆土	底部片	—	1.3	—	(7.5)	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色・黒色粒子少	堅緻	灰白 10YR8/1	釉は灰白 7.5Y8/1
74	1	須恵器 壷	6号土坑 覆土	胴～底部片	—	3.9	—	(3.9)	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子・粗砂粒	堅緻	灰白 2.5Y7/1	
74	2	須恵器甕	6号土坑 覆土	胴部破片	—	8.6	—	—	同心円タタキ	平行タタキ	密 白色粒子少	堅緻	黄灰 2.5Y5/1	
74	3	土師器 坏	7号土坑 底面直上	底部片	—	0.8	—	(5.6)	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 白色粒子やや多	良好	橙 2.5YR6/8	底部糸切痕僅か
74	4	須恵器 坏	7号土坑 底面直上	体～底部片	—	1.8	—	(4.0)	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケズリ	密 白色粒子・粗砂粒	堅緻	灰 7.5Y5/1	
74	5	須恵器 蓋	7号土坑 底面直上	口縁部破片	—	4.7	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰白 N7/	
74	6	須恵器 有台坏	8号土坑 第1層	底部片	—	2.0	—	(11.2)	摩滅	ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰白 7.5Y7/1	外面は灰 7.5Y4/1
74	7	土師器 坩	3号土坑列 底面直上	底部片	—	2.0	—	3.6	摩滅	摩滅	普通　石英・長石・ 白色粒子やや多	普通	浅黄橙 7.5YR8/4	
74	8	土師器 甕	6号土坑列 覆土	口縁部片	(20.4)	3.3	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	やや粗　石英・長石・ 角閃石・輝石・赤色粒子	良好	橙 7.5YR6/8	外面煤付着
75	1	土師器 坏	遺構面直上	ほぼ完形	11.7	4.9	12.3	11.7	ヨコミガキ	口縁部ヨコナデ 体部・底部ヘラケズリ後ヨコナデ	普通 粗砂粒少	普通	橙 5YR7/8	
75	2	土師器 坏	遺構面直上	口縁～底部片	(13.6)	4.0	—	(8.4)	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 体部・底部ヘラケズリ後ヨコナデ	普通 白色粒子多	脆弱	赤褐 5YR4/8	
75	3	土師器 坏	遺構面直上	口縁～底部片	(13.0)	3.6	—	(10.8)	ヨコナデ ミガキ痕僅か	ヨコナデ ミガキ痕僅か	密 白色粒子少	良好	明褐灰 5YR7/1	黒色土器
75	4	土師器 坏	包含層	口縁～底部片	(14.6)	3.6	—	(8.2)	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 白色・黒色粒子少	普通	浅黄橙 7.5YR8/4	黒色土器
75	5	土師器 坏	包含層	口縁～底部片	(11.9)	2.9	—	(8.4)	摩滅	摩滅	普通 白色粒子少	やや 不良	淡橙 5YR8/4	
75	6	土師器 坏か皿	遺構面直上	口縁～底部片	(8.0)	1.5	—	(5.5)	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 白色・赤色粒子	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	底部糸切痕僅か かわらけか？
75	7	土師器 坏	遺構面直上	口縁～体部片	(14.4)	3.3	—	—	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	普通 白色粒子少	普通	浅黄橙 7.5YR8/4	
75	8	土師器 坏	遺構面直上	口縁～体部片	(15.0)	3.4	—	—	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ後ヨコナデ	普通 白色粒子少	普通	橙 2.5YR6/6	
75	9	土師器 坏か皿	遺構面直上	口縁～体部片	(15.0)	2.1	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 石英・白色粒子	普通	橙 5YR6/8	
75	10	土師器 坏	包含層	口縁～体部片	(16.4)	3.2	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	普通　石英・ 長石・白色粒子	普通	浅黄橙 7.5YR8/6	
75	11	土師器 坏	遺構面直上	口縁～体部片	(12.8)	4.0	—	—	ヨコナデ	摩滅	普通　雲母・ 白色・赤色粒子	やや 不良	浅黄橙 10YR8/3	
75	12	土師器 坏	包含層	口縁～体部片	(13.0)	2.5	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 白色粒子僅か	やや 不良	灰白 7.5YR8/1	内外面とも摩滅
75	13	土師器 坏	包含層	口縁～体部片	(14.0)	2.9	—	—	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ後ヨコナデ	普通　石英・ 長石・白色粒子	良好	橙 5YR7/6	
75	14	土師器 坏	包含層	口縁～体部片	(14.7)	3.2	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 白色粒子・粗砂粒	良好	橙 5YR7/6	

図版番号	挿図番号	種別 器種	出土遺構 出土位置	残存部位	口径 (cm)	器高 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	内面技法	外面技法	胎土	焼成	色調	備考
75	15	土師器 坏	遺構面直上	口縁～体部片	(14.2)	2.9	－	－	摩滅	口縁部ヨコナデ 体部摩滅	普通 白色・赤色粒子少	不良	浅黄橙 10YR8/3	
75	16	土師器 坏	遺構面直上	口縁～体部片	(14.4)	3.1	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 白色粒子	普通	褐灰 7.5YR6/1	
75	17	土師器 坏	遺構面直上	口縁～体部片	(15.2)	2.8	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	粗 長石・白色粒子	やや 不良	にぶい橙 7.5YR6/4	
75	18	土師器 坏	包含層	口縁～体部片	(14.2)	3.1	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 白色粒子やや多	良好	橙 5YR7/6	
75	19	土師器 坏	包含層	口縁部片	(13.7)	2.5	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 白色粒子	良好	赤 10R5/6	
75	20	土師器 坏	包含層	口縁部片	(13.1)	1.9	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 白色粒子	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	
75	21	土師器 坏	遺構面直上	口縁部片	(12.0)	2.5	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 長石・白色粒子	良好	明赤褐 2.5YR5/6	
75	22	土師器 坏	包含層	口縁部片	(12.2)	1.8	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 白色粒子	普通	橙 2.5YR7/6	
75	23	土師器 坏	包含層	口縁部片	(11.0)	2.8	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 石英・白色粒子	良好	橙 5YR6/6	
75	24	土師器 椀か坏	遺構面直上	底部片	－	1.8	－	6.8	ヨコナデ	ヨコナデ	普通　石英・ 白色・赤色粒子	良好	赤褐 5YR4/8	底部糸切痕僅か
75	25	土師器 坏	遺構面直上	底部片	－	2.2	－	(8.1)	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 雲母・白色粒子	良好	灰白 7.5YR8/2	黒色土器 内外面とも摩滅
75	26	土師器 坏	包含層	底部片	－	2.8	－	(7.2)	ヨコナデ	ヘラケズリ後ヨコナデ	普通 石英・白色粒子多	良好	明赤褐 2.5YR5/6	底部糸切痕僅か
75	27	土師器 坏	包含層	底部片	－	2.4	－	(7.6)	ヨコナデ	ヘラケズリ後ヨコナデ	普通　石英・長石・ 白色粒子	良好	明赤褐 5YR5/6	底部糸切痕僅か
75	28	土師器 坏	遺構面直上	底部片	－	1.6	－	(9.2)	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 石英・白色粒子少	やや 不良	浅黄橙 7.5YR8/4	底部糸切痕僅か
75	29	土師器 坏	遺構面直上	底部片	－	1.6	－	(10.4)	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 白色粒子	良好	橙 2.5YR6/8	
75	30	土師器 坏	遺構面直上	底部片	－	1.9	－	(9.9)	摩滅	摩滅	普通 長石・白色粒子	良好	橙 5YR6/6	
75	31	土師器 坏	包含層	底部片	－	1.3	－	(8.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 白色粒子	普通	橙 5YR6/8	内外面とも摩滅
75	32	土師器 坏	遺構面直上	底部片	－	1.9	－	(7.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 白色粒子	良好	にぶい赤褐 2.5YR5/4	
75	33	土師器 坏	遺構面直上	底部片	－	2.0	－	(7.4)	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 白色・赤色粒子	良好	明赤褐 2.5YR5/6	
75	34	土師器 坏	遺構面直上	底部片	－	2.0	－	(6.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 白色粒子	良好	橙 5YR6/8	
75	35	土師器 坏	遺構面直上	底部片	－	1.5	－	(7.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 白色粒子やや多	良好	にぶい橙 5YR6/4	
75	36	土師器 坏	包含層	底部片	－	1.4	－	(7.2)	ヨコナデ	ヘラケズリ後ヨコナデ	普通 石英・白色粒子	良好	橙 2.5YR6/6	
75	37	土師器 坏	包含層	底部片	－	1.5	－	(5.9)	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 白色粒子少	普通	橙 5YR7/6	内外面とも摩滅
75	38	土師器 坏	包含層	底部片	－	1.0	－	(6.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 白色粒子	良好	橙 5YR7/6	
75	39	土師器 坏	包含層	底部片	－	1.5	－	(4.9)	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 角閃石・白色粒子	良好	にぶい橙 7.5R6/4	
75	40	土師器 有台坏	包含層	口縁～底部片	(14.0)	4.5	－	(7.0)	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ 後ヨコナデ 底部ヘラケズリ	普通　石英・長石・ 白色粒子	普通	にぶい橙 2.5YR6/4	
75	41	土師器 有台坏	遺構面直上	底部片	－	2.0	－	8.5	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 白色粒子少	良好	橙 5YR7/8	高台部は赤橙色 10YR6/8

図版番号	挿図番号	種別 器種	出土遺構 出土位置	残存部位	口径 (cm)	器高 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	内面技法	外面技法	胎土	焼成	色調	備考
75	42	土師器 有台坏	包含層	底部片	－	1.0	－	(10.2)	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 白色粒子	良好	褐灰 5YR4/1	
76	1	土師器 有台坏	包含層	底部片	－	1.9	－	(13.1)	摩滅	摩滅	普通 白色粒子	普通	橙 5YR7/6	
76	2	土師器 有台坏	包含層	底部片	－	1.3	－	(6.6)	ヨコナデ	ヘラケズリ後ヨコナデ	普通 石英・白色粒子少	良好	橙 5YR7/6	
76	3	土師器 有台坏	包含層	底部片	－	1.2	－	(4.6)	摩滅	摩滅	密 白色粒子少	不良	浅黄橙 10YR8/3	
76	4	土師器 甕	包含層	口縁～胴部片	(17.0)	4.7	－	－	口縁部ヨコナデ 胴部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ 胴部タテハケ	普通　長石・白色・ 赤色粒子・粗砂粒	良好	明赤褐 5YR5/6	駿東型甕
76	5	土師器 甕	包含層	口縁～胴部片	(16.4)	4.8	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	駿東型甕
76	6	土師器 甕	包含層	口縁～胴部片	(15.6)	6.6	－	－	口縁部ヨコナデ 胴部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ 胴部タテハケ	普通　長石・角閃石・ 輝石少・白色粒子・粗砂粒	良好	明赤褐 5YR5/6	駿東型甕 外面煤付着
76	7	土師器 甕	包含層	口縁部片	(24.8)	3.6	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 長石・白色粒子	良好	にぶい橙 5YR7/4	駿東型甕
76	8	土師器 甕	表土	口縁部片	(21.6)	5.0	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	普通　長石・白色・ 赤色粒子・粗砂粒	良好	橙 7.5YR6/6	駿東型甕
76	9	土師器 甕	遺構面直上	口縁部片	(20.6)	4.9	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	普通　石英少・長石多・ 角閃石・輝石・白色粒子少	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	駿東型甕
76	10	土師器 甕	遺構面直上	口縁部片	(17.4)	6.5	－	－	ヨコナデ	タテハケ後ヨコナデ	普通　長石多・角閃石・ 輝石少・白色粒子多	良好	にぶい橙 5YR7/4	駿東型甕
76	11	土師器 甕か堝	包含層	口縁部片	(21.3)	1.9	－	－	摩滅	摩滅	普通 長石・白色粒子多	やや不良	浅黄橙 10YR8/3	伊勢型堝か？
76	12	土師器 甕か堝	包含層	口縁部片	(17.5)	3.0	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	普通　石英・ 長石・白色粒子少	良好	浅黄橙 7.5YR8/3	伊勢型堝か？
76	13	土師器 甕	遺構面直上	口縁部片	(13.4)	4.0	－	－	摩滅	ヨコナデ	普通　長石・角閃石・ 輝石・白色粒子・粗砂粒	良好	橙 7.5YR7/6	内外面とも摩滅
76	14	土師器 甕	遺構面直上	胴～底部片	－	9.2	－	7.8	ヨコハケ	タテハケ	普通　長石・白色・ 赤色粒子多	良好	明褐 7.5YR5/6	駿東型甕　外面煤付着 外面は明褐 2.5YR5/6
76	15	土師器 甕	遺構面直上	胴～底部片	－	6.9	－	(8.0)	ヨコナデ	タテハケ	普通 白色・赤色粒子・粗砂粒	良好	浅黄橙 7.5YR8/3	底部木葉痕僅か
76	16	土師器 甕	包含層	底部片	－	1.7	－	(5.2)	摩滅	摩滅	普通　石英・長石少・ 角閃石・輝石多・白色粒子	やや不良	浅黄 2.5Y7/3	
76	17	土師器 甕	包含層	底部片	－	4.0	－	6.2	指頭圧痕有	ヨコナデ	やや粗　石英・長石・ 白色・赤色粒子少	普通	にぶい黄 2.5Y6/3	外面煤付着 内外面とも摩滅
76	18	土師器 甕	包含層	底部片	－	1.9	－	(6.0)	摩滅	摩滅	普通　長石・白色・ 赤色粒子・粗砂粒	良好	赤褐 5YR4/6	
76	19	土師器 甕	遺構面直上	底部片	－	2.3	－	(7.6)	摩滅	摩滅	やや粗　石英・長石・ 白色粒子・粗砂粒	普通	浅黄橙 7.5YR8/6	外面は橙 5YR6/8
76	20	土師器 甕か壺	遺構面直上	底部片	－	2.7	－	(11.0)	摩滅	摩滅	普通 粗砂粒	不良	橙 2.5YR7/6	底部木葉痕 内外面とも摩滅
77	1	土師器 甕	包含層	底部片	－	3.0	－	(13.8)	摩滅	摩滅	普通　雲母少・石英・ 長石・白色・赤色粒子	良好	橙 7.5YR7/6	
77	2	土師器 甕	遺構面直上	底部片	－	2.2	－	(10.4)	ハケ	摩滅	やや粗　石英・長石多・ 角閃石・輝石・白色粒子多	普通	黒褐 10YR3/1	底部木葉痕僅か 外面はにぶい黄橙 10YR7/4
77	3	土師器 甕	包含層	底部片	－	1.6	－	(10.0)	指頭圧痕有	摩滅	普通　雲母・石英・長石・ 角閃石・輝石・赤色粒子	普通	赤褐 5YR4/6	外面煤付着
77	4	土師器 甕	包含層	底部片	－	1.9	－	(9.8)	摩滅	タテハケ	普通　長石・白色・ 赤色粒子・粗砂粒	普通	橙 7.5YR6/6	底部木葉痕僅か 外面はにぶい黄橙 10YR6/4
77	5	土師器 甕	包含層	底部片	－	1.4	－	(9.4)	ハケ	摩滅	普通 白色粒子	普通	橙 2.5YR6/6	底部木葉痕僅か　駿東型甕 外面は赤灰 2.5YR4/1
77	6	土師器 甕	遺構面直上	底部片	－	2.2	－	(7.2)	摩滅	摩滅	普通　長石・白色・ 赤色粒子少	良好	にぶい橙 5YR7/4	

図版番号	挿図番号	種別 器種	出土遺構 出土位置	残存部位	口径（cm）	器高（cm）	最大径（cm）	底径（cm）	内面技法	外面技法	胎土	焼成	色調	備考
77	7	土師器 甕	包含層	底部片	－	4.6	－	(8.0)	ヨコハケ	摩滅	普通　長石・角閃石・輝石少・白色・赤色粒子	良好	明赤褐 5YR5/6	駿東型甕　外面は明褐 7.5YR5/6 内外面とも摩滅
77	8	土師器 甕	遺構面直上	底部片	－	2.9	－	(8.4)	ヨコハケ	タテハケ	やや粗 長石多・白色粒子	普通	浅黄 2.5YR8/3	底部木葉痕僅か 外面は黒褐 2.5YR3/1
77	9	土師器 甕	遺構面直上	底部片	－	2.6	－	(7.6)	ヨコハケ	タテミガキ	普通　石英少・長石少・白色・赤色粒子多	良好	にぶい橙 5YR7/3	底部木葉痕僅か 外面はにぶい橙 5YR6/3
77	10	土師器 甕	遺構面直上	底部片	－	3.9	－	(7.4)	ヨコハケ	ハケ後ヨコナデ	普通 石英・長石・白色粒子多	良好	明褐灰 5YR7/2	底部木葉痕僅か　駿東型甕 外面は橙 5YR7/6
77	11	土師器 甕	遺構面直上	底部片	－	3.1	－	(7.6)	ヨコハケ	摩滅	普通　長石・白色・赤色粒子・粗砂粒	良好	にぶい赤褐 5YR5/4	
77	12	土師器 甕	包含層	底部片	－	2.8	－	(7.4)	ハケ	ハケ	普通 白色粒子多	普通	橙 5YR7/6	底部木葉痕 駿東型甕
77	13	土師器 甕	包含層	底部片	－	2.0	－	(4.6)	摩滅	摩滅	密　長石少・白色粒子・粗砂粒	良好	暗赤褐 5YR3/6	
77	14	土師器 甕	遺構面直上	底部片	－	1.6	－	(7.0)	摩滅	摩滅	普通　雲母・石英少・長石・白色・赤色粒子少	良好	橙 2.5YR6/8	外面は浅黄橙 7.5YR8/4
77	15	土師器 甕	包含層	底部片	－	2.2	－	(6.6)	ヨコハケ	タテハケ	普通 石英・長石・白色粒子	良好	橙 7.5YR6/8	底部木葉痕僅か
77	16	土師器 甕	遺構面直上	底部片	－	1.8	－	(7.0)	ハケ	摩滅	普通 長石・白色粒子	普通	にぶい橙 5YR7/4	底部木葉痕僅か
77	17	土師器 甕	遺構面直上	底部片	－	3.9	－	(8.0)	摩滅	タテハケ	普通 白色・赤色粒子・粗砂粒	良好	浅黄橙 10YR8/3	外面はにぶい黄橙 10YR7/3
77	18	土師器 甕	包含層	底部片	－	1.5	－	(7.6)	摩滅	摩滅	普通 白色粒子少	やや不良	橙 2.5YR7/8	
77	19	土師器 甕	包含層	底部片	－	2.2	－	(8.4)	摩滅	摩滅	普通 白色粒子少	やや不良	橙 2.5YR7/6	底部木葉痕僅か
77	20	土師器 鉢	遺構面直上	口縁～底部片	(14.8)	5.4	－	(10.4)	摩滅	摩滅	普通 白色粒子	脆弱	橙 2.5YR7/8	底部木葉痕
77	21	土師器 塝	包含層	口縁部破片	－	4.5	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	やや粗　石英・長石・角閃石・赤色粒子やや多	良好	にぶい赤褐 2.5YR5/4	
77	22	土師器 塝	遺構面直上	口縁部破片	－	3.2	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	やや粗　長石・角閃石・白色粒子やや多	良好	明赤褐 2.5YR5/6	
77	23	土師器 塝	包含層	口縁部破片	－	5.3	－	－	ヨコナデ	タテハケ後ヨコナデ	やや粗 白色・赤色粒子多	良好	にぶい橙 5YR6/4	
77	24	土師器 塝	包含層	口縁部破片	－	4.1	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 角閃石・白色・赤色粒子	良好	にぶい橙 2.5YR6/4	
77	25	土師器 塝	包含層	口縁部破片	－	4.2	－	－	ヨコナデ	タテハケ後ヨコナデ	やや粗 白色粒子多	良好	にぶい橙 2.5YR7/4	外面は褐灰 5YR4/1
77	26	土師器 塝	包含層	口縁部破片	－	4.3	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	やや粗 長石・白色・赤色粒子	良好	橙 2.5YR6/6	外面は赤灰 2.5YR4/1
77	27	土師器 塝	遺構面直上	口縁部破片	－	2.1	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	やや粗　角閃石・白色・赤色粒子やや多	良好	にぶい赤褐 5YR5/4	
77	28	土師器 塝	包含層	口縁部破片	－	4.8	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	粗　角閃石・白色・赤色粒子多	良好	橙 2.5YR7/6	
77	29	土師器 塝	遺構面直上	口縁部破片	－	3.2	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	粗 角閃石・白色粒子多	良好	淡赤橙 2.5YR7/4	外面は赤灰 2.5YR4/1
77	30	土師器 羽釜	包含層	口縁部片	(23.0)	2.0	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 白色粒子少	良好	浅黄橙 10YR8/3	
78	1	須恵器 坏	遺構面直上	ほぼ完形	12.2	3.2	－	5.2	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケズリ	密 白色粒子	堅緻	灰白 7.5Y7/1	
78	2	須恵器 坏	遺構面直上	口縁～底部片	(10.8)	3.5	－	4.8	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケズリ	密 白色・黒色粒子	堅緻	灰 7.5Y6/1	
78	3	須恵器 坏	遺構面直上	口縁～体部片	(16.0)	2.6	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰 5Y6/1	

図版番号	挿図番号	種別 器種	出土遺構 出土位置	残存部位	口径 (cm)	器高 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	内面技法	外面技法	胎土	焼成	色調	備考
78	4	須恵器 坏	遺構面直上	口縁～体部片	(13.6)	3.1	－	－	ヨコナデ	ヘラケズリ後ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰白 N8/	
78	5	須恵器 坏	遺構面直上	口縁～体部片	(12.1)	3.4	－	－	ヨコナデ	ヘラケズリ後ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰 N6/	
78	6	須恵器 坏	遺構面直上	口縁～体部片	(13.0)	2.6	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰 N6/	
78	7	須恵器 坏	遺構面直上	底部片	－	1.5	－	(6.2)	ヨコナデ	ヘラケズリ後ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰白 N7/	
78	8	須恵器 坏	包含層	底部片	－	1.2	－	(4.4)	ヨコナデ	ヘラケズリ	密 白色・黒色粒子	堅緻	灰 7.5Y6/1	
78	9	須恵器 坏	遺構面直上	底部片	－	1.6	－	(4.9)	ヨコナデ	ヘラケズリ	密 白色粒子	堅緻	灰 7.5Y6/1	
78	10	須恵器 坏	包含層	底部片	－	1.1	－	4.9	ヨコナデ	ヘラケズリ	密 白色粒子	堅緻	灰 7.5Y6/1	
78	11	須恵器 有台坏	遺構面直上	ほぼ完形	13.4	4.3	－	9.0	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケズリ	密 白色・黒色粒子少	堅緻	灰白 7.5Y7/1	
78	12	須恵器 有台坏	表土	ほぼ完形	14.2	4.2	－	10.1	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケズリ	密 白色粒子少	堅緻	灰白 7.5Y7/1	
78	13	須恵器 有台坏	包含層	口縁～底部片	(15.2)	4.8	－	(9.8)	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケズリ	密 白色・黒色粒子	堅緻	灰白 7.5Y7/1	
78	14	須恵器 有台坏	遺構面直上	口縁～底部片	(14.2)	4.1	－	(9.4)	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰白 7.5Y7/1	外面は灰 7.5Y5/1
78	15	須恵器 有台坏	遺構面直上	体～底部片	－	5.3	－	(11.4)	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケズリ	密 白色・黒色粒子	堅緻	灰 7.5Y5/1	
78	16	須恵器 有台坏	遺構面直上	底部片	－	2.0	－	(12.2)	ヨコナデ	ヘラケズリ後ヨコナデ	密 黒色粒子	堅緻	灰白 7.5Y7/1	
78	17	須恵器 有台坏	包含層	底部片	－	1.5	－	(11.8)	ヨコナデ	ヘラケズリ後ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰 7.5Y6/1	
78	18	須恵器 有台坏	表土	底部片	－	2.0	－	(11.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子	良好	灰白 5Y8/1	
78	19	須恵器 有台坏	遺構面直上	底部片	－	1.4	－	(11.8)	ヨコナデ	ヨコナデ	密 黒色粒子	堅緻	灰 7.5Y6/1	
78	20	須恵器 有台坏	包含層	底部片	－	1.5	－	(9.0)	ヨコナデ	ヘラケズリ後ヨコナデ	密 白色・黒色粒子	堅緻	灰 7.5Y6/1	
78	21	須恵器 有台坏	包含層	底部片	－	2.1	－	(8.2)	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰 5Y5/1	
78	22	須恵器 蓋	表土	ほぼ完形	16.2	4.0	－	－	ヨコナデ	ヘラケズリ後ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰 N6/	
78	23	須恵器 蓋	遺構面直上	口縁部片	(15.1)	1.9	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰 N6/	
78	24	須恵器 蓋	包含層	口縁部片	(15.4)	1.5	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰白 5Y7/1	外面に自然釉付着
78	25	須恵器 蓋	包含層	口縁部片	(15.5)	2.4	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰 5Y6/1	
78	26	須恵器 蓋	遺構面直上	口縁部片	(14.1)	2.6	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色・黒色粒子	堅緻	灰白 N7/	
78	27	須恵器 蓋	遺構面直上	摘み部片	－	1.5	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰白 N7/	
78	28	須恵器 甕	包含層	胴部破片	－	5.7	－	－	同心円タタキ	格子目タタキ	密 白色粒子	堅緻	黄灰 2.5Y5/1	
78	29	須恵器 甕	包含層	胴部破片	－	10.0	－	－	同心円タタキ	平行タタキ	密 白色粒子	堅緻	黄灰 2.5Y6/1	
78	30	須恵器 甕	遺構面直上	胴部破片	－	7.6	－	－	ヘラケズリのような削痕	平行タタキ	密 白色粒子少	堅緻	褐灰 10YR6/1	

図版番号	挿図番号	種別 器種	出土遺構 出土位置	残存部位	口径 (cm)	器高 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	内面技法	外面技法	胎土	焼成	色調	備考
79	1	須恵器 壺	遺構面直上	口縁～底部片	(8.4)	6.4	(12.8)	(6.8)	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰白 7.5Y6/1	
79	2	須恵器 壺	遺構面直上	頸部片	－	5.9	(7.4)	－	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色・黒色粒子	堅緻	灰白 7.5Y7/1	外面に自然釉付着
79	3	須恵器 鉢	遺構面直上	口縁部片	(17.4)	3.5	(20.0)	－	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子・粗砂粒	堅緻	灰 7.5Y5/1	外面に自然釉付着 鉄鉢
79	4	灰釉陶器 埦	遺構面直上	口縁～底部片	(14.5)	4.5	－	6.9	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ後ヨコナデ	密 白色・黒色粒子	堅緻	灰白 5Y8/1	釉は灰オリーブ 5Y6/2
79	5	灰釉陶器 埦	遺構面直上	底部片	－	1.8	－	7.4	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色・黒色粒子	堅緻	灰白 5Y8/1	釉はオリーブ黄 7.5Y6/3
79	6	灰釉陶器 埦？	表土	底部片	－	2.7	－	(7.2)	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子少	堅緻	灰白 10YR7/1	釉は灰白 7.5Y8/2
79	7	灰釉陶器 埦	包含層	底部片	－	2.3	－	(10.4)	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色・黒色粒子少	堅緻	灰白 2.5Y7/1	
79	8	灰釉陶器 埦	包含層	底部片	－	1.8	－	(6.6)	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色・黒色粒子少	堅緻	灰白 2.5Y8/1	釉は灰オリーブ 5Y5/2
79	9	灰釉陶器 埦	遺構面直上	底部片	－	2.0	－	(7.8)	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色・黒色粒子	良好	灰白 5Y7/1	
79	10	灰釉陶器 埦	包含層	底部片	－	1.5	－	(6.6)	ヨコナデ	ヨコナデ	密 黒色粒子少	良好	黄灰 2.5Y5/1	底部糸切痕僅か
79	11	灰釉陶器 皿	遺構面直上	口縁～底部片	(14.0)	2.8	－	6.6	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ後ヨコナデ	密 白色・黒色粒子	堅緻	灰白 2.5Y7/1	底部糸切痕僅か
79	12	緑釉陶器 埦？	遺構面直上	底部破片	－	0.5	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子少	堅緻	灰 5Y6/1	釉は灰オリーブ 7.5Y5/3
80	1	青磁 碗	包含層	口縁～体部片	(16.0)	4.7	－	－	無文	鏑蓮弁文	密 白色粒子	堅緻	灰白 7.5Y8/1	巻頭図版8－5 釉はオリーブ黄 7.5Y6/3
80	2	青磁 碗	包含層	底部片	－	2.7	－	(6.0)	劃花文	無文	密 白色粒子	堅緻	灰白 N8/	巻頭図版8－3 釉は明オリーブ灰 5GY7/1
80	3	青磁 碗	包含層	底部片	－	2.2	－	(5.0)	無文	鏑蓮弁文	密 白色粒子	堅緻	灰白 N8/	巻頭図版8－10 釉は明オリーブ灰 2.5GY7/1
80	4	青磁 碗	包含層	口縁部破片	－	4.4	－	－	劃花文	無文	密 白色粒子	堅緻	灰白 7.5Y8/1	巻頭図版8－2 釉は灰オリーブ 7.5Y6/2
80	5	白磁 碗	遺構面直上	体～底部片	－	3.9	－	(7.1)	無文	無文	密 白色粒子	堅緻	灰白 5Y8/2	巻頭図版8－13 釉は灰白 2.5Y8/2
80	6	瀬戸・美濃 緑釉小皿	包含層	口縁～底部片	(12.8)	2.2	－	(6.2)	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰白 5Y8/1	巻頭図版8－20 釉は灰オリーブ 7.5Y6/2
80	7	瀬戸・美濃 志野丸皿	21号溝状遺構 底面直上	口縁～底部片	(11.2)	2.1	－	(6.4)	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰白 5Y8/1	巻頭図版8－24
80	8	瀬戸・美濃 志野丸皿	包含層	体～底部片	－	1.7	－	(7.5)	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰白 5Y8/1	巻頭図版8－23
80	9	山茶碗 碗	包含層	口縁部破片	－	5.0	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	密　長石・ 白色粒子・粗砂粒	堅緻	褐灰 10Y6/1	
80	10	山茶碗 小皿	遺構面直上	口縁～底部片	(7.2)	1.6	－	(4.8)	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	青灰 5PB6/1	
80	11	山茶碗 小皿	遺構面直上	底部片	－	1.2	－	4.5	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	青灰 5PB6/1	底部糸切痕
80	12	常滑 甕	遺構面直上	口縁部片	(31.4)	5.7	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子多	堅緻	灰黄褐 10YR5/2	
80	13	渥美 甕	遺構面直上	底部片	－	5.7	－	(14.6)	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子・粗砂粒	堅緻	青灰 5PB6/1	
80	14	渥美 甕	遺構面直上	底部片	－	4.7	－	(15.6)	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰白 10YR8/1	
－	－	青磁 碗	表土	口縁部破片	－	2.8	－	－	劃花文	無文	密 白色・黒色粒子少	堅緻	灰白 5Y8/1	巻頭図版8－1 釉はオリーブ黄 7.5Y6/3

図版番号	挿図番号	種別 器種	出土遺構 出土位置	残存部位	口径 (cm)	器高 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	内面技法	外面技法	胎土	焼成	色調	備考
—	—	青磁 碗	池状遺構 覆土	口縁部破片	—	3.9	—	—	無文	鎬蓮弁文	密 白色粒子少	堅緻	灰白 2.5Y8/1	巻頭図版8－4 釉は明オリーブ灰 2.5GY7/1
—	—	青磁 碗	包含層	口縁部破片	—	3.0	—	—	無文	鎬蓮弁文	密 白色粒子少	堅緻	灰白 7.5Y7/1	巻頭図版8－6 釉はオリーブ灰 2.5GY5/1
—	—	青磁 碗	遺構面直上	口縁部破片	—	3.1	—	—	無文	鎬蓮弁文	密 白色粒子少	堅緻	灰白 7.5Y7/1	巻頭図版8－7 釉はオリーブ灰 2.5GY5/1
—	—	青磁 碗	包含層	口縁部破片	—	2.3	—	—	無文	鎬蓮弁文	密 白色粒子少	堅緻	灰白 5Y8/1	巻頭図版8－8 釉は明オリーブ灰 2.5GY7/1
—	—	青磁 碗	包含層	口縁部破片	—	1.8	—	—	無文	鎬蓮弁文	密 白色粒子少	堅緻	灰白 5Y8/1	巻頭図版8－9 釉は明緑灰 10GY7/1
—	—	青磁 碗	包含層	体部破片	—	3.3	—	—	無文	ヘラ描蓮弁文	密 白色粒子少	堅緻	灰白 7.5Y8/1	巻頭図版8－11 釉は灰オリーブ 7.5Y5/3
—	—	青磁 皿	包含層	口縁部破片	—	2.5	—	—	無文	無文	密 白色粒子少	堅緻	灰白 10Y8/1	巻頭図版8－12 釉はオリーブ灰 10Y5/2
—	—	白磁 碗	包含層	底部破片	—	2.1	—	—	無文	無文	密 白色粒子少	堅緻	灰白 7.5Y8/1	巻頭図版8－14 釉は灰白 2.5GY8/1
—	—	青白磁 梅瓶	池状遺構 覆土	胴部破片	—	4.5	—	—	ヨコナデ	櫛描沈線文	密 白色粒子少	堅緻	灰白 5Y8/1	巻頭図版8－15 釉は明緑灰 10GY8/1
—	—	染付 皿	21号溝状遺構 底面直上	底部破片	—	1.4	—	—	染付	染付	密 白色粒子少	堅緻	灰白 N8/	巻頭図版8－16 釉は灰白 2.5GY8/1
—	—	染付 皿	包含層	底部破片	—	0.8	—	—	染付	染付	密 白色粒子少	堅緻	灰白 5Y8/1	巻頭図版8－17 釉は灰白 2.5GY8/1
—	—	瀬戸・美濃 灰釉平碗	包含層	口縁部破片	—	3.0	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子少	堅緻	灰白 2.5Y7/1	巻頭図版8－18 釉はオリーブ黄 5Y6/3
—	—	瀬戸・美濃 灰釉丸皿	包含層	底部破片	—	1.5	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子少	堅緻	灰白 5Y8/2	巻頭図版8－19 釉は灰白 7.5GY8/2
—	—	瀬戸・美濃 灰釉丸皿	包含層	口縁部破片	—	2.3	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子少	堅緻	灰白 5Y8/1	巻頭図版8－21 釉は浅黄 5Y7/3
—	—	瀬戸・美濃 灰釉丸皿	包含層	口縁部破片	—	2.3	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子少	堅緻	灰白 5Y8/1	巻頭図版8－22 釉は浅黄 5Y7/4
—	—	瀬戸・美濃 志野丸皿	包含層	底部破片	—	1.0	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子少	堅緻	灰白 5Y8/2	巻頭図版8－25
—	—	瀬戸・美濃 灰釉直縁大皿	包含層	体部破片	—	1.3	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子・粗砂粒少	堅緻	灰白 5Y7/1	巻頭図版8－26 釉はオリーブ黄 5Y6/3
—	—	瀬戸・美濃 灰釉直縁大皿	包含層	体部破片	—	1.5	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子・粗砂粒少	堅緻	灰白 5Y7/1	巻頭図版8－27 釉は灰オリーブ 5Y5/3
—	—	瀬戸・美濃 灰釉盤	包含層	口縁部破片	—	1.5	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子少	堅緻	灰白 5Y8/2	巻頭図版8－28 釉は灰黄 2.5Y7/2
—	—	瀬戸・美濃 擂鉢	池状遺構 覆土	口縁部破片	—	1.7	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子少	堅緻	灰白 2.5Y7/1	巻頭図版8－29 釉は赤黒 5R2/1
—	—	瀬戸・美濃 擂鉢	包含層	胴部破片	—	4.3	—	—	ヨコナデ擂目有	ヨコナデ	密 白色粒子少	堅緻	灰白 2.5Y7/1	巻頭図版8－30 釉は褐灰 7.5YR4/1
83	1	陶器 皿	池状遺構 覆土	口縁～底部片	(14.4)	2.3	—	(8.2)	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子・粗砂粒少	堅緻	灰白 5Y8/1	釉は浅黄 5Y7/3
83	2	陶器 擂鉢	池状遺構 覆土下層	底部片	—	5.0	—	(10.6)	ヨコナデ擂目有	ヨコナデ	密 白色粒子・粗砂粒少	堅緻	灰白 10YR8/2	底部糸切痕僅か 釉は灰黄褐 10YR4/2
90	1	土師器 坏	13号溝状遺構 覆土上端	底部片	—	1.4	—	(5.8)	ヨコナデ	ヨコナデ	普通　石英・ 長石・白色粒子	普通	明赤褐 2.5YR5/8	
90	2	土師器 甕	13号溝状遺構 第1層	口縁～胴部片	(39.0)	6.3	—	—	口縁部ヨコナデ 胴部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ 胴部タテハケ	普通　石英・長石多・ 白色・赤色粒子・粗砂粒	良好	明褐 7.5YR5/6	外面は明赤褐 5YR5/6 外面煤付着
90	3	染付 碗	19号溝状遺構 覆土	体～底部片	—	4.0	—	(4.0)	無文	染付	密 白色粒子	堅緻	灰白 7.5Y8/2	
90	4	須恵器 壺	20号溝状遺構 覆土	底部片	—	1.9	—	(8.8)	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰白 7.5Y6/1	

図版番号	挿図番号	種別 器種	出土遺構 出土位置	残存部位	口径 (cm)	器高 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	内面技法	外面技法	胎土	焼成	色調	備考
90	5	陶器 碗か皿	20号溝状遺構 底面直上	底部片	－	2.7	－	(6.5)	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色・黒色粒子少	堅緻	灰白 5Y8/1	釉はオリーブ黄 5Y6/4
90	6	染付 碗	20号溝状遺構 底面直上	ほぼ完形	9.9	5.0	－	3.9	無文	染付	密 白色粒子	堅緻	灰白 10Y8/1	
90	7	染付 碗	20号溝状遺構 覆土	体～底部片	－	3.1	－	3.7	無文	染付	密 白色粒子	堅緻	灰白 10Y8/1	
90	8	染付 筒形碗	20号溝状遺構 覆土	口縁～底部片	(7.8)	5.4	－	(3.6)	染付	染付	密 白色粒子	堅緻	灰白 10Y8/1	
90	10	陶器 志野小皿	21号溝状遺構 覆土	口縁～体部片	(12.2)	1.5	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色・黒色粒子	堅緻	灰白 5Y8/1	釉は浅黄 5Y7/3
90	11	染付 碗	21号溝状遺構 底面直上	ほぼ完形	14.2	5.6	－	4.2	無文	体部染付	密 白色粒子	堅緻	灰白 7.5Y7/1	
90	12	染付 碗	21号溝状遺構 底面直上	口縁～底部片	(9.8)	5.0	－	(4.1)	無文	染付	密 白色粒子	堅緻	灰白 10Y8/1	
90	13	染付 碗	21号溝状遺構 底面直上	口縁～体部片	(12.2)	3.7	－	－	無文	体部染付	密 白色粒子	堅緻	灰白 10Y7/2	
90	14	染付 筒形碗	21号溝状遺構 底面直上	口縁～体部片	(7.6)	4.9	－	－	染付	染付	密 白色粒子	堅緻	灰白 10Y8/1	
90	15	陶器 碗か皿	36号土坑 覆土	口縁部片	(14.0)	2.2	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰白 2.5Y8/1	釉は淡黄 2.5Y8/3
90	16	灰釉陶器 埦	40号土坑 覆土	底部片	－	2.3	－	(7.2)	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色・黒色粒子少	堅緻	灰白 7.5Y7/2	釉は灰白 7.5Y7/2
91	1	陶器 丸碗？	遺構面直上	体～底部片	－	2.4	－	(4.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子少	堅緻	灰白 5YR8/1	釉は赤褐 5YR4/8
91	2	陶器 灯明皿	包含層	口縁～底部片	(7.8)	1.9	－	(3.9)	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰白 5YR8/1	釉は赤褐 5YR4/6
91	3	陶器 鉢	包含層	胴～底部片	－	5.9	－	(8.5)	ヨコナデ	ヨコナデ	密 白色粒子少	堅緻	灰白 2.5Y8/1	釉は明黄褐 2.5Y7/6
91	4	陶器 擂鉢	包含層	口縁部片	(34.2)	7.2	－	－	ヨコナデ 擂目有	ヨコナデ	密 白色粒子	堅緻	灰白 5YR8/1	釉は暗赤褐 5YR3/6
91	5	陶器 擂鉢	包含層	底部片	－	6.9	－	(14.0)	ヨコナデ 擂目有	ヨコナデ	密 白色粒子少	堅緻	灰白 10YR8/2	底部糸切痕 釉は黒褐 10YR2/2
91	6	陶器 擂鉢	包含層	底部片	－	5.2	－	(13.1)	ヨコナデ 擂目有	ヨコナデ	密 白色粒子・粗砂粒	堅緻	灰白 5YR8/1	底部糸切痕 釉は暗赤褐 5YR3/6
91	7	染付 碗	包含層	口縁～底部片	(11.2)	5.7	－	(4.0)	染付	無文	密 白色粒子	堅緻	オリーブ灰 10Y6/2	
91	8	染付 碗	包含層	口縁～底部片	(7.2)	5.6	－	(2.6)	染付	染付	密 白色粒子	堅緻	灰白 7.5Y8/1	
91	9	染付 小碗	表土	ほぼ完形	6.7	3.2	－	2.6	無文	染付	密 白色粒子	堅緻	灰白 10Y8/1	
91	10	染付 小碗	包含層	口縁～底部片	(7.8)	4.1	－	(2.0)	無文	染付	密 白色粒子	堅緻	灰白 10Y7/2	
91	11	染付 筒形碗	包含層	口縁～底部片	(7.3)	5.5	－	3.8	染付	染付	密 白色粒子	堅緻	灰白 10Y8/1	

第８表　出土土製品観察表

図版番号	挿図番号	器種名	出土遺構出土位置	残存長（cm）	残存厚（cm）	胎　　土	焼成	色調	備　　考
79	13	土錘	包含層	4.5	2.6	密 白色・黒色粒子	堅緻	明褐灰 7.5YR7/1	
91	12	丸瓦	包含層	5.0	1.4	普通 白色・赤色粒子少	良好	橙 7.5YR7/6	内面布目痕あり
91	13	瓦？	包含層	5.7	2.1	普通 白色粒子・粗砂粒少	普通	明黄褐 10YR6/6	内面タタキ

第９表　出土石器観察表

図版番号	挿図番号	器種名	出土遺構出土位置	石　　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備　　考
15	1	石鏃	１号溝状遺構 底面付近	黒曜石	1.80	1.40	0.30	0.5	信州産黒曜石
15	2	石核	包含層	赤玉石	1.95	1.35	1.35	3.4	伊豆産赤玉石
31	11	石鏃	環濠 第４層	ホルンフェルス	11.80	6.65	2.90	248.7	石材は富士川や 千本浜で採集可能
40	1	敲石	環濠 直上包含層	閃緑岩	14.85	7.90	4.60	848.5	
40	2	敲石	遺構面直上	細粒砂岩	10.80	7.85	5.20	607.7	
40	3	敲石	遺構面直上	中粒砂岩	10.85	5.50	3.05	242.7	
40	4	敲石	包含層	中粒砂岩	9.25	8.55	3.95	430.3	
40	5	敲石	遺構面直上	輝石安山岩	10.50	5.40	3.55	303.8	
57	4	敲石	１０号溝状遺構 底面直上	中粒砂岩	17.05	6.25	3.60	541.0	
90	9	凹石	２０号溝状遺構 覆土	軽石	11.90	9.60	5.90	165.2	
91	14	線刻礫	包含層	ホルンフェルス	9.20	7.55	3.80	316.4	石材は富士川や 千本浜で採集可能

第10表　出土木製品観察表

図版番号	挿図番号	器種名	出土遺構出土位置	樹　種　名	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	備　　考
34	18	用途不明 木製品	環濠 第６層	ヒノキ	13.0	8.3	2.5	
43	18	板状木製品	１号溝状遺構 底面直上	イヌマキ	41.7	8.0	3.5	
83	3	用途不明 木製品	池状遺構 覆土上層	クリ	6.7	5.3	0.9	赤色（10R5/8）の顔料 が片面に付着
83	4	又鍬状 木製品	池状遺構 覆土上層	アカマツまたは クロマツ（二葉マツ類）	29.9	14.0	3.3	

第11表　出土金属製品観察表

図版番号	挿図番号	器種名	出土遺構出土位置	材質	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備　　考
29	8	鉄鉾	環濠 第３層	鉄	6.2	0.9	0.3	9.9	茎部 木質付着
83	5	棒状銅製品	池状遺構 覆土	銅	7.6	0.6	0.4	5.7	煙管吸口の未成品？
91	15	煙管	遺構面直上	銅	3.6	1.1	1.1	2.9	雁首
91	16	煙管	包含層	銅	9.7	1.2	1.2	15.1	吸口

第12表　出土銭貨観察表

図版番号	挿図番号	銭名	出土遺構出土位置	書体	国名	初鋳年	材質	銭径（cm）	内径（cm）	孔径（cm）	銭厚（cm）	重量（g）
92	1	昭和十四年 カラス一銭	池状遺構 覆土	－	日本	1939年	アルミ	1.70	－	－	0.14	0.9
92	2	天聖元寶	包含層	真書	北宋	1023年	銅	2.45	2.20	0.70	0.13	1.8
92	3	熙寧元寶	包含層	真書	北宋	1068年	銅	2.40	2.10	0.75	0.12	2.1
92	4	元豊通寶	包含層	篆書	北宋	1078年	銅	2.40	2.00	0.75	0.12	1.8
92	5	寛永通寶（新寛永）	包含層	真書	日本	1668年	銅	2.30	2.10	0.65	0.09	1.9
92	6	寛永通寶（新寛永）	包含層	真書	日本	1668年	銅	2.30	2.10	0.65	0.09	1.9

第Ⅳ章　理化学的分析

第１節　自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

西通北遺跡は、愛鷹山と駿河湾とに挟まれた海岸平野に立地する。遺跡付近はかつて存在した大きな湿地帯であった浮島沼の東縁にあたると考えられる。この湿地帯は、縄文海進後の海退に伴い形成し砂堤列と愛鷹山との間に発達したもので、弥生時代頃に形成した潟湖に由来するものである。今回の発掘調査により、１区では奈良・平安時代を中心とした遺構・遺物が、２区では弥生時代を中心とした遺構・遺物が発見されている。今回の自然科学分析調査は、弥生時代の環濠内の覆土について珪藻分析、花粉分析、花粉イネ属同定、植物珪酸体分析、種実分析を行い、当時の古環境に関する情報を得る。

１．試料

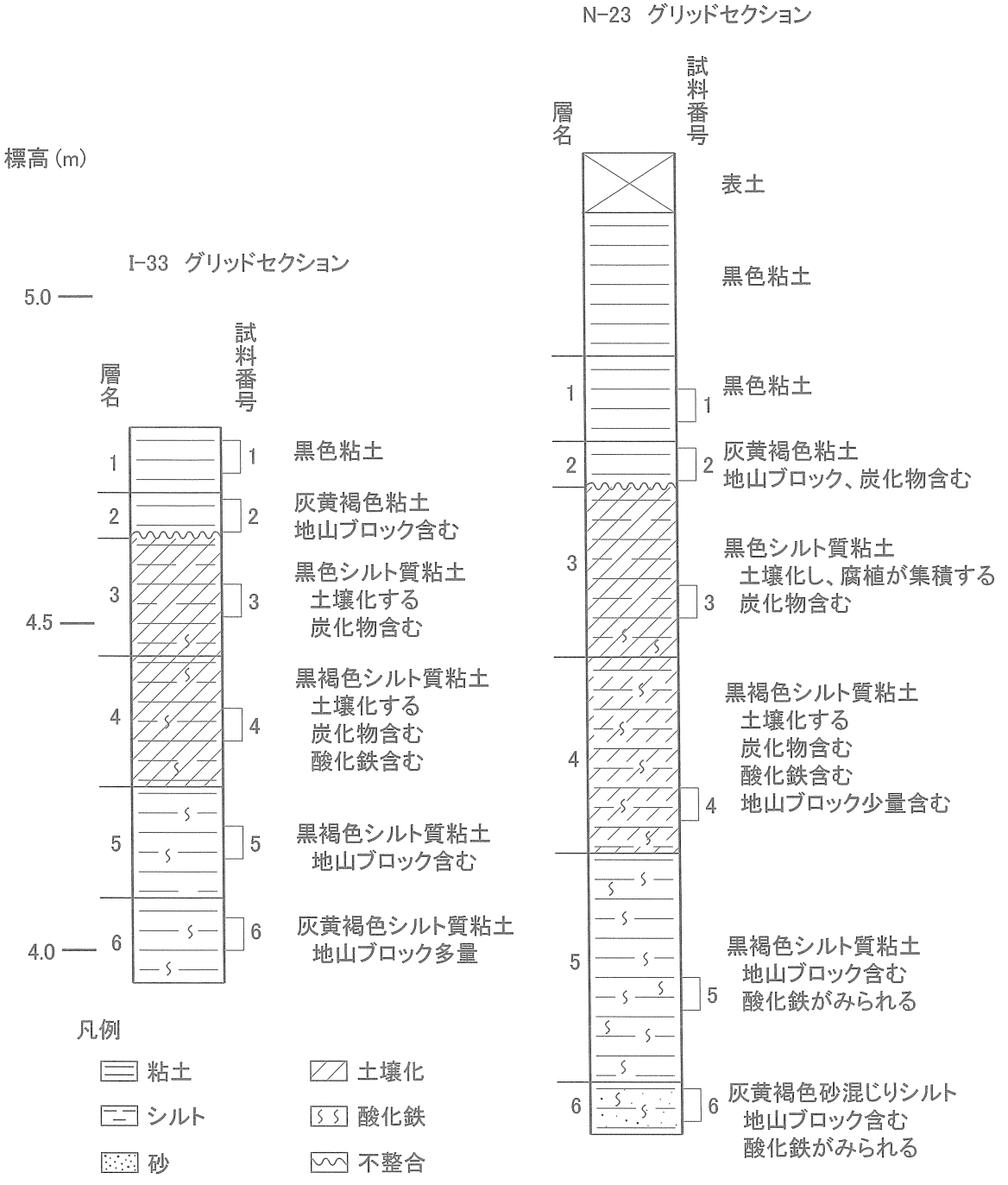
当社技師１名が現地に赴き、調査および試料採取を行った。試料は、２区で検出された環濠の東側と西側の２地点で採取した（第93図）。Ｉ－33グリッドセクションでは、上位より１～６層に分層されている。最上位の１層は黒色粘土層、２層は灰黄褐色粘土層で、層相から連続的に堆積したことが推定され、ともに古墳時代・古代の遺物が混じるとされる。２層は３層の上位に不整合で堆積する。３層は黒色シルト質粘土層、４層は黒褐色シルト質粘土層で、連続的に堆積したことが推定される。ともに環濠埋積過程において土壌化が進んでおり、腐植が集積している。弥生時代の遺物が出土しているとされる。下位の５層は黒褐色シルト質粘土層、６層は灰黄褐色シルト質粘土層で、環濠が機能していた時期の堆積物と考えられ、弥生時代中期中葉の土器が部分的に集中して出土しているとされる。試料は、層位毎（１～６層）に６点（試料番号１～６）を採取した。分析調査には、弥生時代の堆積物を対象として試料番号３～６（３～６層）の４点について、珪藻分析、花粉分析、花粉イネ属同定、植物珪酸体分析を実施する。さらに、底部近くの２点（試料番号５、試料番号６）は種実分析も実施する。

Ｎ－23グリッドセクションにおいても、Ｉ－33グリッドセクションと同様に上位より１～６層に分層されている。２地点の各層の層相は概ね類似する。ただし、Ｎ－23グリッドセクションの４層で腐植の集積が少ない。また、Ｎ－23グリッドセクションの６層の層厚は薄く、極細粒砂が比較的多く混じる（灰黄褐色砂混じりシルト層）。２地点間で１～６層の各層に包含される遺物の時期も一致するとされることから、各層は対比すると考えられる。試料は、層位毎（１～６層）に６点（試料番号１～６）の試料を採取した。このうち、６層は砂が多く化石や植物遺体の産出が少ないと予想されたため、試料番号２～５（２～５層）の４点について、珪藻分析、花粉分析、花粉イネ属同定、植物珪酸体分析を実施する。さらに、底部近くの２点（試料番号４、試料番号５）は種実分析も実施する。以上の合計で、珪藻分析８点、花粉分析８点、花粉イネ属同定８点、植物珪酸体分析８点、種実分析４点を実施する。

２．分析方法

(1)　珪藻分析

試料を湿重で７ｇ前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法（４時間放置）の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1,000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、



第93図　環濠試料採取地点の層序

珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、原口ほか（1998）、Krammer（1992）、Krammer & Lange-Bertalot（1986, 1988, 1991a, 1991b）、渡辺ほか（2005）、小林ほか（2006）などを参照し、分類基準は、Round, Crawford & Mann（1990）に従う。なお、壊れた珪藻殻の計数基準は、柳沢（2000）に従う。

同定結果は、中心類（Centric diatoms；広義のコアミケイソウ綱Coscinodiscophyceae）と羽状類（Pennate diatoms）に分け、羽状類は無縦溝羽状珪藻類（Araphid pennate diatoms：広義のオビケイソウ綱Fragilariophyceae）と有縦溝羽状珪藻類（Raphid pennate diatoms；広義のクサリケイソウ綱Bacillariophyceae）に分ける。また、有縦溝類は、単縦溝類、双縦溝類、管縦溝類、翼管縦溝類、短縦溝

類に細分する。

各種類の生態性は、Vos & de Wolf（1993）を参考とするほか、塩分濃度に対する区分はLowe（1974）に従い、真塩性種（海水生種）、中塩性種（汽水生種）、貧塩性種（淡水生種）に類別する。また、貧塩性種は細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料は、産出率2.0％以上の種類について主要珪藻化石群集の分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析にあたり、淡水生種（貧塩性種）は安藤（1990）、陸生珪藻は伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性は渡辺ほか（2005）の環境指標種を参考とする。

⑵　花粉分析・イネ属同定

試料約10gを秤り取り、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.3）よる有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物粒の溶解、アセトリシス（無水酢酸９、濃硫酸１の混合液）処理によるセルロースの分解、の順に物理・化学的処理を施す。処理後の残渣から一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作成し、同定を行う。結果は同定・計数結果の一覧表、および花粉化石群集の分布図として表示する。木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

イネ属同定はノマルスキー微分干渉装置を用い、検出されるイネ科花粉の表面微細構造・発芽孔の肥厚の状況・粒径などを考慮して、中村（1974）を参考にしてイネ属と他のイネ科に分類した。

⑶　植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2004）の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物１gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物１gあたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100個／g未満は「<100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸め（100単位にする）、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。また、各分類群の植物珪酸体含量とその層位的変化から古植生について検討するために、植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。

⑷　種実分析

試料200ccを水に浸し、粒径0.5㎜の篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な種実遺体を抽出する。現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等との対照から、種実遺体の種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。試料中に確認された炭化材と高師小僧（褐鉄鉱）は、70℃48時間乾燥後の重量（g）と最大径（㎜）を表示する。分析後は、種実遺体を分類群毎に容器に入れ、70％程度のエタノール溶液で液浸し、保管する。

第13表　生態性区分と環境指標種群

	塩分濃度に対する区分　Lowe（1974）による	
海水生種	強塩性種	塩分濃度40.0‰以上の高濃度海水域に生育する種
	真塩性種（海水生種）	塩分濃度40.0～30.0‰に生育する種
汽水生種	中塩性種（汽水生種）	塩分濃度30.0～0.5‰に生育する種
淡水生種	貧塩性種（淡水生種）	塩分濃度0.5‰以下に生育する種
	淡水生種の生態性区分	
塩分	貧塩好塩性種	少量の塩分がある方が良く生育する種
	貧塩不定性種	少量の塩分があってもこれに良く耐えることができる種
	貧塩嫌塩性種	小量の塩分にも耐えることができない種
	広域塩性種	淡水～汽水域まで広い範囲の塩分濃度に適応できる種
pH	真酸性種	pH7.0以下に生育し、特にpH5.5以下の酸性水域で最も良く生育する種
	好酸性種	pH7.0付近に生育し、pH7.0以下の水域で最も良く生育する種
	pH不定性種	pH7.0付近の中性水域で最も良く生育する種
	好アルカリ性種	pH7.0付近に生育し、pH7.0以上の水域で最も良く生育する種
Hustedt（1937－38）による	真アルカリ性種	pH7.0以上の水域にのみ出現する種
流水	真止水性種	止水域にのみ生育する種
	好止水性種	止水域に特徴的であるが、流水域にも生育する種
	流水不定性種	止水域にも流水域にも普通に生育する種
	好流水性種	流水域に特徴的であるが、止水域にも生育する種
Hustedt（1937－38）による	真流水性種	流水域にのみ生育する種

主に海水域での環境指標種群（小杉，1988による）	
外洋指標種群（A）	塩分濃度が約35‰の外洋水中で浮遊生活するもの
内湾指標種群（B）	塩分濃度35～26‰の内湾水中で浮遊生活することからそのような環境を指標することのできる種群
海水藻場指標種群（C1）	塩分濃度35～12‰の海域で海藻（草）に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
汽水藻場指標種群（C2）	塩分濃度12～4‰の汽水域で海藻（草）に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
海水砂質干潟指標種群（D1）	塩分濃度35～26‰の砂底の砂に付着生育することからそのような環境を指標することができる種群
汽水砂質干潟指標種群（D2）	塩分濃度26～5‰の砂底の砂に付着生育することからそのような環境を指標することができる種群
海水泥質干潟指標種群（E1）	30～12‰の閉鎖性の高い塩性湿地など泥底の泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
汽水泥質干潟指標種群（E2）	塩分濃度12～2‰の汽水化した塩性湿地などの泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
淡水底生種群（F）	2‰以下の淡水域の底質の砂、泥、水生植物などに付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
淡水浮遊生種群（G）	塩分濃度2‰以下の湖沼などの淡水域で浮遊生活することからそのような環境を指標することのできる種群
河口浮遊生種群（H）	塩分濃度20～2‰の河口域で浮遊生活、あるいは付着生活することからそのような環境を指標することのできる種群
淡水域での環境指標種群（安藤，1990による）	
上流性河川指標種群（J）	河川上流部の峡谷部に集中して出現することから上流部の環境を指標する可能性の大きい種群
中～下流性河川指標種群（K）	河川中～下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
最下流性河川指標種群（L）	最下流部の三角州の部分に集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
湖沼浮遊性種群（M）	水深が約1.5m以上ある湖沼で浮遊生活する種群で湖沼環境を指標する可能性の大きい種群
湖沼沼沢湿地指標種群（N）	湖沼における浮遊生種としても沼沢湿地の付着生種としても優勢に出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
沼沢湿地付着生種群（O）	沼よりも浅く水深が1m前後で一面に水生植物が繁茂している沼沢や更に水深の浅い湿地で優勢な出現の見られることからそのような環境を指標する可能性の大きい種群
高層湿原指標種群（P）	ミズゴケを主体とした環境や泥炭が形成される環境に集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
陸域指標種群（Q）	水中でなく、多少の湿り気のある土壌表面、岩の表面、コケなど常に大気に曝された好気的環境（陸域）に集中して生育することからそのような環境を指標する可能性の大きい種群
陸域での環境指標種群（伊藤・堀内，1991による）	
陸生珪藻A群（RA）	陸生珪藻の中でも、分布がほぼ陸域に限られる耐乾性の高い種群
陸生珪藻B群（RB）	陸生珪藻A群に随伴し、陸域にも水中にも生育する種群
未区分陸生珪藻（RI）	陸生珪藻に相当すると考えられるが、乾湿に対する適応性の不明なもの

３．結果

⑴　珪藻分析

結果を第14表、第94図に示す。また、珪藻化石の生態性区分や環境指標種群の説明を第13表に示す。珪藻化石の産出頻度は、何れの試料も多産する。完形殻の出現率は、60％前後である。産出分類群数は、合計で40属135分類群である。地点別に珪藻化石群集の特徴を下位より述べる。

・Ⅰ－33グリッドセクション

６層（試料番号６）は、淡水域に生育する水生珪藻が約50％、陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻が約40％、淡水～汽水生種が約10％産出する。淡水生種の生態性（塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応性）の特徴は、貧塩不定性種と貧塩好塩性種、好＋真アルカリ性種、流水不定性種が多産する。主要種は、塩分や塩類の豊富な河口や温泉水中などに付着生育する淡水～汽水生種の*Rhopalodia gibberula*、流水不定性で有機汚濁の進んだ腐水域に耐性のある好汚濁性種の*Luticola goeppertiana*、*Nitzschia amphibia*等が10％前後産出する。この他、好流水性種の*Achnanthes inflata*、沼沢湿地付着生種の*Placoneis elginensis*、流水不定性で好清水性種の*Diploneis ovalis*等が産出する。陸生珪藻では、耐乾性の高い陸生珪藻Ａ群の*Hantzschia amphioxys*が約10％産出する。

５～３層（試料番号５～３）は、陸生珪藻が全体の約60％と多産する。その他水生珪藻が約20％、淡水～汽水生種が約10％産出する。主要種は、陸生珪藻Ａ群の*Hantzschia amphioxys*、*Luticola mutica*が約10％産出し、同じく陸生珪藻Ａ群の*Diadesmis contenta*、*Pinnularia borealis*、それに水域にも陸域にも生育する陸生珪藻Ｂ群の*Navicula ignota*等が産出する。

・Ｎ－23グリッドセクション

５層（試料番号５）、４層（試料番号４）は、水生珪藻が約50％、陸生珪藻が約40％、淡水～汽水生種が約10％産出する。淡水生種の生態性の特徴は、貧塩不定性種と貧塩好塩性種、好＋真アルカリ性種、流水不定性種が多産する。主要種は、流水不定性で好汚濁性種の*Luticola goeppertiana*が約15％と産出し、淡水～汽水生種の*Rhopalodia gibberula*、好流水性で付着性の*Achnanthes inflata*、*Caloneis bacillum*、沼沢湿地付着生種の*Placoneis elginensis*、流水不定性で好清水性種の*Diploneis ovalis*等を伴う。陸生珪藻では、陸生珪藻Ａ群の*Hantzschia amphioxys*、*Luticola mutica*が約10％産出する。

３層（試料番号３）は、陸生珪藻が約70％と多産する。これに次いで、水生珪藻が約20％、淡水～汽水生種が約10％産出する。主要種は、陸生珪藻Ａ群の*Hantzschia amphioxys*が約25％産出し、同じく陸生珪藻Ａ群の*Luticola mutica*が約15％産出する。これに付随して、*Pinnularia borealis*等が産出する。水生珪藻としては、*Navicula seposita* var. *lanceolata*等が低率ながら産出する程度である。

２層（試料番号２）は、水生珪藻が約60％、陸生珪藻は、約40％産出する。淡水生種の生態性の特徴は、貧塩不定性種、好＋真アルカリ性種、流水不定性種と好＋真止水性種が多産する。主要種は、止水性で湖沼沼沢湿地指標種の*Aulacoseira ambigua*が約10％産出し、好止水性種の*Fragilariforma exigua*、*Pseudostaurosira brevistriata*、*Staurosira construens*、*Staurosira venter*、好流水性種の*Caloneis bacillum*、それに流水不定性種の*Diploneis ovalis*等を伴う。

⑵　花粉分析・イネ属同定

結果を第15表に示す。Ⅰ－33グリッドセクション、Ｎ－23グリッドセクション共に花粉化石の検出数が少なく、保存状態も悪い。分析残渣のほとんどは微粒炭である。モミ属、ツガ属、マツ属、イネ科などが少量みられるのみである。イネ属花粉はⅠ－33セクションの４層（試料番号４）で１個体検出されたのみである。

第14表　珪藻分析結果

種類 / 試料番号	生態性 塩分	pH	流水	環境指標種	I－33 3	4	5	6	N－23 2	3	4	500
Bacillariophyta（珪藻植物門）												
Centric Diatoms（中心型珪藻類）												
Aulacoseira ambigua (Grun.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	N,U	1	1	1	－	9	2	－	－
Aulacoseira granulata (Ehr.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	M,U	－	－	－	－	－	1	－	－
Aulacoseira italica (Ehr.) Simonsen	Ogh-ind	ind	l-ph	U	1	－	－	－	－	1	1	－
Coscinodiscus rothii (Ehr.) Grunow	Euh-Meh				－	－	－	1	－	－	－	1
Araphid Pennate Diatoms（無縦溝羽状珪藻類）												
Fragilaria capucina Desmazieres	Ogh-ind	al-il	ind	T	2	1	－	－	2	1	1	－
Fragilaria capucina var. *gracilis* (Oestr.) Hustedt	Ogh-ind	ind	l-ph	T	－	－	－	－	1	－	－	1
Fragilaria vaucheriae (Kuetz.) Petersen	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	－	－	－	－	1	－	－	－
Fragilariforma exigua (Grun.) D.M.Williams & Round	Ogh-hob	ac-il	l-ph	P	1	－	－	－	4	－	1	－
Fragilariforma virescens (Ralfs) Williams & Round	Ogh-ind	ac-il	l-ph	P,U	－	－	－	－	1	－	－	－
Pseudostaurosira brevistriata (Grun.) Williams & Round	Ogh-hil	al-il	l-ph	U	8	3	3	－	5	3	5	1
Staurosira construens Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	－	3	－	－	4	2	－	－
Staurosira construens var. *binodis* (Ehren.) Hamilton	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	－	－	－	－	1	－	1	－
Staurosira construens var. *triundalata* (Reichelt) H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	l-ph		1	－	－	－	－	2	2	1
Staurosira venter (Ehren.) H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	3	4	2	1	4	3	4	1
Staurosirella pinnata (Ehr.) Williams & Round	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	－	1	－	－	1	－	2	－
Staurosirella lapponica (Grun.) Williams & Round	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	1	－	－	－	－	－	－	－
Synedrella parasitica (W.Smith) Round	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	－	－	－	－	1	－	3
Ulnaria acus (Kuetzing) M.Aboal	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	－	1	－	－	－	－	－	－
Tabellaria flocculosa (Roth) Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-bi	T	1	2	－	－	－	－	－	－
Raphid Pennate Diatoms（有縦溝羽状珪藻類）												
Monoraphid Pennate Diatoms（単縦溝羽状珪藻類）												
Achnanthes inflata (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	T	1	1	2	10	－	1	9	4
Planothidium lanceolatum (Breb. ex Kuetz.) Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	－	－	－	－	－	－	1	－
Achnanthidium exiguum (Grunow) Czarnecki	Ogh-ind	al-il	ind	S	2	1	－	－	1	2	－	－
Achnanthidium minutissimum (Kuetz.) Czarn.	Ogh-ind	al-il	ind	U	－	－	－	－	－	1	1	－
Biraphid Pennate Diatoms（双縦溝羽状珪藻類）												
Amphora copulata (Kuetz.) Schoeman et R.E.M.Archibald	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	1	－	－	1	－	－	3
Amphora montana Krasske	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	－	－	1	4	1	－	－	1
Amphora normanii Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	RB	－	－	－	2	－	－	－	－
Anomoeoneis sphaerophora (Kuetz.) Pfitzer	Ogh-Meh	al-bi	ind		1	－	－	－	－	－	－	－
Cymbopleura naviculiformis (Auerswald) Krammer	Ogh-ind	ind	ind	O,U	－	－	－	－	－	－	1	－
Encyonema silesiacum (Bleisch) D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	－	－	－	－	1	－	－	－
Placoneis elginensis (Greg.) E.J.Cox	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	1	－	2	9	－	－	1	8
Placoneis elginensis var. *neglecta* (Krasske) H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1	3	－	1	3	1	1	4
Placoneis palaelginensis Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	5	3	2	2	－	1	1	－
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	－	－	－	1	1	－	1	－
Gomphonema parvulum (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	1	－	－	1	1	1	－	－
Gomphonema pseudosphaerophorum H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	－	1	－	－	－	－	－	－
Gomphonema sphaerophorum Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	－	－	－	－	－	－	－
Diploneis elliptica (Kuetz.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	RB,T	－	－	－	－	－	－	－	－
Diploneis ovalis (Hilse) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	T	3	13	3	15	5	4	9	15
Diploneis parma Cleve	Ogh-ind	ind	ind		－	－	－	－	－	－	－	1
Eolimna tantula (Hust.)	Ogh-ind	ind	r-ph	RI,U	1	3	1	2	－	2	1	1
Navicula hambergii Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RI	－	－	－	－	－	－	－	1
Navicula peregrina (Ehr.) Kuetzing	Meh				－	－	－	－	－	1	－	－
Navicula germainii Wallace	Ogh-Meh	al-il	ind	U	－	－	－	－	－	1	－	－
Navicula amphiceropsis Lange-Bertalot et U.Rumrich	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1	－	－	－	－	－	－	－
Navicula elginensis var. *cuneata* H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	ind		－	－	－	4	－	－	－	－
Navicula gibbula Cleve	Ogh-ind	ind	ind	RI	－	1	－	－	－	－	－	－
Navicula hambergii Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RI	－	－	－	－	－	－	－	1
Navicula ignota Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RB,T	13	11	7	4	1	9	－	1
Navicula ignota var. *acceptata* (Hust.) Lange-B.	Ogh-ind	ind	ind	RB,U	2	－	－	2	－	－	－	－
Navicula ignota var. *palustris* (Hust.) Lund	Ogh-ind	ind	ind	RB	－	－	－	－	1	－	1	2
Navicula kotschyi Grunow	Ogh-ind	al-il	ind		3	－	－	－	－	3	2	1
Navicula jaernefeltii Hustedt	Ogh-ind	ac-il	l-ph		－	－	－	－	－	－	1	－
Navicula placenta fo. *obtusa* Meister	Ogh-ind	al-il	ind		－	－	－	1	－	－	－	2
Navicula rostellata Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	－	－	－	－	－	2	－	－
Navicula seposita var. *lanceolata* Haragushi	Ogh-ind	ind	l-ph		2	5	3	4	1	7	8	2
Navicula tokyoensis H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	l-ph	RI	－	－	－	3	－	1	－	4
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	－	－	－	－	－	－	1
Gyrosigma scalproides (Rabh.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	－	－	－	－	－	－	1	－
Craticula cuspidata (Kuetz.) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S	－	－	－	－	－	1	－	－
Stauroneis borrichii (Pet.) Lund	Ogh-ind	ind	ind	RI	3	2	2	－	1	3	3	1
Stauroneis kriegeri Patrick	Ogh-ind	ind	ind	T	－	－	－	－	－	－	1	－
Stauroneis obtusa Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	5	－	1	－	－	2	1	－
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O,U	－	－	－	－	－	1	－	－
Stauroneis smithii Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	－	1	－	－	－	－	－	－
Stauroneis tenera Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	－	－	－	－	－	1	－	－
Stauroneis thermicola (Petersen) Lund	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	－	－	－	－	－	－	－
Frustulia vulgaris (Thwait.) De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	－	－	－	－	1	－	－	1
Cosmioneis pusilla (W.Smith) Mann & Stickle	Ogh-Meh	ind	ind		－	－	－	1	－	－	2	－
Diadesmis biceps Arnott ex Grunow in Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	6	32	2	1	－	6	5	6
Diadesmis brekkaensis (J.B.Petersen) D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	RI	11	3	4	2	－	2	－	1
Diadesmis confervacea Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RB,S	1	1	－	－	－	－	1	－
Diadesmis contenta (Grun.ex Van Heurck) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	10	11	3	5	1	5	1	5
Luticola goeppertiana (Bleisch) D.G.Mann	Ogh-hil	al-il	ind	S	－	2	－	23	－	2	38	26
Luticola mutica (Kuetz.) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	18	23	10	4	6	32	18	12
Luticola paramutica (Bock) D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	RB	2	－	－	－	－	－	1	1

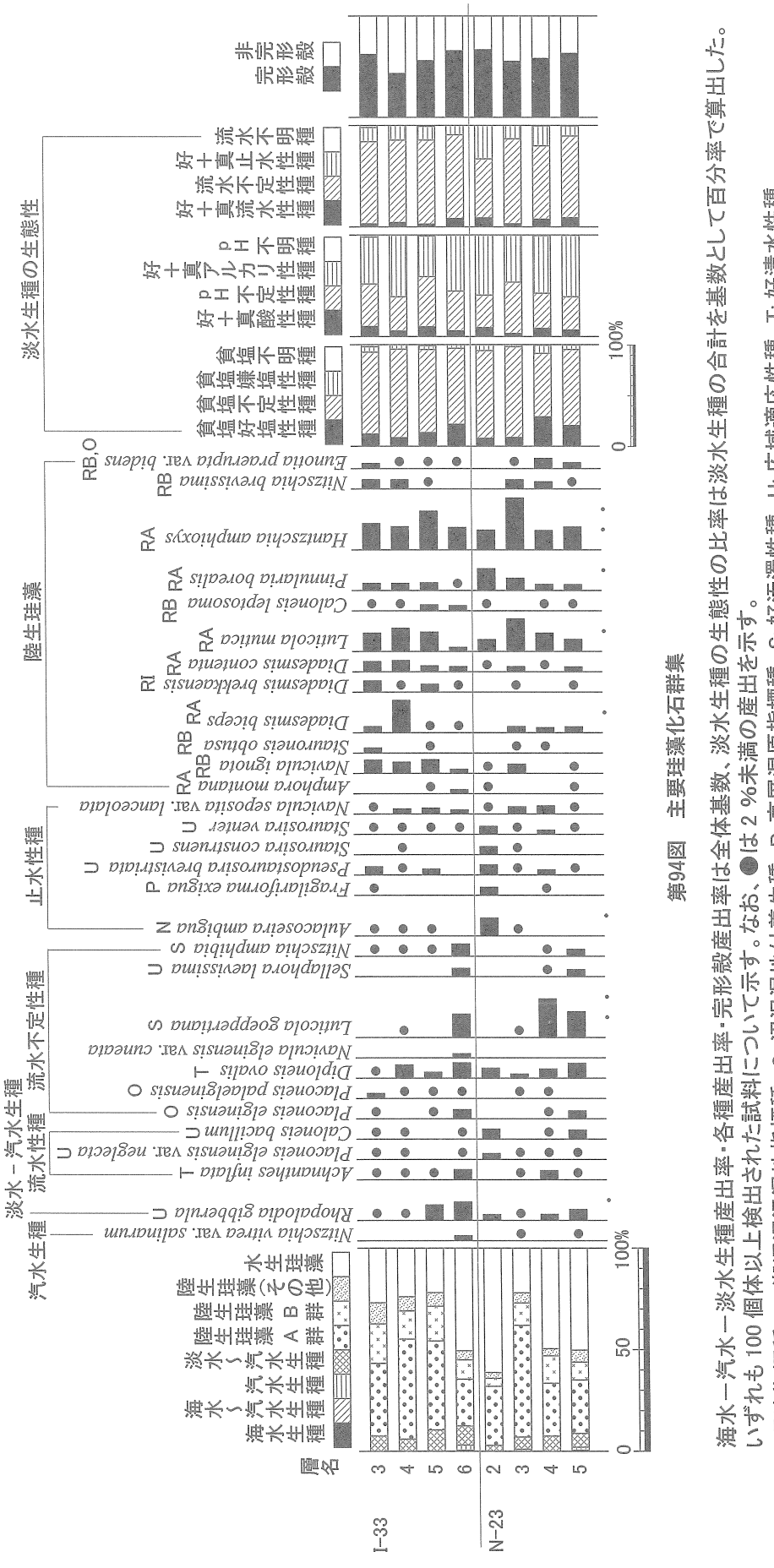
種類 / 試料番号	生態性 塩分	pH	流水	環境指標種	I－33 3	4	5	6	N－23 2	3	4	500
Luticola plausibilis (Hustedt ex Simonsen) D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind		－	1	－	－	－	－	1	2
Neidium alpinum Hustedt	Ogh-ind	ac-il	ind	RA	2	－	2	2	－	－	－	－
Neidium ampliatum (Ehr.) Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-ph		2	－	－	－	1	－	－	1
Neidium bisulcatum (Lagerst.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	RI	1	－	－	－	－	－	－	－
Neidium dubium (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ind	ind		－	－	－	－	－	1	－	－
Neidium hercynicum A.Mayer	Ogh-ind	ac-il	ind	U	－	－	－	－	1	－	－	－
Neidium iridis (Ehr.) Cleve	Ogh-hob	ac-il	ind	O,U	－	－	－	－	1	－	－	－
Neidium longiceps (W.Greg.) R.Ross	Ogh-hob	ac-il	ind		－	－	－	－	1	－	－	－
Caloneis aerophila Bock	Ogh-ind	ac-bi	ind	RA,S	2	3	2	－	－	1	－	－
Caloneis angustivalva Boye P.	Ogh-ind	ind	ind	RI	3	－	－	1	－	2	－	1
Caloneis bacillum (Grun.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1	1	－	3	5	－	2	9
Caloneis hyalina Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RA	－	－	－	－	－	－	1	－
Caloneis lagerstedtii (Lagerst.) Cholnoky	Ogh-ind	al-il	ind	S	－	－	1	3	－	2	－	－
Caloneis leptosoma Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	1	1	3	5	1	－	1	1
Caloneis minuta (Grunow) Ohtsuka et Fujita	Ogh-ind	al-il	ind		1	－	－	－	－	－	－	－
Caloneis silicula (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		－	－	－	－	1	－	－	－
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	7	7	4	3	11	12	6	6
Pinnularia borealis var. *brevicostata* Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RA	－	－	－	－	－	1	－	－
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O,U	1	－	－	－	－	－	－	－
Pinnularia mesolepta (Ehr.) W.Smith	Ogh-ind	ac-il	ind	S	－	－	－	1	－	－	－	1
Pinnularia microstauron (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	S	－	－	1	－	－	－	－	－
Pinnularia nodosa Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	－	－	－	－	－	1	－	1
Pinnularia obscura Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	－	－	－	2	1	－	－	－
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RB	－	1	2	1	1	－	3	2
Pinnularia schroederii (Hust.) Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	4	－	1	2	－	3	2
Pinnularia stomatophora (Grun.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		1	－	－	－	－	－	－	－
Pinnularia stomatophora var. *triundulata* (Font.) Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		1	－	－	－	－	－	－	－
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	－	－	1	1	－	－	－	1
Pinnularia subcapitata var. *paucistriata* (Grun.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	U	－	－	－	－	－	1	－	1
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	－	1	－	－	－	－	－
Sellaphora americana (Ehr.) Mann	Ogh-ind	al-il	l-ph		－	1	－	－	－	－	－	－
Sellaphora bacillum (Ehr.) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	U	－	－	－	－	－	2	－	－
Sellaphora laevissima (Kuetz.) Mann	Ogh-ind	ind	ind	U	－	－	－	8	－	－	1	7
Sellaphora pseudopupula (Krasske) Lange-B.	Ogh-ind	ind	ind		－	－	－	2	－	1	－	1
Sellaphora pupula (Kuetz.) Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	S	2	3	1	－	－	－	2	－
管縦溝類												
Bacillaria paxillifer (O.F.Mull.) Hendey	Ogh-Meh	al-il	l-ph	U	－	－	－	－	－	1	－	－
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	26	23	20	22	10	51	19	23
Nitzschia vitrea var. *salinarum* Grunow	Meh				－	－	－	5	－	1	－	2
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-Meh	al-il	ind	RB,U	9	9	2	－	－	9	7	3
Nitzschia palea (Kuetz.) W.Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	－	－	1	－	－	－	－	－
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	S	1	2	2	12	－	－	2	7
Nitzschia angustata (W.Smith) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		－	－	－	－	－	－	2	－
Nitzschia fonticola Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	－	－	－	－	－	－	－
Nitzschia hantzschiana (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	U	－	－	－	－	2	－	－	1
Nitzschia heidenii Meister	Ogh-ind	al-il	ind	T	－	－	－	－	1	1	－	－
Nitzschia nana Grunow	Ogh-ind	ind	ind	S	－	1	－	－	－	－	－	－
Nitzschia paleacea (Grun.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	－	－	－	－	－	－	－
Nitzschia parvuloides Cholnoky	Ogh-ind	ind	ind	U	－	－	1	－	－	－	－	－
Nitzschia spp.	Ogh-unk	unk	unk		－	－	－	－	－	－	1	－
Tryblionella levidensis W.Smith	Meh			S	－	－	－	－	－	－	－	1
Tryblionella victoriae Grunow	Ogh-Meh	al-il	ind	S	1	－	－	－	－	－	－	－
Rhopalodia gibberula (Ehr.) O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind	U	4	3	8	18	3	1	6	11
Rhopalodia gibba (Ehr.) O.Muller	Ogh-ind	al-il	ind	U	2	－	－	－	2	－	－	－
Rhopalodia quisumbirgiana Skvortzow	Ogh-hil	al-il	r-ph		1	－	－	－	－	－	－	－
翼管縦溝類												
Surirella angusta Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	－	－	－	－	－	1	1	－
短縦溝類												
Eunotia arcus Ehrenberg	Ogh-hob	ind	ind	U	－	1	－	－	－	－	1	－
Eunotia arcus var. *bidens* Grunow	Ogh-ind	ac-il	l-ph		1	－	－	－	－	－	－	－
Eunotia bigibba Kuetzing	Ogh-hob	ac-bi	ind	RB	1	－	－	－	－	－	－	－
Eunotia fallax A.Cleve	Ogh-hob	ac-bi	ind	RA	1	－	2	3	－	2	2	1
Eunotia minor (Kuetz.) Grunow	Ogh-hob	ind	ind	O,T	1	－	－	－	－	－	－	－
Eunotia praerupta Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T	－	1	－	2	－	－	2	1
Eunotia praerupta var. *bidens* (Ehren.) Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T	5	4	2	2	－	1	10	6
Eunotia praerupta var. *inflata* Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RI	－	1	－	－	－	－	－	－
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	－	－	－	－	－	－	－
海水生種					0	0	0	0	0	0	0	0
海水～汽水生種					0	0	0	1	0	0	0	1
汽水生種					0	0	0	5	0	2	0	3
淡水～汽水生種					15	12	11	19	3	12	15	14
淡水生種					186	189	94	175	100	186	185	187
珪藻化石総数					201	201	105	200	103	200	200	205

珪藻の適応性

H.R.　：塩分濃度	pH　：水素イオン濃度	C.R.：流水
Meh　：汽水生種	al-bi：真アルカリ性種	l-bi　：真止水性種
Ogh-Meh：淡水－汽水生種	al-il　：好アルカリ性種	l-ph：好止水性種
Ogh-hil　：貧塩好塩性種	ind　：pH不定性種	ind　：流水不定性種
Ogh-ind　：貧塩不定性種	ac-il：好酸性種	r-ph：好流水性種
Ogh-hob　：貧塩嫌塩性種	ac-bi：真酸性種	r-bi　：真流水性種
Ogh-unk　：貧塩不明種	unk　：pH不明種	unk：流水不明種

環境指標種群

K：中～下流性河川指標種，M：湖沼浮遊性種，N：湖沼沼沢湿地指標種，O：沼沢湿地付着生種，P：高層湿原指標種（以上は安藤，1990）
S：好汚濁性種，U：広域適応性種，T：好清水性種（以上はAsai and Watanabe，1995）
R：陸生珪藻（RA：A群，RB：B群，RI：未区分、伊藤・堀内，1991）



第94図　主要珪藻化石群集

海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。
いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は２％未満の産出を示す。
（環境指標種，N: 湖沼沼沢湿地指標種，O: 沼沢湿地付着生種，P: 高層湿原指標種，S: 好汚濁性種，U: 広域適応性種，T: 好清水性種，
RA: 陸生珪藻Ａ群，RB: 陸生珪藻Ｂ群，RI: 未区分陸生珪藻）

第15表　花粉分析結果

種　類	I－33				N－23			
	3	4	5	6	2	3	4	5
木本花粉								
モミ属	－	－	－	－	1	－	－	－
ツガ属	－	－	1	－	－	－	－	－
マツ属	－	－	1	－	1	1	－	－
スギ属	－	－	－	－	1	－	－	－
ブナ属	－	－	－	－	1	－	－	－
草本花粉								
イネ属	－	1	－	－	－	－	－	－
イネ科	－	2	－	1	4	－	－	－
ヒルガオ属	－	－	－	－	1	－	－	－
オミナエシ属	－	－	－	－	－	1	－	－
不明花粉	－	－	1	－	－	－	－	－
シダ類胞子								
イノモトソウ属	－	－	1	－	2	－	－	－
他のシダ類胞子	4	5	10	9	19	1	2	4
合　計								
木本花粉	0	0	2	0	4	1	0	0
草本花粉	0	3	0	1	5	1	0	0
不明花粉	0	0	1	0	0	0	0	0
シダ類胞子	4	5	11	9	21	1	2	4
総計（不明を除く）	4	8	13	10	30	3	2	4

(3)　植物珪酸体分析

結果を第16表、第95図に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。以下に、各地点での産状を述べる。

I－33グリッドセクションでは、上位ほど植物珪酸体含量が増加し、３層（試料番号３）で約23万個／gと極めて多い。各試料で検出される分類群は同様であり、ネザサ節を含むタケ亜科、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが見られる。各種類とも、ほぼ植物珪酸体含量に比例して増減しているため、構成比でみると、いずれの試料も類似する。なお、３層（試料番号３）では、栽培植物であるイネ属も検出される。葉部に形成される短細胞珪酸体が見られ、その含量は約900個／gである。またイネ属の短細胞列も見られる。

N－23グリッドセクションの植物珪酸体含量は、I－33グリッドセクションと異なる傾向が見られ、上位にかけて減少する。しかし、検出される分類群は同様である。また、産状も同様であり、ススキ属を含むウシクサ族の産出が目立つ。ウシクサ族の機動細胞列も見られる。

(4)　種実分析

結果を第17表に示す。種実は、I－33グリッドセクションの６層（試料番号６）から草本のタデ属の果実１個と、N－23グリッドセクションの４層（試料番号４）からタデ属の果実２個、５層（試料番号５）から草本のサナエタデ近似種の果実１個が検出されるのみであった。その他に、各試料から炭化材が微量（0.01g未満）や高師小僧（褐鉄鉱）、N－23グリッドセクションの５層（試料番号５）から種類、部位不明の植物片が微量確認された。以下に、種実の形態的特徴を記す。

- サナエタデ近似種（*Polygonum* cf. *lapathifolium* L.）　タデ科タデ属

果実の破片が検出された。黒色、長さ1.5㎜、幅1.3㎜程度の偏平な円状二面体。頂部はやや尖り、２花柱を欠損する。基部は切形で、灰褐色の萼と萼から伸びる花被片を欠損する。果皮表面は平滑。

- タデ属（*Polygonum*）　タデ科

果実の破片が検出された。黒褐色、形状はレンズ状または三稜状広卵体と思われるが、詳細は不明。

破片の大きさは1.3㎜程度。頂部は尖り、花柱を欠損する。果皮表面には網目模様がある。

４．考察

珪藻化石群集からみると、Ｉ－33グリッドセクション、Ｎ－23グリッドセクション共に類似した傾向が認められ、これは２地点間で１～６層の各層が対比していることを反映しているものと考えられる。遺構覆土下部にあたるＩ－33の６層とＮ－23の５・４層は、水生珪藻が陸生珪藻の割合を上回る。また、塩分や塩類の豊富な水域に生育する種群や有機汚濁の進んだ腐水域に生育する好汚濁性種が多産することが特徴である。このことから、これらは富栄養で淀んだ（流れがない）状況であったと思われる。なお、今回花粉化石や種実遺体はほとんど検出されないが、これらは好気的環境（乾いた状態）における風化に弱い。また、上位に比べて割合は低いが陸生珪藻も産出する。このことから、覆土は上記のような水

第16表　植物珪酸体含量

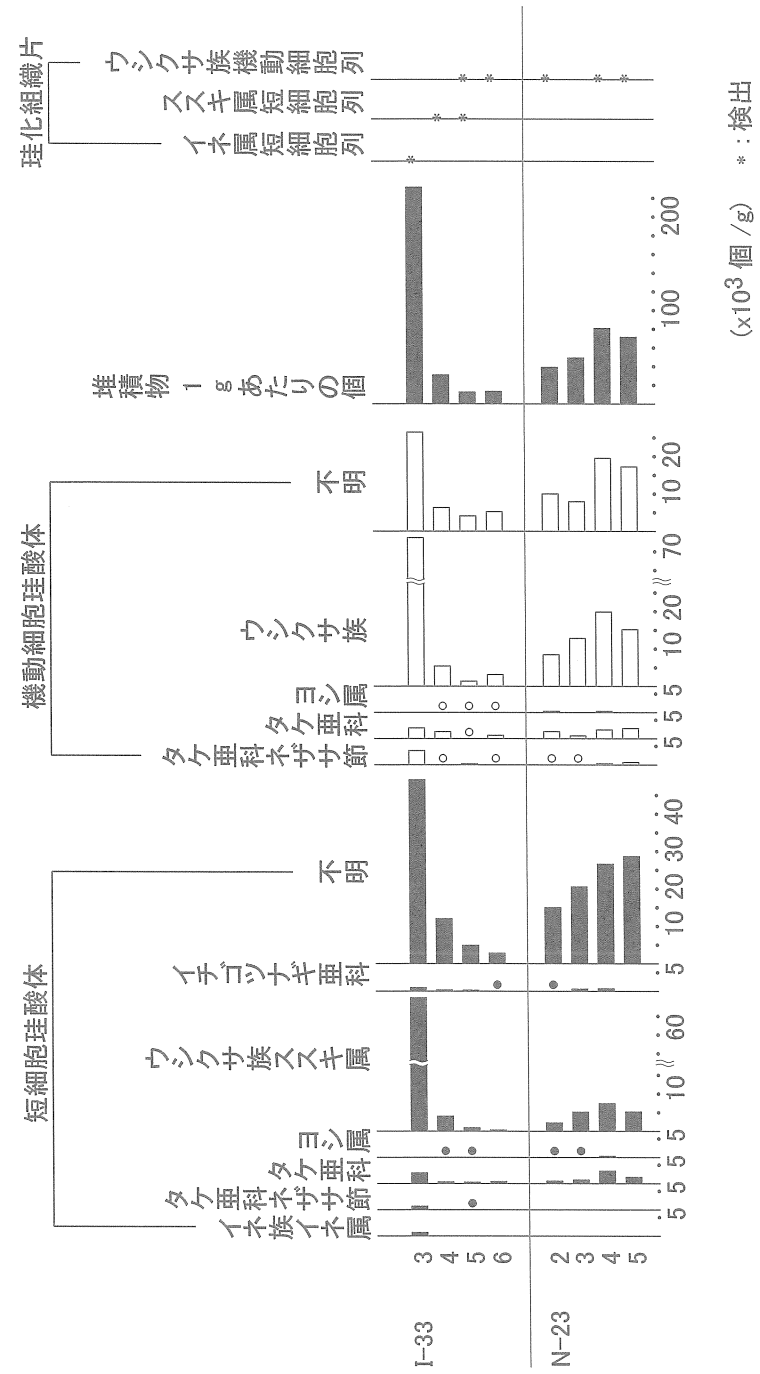
（個／g）

種　類	Ｉ－33				Ｎ－23			
試料番号	3	4	5	6	2	3	4	5
イネ科葉部短細胞珪酸体								
イネ族イネ属	900	－	－	－	－	－	－	－
タケ亜科ネザサ節	900	－	＜100	－	－	－	－	－
タケ亜科	2,800	500	400	600	700	1,000	3,400	1,700
ヨシ属	－	200	＜100	－	200	200	300	－
ウシクサ族ススキ属	69,900	4,000	900	300	2,200	5,100	7,400	5,200
イチゴツナギ亜科	900	300	300	200	200	600	700	－
不　明	49,100	12,000	4,900	2,800	15,000	20,500	26,600	28,600
イネ科葉身機動細胞珪酸体								
タケ亜科ネザサ節	3,800	200	300	＜100	200	200	300	700
タケ亜科	2,800	1,800	＜100	900	1,900	800	2,400	2,800
ヨシ属	－	200	＜100	＜100	300	－	300	－
ウシクサ族	73,700	5,400	1,400	3,100	8,400	12,800	19,900	15,200
不　明	26,500	6,300	4,100	5,200	10,000	7,900	19,500	17,300
合　計								
イネ科葉部短細胞珪酸体	124,700	16,900	6,600	3,900	18,200	27,400	38,400	35,500
イネ科葉身機動細胞珪酸体	106,800	13,800	5,900	9,400	20,800	21,700	42,400	35,900
総　計	231,500	30,700	12,500	13,300	39,100	49,100	80,900	71,400

含量は、10の位で丸めている（100単位にする）
＜100：100個／g未満
－：未検出，＊：検出

第17表　種実分析結果

				Ｉ－33		Ｎ－23	
分類群	部位	状態		5	6	4	5
種実							
サナエタデ近似種	果実	破片					1個
タデ属	果実	破片			1個	2個	
不明植物	不明	破片					＋
炭化材			乾燥重量	＜0.01g	＜0.01g	＜0.01g	＜0.01g
			最大径	2.2mm	2.5mm	2.5mm	3mm
高師小僧（褐鉄鉱）			乾燥重量	2.91g	0.19g	1.07g	1.21g
			最大径	32.8mm	8.9mm	14.8mm	15.9mm
			分析量	200cc	200cc	200cc	200cc
				284.24g	281.48g	263.16g	267.26g



第95図　植物珪酸体含量

堆積物1gあたりに換算した個数を示す。●○は250個/g未満を示す。
また、珪化組織片の産状を＊で示す。

域環境の中で水成堆積した後、一時的に乾燥した時期も存在したと考えられる。したがって、花粉化石や種実遺体は酸化分解が進み、残りにくかったと考えられる。

Ｉ－33の５～３層やＮ－23の３層は、耐乾性の高い陸生珪藻A群を多く含む陸生珪藻が多産する。層相からみて、これらの堆積物も水によって運搬されたと思われるが、その後乾燥することが多かったため、陸生珪藻が優占する組成になったと思われる。Ｉ－33の４・５層で陸生珪藻がやや多いのは、Ｎ－23より乾燥していたことを反映していると考えられ、Ｉ－33の４層の土壌化も進んだと考えられる。これは、Ｉ－33の４層以下の標高がＮ－23よりも20㎝程高いこととも整合する。

Ｎ－23グリッドセクションの２層は、水生珪藻が多産する。湖沼沼沢湿地指標種群や沼沢湿地付着生種群が多かったことから、浅い沼沢域であったと考えられる。２層が３層の上位に不整合で堆積することを考慮すると、３層堆積後のある時期に３層の上部を削剥して２層が水成堆積したことが考えられる。ただし、花粉化石の保存が悪い点などから、常時水が存在していた訳ではなく、乾燥した時期もあったと考えられる。以上のことから、環濠内の水域環境は、乾湿を繰り返すような環境下で、埋没が進行していったと考えられる。

植物珪酸体分析結果を見ると、「不明」も含めたいずれの種類も、堆積物中の植物珪酸体含量に応じて増減していることがわかる。このため、植物珪酸体の構成比をみると、各層準とも類似した割合となる。このことから、植物珪酸体の含量の変化は、周辺植生が変化したためではなく、植物珪酸体の堆積機構の違いによると考えられる。したがって、植生を考えるに当たっては、細かな含量の変化は考慮せず行う。植物珪酸体組成から、周辺には、ネザサ節、ススキ属、イチゴツナギ亜科などのイネ科植物が定常的に生育していたことがうかがえる。この中でもススキ属は全ての層準を通して他の試料よりも多く検出されており、周辺植生の中でも主要な種類であったと考えられる。特にＩ－33の３層では多くのススキ属が検出され、周辺に多く分布していたと思われる。なお、ススキ属には低湿地に生育する「オギ」も含む。潟湖が近いことから、検出されたススキ属を含むウシクサ族珪酸体は、湿地に生育する「オギ」の可能性もあるが、環濠内の珪藻分析等の結果により、周辺が乾いた状態状況であったと推定されることなどから、周辺に生育していたものは乾燥地を好むススキ類であったと思われる。ススキ類は開けた草地を構成する種類で、乾燥した裸地に先駆的に侵入して草地を構成する。したがって、開発によって切り開かれた土地にこれらが広く生育していたものと考えられる。種実遺体で微量ではあるが検出されるタデ類も開けた場所を好む種類であり、環濠周辺などを中心に生育していたと思われる。

当時の地形環境からして、西側には浮島ヶ原の元となる潟湖が広がっていたと考えられる。浮島ヶ原に位置する雌鹿塚遺跡で弥生時代後期～古代にかけての古植生が調査されており、スギ林や常緑広葉樹林が優占したことが指摘されている（パリノ・サーヴェイ株式会社 1990、松原 1990）。また、弥生時代後期前半とされる立木の調査では、アカガシ亜属やカヤが確認されている（能城ほか 1991）。おそらく当時の森林は、山地縁辺部や低地の中でも河川の影響を受けやすいなど土地条件が悪く開発が及びにくい地域を中心に生育していたとみられる。

なおイネ属由来の花粉化石や植物珪酸体が、少量検出される。イネ属が微量で、ススキ属の方が圧倒的に多いことを考えると、イネの生産域は離れた場所にあり、周辺には存在しなかった可能性がある。

引用文献

安藤一男　1990　「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42, 73-88

Asai, K. & Watanabe, T. 1995 Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom, 10,* 35-47

原口和夫・三友清史・小林弘　1998　『埼玉の藻類』珪藻類 埼玉県植物誌　埼玉県教育委員会, 527-600.

Hustedt, F. 1937-1939 *Systematische und okologische Untersuchungen uber die Diatomeen-Flora von Java,,Baliund Sumatra* Archivfur Hydrobiology, Supplement, 15:131-177, 15:187-295, 15:393-506, 15:638-790, 16:1-155, 16:274-394

伊藤良永・堀内誠示　1991　「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌』6，23-45

石川茂雄　1994　『原色日本植物種子写真図鑑』　石川茂雄図鑑刊行委員会，328p

小杉正人　1988　「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『第四紀研究』27，1-20

小林弘・出井雅彦・真山茂樹・南雲保・長田啓五　2006　『小林弘珪藻図鑑』第１巻　株式会社内田老鶴圃，531p

近藤錬三　2004　「植物ケイ酸体研究」『ペドロジスト』48，46-64

Krammer, K. 1992 *PINNULARIA.eine Monographie der europaischen Taxa.BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26.* J. CRAMER, 353p

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1986 *Bacillariophyceae.1. Teil: Naviculaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/1.* Gustav Fischer Verlag, 876p

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1988 *Bacillariophyceae.2. Teil: Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/2.* Gustav Fischer Verlag, 536p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1991a *Bacillariophyceae.3.Teil: Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/3.* Gustav Fischer Verlag, 230p

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1991b *Bacillariophyceae.4. Teil: Achnanthaceae, Kritsche Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/4.* Gustav Fischer Verlag, 248p

Lowe, R. L 1974 *Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms.* 334p. In Environmental Monitoring Ser. EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinati

中村純　1974　「イネ科花粉について，とくにイネ（Oryza sativa）を中心として」『第四紀研究』13，187-193

中山至大・井之口希秀・南谷忠志　2000　『日本植物種子図鑑』　東北大学出版会，642p.

能城修一・車崎正彦・鈴木三男・石川治夫　1991　「静岡県沼津市雌鹿塚遺跡出土木製品の用材」『金沢大学教養部論集』人文科学編　28-2　金沢大学，43-63

松原彰子　1990　「雌鹿塚遺跡周辺における自然環境の変遷」『雌鹿塚遺跡発掘調査報告書』Ⅰ　遺構編　沼津市文化財調査報告書第51集　沼津市教育委員会，171-215

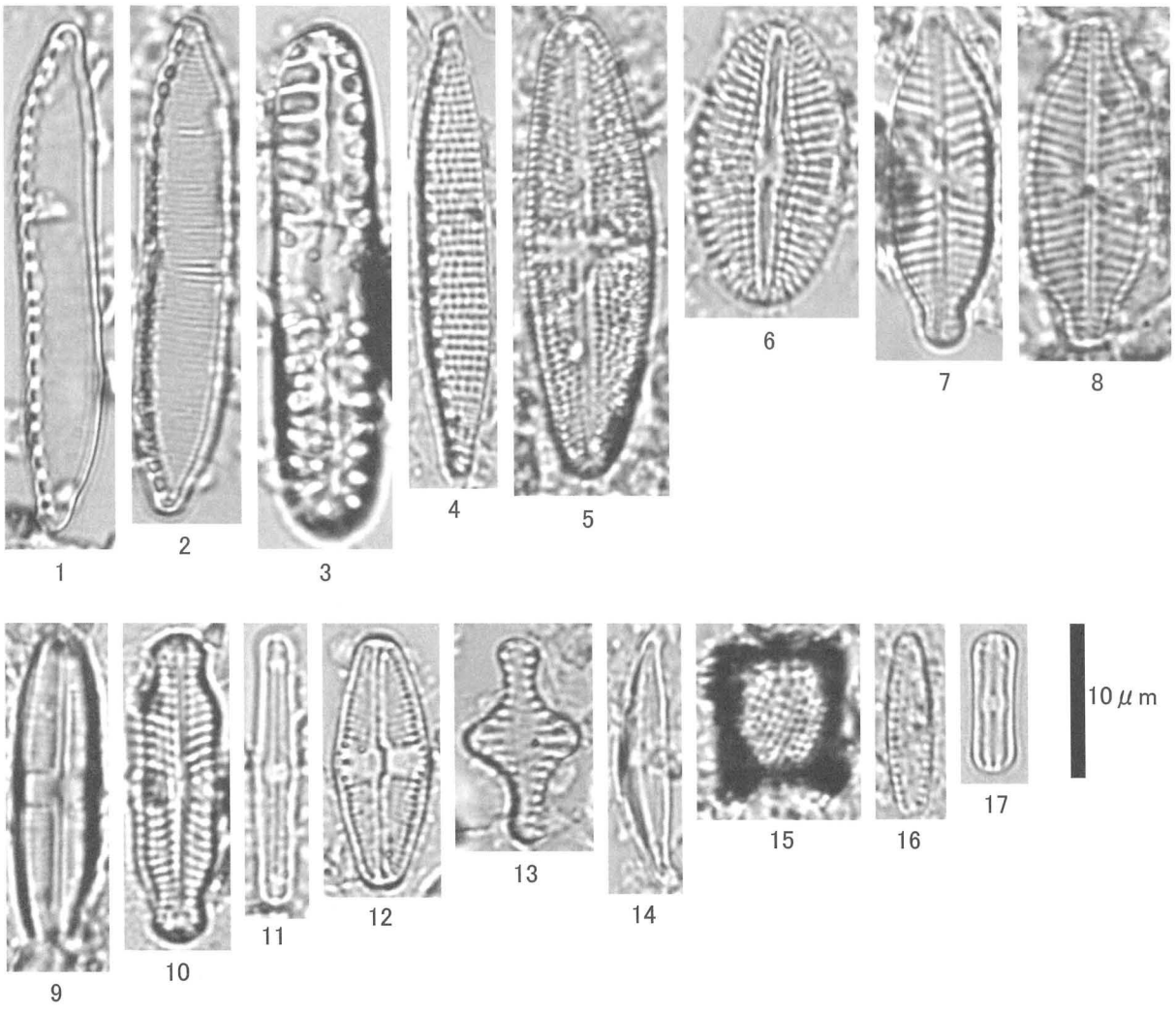
パリノ・サーヴェイ株式会社　1990　「雌鹿塚遺跡の自然科学分析結果」『雌鹿塚遺跡発掘調査報告書』Ⅰ　遺構編　沼津市文化財調査報告書第51集　沼津市教育委員会，153-170

Round, F. E..,Crawford, R. M. & Mann, D. G 1990 *The diatoms. Biology & morphology of the genera.* 747p. Cambridge University Press, Cambridge

Vos, P. C. & H. deWolf 1993 Diatoms as a tool for reconstructing sedimentary environments in coastal wetlands; methodological aspects. *Hydrobiologica,* 269/270, 285-296

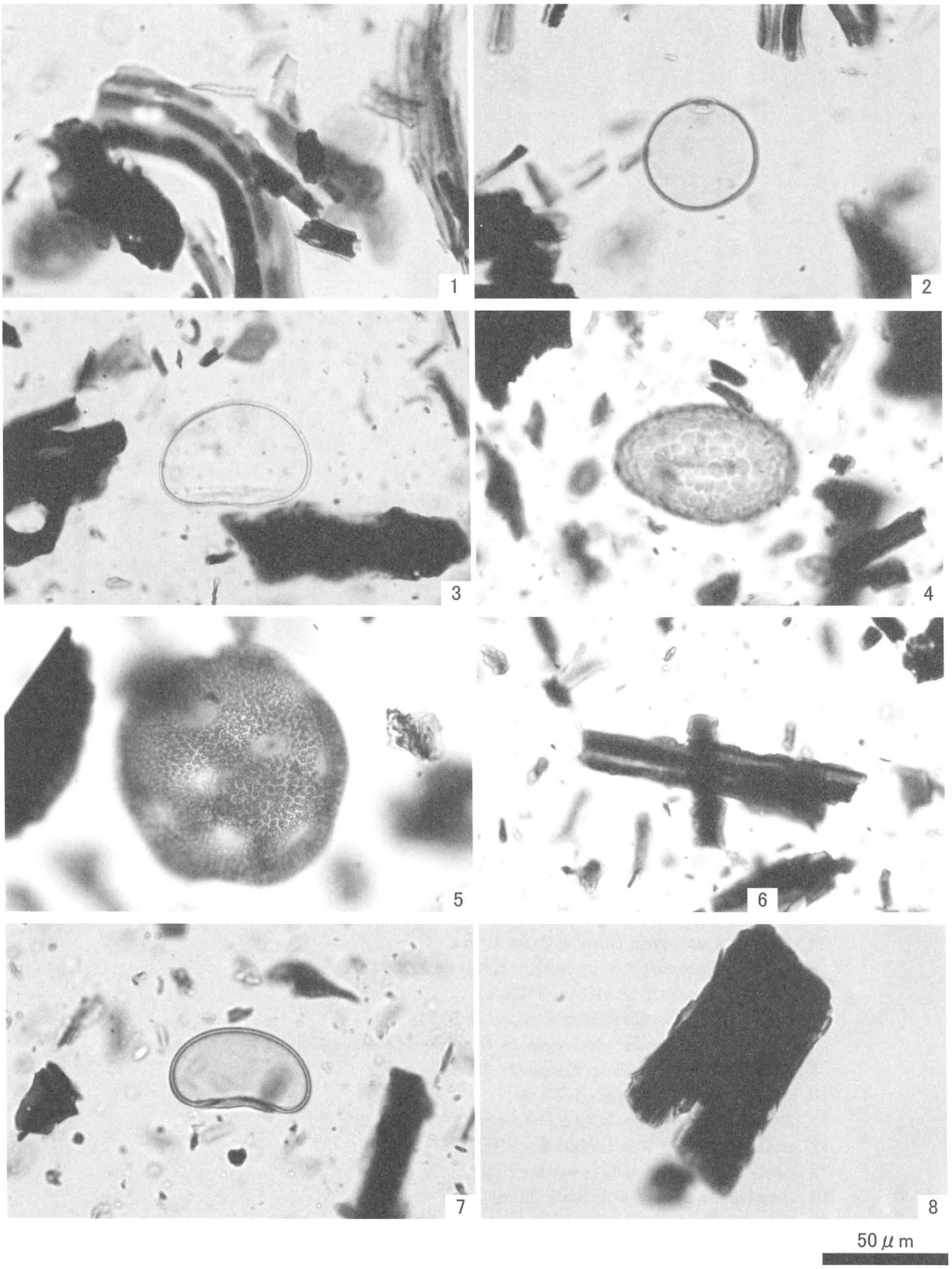
渡辺仁治・浅井一視・大塚泰介・辻彰洋・伯耆晶子　2005　『淡水珪藻生態図鑑』　内田老鶴圃，666p

柳沢幸夫　2000　「Ⅱ－１－３－２－(5)計数・同定」『化石の研究法―採集から最新の解析法まで―』化石研究会・共立出版株式会社，49-50



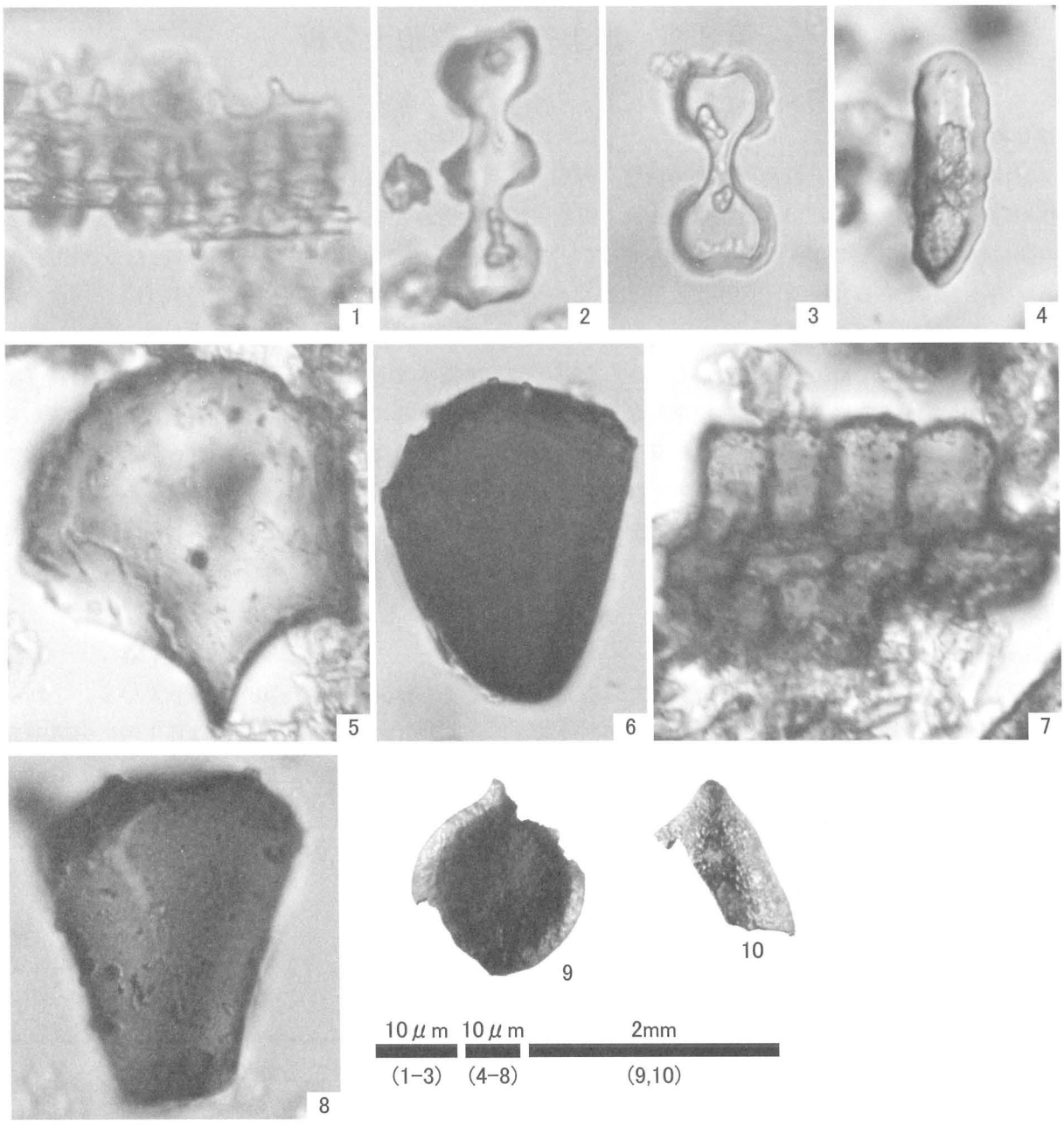
1 . *Nitzschia brevissima* Grunow(I-33; 3)
2 . *Hantzschia amphioxys* (Ehr.)Grunow (I-33; 4)
3 . *Pinnularia borealis* Ehrenberg(I-33; 4)
4 . *Nitzschia amphibia* Grunow (I-33 ;6)
5 . *Luticola goeppertiana* (Bleisch)D.G.Mann(N-23; 4)
6 . *Diploneis ovalis* (Hilse)Cleve(I-33; 6)
7 . *Placoneis elginensis* (Greg.)E.J.Cox (I-33; 6)
8 . *Placoneis elginensis* var. *neglecta* (Krasske)H.Kobayasi(N-23; 4)
9 . *Caloneis bacillum* (Grun.)Cleve (N-23; 2)
10 . *Navicula ignota* Krasske(I-33; 3)
11 . *Diadesmis brekkaensis* (J.B.Petersen)D.G.Mann(I-33; 3)
12 . *Luticola mutica* (Kuetz.)D.G.Mann(I-33; 4)
13 . *Staurosira construens* Ehrenberg (N-23; 2)
14 . *Amphora montana* Krasske(I-33; 6)
15 . *Aulacoseira ambigua* (Grun.)Simonsen(N-23; 2)
16 . *Pseudostaurosira brevistriata* (Grun.)Williams & Round(I-33; 3)
17 . *Diadesmis biceps* Arnott ex Grunow in Van Heurck(I-33; 3)

写真７　珪藻化石



1．状況写真(I-33; 3)
2．状況写真(イネ属)(I-33; 4)
3．状況写真(シダ類胞子)(I-33; 5)
4．状況写真(シダ類胞子)(I-33; 6)
5．状況写真(ヒルガオ属)(N-23; 2)
6．状況写真(N-23; 3)
7．状況写真(シダ類胞子)(N-23; 4)
8．状況写真(N-23; 5)

写真８　花粉化石



1．イネ属短細胞列(I-33; 3)
2．ススキ属短細胞珪酸体(I-33; 3)
3．ススキ属短細胞珪酸体(N-23; 3)
4．イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(I-33; 4)
5．ヨシ属機動細胞珪酸体(I-33; 6)
6．ウシクサ族機動細胞珪酸体(I-33; 3)
7．ウシクサ族機動細胞列(I-33; 6)
8．ウシクサ族機動細胞珪酸体(N-23; 3)
9．サナエタデ近似種 果実(N-23; 5)
10．タデ属 果実(N-23; 4)

写真９　植物珪酸体・種実遺体

第２節　出土弥生土器胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

沼津市西通北遺跡は、駿河湾奥部の海岸を縁取る砂州の上に立地する。この砂州は、狩野川下流の扇状地性三角州と富士川河口扇状地に挟まれて東西に細長く発達しており、砂州と富士山・愛鷹山南麓との間には浮島ヶ原とよばれる低湿地が広がっている。西通北遺跡の位置する砂州が完成したのは約2,000年前頃とされている（松原 1989）が、これまでの発掘調査では弥生時代中期、古墳時代および古代の遺構・遺物が確認されている。

今回の分析調査では、調査区内から出土した弥生時代中期中葉および同後葉とされた土器の材質（胎土）について、その岩石学的な特性を明らかにするとともに、その特性と既存の地質情報との比較から土器原材料の地域性を検討する。特に今回の試料は考古学的所見により、静岡県中部（西駿河）や神奈川県西部（西相模）等の地域性が想定できるとされる特徴を有するものが含まれることから、これらの型式と胎土の特徴および地域性との対応関係を確認することにより、各試料の搬入あるいは在地の可能性についても検討する。

１．試料

試料は、西通北遺跡の環濠より出土した弥生土器片10点で、分析番号１～10が付されている。これらのうち、分析番号１～４の４点は弥生時代中期後葉とされ、分析番号５～10の６点は弥生時代中期中葉とされている。発掘調査所見によれば、分析番号３は静岡県中部（西駿河）における弥生時代中期後葉の有東式併行と考えられており、分析番号７、９は神奈川県西部（西相模）における弥生時代中期中葉の中里式併行であると考えられている。さらに分析番号４および９は、弥生時代中期の太平洋沿岸部に多くみられる、「磨消線文甕」に相当すると考えられている。

各試料の出土位置、時期、器種などを一覧にして、第18表に示す。

第18表　試料一覧および胎土分類

分析番号	出土位置		時期	器種	注記	発掘調査所見	胎土分類												
							鉱物・岩石組成						粒径組成					砕屑物		
							A	B	C	D	E	F	1	2	3	4	5	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
1	環濠	第3層	弥生中期後葉	壺	SNDK K-27 S150 Ⅲ層　090305			■									■		■	
2	環濠	第3層	弥生中期後葉	甕	SNDK M-24 S150 Ⅲ層　090302						■			■					■	
3	環濠	第4層	弥生中期後葉	壺	SNDK J-28 S150 Ⅳ層　090115	静岡県中部（西駿河）有東式併行					■		■						■	
4	環濠	第4層	弥生中期後葉	甕	SNDK I-32 S150 Ⅳ層	磨消線文甕（太平洋沿岸部）	■										■	■		
5	環濠	第5層	弥生中期中葉	壺	SNDK1738							■			■					■
6	環濠	第5層	弥生中期中葉	甕	SNDK M-24 S150 Ⅴ層　090304						■				■					■
7	環濠	第6層	弥生中期中葉	壺	SNDK1718	神奈川県西部（西相模）中里式併行						■				■				■
8	環濠	第6層	弥生中期中葉	甕	SNDK1537	磨消線文甕（太平洋沿岸部）				■					■			■		
9	環濠	底直上	弥生中期中葉	壺	SNDK1570	神奈川県西部（西相模）中里式併行						■				■				■
10	環濠	底直上	弥生中期中葉	甕	SNDK1571				■						■			■		

２．分析方法

ここでは、松田ほか（1999）の方法を用いる。この方法は、土器の薄片を作製して、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べるものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いも見出すことができるため、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。したがって、単に岩片や鉱物片の種類のみを捉えただけでは、試料間の胎土の区別ができないことが予想される、同一の地質分布範囲内で作られた土器の胎土分析には、松田ほか（1999）の方法は適当である。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に0.03㎜の厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5㎜間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の３次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

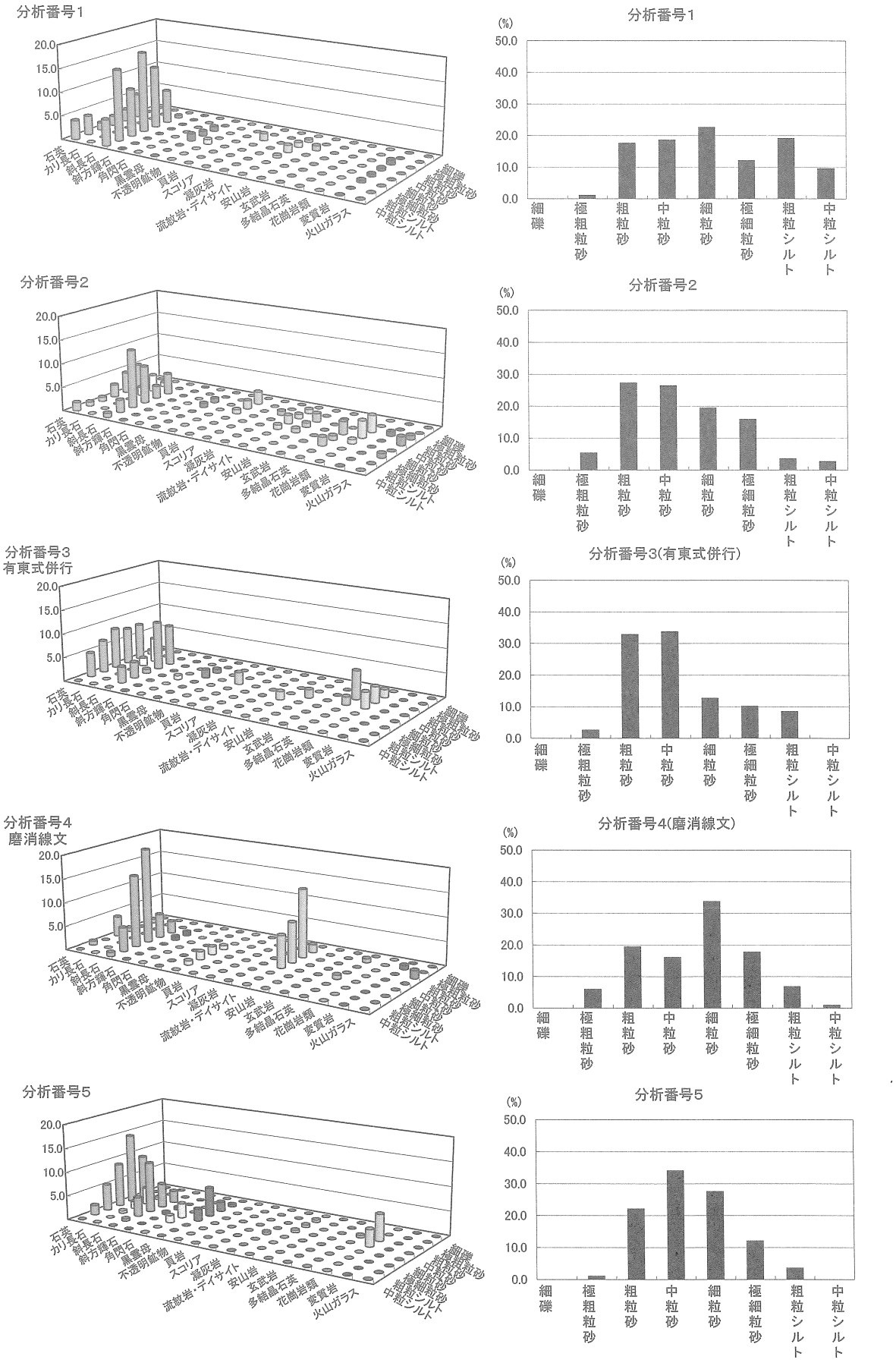
３．結果

結果を第19表、第96～98図に示す。検出された鉱物片および岩石片の種類とその量比は、試料によって比較的明瞭に異なるものとほぼ同様のものとが認められた。すなわち、グルーピングすることが可能である。特に鉱物片では、斜長石の多い組成の試料と石英と斜長石が同量程度に多い組成の試料が認められる。また岩石片の組成に注目すると、流紋岩・デイサイトが特に多い組成から、それに安山岩や玄武岩の加わる組成、さらにそれらに加えて堆積岩類や花崗岩類ホルンフェルスまで含む組成が認められるほか、花崗岩類の多い組成も認められた。このような分析結果から、上述した順に、以下に示すA～F類までの６種類を設定することができる。

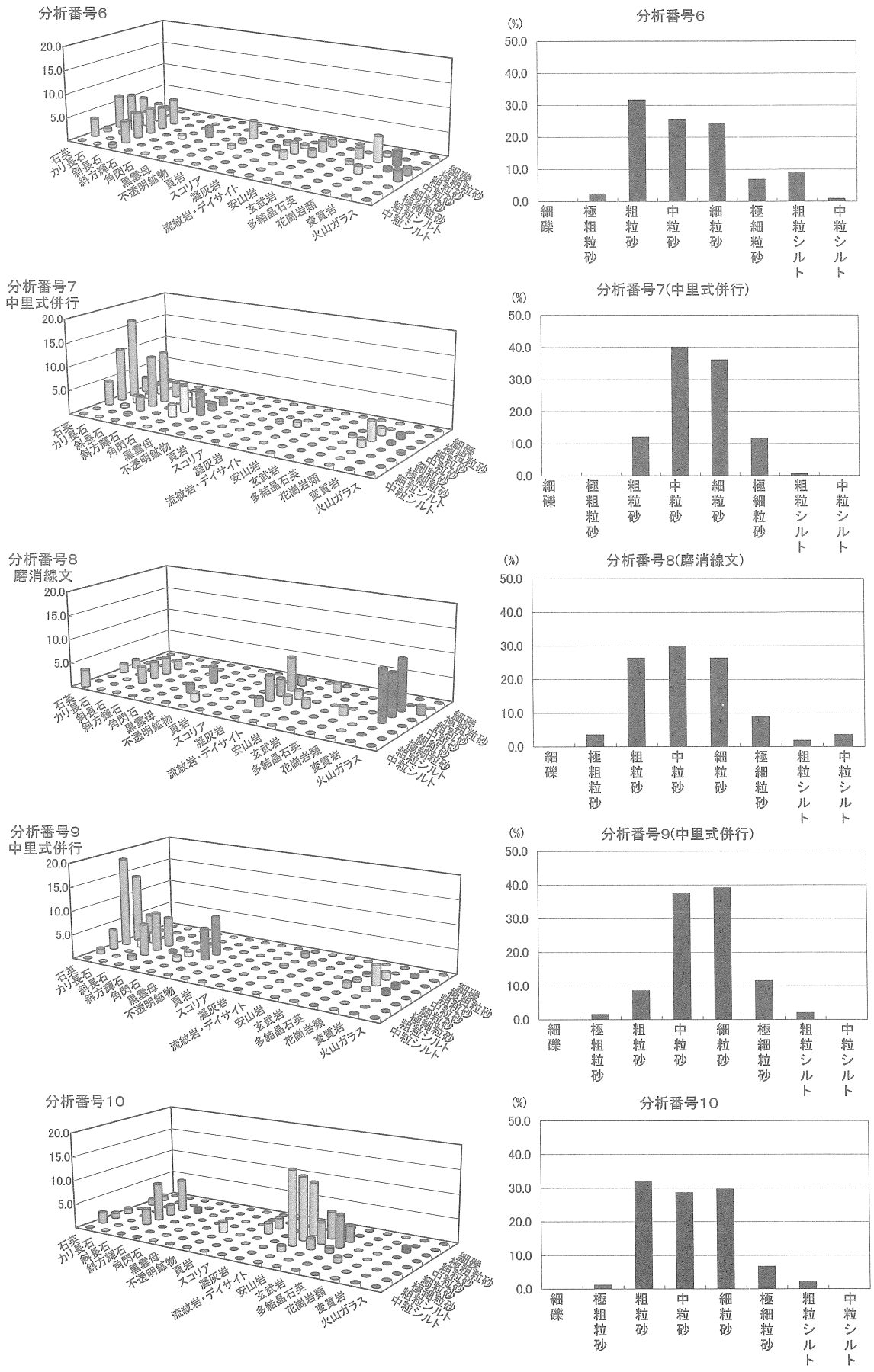
A類：斜長石の鉱物片と流紋岩・デイサイトの岩石片が突出して多く含まれる組成。斜長石以外の鉱物片では、少量の石英と不透明鉱物を伴い、微量の斜方輝石と単斜輝石が含まれる。流紋岩・デイサイト以外の岩石片では、微量の軽石、多結晶石英、変質岩、火山ガラスが含まれる。なお、流紋岩・デイサイトの斑晶は輝石であり、石基には二次鉱物の黒雲母が含まれている。また、変質岩は安山岩または玄武岩の風化岩である。今回の試料では、分析番号４の１点がA類に分類される。

B類：A類と同様に鉱物片では斜長石が突出して多いが、岩石片では流紋岩・デイサイトがやや多く、スコリアや安山岩および変質岩も少量ではあるが同量程度に含まれる。斜長石以外の鉱物片では、少量の石英と微量の黒雲母および不透明鉱物が含まれる。流紋岩・デイサイトは珪長岩状組織を示し、A類と同様に斑晶には輝石、石基には二次鉱物の黒雲母が認められる。また、安山岩には沸石を含むものも認められた。変質岩は風化岩などである。今回の試料では、分析番号１の１点がB類に分類される。

C類：A類と同様に鉱物片では斜長石が多く、岩石片では流紋岩・デイサイトが多い。ただし、安山岩および玄武岩の岩石片も少量伴われることが特徴となる。斜長石以外の鉱物片では、少量の石英と微量の斜方輝石および不透明鉱物を伴い、岩石片は上述した種類以外に微量のスコリアと多結晶石英および変質岩が含まれる。流紋岩・デイサイトの特徴は、上述したA類およびB類と同様である。また、安山岩と玄武岩は、新鮮で変質していない第四紀の火山岩に由来するものが多い。今回の試料では、分析番号10の１点がC類に分類される。



第96図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（%）および粒径組成①

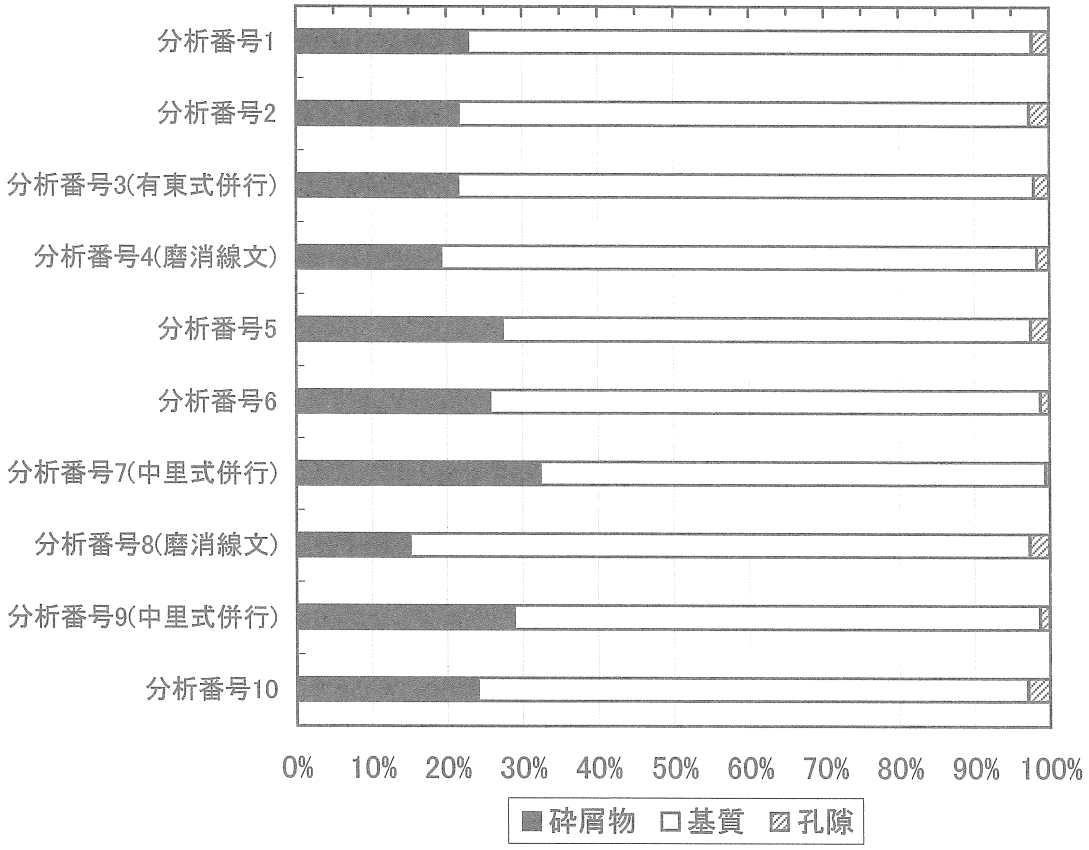


第97図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（％）および粒径組成②

第19表　薄片観察結果

分析番号	砂粒区分		砂粒の種類構成																																												合計
			鉱物片																	岩石片																						その他				
			石英	クリストバライト	カリ長石	斜長石	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	アクチノ閃石	緑簾石	白雲母	黒雲母	ジルコン	褐簾石	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	礫岩	軽石	スコリア	凝灰岩	溶結凝灰岩	流紋岩・デイサイト	デイサイト	安山岩	玄武岩	多結晶石英	花崗岩類	珪長岩	ドレライト	緑色岩	ホルンフェルス	粘板岩	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	植物片	珪藻	海綿骨針	植物珪酸体	
1	砂	細礫																																											0
		極粗粒砂				1																					1																			2
		粗粒砂	10			14									2										3			2		2										2								35
		中粒砂	5			26									2													3												1								37
		細粒砂	4			34									3			2										1												1								45
		極細粒砂	3			20																																	1								24
		粗粒シルト	8			30																																									38
		中粒シルト	8			11																																									19
	基質																																												653
	孔隙																																												20
2	砂	細礫																																											0
		極粗粒砂			1														3							1											1								6
		粗粒砂	6		4	5									1				1	2					1		1		2				4				1	1		1		1					31
		中粒砂	5		2	3									1					1	1							2		1		3	4				3				2	2					30
		細粒砂	3			9			2											4								1		1		1	1															22
		極細粒砂	1			14																									2									1					18
		粗粒シルト	1			3																																									4
		中粒シルト	2			1																																									3
	基質																																												398
	孔隙																																												14
3	砂	細礫																																											0
		極粗粒砂	1																														2													3
		粗粒砂	9		6	10									1																		7	4				2									39
		中粒砂	9		2	12									2					3										2			2	4				2				2						40
		細粒砂	10			1				1									1								2																			15
		極細粒砂	8			4																																									12
		粗粒シルト	6			4																																									10
		中粒シルト																																											0
	基質																																												421
	孔隙																																												11
4	砂	細礫																																											0
		極粗粒砂	1																				2				2				1								1								7
		粗粒砂				3		1																				17															2					23
		中粒砂	1			6		1									1									10																				19
		細粒砂	5			24												2									8				1															40
		極細粒砂				18			1									2																											21
		粗粒シルト	1			6												1																											8
		中粒シルト				1																																									1
	基質																																												488
	孔隙																																												10
5	砂	細礫																																											0
		極粗粒砂													1											1																				2
		粗粒砂	18		1	5									4							1						1				1	11				2									44
		中粒砂	29		7	10		1							12													1					7				1									68
		細粒砂	18		3	21		1		6					5												1																				55
		極細粒砂	11		1	8				3			1																																24
		粗粒シルト	4			1							2																																7
		中粒シルト																																											0
	基質																																												512
	孔隙																																												18

分析番号	砂粒区分		砂粒の種類構成																																										合計
			鉱物片																岩石片																						その他				
			石英	クリストバライト	カリ長石	斜長石	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	アクチノ閃石	緑簾石	白雲母	黒雲母	ジルコン	褐簾石	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	礫岩	軽石	スコリア	凝灰岩	溶結凝灰岩	流紋岩・デイサイト	デイサイト	安山岩	玄武岩	多結晶石英	花崗岩類	珪長岩	ドレライト	緑色岩	ホルンフェルス	粘板岩	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	植物片	珪藻	海綿骨針	植物珪酸体	
6	砂	細礫																																												0
	砂	極粗粒砂																										2			1															3
	砂	粗粒砂	6		5	7																5						1		1		3		3	7							4								42
	砂	中粒砂	8		4	6			1					3					1						1		3		2		1		1						1		2				34
	砂	細粒砂	9		5	7				1											1							2					2				2					3				32
	砂	極細粒砂	1		1	7																																							9
	砂	粗粒シルト	5			6																																							1	12
	砂	中粒シルト				1																																									1
	基質																																													378
	孔隙																																													6
7	砂	細礫																																												0
	砂	極粗粒砂																																												0
	砂	粗粒砂	6		4	6									3																		3							2								24
	砂	中粒砂	33		2	21				7			1		3											1		2				1	8							1								80
	砂	細粒砂	22		3	21			1	11						10																		3									1					72
	砂	極細粒砂	10		1	6				5			1																																23
	砂	粗粒シルト				1																																									1
	砂	中粒シルト																																												0
	基質																																													416
	孔隙																																													3
8	砂	細礫																																												0
	砂	極粗粒砂																								1				1																	2
	砂	粗粒砂				1																			4																6	3	1					15
	砂	中粒砂	1			2									2											2		1						1						5	2		1			17
	砂	細粒砂	1			2																			3		1		1		1								6								15
	砂	極細粒砂				2									1										1																		1			5
	砂	粗粒シルト																1																													1
	砂	中粒シルト	2																																												2
	基質																																													311
	孔隙																																													10
9	砂	細礫																																												0
	砂	極粗粒砂																								2														1								3
	砂	粗粒砂	9			1				1																1				1	3	1													17
	砂	中粒砂	28		4	12								16											1						1	8	1			2			2								75
	砂	細粒砂	37		3	16		1		2				13																	2	1						1	2								78
	砂	極細粒砂	8			13				2																																			23
	砂	粗粒シルト	2			2																																								4
	砂	中粒シルト																																												0
	基質																																													484
	孔隙																																													9
10	砂	細礫																																												0
		極粗粒砂	1																																												1
		粗粒砂	1			6		1																	2			10		5	3										1								29
		中粒砂				2																			2			12		4	6																26
		細粒砂	1			7												2									14		2	1																27
		極細粒砂	1			3																						1				1																6
		粗粒シルト	2																																												2
		中粒シルト																																												0
	基質																																													277
	孔隙																																													11



第98図　砕屑物・基質・孔隙の割合

D類：全体的に砂粒が少量しか含まれないが、その中で鉱物片では斜長石が多く、岩石片では凝灰岩と変質岩がやや多い。斜長石以外の鉱物片では微量の石英、黒雲母および不透明鉱物を伴い、岩石片では他に微量の流紋岩・デイサイト、安山岩、多結晶石英、珪長岩、珪化岩、変質岩、火山ガラスも含まれる。変質岩は風化した凝灰岩や火山岩などである。今回の試料では、分析番号８の１点がD類に分類される。

E類：鉱物片では石英と斜長石が同量程度に多く、それらよりやや少量のカリ長石を伴い、他に微量の単斜輝石、角閃石、黒雲母を含む。岩石片では、チャート、頁岩、砂岩の堆積岩類、凝灰岩、流紋岩・デイサイト、安山岩の火砕岩・火山岩類、そして多結晶石英と花崗岩類およびホルンフェルスおよび変質岩、珪化岩など、多種類の岩石を少量ずつ含むことが特徴である。今回の試料では、分析番号２、３、６の３点がE類に分類される。

F類：鉱物片では石英と斜長石が同量程度に多く、少量のカリ長石、角閃石および黒雲母を含み、微量の斜方輝石と緑簾石も含む。岩石片は、全体的に少量であるが、その中では花崗岩類が比較的多いことが特徴である。花崗岩類以外の岩石片では、凝灰岩、流紋岩・デイサイト、多結晶石英、珪長岩、ホルンフェルスなどが微量ずつ含まれる。今回の試料では、分析番号５、７、９の３点がE類に分類される。

胎土中の砂粒の粒径組成では、試料によってモードとなる粒径が異なる。ここでは、全体的に粗粒の傾向から細粒の傾向に向かって１～４類までの分類ができる。

１類：中粒砂をモードとするが、粗粒砂も同程度に多く、これら２段階の粒径が突出して多い組成。

２類：粗粒砂をモードとするが、中粒砂も同程度に多く、さらに１類に比べて細粒砂と極細粒砂の割合も比較的高い組成。

３類：粗粒砂、中粒砂、細粒砂の３者が同程度に多く、いずれかがモードとなり、かつそれらが突出して多い組成。

４類：中粒砂または細粒砂をモードとし、両者が同程度に多く、かつこれらが突出して多い組成。

５類：細粒砂をモードとする組成

各試料の分類結果は第18表に併記する。全体的には３類が４点と多く、他の分類は、４類と５類が２点ずつ、１類と２類は１点ずつである。

砕屑物の量比（第98図）は、約15%から約35%までの範囲が示されることから、ここでは５％ごとに段階を区切り、砕屑物量の少ない順に15～20%をⅠ類、20～25%をⅡ類、25%以上をⅢ類とした。各試料の分類結果は、第18表に併記する。試料全体では、Ⅰ類が２点、Ⅱ類とⅢ類は４点ずつに分類された。

４．考察

(1)　胎土の地域性

A類からF類まで設定された鉱物片・岩石片の組成は、それぞれが土器の原材料となった土（一般には粘土と呼ばれることが多いが、実際にはシルトや砂も含まれている）の採取された場所の地質学的背景を反映している。したがって、今回分析対象とした計10試料には、地質学的背景の異なる６つの地域で製作された土器が混在していると考えることができる。

西通北遺跡の位置する砂州周辺の地形・地質について、沢村（1953, 1955）、日本の地質「中部地方Ⅰ」編集委員会（1988）、町田ほか編（2006）、杉山ほか（2010）などの記載により概観すると、すぐ東側には富士火山に由来する火山砕屑物からなる御殿場泥流堆積物により形成された、狩野川最下流の扇状地性三角州が分布する。御殿場泥流堆積物は、玄武岩角礫を主体とする堆積物である（町田 1964）。狩野川の扇状地性三角州南側の駿河湾沿いには、白浜層群と呼ばれる新第三紀中新世～鮮新世の火山岩・火砕岩（凝灰岩）から構成される静浦山地が分布する。白浜層群の火山岩・火砕岩のほとんどは安山岩質または玄武岩質であるが、沼津市獅子浜背後の山地斜面、伊豆の国市重寺付近の山地、同市神島付近の葛城山や城山にはデイサイトからなる貫入岩体が分布している。静浦山地の東側は、狩野川の沖積低地（田方平野）を挟んで、第四紀の安山岩質または玄武岩質の溶岩や火砕岩からなる多賀火山が位置し、その北側に接して安山岩質または玄武岩質の溶岩・火砕岩からなる箱根火山が分布する。なお多賀火山西麓の旧韮山町土手和田付近の山地は、白浜層群中のデイサイトの貫入岩体により構成されている。

また本遺跡の位置する砂州は、駿河湾沿いに西方に伸びて富士川扇状地に接する。この砂州は主に富士川系の礫によって構成されており、駿河湾奥部を東向きに流れる沿岸流によって形成されたと考えられている（松原 1984）。したがって、砂州の地質学的背景としては、富士川流域に分布する地質ということができる。上述した地質記載に、尾崎ほか（2002）などを加えて富士川流域の地質をみると、下流域の両岸には岩淵安山岩などの新第三紀鮮新世～第四紀前期更新世の安山岩類が分布するが、それより上流側の山地には富士川層群と呼ばれる新第三紀中新世の堆積岩類からなる地質が広く分布し、さらに上流の甲府盆地南側の山地には新第三紀中新世の凝灰岩類や火山岩類が分布、そして甲府盆地内の笛吹川流域には新第三紀中新世に貫入した花崗岩類からなる甲府深成岩体が分布している。おそらく、富士川扇状地を構成する堆積物中には、これら多種類の岩石片やそれに由来する鉱物片が含まれていると考えられる。そしてそれらが移動し、再堆積したものが砂州であり、移動中の淘汰はあるものの、その堆積物中には多種類の岩石片や鉱物片が含まれていると考えられる。

今回の胎土分類におけるA～F類のうち、A～D類までは斜長石が石英よりも多く、岩石片では火山岩および火砕岩を主体とする組成である。上述した地質学的背景との比較から、このような組成は西通北遺跡よりも東側の地域に由来する可能性が高いと考えられる。流紋岩・デイサイトの突出して多い組成

のA類は、白浜層群中に分布するデイサイトからなる貫入岩体の山地周縁部に由来する可能性がある。B類の流紋岩・デイサイトは同様に白浜層群中のデイサイトに由来すると考えられ、混在する安山岩も沸石を含むことから、同様に白浜層群を構成する安山岩に由来すると考えられる。また、同時に混在するスコリアについては、富士山の噴出物に由来すると考えられることから、B類は白浜層群からなる静浦山地と御殿場泥流堆積物からなる扇状地性三角州とが接する、沼津市市街地付近に由来する可能性があることが示唆される。C類については、流紋岩・デイサイトは白浜層群に由来すると考えられるが、これに第四紀火山噴出物に由来する安山岩と玄武岩とが混在することから、両地質からの砕屑物が混在する田方平野の沖積低地堆積物に由来する可能性がある。D類の主な岩石片である凝灰岩、流紋岩・デイサイト、安山岩はいずれも白浜層群に由来すると考えられることから、D類も静浦山地周縁部に由来する可能性がある。ただし、D類は、スコリアを含まないことでB類とは区別され、第四紀火山噴出物を含まないことでC類とは区別されることから、D類の由来する地域としては、静浦山地周縁部でも沼津市街地に近い北部ではなく、また田方平野内でもない山地斜面沿いの地域が想定し得る。

E類は、堆積岩類や花崗岩類などを含むことで、A～D類とは地質学的背景の大きく異なる地域に由来すると考えられる。上述した周辺地質記載との比較では、E類の岩石片の種類構成は、富士川流域の地質分布と非常に良く一致する。したがって、E類の由来する地域としては、第一に富士川扇状地が推定され、第二に西通北遺跡も含めた砂州の分布域内が推定される。現時点では、両地域の自然堆積物の鉱物・岩石組成などを得ていないため、いずれの地域に由来するかを判別することはできない。今後の分析事例の蓄積により、E類の由来する地域を特定できるものと考える。

F類も、A～D類とは鉱物・岩石組成が大きく異なり、さらに上述したE類とも岩石組成の違いは大きい。したがって、F類の由来する地域は、少なくとも沼津市周辺や富士川下流域ではないと考えられる。また、F類の特徴である花崗岩類は伊豆半島には分布しないから、伊豆半島全域もF類の由来する地域からは除外される。前述した周辺地質の記載では、花崗岩類が広く分布する地域として甲府盆地が認められる。甲府盆地を取り囲む地質の概略は、前述した尾崎ほか（2002）および日本の地質「中部地方Ⅰ」編集委員会（1988）でみることができる。前述したように、盆地南側の山地には西八代層群と呼ばれる新第三紀の火山岩・火砕岩が分布し、この地質は盆地西側の山地にも分布している。その西側山地の北部には、甲斐駒ヶ岳深成岩体と呼ばれる主に角閃石黒雲母花崗閃緑岩からなる地質が分布し、釜無川を挟んでその北東側には第四紀更新世の八ヶ岳火山が位置する。一方、盆地東側の笛吹川上流域には、前述した甲府深成岩体が広く分布する。甲府深成岩体を構成する岩石は、黒雲母花崗岩や角閃石黒雲母花崗閃緑岩などである。そして甲府市街地北側背後の山地は、新第三紀中新世～鮮新世とされるデイサイト・安山岩質の溶岩および火砕岩が分布している。F類の岩石組成では、花崗岩類に伴って微量の砂岩、凝灰岩、流紋岩・デイサイトが認められているが、安山岩はいずれの試料からも認められない。F類の由来する地域として甲府盆地を想定した場合は、おそらく八ヶ岳起源の安山岩類が比較的多く混在するであろう釜無川流域よりも、凝灰岩の混じる笛吹川流域の方が可能性は高いと考えられる。ただし現時点では、F類の由来する地域を甲府盆地に特定できないため、他の花崗岩類が広く分布する地域の可能性は十分にありえる。

⑵　型式と胎土との関係

第18表には、A～F類の鉱物・岩石組成、１～５類の粒径組成、Ⅰ～Ⅲ類の砕屑物量という胎土分類と各試料の時期や器種およびその他の所見が並べてある。時期と胎土との対応をみると、弥生時代中期後葉と弥生時代中期中葉では、いずれの胎土分類にも異なる傾向があることが看取される。弥生時代中期後葉ではA、B、Eの各類に分かれるが、弥生時代中期中葉ではF類が若干多い傾向を示し、他にC、D、Eの各類を伴い、後葉の土器で認められたA類およびB類は認められない。粒径組成では、弥生時代中期

後葉の土器は、粒径の粗い１類と２類、粒径の細かい５類とに分かれるが、弥生時代中期中葉の土器は、粒径の中程度の３類と４類から構成されている。砕屑物の量では、弥生時代中期後葉の土器は中程度のⅡ類が多い傾向にあり、少量のⅠ類を伴うが、弥生時代中期中葉の土器は多量のⅢ類が若干多い傾向にあり、少量のⅠ類を伴うという構成である。

以上述べた時期と胎土との対応関係から、弥生時代中期中葉と後葉とでは、使用されている土器の製作と供給に関わる事情が異なっていたと考えられる。特に鉱物・岩石組成の違いからは、製作地の違いが推定され、粒径組成および砕屑物量の違いからは、素地土の調整（砂と粘土の混合の仕方など）も異なっていたことが推定される。中でも中葉のE類と後葉のE類では、粒径組成・砕屑物量とも異なる分類になる事実は、製作地域が同じでも素地土の調整が時期により異なっていたことを示唆するものであろう。

現時点では、各胎土分類の地域性もまだ仮説の段階であり、今後愛鷹山麓から駿河湾沿岸および伊豆半島も含めた地域において分析例を蓄積することにより、より確かな土器製作事情を推定することができるものと期待される。

引用文献

町田洋　1964　「Tephrochronologyによる富士火山とその周辺地域の発達史―第四紀末期について―（その１）（その２）」『地学雑誌』73, 293-308, 337-350

町田洋・松田時彦・海津正倫・小泉武栄編　2006　『日本の地形』５　中部, 東京大学出版会, 385p.

松原彰子　1989　「完新世における砂州地形の発達過程―駿河湾沿岸低地を例として―」『地理学評論』62A, 160-183

松田順一郎・三輪若葉・別所秀高　1999　「瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察―岩石学的・堆積学的による―」『日本文化財科学会第16回大会発表要旨集』, 120-121

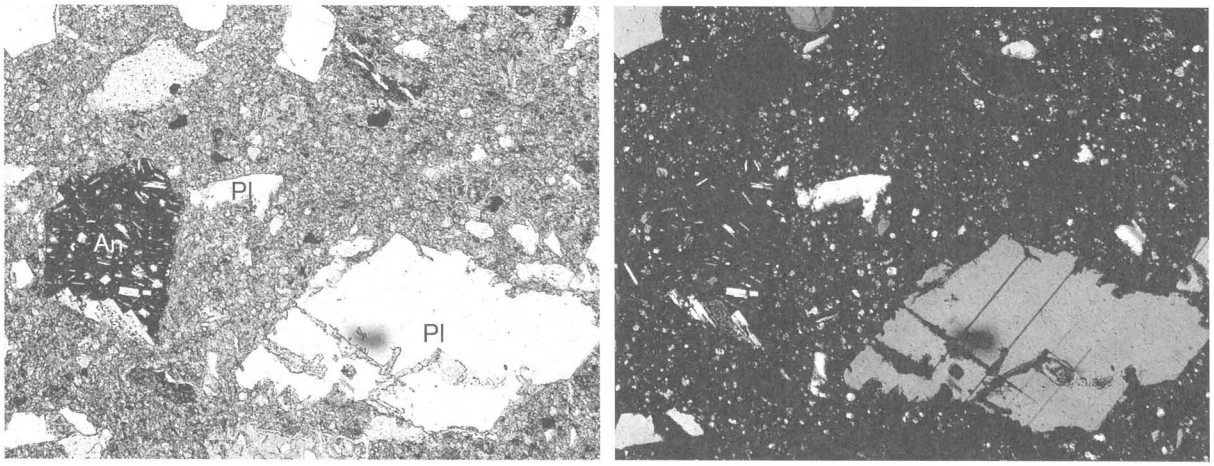
日本の地質「中部地方Ⅰ」編集委員会　1988　『日本の地質』４　中部地方Ⅰ　共立出版, 330p

尾崎正紀・牧本博・杉山雄一・三村弘二・酒井彰・久保和也・加藤禎一・駒澤正夫・広島俊男・須藤定久　2002　『20万分の１地質図幅「甲府」』　地質調査所

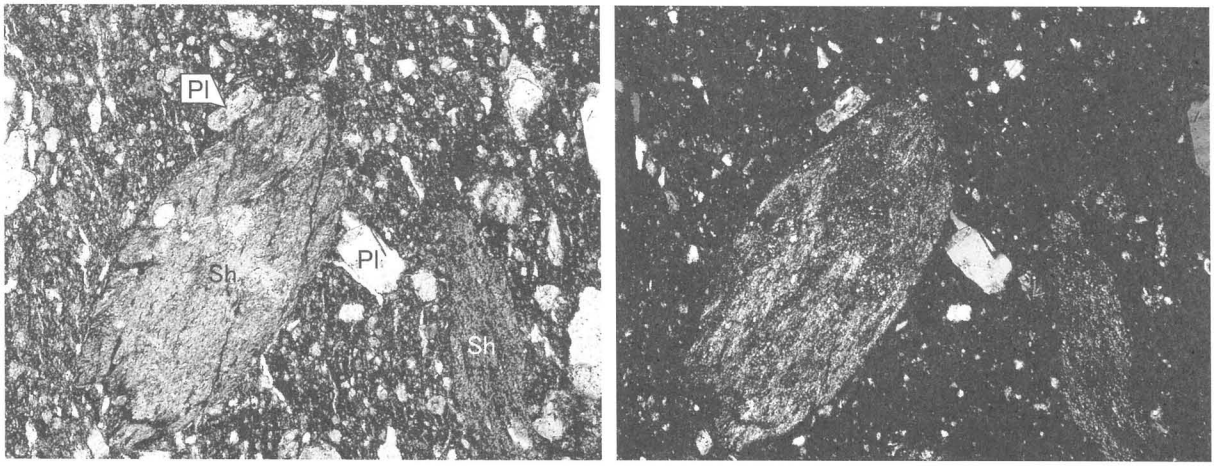
沢村孝之助　1953　『７万５千分の１地質図幅「沼津」』　地質調査所

沢村孝之助　1955　『５万分の１地質図幅「修善寺」』　地質調査所, 47p

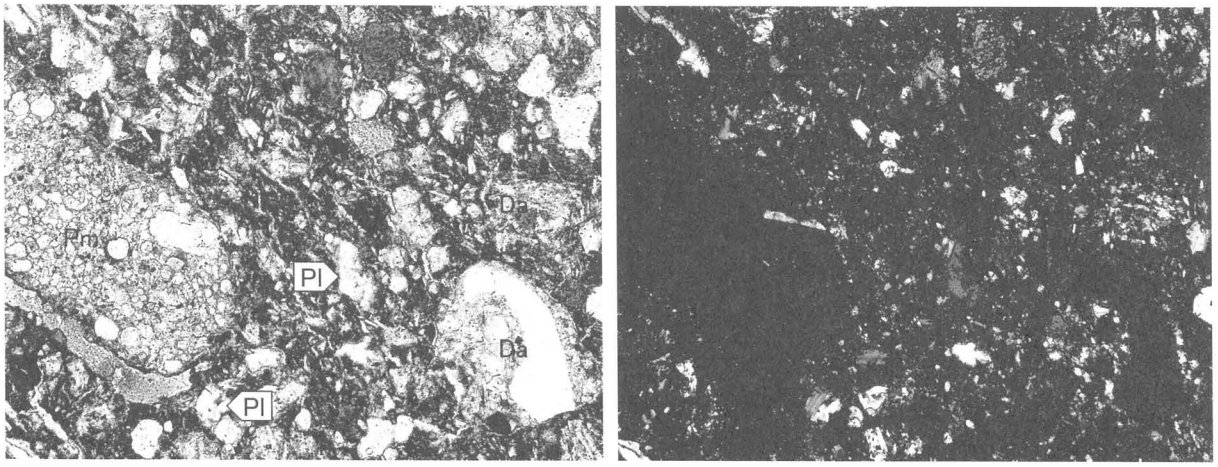
杉山雄一・水野清秀・狩野謙一・村松　武・松田時彦・石塚治・及川輝樹・高田亮・荒井晃作・岡村行信・実松健造・高橋正明・尾山洋一・駒澤正夫　2010　『20万分の１地質図幅「静岡・御前崎」（第２版）』　独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター



1.分析番号1(環濠第3層　弥生中期後葉　壺)



2.分析番号2(環濠第3層　弥生中期後葉　甕)

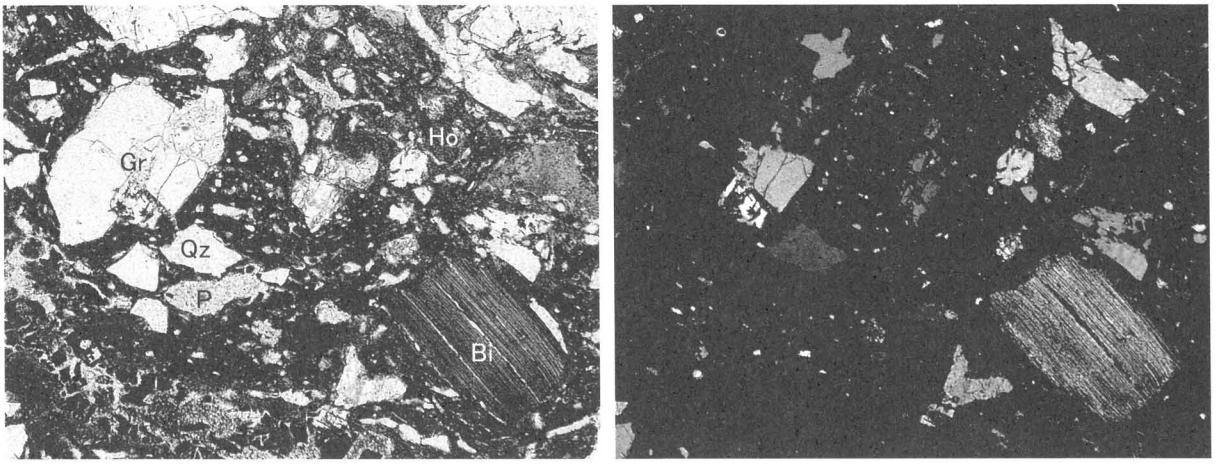


3.分析番号4(環濠第4層　弥生中期後葉　甕　磨消線文甕)

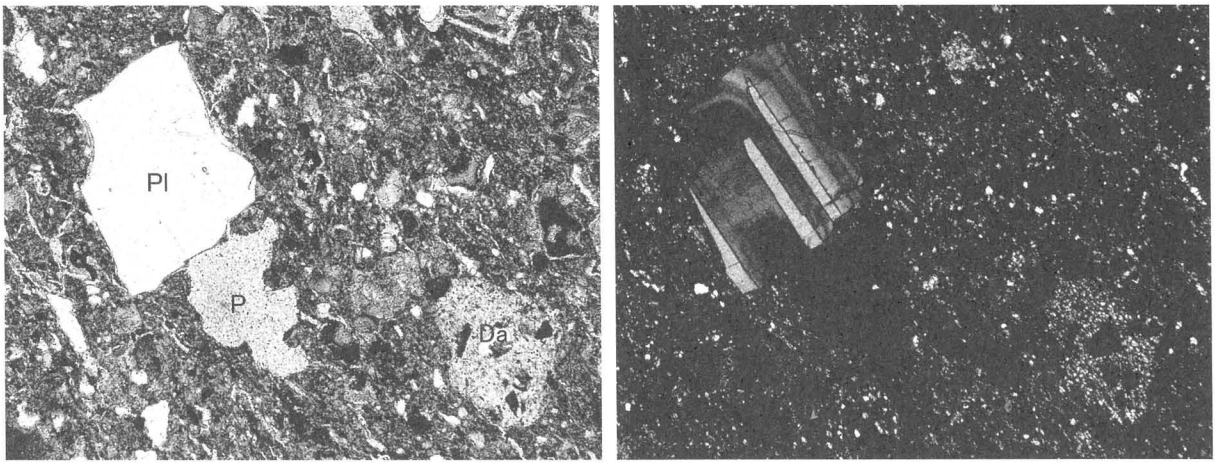
0.5mm

Pl:斜長石. Sh:頁岩. Pm:軽石. Da:デイサイト. An:安山岩.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

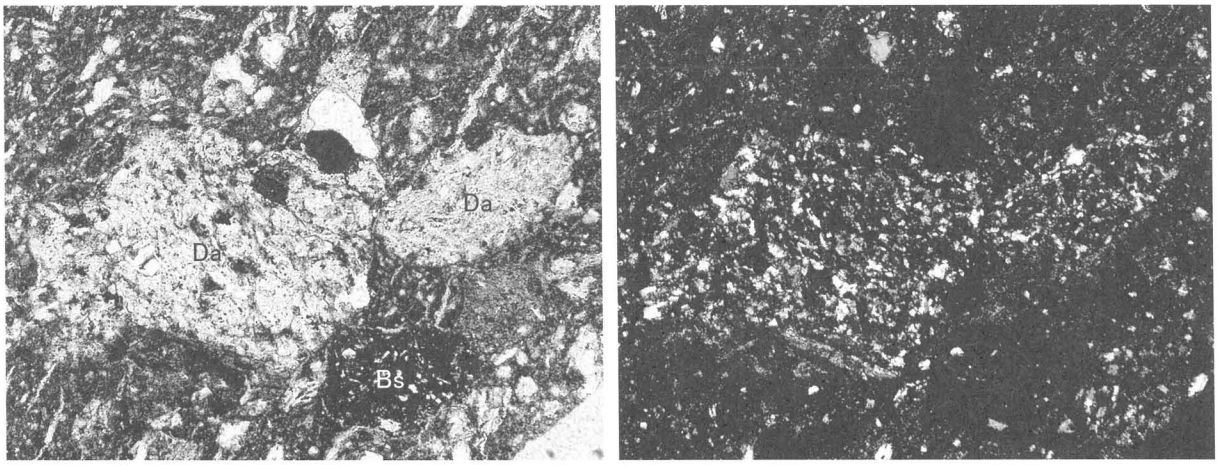
写真10　胎土薄片①



4.分析番号5(環濠第5層　弥生中期中葉　壺)



5.分析番号8(環濠第6層　弥生中期中葉　甕　磨消線文甕)



6.分析番号10(環濠底直上　弥生中期中葉　甕)

0.5mm

Qz:石英. Pl:斜長石. Ho:角閃石. Bi:黒雲母. Da:デイサイト. Bs:玄武岩. Gr:花崗岩. P:孔隙.

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

写真11　胎土薄片②

第３節　放射性炭素年代（AMS測定）

株式会社加速器分析研究所

１．測定対象試料

西通北遺跡は、静岡県沼津市小諏訪・大諏訪地内（北緯35° 6′38″、東経138°50′12″）に所在する。南は千本浜、北は愛鷹山をのぞむ標高６m程の低地で、浮島ヶ原と呼ばれる低湿地帯の東縁にあたる。測定対象試料は、環濠の直上包含層出土木炭（No. 1 ：IAAA-100632、No. 2 ：IAAA-100633）、９号土坑列出土木炭（No. 3 ：IAAA-100634）、157号土坑出土木炭（No. 4 ：IAAA-100635）、環濠第４層出土木炭（No. 5 ：IAAA-100636）、同第５層出土木炭（No. 6 ：IAAA-100637）の合計６点である（第20表）。

２．測定の意義

No. 1 、２、５、６の測定では環濠の存続期間を明らかにする。No. 3 の測定により土坑列の存続時期を確認する。No. 4 の測定で環濠の内側にある土坑の存続期間を明らかにし、環濠との前後関係を知る。

３．化学処理工程

(1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

(2) 酸－アルカリ－酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常１mol/ℓ（１M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから１Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Mに達した時には「AAA」、１M未満の場合は「AaA」と第20表に記載する。

(3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

(4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。

(5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

(6) グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

４．測定方法

3MVタンデム加速器（NEC Pelletron 9SDH－2）をベースとした^{14}C－AMS専用装置を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（$^{13}C/^{12}C$）、^{14}C濃度（$^{14}C/^{12}C$）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

５．算出方法

(1) δ^{13}Cは、試料炭素の^{13}C濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第20表）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

(2) ^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第20表に、補正していない値を参考値として第21表に示した。^{14}C年代と誤差は、下１桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（±１σ）は、試料の^{14}C年代がその

誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

(3) pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため、補正した値を第20表に、補正していない値を参考値として第21表に示した。

(4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（１σ＝68.2％）あるいは２標準偏差（２σ＝95.4％）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C補正を行い、下一桁を丸めない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース（Reimer et al. 2009）を用い、OxCalv4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第21表に示した。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

６．測定結果

環濠に関わる試料の^{14}C年代は、直上包含層出土のNo.１が90±20yrBP、No.２が860±30yrBP、第４層出土のNo.５が2500±30yrBP、第５層出土のNo.６が2240±20yrBPである。環濠覆土出土試料について検討すると、覆土第４、５層から弥生時代中期の土器（中期中葉主体）が出土していることに照らして、暦年較正年代（１σ）でBC４世紀前半とBC３世紀前葉から中葉頃の範囲が示されている第５層出土No.６の年代値が整合的と考えられる。第４層出土のNo.５はNo.６よりも若干古い値を示した。直上包含層のNo.１は暦年較正年代（１σ）で17世紀末以降、No.２は12世紀後半から13世紀初頭の範囲となっている。周辺の包含層から弥生時代中期中葉から奈良・平安時代までの土器が混在して出土していることとあわせて、これら２点の年代値は環濠が存続した期間の下限を矛盾なく示している。

９号土坑列出土木炭No.３の^{14}C年代はModernである。

157号土坑出土木炭No.４の^{14}C年代は180±30yrBPで、暦年較正年代（１σ）は17世紀後半以降の範囲となった。157号土坑は環濠の内側に位置しているが、この土坑が環濠よりもずっと新しい時期の遺構である可能性を示す結果となった。

炭素含有率はすべて60％を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

第20表　測定結果①

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}C$（‰）（AMS）	$\delta^{13}C$補正あり	
						LibbyAge（yrBP）	pMC（%）
IAAA-100632	No. 1	遺構：環濠　層位：直上包含層	木炭	AAA	−23.20±0.38	90±20	98.94±0.30
IAAA-100633	No. 2	遺構：環濠　層位：直上包含層	木炭	AAA	−25.25±0.65	860±30	89.80±0.28
IAAA-100634	No. 3	遺構：9号土坑列　層位：覆土	木炭	AAA	−22.91±0.63	Modern	104.02±0.32
IAAA-100635	No. 4	遺構：157号土坑　層位：覆土	木炭	AAA	−26.03±0.74	180±30	97.84±0.31
IAAA-100636	No. 5	遺構：環濠　層位：第4層	木炭	AaA	−23.45±0.61	2,500±30	73.24±0.24
IAAA-100637	No. 6	遺構：環濠　層位：第5層	木炭	AaA	−24.76±0.66	2,240±20	75.68±0.23

[#3674]

第21表　測定結果②

測定番号	$\delta^{13}C$補正なし		暦年較正用（yrBP）	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-100632	60±20	99.30±0.29	85±24	1698calAD-1724calAD（21.1%） 1815calAD-1834calAD（14.6%） 1878calAD-1917calAD（32.5%）	1691calAD-1730calAD（25.8%） 1810calAD-1923calAD（69.6%）
IAAA-100633	870±20	89.76±0.25	863±25	1164calAD-1213calAD（68.2%）	1050calAD-1083calAD（ 8.5%） 1125calAD-1136calAD（ 1.8%） 1151calAD-1225calAD（83.5%） 1233calAD-1242calAD（ 1.1%） 1247calAD-1252calAD（ 0.6%）
IAAA-100634	Modern	104.46±0.29	Modern		
IAAA-100635	190±20	97.63±0.27	175±25	1668calAD-1683calAD（12.3%） 1736calAD-1782calAD（38.0%） 1798calAD-1805calAD（ 5.3%） 1933calAD-1949calAD（12.6%）	1661calAD-1695calAD（18.4%） 1726calAD-1814calAD（55.6%） 1839calAD-1842calAD（ 0.3%） 1853calAD-1867calAD（ 1.1%） 1918calAD-1954calAD（20.0%）
IAAA-100636	2,480±30	73.47±0.22	2,501±26	763calBC-745calBC（ 9.4%） 688calBC-681calBC（ 3.6%） 673calBC-665calBC（ 4.0%） 647calBC-551calBC（51.2%）	776calBC-537calBC（94.9%） 529calBC-524calBC（ 0.5%）
IAAA-100637	2,240±20	75.71±0.21	2,238±24	378calBC-354calBC（19.3%） 291calBC-231calBC（48.9%）	388calBC-347calBC（25.7%） 318calBC-207calBC（69.7%）

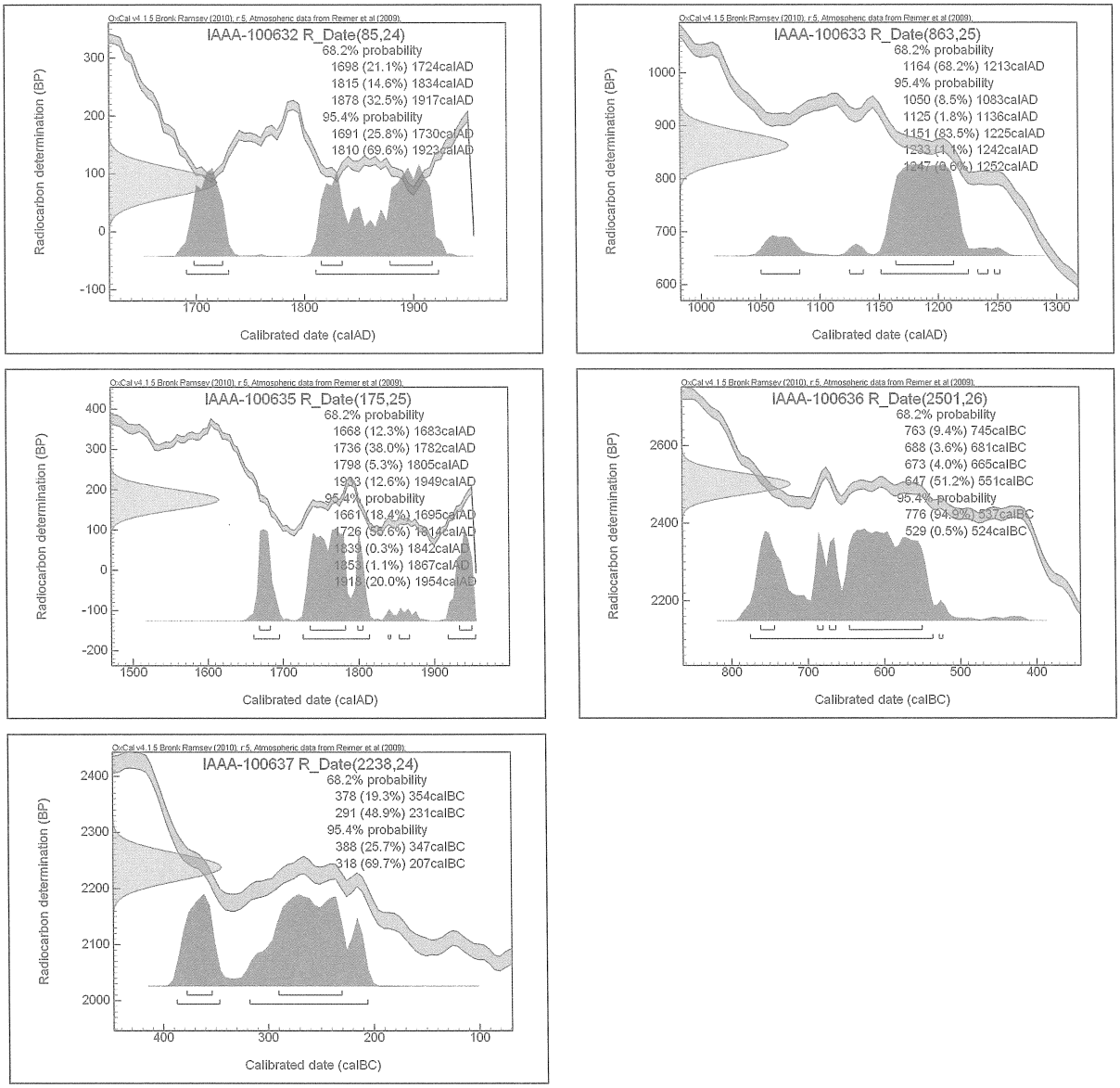
[参考値]

文献

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19 (3), 355-363

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51 (1), 337-360

Reimer, P. J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0 -50, 000 years cal BP, *Radiocarbon* 51 (4), 1111-1150



第99図　暦年較正年代グラフ

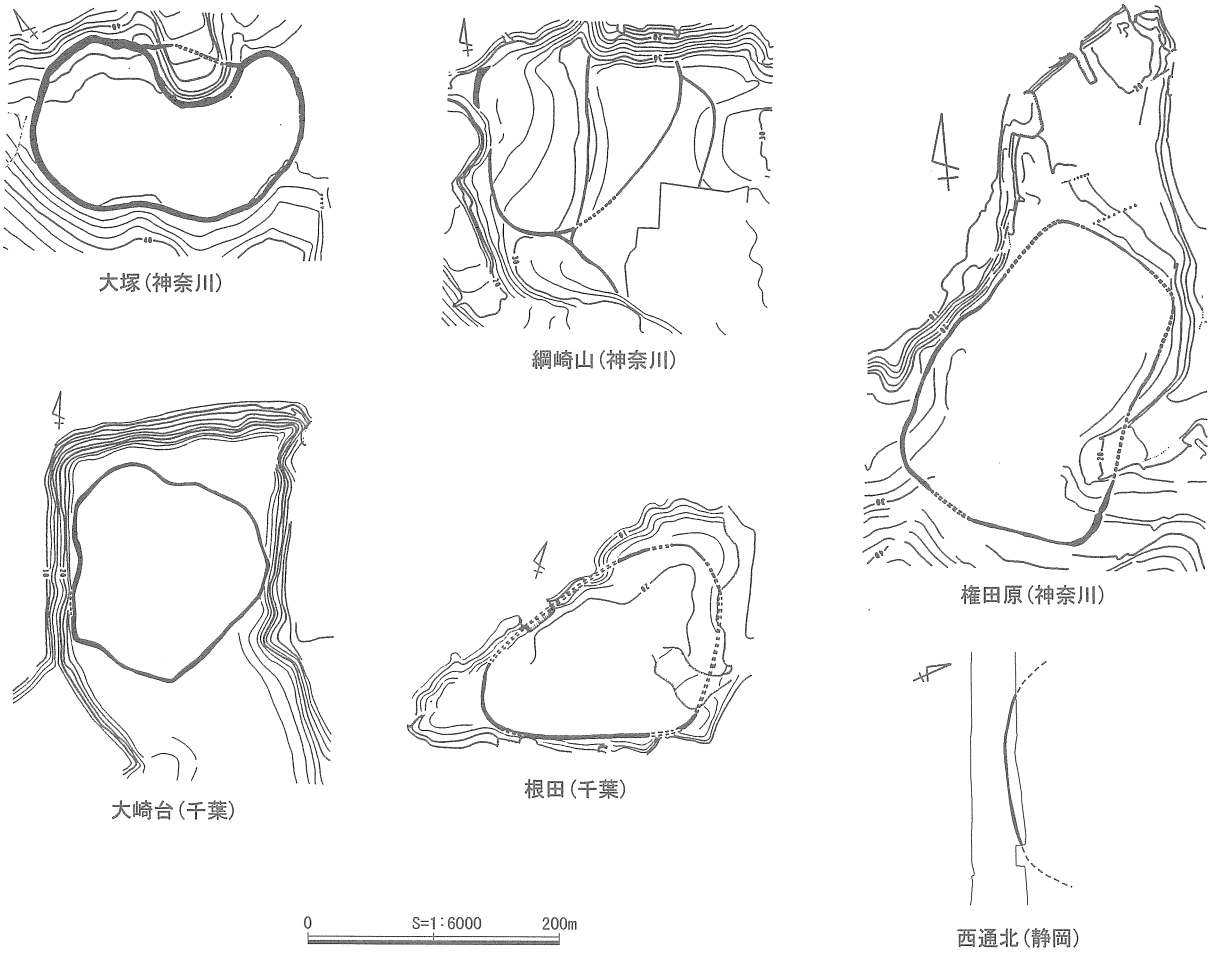
第Ⅴ章　考　　察

第１節　環濠の特徴と機能について

１.「環濠」の呼称について

西通北遺跡で検出された大型の溝状遺構を「環濠」とした。濠の底部から出土した土器の年代観や放射性炭素年代測定結果（第Ⅳ章第３節参照）から、濠は弥生時代中期中葉以前に掘削されていた可能性が高い。静岡県内での類例としては、浜松市の中村遺跡のSD01から丸子式（弥生時代中期前葉）土器が出土したことから、県内最古の環濠と考えられている（鈴木編 2005）。東日本でも弥生時代中期中葉以前にまで遡る環濠の検出例は少なく、埼玉県熊谷市の池上遺跡（中島ほか編 1984）や神奈川県小田原市の中里遺跡（戸田 1999、河合 2008など）が知られている程度である。ちなみに、中里遺跡例は環濠的役割をもつ溝と旧河道とされ、「環濠」と呼称されてはいない。本遺跡での検出例は、これらの類例に並び県内最古級ないしは東日本最古級の環濠と位置づけることが可能であろう。

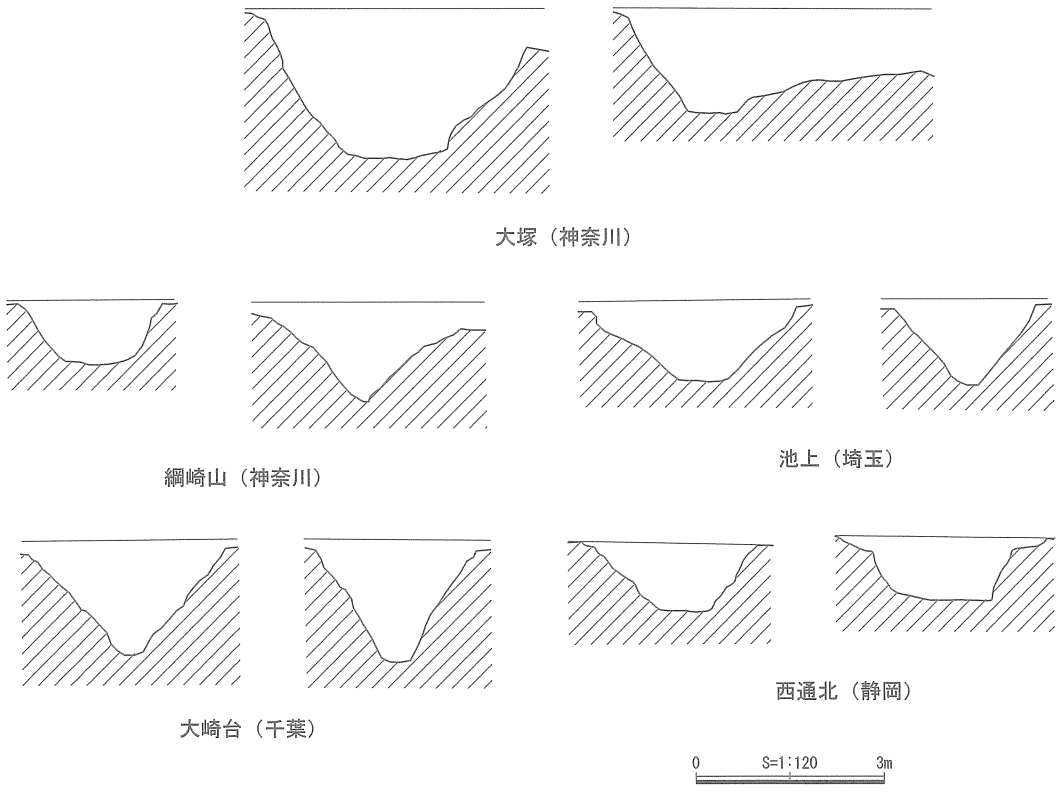
ただし、今回の調査では調査範囲の制約もあり、環濠の内側に展開したであろう住居址等の居住域を確認するには至らなかった。環濠が環濠集落に伴うものであるのならば、集落なき環濠という表現は適切なのであろうか。「環濠」とは言うまでもなく環状の濠のことである。斎藤忠氏の『日本考古学用語辞典』（斎藤 1998）では「環濠（かんごう）→（ほり）」とした上で、「堀（ほり）：濠・壕・渠・湟・隍と



第100図　弥生時代中期環濠の平面形態の諸例（武井編 1991をもとに作成）

も書く。溝と同じように一種の水路でもありかつ水を貯える施設でもあるが、考古学上の遺跡では、古墳のまわりや屋敷や城郭のまわりをはじめ生産遺跡・集落遺跡などに、この種の施設がみられる。」とある。また、「ほり」にどの文字をあてるかについては「堀と濠とが最も適切であるが、『堀』の場合、『穿孔』の意味も強いので、むしろ『濠』が適当であろう。すなわち周濠・環濠のように用いてもよい」とされる。環濠と言えば弥生時代の集落外縁に巡らされる特有の施設と理解されることが多いが、古墳時代の豪族居館や中・近世の屋敷を巡る濠もある。環濠が取り囲むものは居住域だけでなく、貯蔵穴群や工房群、墓域である場合もある。また、縄文時代の環濠の存在も指摘され、祭祀等に用いられる非日常的な空間と考えられる（岡村 1997など）など、環濠の性格やその機能について統一的な見解が定まっている状況とは言い難い。そこで本書では、居住域の有無をもって「環濠」呼称の可否は問わない立場をとる。

本遺跡で検出された大型溝状遺構を環濠とした根拠には、①遺構の規模（長さ・幅・深さ）②平面形態③断面形態の３点が挙げられる。他地域における弥生時代中期の環濠と比較しながら、この３点について検討を進めていきたい。本遺跡の環濠の規模は、総延長約120m、平均幅2.5m、最大幅4.5m、検出面からの深さは１m前後を測る。規模については、環濠の典型的な事例とされる神奈川県横浜市の大塚遺跡例（武井編 1991）などと比較しても見劣りするものではないだろう。小出輝雄氏は、南関東地方の弥生時代中期後葉の環濠を集成検討した結果、中期の環濠の平面形態は「円への指向」を最も基本的な要素としており、後期に多くみられる直線的な「条溝」タイプの環濠は認められない点を指摘している（小出 2006）。本遺跡の環濠の平面形態も、円弧状を描いており、弥生時代中期の「円への指向」をもつ環濠の一例として捉えることができよう。環濠の断面形態については、第101図に示されるように、台地上の遺跡では断面Ｖ字形のいわゆる薬研掘りが多い。その反面、池上遺跡のような低地付近（自然堤防上）の遺跡では、本遺跡のような断面Ｕ字形あるいは逆台形に近い形態のものも認められる。また、大



第101図　弥生時代中期環濠の断面形態の諸例（武井編 1991をもとに作成）

塚遺跡のように台地上に立地しながらも、断面U字形のものも存在している。本遺跡の環濠の断面形態は低地における弥生時代中期の環濠として妥当なものと思われる。

以上の３点の検討から、本書では西通北遺跡で検出された大型の溝状遺構を「環濠」と呼ぶ。

２.「空壕」か「水濠」か

環濠の「ごう」の字を「濠」とすべきか「壕」とするか意見が分かれるところである。水を湛えた環「濠」と、底を覗いて掘り方を見通せる環「壕」とでは、「ほり」としての機能も異なったものと考えられる。西通北遺跡の環濠が、水濠かあるいは空壕であったか、またその機能を特定することを目的として、本調査期間中に環濠に対する自然科学分析を実施した。環濠覆土６層の各層位から採集したサンプルを対象に珪藻分析、花粉分析、花粉イネ属同定、植物珪酸体分析、種実分析を行い、当時の古環境に関する情報を得ることができた。分析結果は第Ⅳ章第１節に詳述されているが、珪藻分析によって水生珪藻の化石が数多く認められ、環濠は水を湛えていた時期があったことが判明した。ただし、常時環濠内が浸水していた訳ではなく、乾燥した時期もあったと考えられ、環濠は乾湿を繰り返すような環境下で、埋没が進行していったことが考えられた。また、種実分析によってススキ属が全ての層位を通して多く検出されるなど、当時の周辺植生は湿生植物が繁茂する湿地のような環境下であったことが考えられる。環濠の周辺が水捌けの悪い湿地であったことも、環濠が水を湛えていたことを想起させる。

環濠が水濠であったことは、自然科学分析の結果以外でも、確認することができた。写真12は環濠の側壁の様子である。濠の中央よりやや下位に、ほぼ同じ高さで横位の10㎝前後の窪みが認められる。この窪みは環濠内のほぼ全域で認められた。環濠が埋没する過程で、この窪み付近が底面となった際に、濠の中に溜まった水の侵食作用によって生じた窪みであることが考えられる。このことから、環濠内に水が10㎝程溜まっていた時期が存在したことが推定される。また、土器の出土状況からも環濠の状態を

写真12　環濠側壁の窪み

知ることができる。環濠内の土器出土状況については、第Ⅲ章第２節で詳述したように、第５・６層でまとまって出土する土器集中が４箇所認められた。土器は局所的に出土する地点が数箇所あるだけで、満遍なく出土する訳ではなく、土器が出土しない箇所では、まさに一片の土器片の出土も認められなかった。土器集中における土器は同一個体のものが多く、接合すれば完形に近い状態にまで復原できる土器もあった。すなわち、数個体の土器が濠の中に転落あるいは廃棄されたような印象を受ける出土状況であった。もし、環濠の中に水が溜まっており、流路の如く水の流れがあったのであれば、濠の中へ落ちた土器の破片が一面に散乱したような出土状況になることが想定されよう。つまり、環濠内の土器は濠の中を水流などによって移動はしなかった、土器を移動させるほどの流れはなかったと考えることができる。そのことを傍証するように、出土した土器の破面は鋭く、流れてローリングを受けた土器に特有の摩滅したような痕跡を認めることはできなかった。

珪藻分析の結果や濠の中あるいは周囲に湿生植物が繁茂していたような植生、側壁面の水の浸食の痕跡から、環濠には水が溜まっていた、つまり水濠であったと考えられる。ただし、自然科学分析で得られた乾湿を繰り返したような環濠の水域環境、集中的かつ局所的な土器出土状況、出土土器には大きく摩滅したような痕跡が認められなかったことから、水は溜まっていたものの環濠は流路としては使用されていなかったことが分かる。また、付け加えるのであれば、覆土には砂や砂利を含む層が認められなかったことも環濠内に流れがなかったことの状況証拠と言える。環濠は雨水等が溜まるにまかせたまま、乾湿を繰り返していたのであろう。

３．環濠の性格と機能

環濠には、今まで①害獣の進入を防ぐ②敵対する集団の進入を防ぐ③土地の境界を区画する④精神的な結界として区画する⑤導水や排水のための流路とする⑥廃棄物を処理する等のいくつかの用途が推定されてきた。特に、佐原真氏は弥生時代に起こった戦争を証拠立てる根拠の一つとして環濠集落の存在を挙げている（佐原 1999）。愛知県の朝日遺跡で検出された逆茂木や佐賀県の吉野ヶ里遺跡で見つかった物見櫓の存在と合わせて、環濠は防御的機能をもつものとして通説化していった感もある（佐原 1991・2002、田中 1991、森岡 1991など）。一方、東日本弥生社会における環濠の機能として、捕虜収容所の如く村人の逃亡を防ぐため（岡本 1998）、集団の内的結束を図るため（久世 2001）、集落の形成や再生を記（祈）念して掘られた（小出 2006）などの環濠と戦争とを直接結び付けない用途が提示されている。

上記のような環濠に対する研究や評価を踏まえて、西通北遺跡における環濠の性格と機能を考えてみたい。用途①や②のように本環濠に防御的な機能を想定することには、慎重にならざるを得ない。積極的に集団同士の抗争を示す遺物や防御性の高い施設を備えていたとは考え難いためである。出土遺物は土器を除けば石鏃に鉄鉇、不明木製品のみであり、土層断面の観察からは、環濠の内側ないしは外側から積み上げた土が流入している痕跡は認められなかった。土塁ないしは土手のような構造物は環濠には伴わなかった可能性が高い。ただし、本環濠の幅は平均2.5m、最大で4.5m程を測り、容易に飛び越えることはできない。用途①に関してのみ、ある程度機能し得たことが考えられる。用途③や④の区画については、本遺跡が起伏の少ない低地上に位置していることを考慮すれば、濠によって内外を境界することは自然なことと考えられる。ただし、現時点では環濠の内側の様相が判明していないことから、それ以上踏み込んで検討を加えることは難しい。用途⑥は検証が困難であるが、環濠内へ廃棄物を処理していたか否かは、土器の出土状況から考えると、少なくとも環濠内は土器捨て場あるいは土器溜まりのような様相は呈していなかった。埋没（機能停止）時に数個体の土器が廃棄あるいは転落した痕跡が認められるほかは、環濠内は比較的整然としている印象を受ける。

用途⑤に関しては、調査成果から踏み込んだ検討が必要とされる。前述したように環濠が水濠である

ものの、流路としては機能し得なかった点から、導水や排水といった機能を想定することは躊躇われる。調査区内は現地形・旧地形とも勾配がほとんど無く、水をいずれかの方向へ流す、あるいは取り込むといった用途は想定し難い。また、環濠内も意識的に高低差をつけて掘削されたような痕跡は認められなかった。ただし、流路としては機能しなかったとしても、低湿地帯に立地する環境や珪藻分析の結果を考慮すれば、雨水や湧水を溜めておく遊水池の如く機能していた可能性は十分考えられる。最初からそれを目的として掘削されたかは定かではないが、環濠が開口している間は、環濠周辺の雨水や湧水による浸水は緩和されたことであろう。遺跡の立地環境に目を向けて評価するのであれば、雨水や湧水等による水害対策に掘削された可能性は捨て切れず、治水的な機能を考えておきたい。

上記の検討から、本遺跡の環濠の性格と機能についてまとめてみたい。本遺跡の環濠に防御的機能を想定するのであれば、対人ではなく害獣に対しては機能していた可能性はある。物理的あるいは精神的区画については十分考えられるが、環濠内の居住域の存在が確定していない段階では保留とせざるを得ない。また、環濠内に雨水や湧水を湛えておくことによって、環濠周囲の水害を緩和する治水的機能を果たしていた可能性が考えられる。ただし、最初から環濠に治水的機能を求めて掘削が行われたものなのか、掘削した結果として治水的機能を有すことになったのかは判然としない。

４．出土遺物について

弥生時代中期の壺と甕が、環濠内からまとまって出土した。壺は、細頸のもので口縁部から胴部上半にかけて太描の沈線と縄文・刺突文等を組み合わせながら、三角文・四角文を横位に連続させて文様帯を構成している。甕は、口縁部から底部まで縦方向を基調とした粗い刷毛目調整が施されたものが出土している。刷毛目調整の後、胴央部に指頭等によって２～３条の横方向の磨消線が施された「磨消線文甕」と呼ばれるものである。

小野真一氏はかつて沈線や縄文、刺突文を組み合わせた文様が施される細頸壺に代表される、東駿河地域の弥生時代中期中葉の土器型式として鴨ヶ池式を設定した（小野 1979など）。西通北遺跡環濠出土土器も第５・６層を中心として鴨ヶ池式の特徴をもつ壺が認められる。しかし、鴨ヶ池式は、遠江地域の同時期の嶺田式と大差なく、ほぼ同一型式（小野 1976）とされるとともに、南関東地方の須和田式にきわめてよく似る（小野 1966）とされるなど、その実態が判然としていない部分が多い。原因の一つとして、東駿河地域における当該期の資料の少なさがあげられる。弥生時代中期中葉の土器は、沼津市域においては、愛鷹丘陵に位置する古城遺跡（秋本 1972、鈴木編 1984）や二ッ洞遺跡（山本・仲家・前田編 1993）、浮島ヶ原の雄鹿塚遺跡（鈴木編 1989）からの出土が知られているが、周辺地域においても三島市の御殿川流域の中手乱遺跡や鶴喰広田遺跡の旧流路から出土している（佐野・岩本編 1998）程度であり、しかも明確な遺構からの出土事例ではない。また、壺のみの出土が多く、甕を合わせた組成が不明確であった。

本遺跡では、環濠内部から壺が甕を伴って出土しており、第３層以下は弥生時代の資料のみが包含されるなど、他の時期の資料の混在が無い良好な出土事例と言える。今までまとまった資料が少なかった東駿河の弥生時代中期中葉の土器編年を検討するうえで、基準的な資料になり得るだろう。また、出土弥生土器胎土分析の結果（第Ⅳ章第２節参照）からは、弥生時代中期中葉と後葉とでは、使用されている土器の製作と供給に関わる事情が異なっていたことが考えられ、土器の移動やその背後の人々の交易関係など、当該期の流通に関する課題も提示された。

土器以外に特筆すべき資料として、環濠第３層から出土した１点の鉄器が挙げられる。前述の通り、第３層出土土器は概ね弥生時代中期後葉に位置づけられることから、出土鉄器も弥生時代中期後葉に帰属する資料である可能性が高い。東海地方での弥生時代鉄器の出土事例は少なく、管見に触れる限り、

第22表　東海地方出土弥生時代鉄器地名表

旧国名	遺跡名	所在地	遺構名	種別	出土点数	時期	文献
伊豆	下河津小学校校庭遺跡	静岡県賀茂郡河津町	校庭発掘地点	剣？	1点	弥生終末期～古墳前期	柳島1978
	山木遺跡	静岡県伊豆の国市	包含層	鏃・不明2	3点	弥生後期	八幡ほか編1969
	中島西原田遺跡	静岡県三島市	6区Ⅲ層	剣	1点	弥生？	橋本編1994
駿河	矢崎遺跡	静岡県駿東郡清水町	Aトレンチ第3層	鉇・鏃27	28点	弥生後期	小野1971
			Fトレンチ第3層	鏃	1点	弥生後期	
			Fトレンチ層位不明	鏃	1点	弥生後期？	
	西通北遺跡	静岡県沼津市	環濠	鉇	1点	弥生中期後葉	杉山2009・2010
	目黒身遺跡		第15号住居址	不明	1点	弥生後期末～古墳前期	小野編1970
			第17号住居址	不明	1点	弥生後期後葉	
			第22号住居址	不明	1点	弥生後期末～古墳前期	
	沢田遺跡		不明	不明	1点	弥生後期	小野1957
	雌鹿塚遺跡		J-6区包含層	不明	1点	弥生後期	石川編1990
			M-12区包含層	不明	1点	弥生後期	
			M-14区包含層	釣針	1点	弥生後期	
	石川遺跡	静岡県静岡市清水区	水路跡	斧	1点	弥生後期後葉	平野1987
	長崎遺跡		6区	斧	1点	弥生後期前葉	足立ほか編1995
	川合遺跡	静岡県静岡市葵区	11区SP116232（ピット）	斧	1点	弥生後期	平野1987
			11区柱穴状ピット	斧	1点	弥生後期	
			11区Ⅹ層	斧・鑿	2点	弥生後期	
			11区	鉇	1点	弥生～古墳	
			12区Ⅹ層	斧5	5点	弥生後期	平野・山田・伊藤編1991・1992
			12区	斧	1点	弥生～古墳	
	登呂遺跡	静岡県静岡市駿河区	B地区	不明2	2点	弥生後期	中野編1989
	鷹ノ道遺跡		河畔（包含層）	釧	1点	弥生後期前葉	天石2000・2002
	小黒遺跡		包含層	斧（袋状）2・鏃	3点	弥生終末期～古墳前期	浅野1988
	稲ヶ谷遺跡	静岡県藤枝市	19号住居址	斧	1点	弥生後期中葉	八木・磯部編1980
			23号住居址	剣	1点	弥生後期後葉	
	寺家前遺跡		B610（土坑）	鑿	1点	弥生後期～古墳初頭	中川律子氏の御教示による
	田ノ谷遺跡	静岡県島田市	住居址	鉇	1点	弥生後期	渋谷・坂巻・足立編1985
	駿河山遺跡		SZ5171（方形周溝墓）周溝	鏃	1点	弥生後期	溝口彰啓氏の御教示による
			SZ2002（方形周溝墓）周溝	鉇	1点	弥生後期	
	倉見原3号墳	静岡県牧之原市	礫槨	鉇・剣2	3点	弥生終末期～古墳前期	小野ほか編1968
遠江	原新田遺跡	静岡県掛川市	1号方形周溝墓主体部	剣	1点	弥生後期	平野1987
	葛堺ヶ谷遺跡		SB03（竪穴住居）	錐？	1点	弥生後期末～古墳前期	蔵本編2001
			SB10B（竪穴住居）	鏃	1点	弥生後期末～古墳前期	
			SB11（竪穴住居）	刀子	1点	弥生後期末～古墳前期	
			SB14（竪穴住居）	鉇	1点	弥生後期末～古墳前期	
			B区南	鑿	1点	弥生後期末～古墳前期	
	愛野向山Ⅱ遺跡	静岡県袋井市	B区SB33（竪穴住居）	鑿	1点	弥生後期	松井ほか編2004
			B区SB64（竪穴住居）	斧	1点	弥生後期	
	竹之内原1号墓	静岡県磐田市	第1主体部	鉇・剣	2点	弥生終末期～古墳前期	木村編1992
	新豊院山3号墓		土壙	鉇・剣・鏃2	4点	弥生終末期～古墳前期	佐口ほか編2006
	梵天遺跡		H地点SK7（土坑）	鑿・剣	2点	弥生後期	佐口編2003
			I地点SK7（土坑）	鑿・剣	2点	弥生後期	
	峯山遺跡	静岡県周智郡森町	台状墓第2主体部	鑿・釧	2点	弥生後期後葉	伊藤1996
	文殊堂遺跡		SF23（土坑墓）	剣	1点	弥生後期	田村編2006
			SF70（土坑墓）	剣	1点	弥生後期	
			C群遺構外	鏃	1点	弥生後期	
			O群遺構外	剣	1点	弥生後期	
	平沢遺跡	静岡県浜松市天竜区	A7号住居址	鏃	1点	弥生後期	平野編1971
			A8号住居址	不明	1点	弥生後期	
			A9号住居址	不明	1点	弥生後期	
	祝田遺跡	静岡県浜松市北区	4号方形周溝墓	刀子・摘鎌2・錐？	4点	弥生後期	鈴木編1994
			SD54（溝状遺構）	不明3	3点	弥生後期	
	椿野遺跡		P4002（小穴）	刀子	1点	弥生後期～古墳前期	柴田編1993
			P4100（小穴）	刀子	1点	弥生後期～古墳前期	
	矢畑遺跡		SZ01（方形周溝墓）	剣・鏃	2点	弥生終末期～古墳前期	丸杉・平塚・大谷編2008
	東原遺跡	静岡県浜松市浜北区	第3号住居址	鋤鍬先？	1点	弥生後期中葉	松井編1983
三河	郷中遺跡	愛知県豊川市	C地区SK12（土坑）	斧	1点	弥生後期	前田ほか編1989
	南山畑遺跡	愛知県豊田市	SB01（竪穴住居）	鉄片238	238点	弥生終末期	天野編1999
			SB04（竪穴住居）	鏃・鉄片45・鉄滓6	52点	弥生終末期	
			SB08（竪穴住居）	鉄片1087・鉄滓2	1089点	弥生終末期	
			SB10（竪穴住居）	鏃	1点	弥生終末期	
			SZ01（方形周溝墓）	鏃	1点	弥生終末期	
			SK03（土坑）	不明	1点	弥生終末期	
	神明遺跡		SB254（竪穴住居）	鉇	1点	弥生終末期～古墳初頭	森ほか編2001
	八剣遺跡	愛知県新城市	H区包含層	釘？	1点	弥生終末期～古墳初頭	岩野ほか編1965
	欠山遺跡	愛知県宝飯郡小坂井町	SH9（竪穴住居）	刀子・鑿	2点	弥生後期	中村編1994
尾張	瑞穂遺跡	愛知県名古屋市瑞穂区	TC区北	釘？2	2点	弥生後期	山田1980
			包含層	鏃2	2点	弥生後期	小栗1932
	三王山遺跡	愛知県名古屋市緑区	SD02（環濠）	鏃2	2点	弥生後期	水野ほか編1999
	則武向貝塚	愛知県名古屋市西区	包含層	鉇・不明	2点	弥生後期末？	小栗1933
	朝日遺跡	愛知県名古屋市西区・清洲市	61E区SD02（溝状遺構）	刀子	1点	弥生中期中葉	宮腰編1992
			SDⅤ（溝状遺構）	刀子	1点	弥生後期	
	二夕子遺跡	愛知県一宮市	H区住居跡	鏃3	3点	弥生後期	澄田編1967
	元屋敷遺跡		竪穴住居跡	鋤鍬先？	1点	弥生後期	
美濃	伊瀬窯地遺跡	岐阜県美濃加茂市	墳丘墓主体部付近	剣	1点	弥生終末期	齋藤・可児・磯谷編1994
	薬師原東山1号墳	岐阜県各務原市	周溝	刀子	1点	弥生終末期～古墳初頭	渡辺編1999
伊勢	高松遺跡	三重県津市	台状墓主体部西側土坑	刀子	1点	弥生後期前葉	谷本編1970
	大城3号墓		墳丘裾	斧（袋状）	1点	弥生後期	田中編1998
	山奥遺跡	三重県四日市市	SH20（竪穴住居）	鑿	1点	弥生後期	清水編2003
			SH27（竪穴住居）	刀子	1点	弥生後期	
			SH30（竪穴住居）	鉇	1点	弥生後期	
			SH36（竪穴住居）	鏃	1点	弥生後期	
			SH54（竪穴住居）	鑿	1点	弥生後期	
			SH74（竪穴住居）	鉇	1点	弥生後期	
			SH106（竪穴住居）	斧	1点	弥生後期	清水編2004
			SH117（竪穴住居）	鏃	1点	弥生後期	
			SH174（竪穴住居）	鉇	1点	弥生後期	
			SH240（竪穴住居）	鉇	1点	弥生後期	
			SH245（竪穴住居）	鉇	1点	弥生後期	
			SH283（竪穴住居）	鉇	1点	弥生後期	
			SK140（土坑）	刀子・錐？	2点	弥生後期	
	金塚遺跡		SH19（竪穴住居）	鉇	1点	弥生後期	森川ほか編2002
			2号墳流出土	不明	1点	弥生後期	
	城ノ谷遺跡		SH20（竪穴住居）	鉇	1点	弥生後期	金子編2004
	南谷遺跡	三重県鈴鹿市	SD04（溝状遺構）	鏃2	2点	弥生後期前葉	穂積・小嵜編1995
	上箕田遺跡		不明	刀子	1点	弥生？	川崎ほか編2009
	下之庄東方遺跡	三重県松阪市	前山地区SX02（方形周溝墓）	斧（袋状）	1点	弥生後期	清水編2004
志摩	白浜遺跡	三重県鳥羽市	包含層	釣針4・剣・不明5	10点	弥生後期～古墳前期	萩本ほか編1990
			SB2（竪穴住居）	剣	1点	弥生後期後葉～古墳初頭	
伊賀	土山遺跡	三重県名張市	土坑（竪穴住居？）	鏃	1点	弥生後期後葉	清水編2004

第22表の通り55遺跡より1,548点が認められた。ただし、この中には愛知県豊田市の南山畑遺跡（天野編 1999）で検出された鍛冶関連遺構（SB01・04・08）より出土した鉄器製作時の鍛造薄片等の微小鉄片や鉄滓等1,378点も含まれている。そのため、製品としての鉄器の数は、総点数からこの鍛冶関連遺物1,378点を除いた170点となる。これらはほぼ全てが弥生時代後期から終末期の資料とされている。本遺跡発見の鉄鉇は、弥生時代中期中葉の資料とされている愛知県名古屋市の朝日遺跡61E区SD02出土刀子（宮腰編 1992）とともに、東海地方では稀有な弥生時代中期の鉄器と考えられる。本資料は静岡県内では９例目の鉄鉇出土事例となり、弥生時代中期の鉄鉇出土事例では言うまでもなく初めてとなる。また、静岡県内最古の鉄器になる。東海地方における弥生時代中期の鉄器の少なさが明らかになる一方で、南関東地方では弥生時代中期後葉（宮ノ台式期）に属する鉄器の出土数が一定量認められている（安藤 1997）。今後はこのような状況を踏まえ、東海地方のみならず南関東地方を含む東日本社会への鉄器普及を考えるうえで、本遺跡出土資料を位置づけていく必要があろう。

５．東駿河地域の弥生時代集落について

西通北遺跡が位置する静岡県東部地域（東駿河地域）における弥生時代集落の展開について触れておきたい。駿東郡長泉町の大平遺跡は東駿河地域のみならず静岡県内最初期の弥生時代遺跡である（佐野・水上編 2001）。大平遺跡では弥生時代前期末の住居址が検出され、条痕文土器（甕）や黒曜石製石鏃が出土するなど、弥生時代開始期の人々の暮らしを明らかにする手がかりを得ることができた。大平遺跡は愛鷹山南東麓に位置する丘陵上の遺跡で、住居址は狩猟採集生活におけるキャンプ地として機能していた可能性が考えられており、集住や農耕の痕跡は認められなかった。弥生時代中期前葉・中葉段階では、東駿河地域において明確な遺構やそれに伴う遺物は見つかっていない。特に、人々が集団となって暮らしを営んだ大規模な集落の痕跡は未だに発見されていない。このような背景の中で、本遺跡で検出された環濠は、第Ⅱ章第１節で触れたように、現在の沼津市域低地部が海から湖へそして陸地化していく過程で、丘陵部から低地部に定住し始めた最初の弥生時代人の活動痕跡を示すものとして評価できる。

静岡県内の弥生時代中期における明確な環濠の検出事例は稀少で、弥生中期環濠集落の形成と展開について言及できるだけの資料が揃っているとは言い難い。弥生時代後期段階に入ると、浜松市の伊場遺跡の三重環濠（斎藤ほか編 1977）に代表されるように、県内での環濠および環濠集落の検出・調査例は弥生中期段階のそれとは比較にならないほど増加する。弥生時代後期の「環濠」は集落研究を構成する要素の一つとして扱われ、県内環濠集落の地域性やその展開と解体に関しても言及されている（松井 1988・篠原 2002）。東駿河地域の弥生後期環濠集落としては、本遺跡の立地する浮島ヶ原低地のやや北側、愛鷹山南麓丘陵末端部の低台地上に位置する尾崎遺跡（内藤編 2000）や目黒身遺跡（小野編 1970）などが知られている。環濠集落以外でも、植出遺跡（羽二生・岩崎編 1997）や北神馬土手遺跡（矢田編 2001）など、愛鷹山南麓丘陵上に弥生時代後期から終末期にかけての大規模集落が営まれるようになる。

上記のことから、東駿河地域（特に沼津市域とその周辺）においては、丘陵部から低地部へ、さらには低地部から丘陵部へという弥生集落の変遷過程が認められるようである。本遺跡の環濠は、弥生時代前期から中期における最初の集落変遷である低地部への移住について考えるうえで、貴重な一例と言えよう。

参考文献

秋本真澄　1972 「沼津市興国寺城出土の弥生式土器」『駿豆考古』第12号　駿豆考古学会

足立順司ほか編　1995 『長崎遺跡』Ⅳ（遺物・考察編）静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第59集　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

天石夏実　2000 「鷹ノ道遺跡（第６次）」『ふちゅ～る』No. 8　静岡市教育委員会

天石夏実　2002 「資料紹介―静清平野出土の銅釧・鉄釧・銅環―」『ふちゅ～る』No.10　静岡市教育委員会

天野博之編　1999 『南山畑遺跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第10集　豊田市教育委員会

浅野毅　1988 「小黒遺跡」『静岡・清水平野の弥生時代―新出土品にみる農耕生活―』 静岡市立登呂博物館

安藤広道　1997 「南関東地方石器～鉄器移行期に関する一考察」『横浜市歴史博物館研究紀要』第２号　横浜市歴史博物館

石川治夫編　1990 『雌鹿塚遺跡発掘調査報告書』Ⅱ 遺物編 沼津市文化財調査報告書第51集　沼津市教育委員会

石黒立人ほか編　1994 『朝日遺跡』Ⅴ（土器編・総論編）愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34集　財団法人愛知県埋蔵文化財センター

伊藤美鈴　1996 「峯山台状墓・崇信寺古墳群」『静岡県森町飯田の遺跡』 森町教育委員会

岩野見司ほか編　1965 『川路萩平（C地点）遺跡・大宮八剣遺跡』 新城市教育委員会

梅島満　1978 「駿河湾を中心とする土師器の研究」『駿河』第31号　駿河郷土史研究会

岡村道雄　1997 「縄文時代の環濠、溝、柵列」『考古学ジャーナル』No.412　ニュー・サイエンス社

岡本孝之　1998 「外土塁環壕集落の性格」『異貌』第16号　共同体研究会

小栗鐵次郎　1932 「銅鏃鐵鏃を共存した名古屋市瑞穂町東牧の彌生式遺蹟」『愛知縣史蹟名勝天然紀念物調査報告』第十　愛知縣

小栗鐵次郎　1933 「名古屋市西區則武町向貝塚」『愛知縣史蹟名勝天然紀念物調査報告』第十一　愛知縣

小野真一　1957 『静岡県東部古代文化総覧』 蘭契社書店

小野真一　1966 「駿河湾地方における中期弥生文化について」『上代文化』第36輯　國學院大學考古学会

小野真一　1976 「入門講座 弥生土器―中部東海東部２―」『考古学ジャーナル』No.127　ニュー・サイエンス社

小野真一　1971 「駿河矢崎遺跡調査略報」『駿豆の遺跡研究』(1)　沼津女子高等学校郷土研究部

小野真一　1979 『駿豆地方の弥生式土器集成』 駿豆考古学会

小野真一編　1970 『目黒身―弥生・古墳時代集落址の調査―』 沼津考古学研究所

小野真一ほか編　1968 『東名高速道路（静岡県内工事）関係埋蔵文化財調査報告書』 静岡県教育委員会・日本道路公団

金子智子編　2004 『城ノ谷遺跡発掘調査報告』 三重県埋蔵文化財センター

河合英夫　2008 「中里遺跡の衝撃―南関東農耕形成期の集落―」『新神奈川・新弥生論』 神奈川県考古学会

川崎志乃ほか編　2009 『上箕田遺跡（第３次）・上箕田城跡、上原遺跡、尾野山城跡、打越城発掘調査報告』 三重県埋蔵文化財センター

木村弘之編　1992 『竹之内１号墓遺跡発掘調査報告書』 磐田市教育委員会

久世辰男　2001 『集落遺構からみた南関東の弥生社会』 六一書房
蔵本俊明編　2001 『菖蒲ヶ谷遺跡・山ノ口古墳群』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第124集　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
小出輝雄　2006 「環濠は戦争用遺構か―南関東弥生時代中期後半期の検討から―」『古代』第119号　早稲田大学考古学会
斎藤忠　1998 『日本考古学用語辞典』 学生社
斎藤忠ほか編　1977 『伊場遺跡遺構編』伊場遺跡発掘調査報告書第２集　浜松市教育委員会
齊藤基生・可児光生・磯谷祐子編　1994 『伊瀬粟地遺跡発掘調査報告書』 美濃加茂市教育委員会
佐口節司編　2003 『県道浜松袋井線緊急地方道道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 磐田市教育委員会
佐口節司ほか編　2006 『新豊院山遺跡発掘調査報告書』Ⅲ 新豊院山古墳群 D地点の発掘調査　磐田市教育委員会
佐野五十三・岩本貴編　1998 『御殿川流域遺跡群』Ⅳ 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第104集　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
佐野暢彦・水上綾子編　2001 『大平遺跡』Ⅱ 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第129集　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
佐原真　1991 「弥生時代の戦争」『邪馬台国時代の東日本』 六興出版
佐原真　1999 「日本・世界の戦争の起源」『人類にとって戦いとは１ 戦いの進化と国家の形成』 東洋書林
佐原真　2002 「弥生時代の戦争」『古代を考える 稲・金属・戦争―弥生―』 吉川弘文館
宍戸信悟ほか編　1989・1991 『砂田台遺跡』Ⅰ・Ⅱ 神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告20　神奈川県立埋蔵文化財センター
篠原和大　2002 「環濠―静岡県における弥生時代後期環濠集落の理解に向けて―」『静岡県における弥生時代集落の変遷』 静岡県考古学会
柴田睦編　1993 『椿野遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第52集　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
渋谷昌彦・坂巻隆一・足立順司編　1985 『田ノ谷遺跡発掘調査報告書』 島田市教育委員会
清水政宏編　2003 『山奥遺跡』Ⅰ 四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書31　四日市市教育委員会
清水政宏編　2004 『山奥遺跡』Ⅱ 四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書32　四日市市教育委員会
杉山和徳　2009 「東駿河の弥生時代の始まり」『平成21年度遺跡調査報告会 静岡の原像を探る』 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所・静岡県教育委員会
杉山和徳　2010 「西通北遺跡―弥生時代中期中葉の環濠の調査―」『月刊考古学ジャーナル』No.600　ニュー・サイエンス社
鈴木光一編　1994 『祝田遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第51集　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
鈴木敏則編　2005 『梶子北（三永）・中村遺跡―弥生時代編―』 財団法人浜松市文化協会
鈴木裕篤編　1984 『興国寺城跡伝天守台跡・伝東船着場跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第32集　沼津市教育委員会
鈴木裕篤編　1989 『雄鹿塚遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第46集　沼津市教育委員会
澄田正一編　1967 『新編 一宮市史』資料編二　一宮市
武井則道編　1991 『大塚遺跡』弥生時代環濠集落址の発掘調査報告Ⅰ 遺構編　横浜市埋蔵文化財セン

ター
田中秀和編　1998『大城遺跡発掘調査報告書』安濃町埋蔵文化財発掘調査報告５　安濃町教育委員会・安濃町遺跡調査会
田中琢　1991『倭人争乱』日本の歴史②　集英社
谷本鋭次編　1970『高松弥生墳墓発掘調査報告』津市埋蔵文化財調査報告４　津市教育委員会
田村隆太郎編　2006『森町円田丘陵の遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第167集　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
戸田哲也　1999「弥生農耕成立期の集落―神奈川県中里遺跡」『季刊考古学』第67号　雄山閣
内藤由貴子編　2000『尾崎遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第73集　沼津市教育委員会
中島宏ほか編　1984『池守・池上 一般国道125号線埋蔵文化財発掘調査報告書』埼玉県教育委員会
中野宥編　1989『登呂遺跡出土資料目録』写真編 登呂遺跡基礎資料４　静岡市立登呂博物館
中村文哉編　1994『欠山遺跡』小坂井町教育委員会
西川修一ほか編　1998『御屋敷添遺跡 第３地点（№１）第４地点（№２）第５地点（№44）高森・一ノ崎遺跡（№37）高森・窪谷遺跡（№３）』かながわ考古学財団調査報告33　財団法人かながわ考古学財団
萩本勝ほか編　1990『白浜遺跡発掘調査報告』本浦遺跡群調査委員会
橋本敬之編　1994『御殿川流域遺跡群』II 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第50集　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
羽二生保・岩崎しのぶ編　1997『北神馬土手遺跡他』Ⅰ（遺構編本文）静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第74集　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
平野和男編　1971『ひらさわ 平沢遺跡発掘調査報告書』佐久間町教育委員会
平野吾郎　1987「川合遺跡出土の鉄斧・鉄鎌ならびに鋤先の出土状態について」『研究紀要』II　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
平野吾郎編　1983『有東遺跡』Ⅰ下 静岡県文化財調査報告書第28集　静岡県教育委員会
平野吾郎・山田成洋・伊藤律子編　1991・1992『川合遺跡 遺物編』２ 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第32集　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
穂積裕昌・小菅文裕編　1995『一般国道23号中勢道路（６工区）建設事業に伴う南谷遺跡・稲生遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター
前田清彦ほか編　1989『郷中・雨谷』豊川市教育委員会
松井一明　1988「静岡県」『弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題』II　愛知考古学談話会
松井一明編　1983『浜北市東原遺跡B地点』(I) 浜北市教育委員会
松井一明ほか編　2004『愛野向山Ⅱ遺跡』袋井市教育委員会
丸杉俊一郎・平塚智久・大谷宏治編　2008『矢畑遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第182集　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
水野裕之ほか編　1999『三王山遺跡（第１～５次)』埋蔵文化財調査報告書30　名古屋市教育委員会
宮腰健司編　1992『朝日遺跡』III 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第32集　財団法人愛知県埋蔵文化財センター
森泰通ほか編　2001『神明遺跡』II 豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第17集　豊田市教育委員会
森岡秀人　1991「戦いと武器」『弥生文化―日本文化の源流をさぐる―』弥生文化博物館叢書１　大阪府立弥生文化博物館
森川幸雄ほか編　2002『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市JCT建設事業に伴う

金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告』　三重県埋蔵文化財センター
八木勝行・磯部武男編　1980　『日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅰ　縄文・弥生時代編　藤枝市土地開発公社・藤枝市教育委員会
八幡一郎ほか編　1969　『山木遺跡―第二次調査概報―』　韮山町教育委員会
矢田陽子編　2001　『北神馬土手・尾上Ⅱ橋遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第76集　沼津市教育委員会
山田鉱一　1980　「瑞穂遺跡―1951・52・54年度発掘調査報告―」『人類学博物館紀要』第２号　南山大学人類学博物館
山田鉱一ほか編　2003　『高蔵遺跡（第１次)』埋蔵文化財調査報告書45　名古屋市教育委員会
山本惠一・仲家三千彦・前田友子編　1993　『二ッ洞遺跡（b・c区）発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第54集　沼津市教育委員会
渡辺博人編　1999　『蘇原東原遺跡群発掘調査報告書』各務原市文化財調査報告第26号　各務原市埋蔵文化財調査センター

第２節　溝状遺構と古代条里ついて

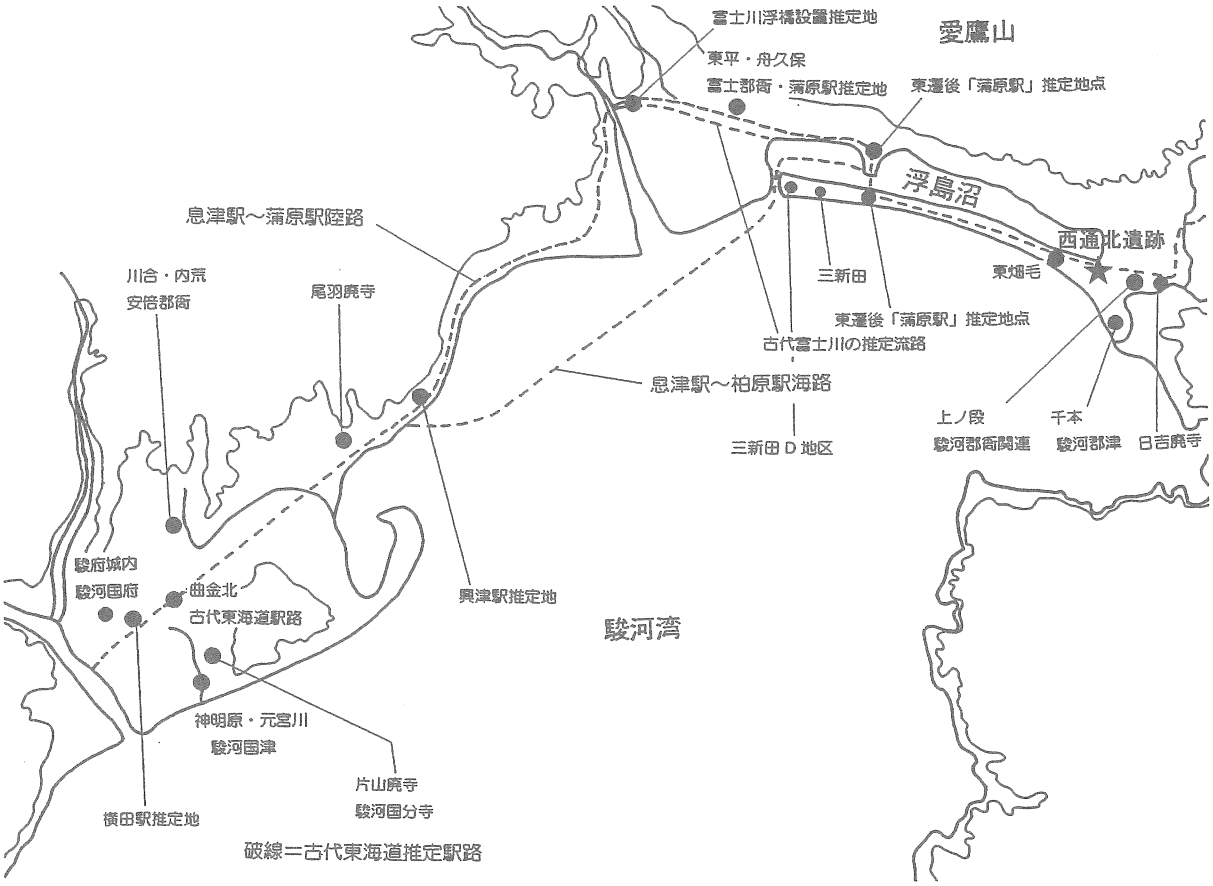
律令期における西通北遺跡を取り巻く環境について、第Ⅱ章第２節でも触れたように、本遺跡が古代駿河国の主要交通路の推定路線上周辺に位置していたこと（第102図）から、発掘調査開始当初は古代東海道の発見が期待されていた。本調査では、古代東海道自体が検出されることはなかったが、律令期の人々の盛んな往来を偲ばせるような土師器・須恵器の集中出土、溝状遺構や土坑の検出が認められた。この内、ほぼ東西方位に延伸する１号溝状遺構と、概ね南北方向に延伸する８号溝状遺構の存在は、律令期の条里を意識した遺構として注目される。また、本遺跡の所在地である小諏訪字二ノ坪は、数詞の付く坪地名として、条里施行地域における条里界線推定の手がかりとして数度に渡り活用されてきた（望月 1961、加藤 1976、原・菊池 2004・2006)。そうした経緯からも、ここでは本遺跡周辺の古代の土地区画を考えるうえで、本遺跡の属する駿河国駿河郡の条里に関する研究を踏まえ、１・８号溝状遺構の特徴に触れ、若干の検討を加えたい。

１．駿河国駿河郡の条里研究小史

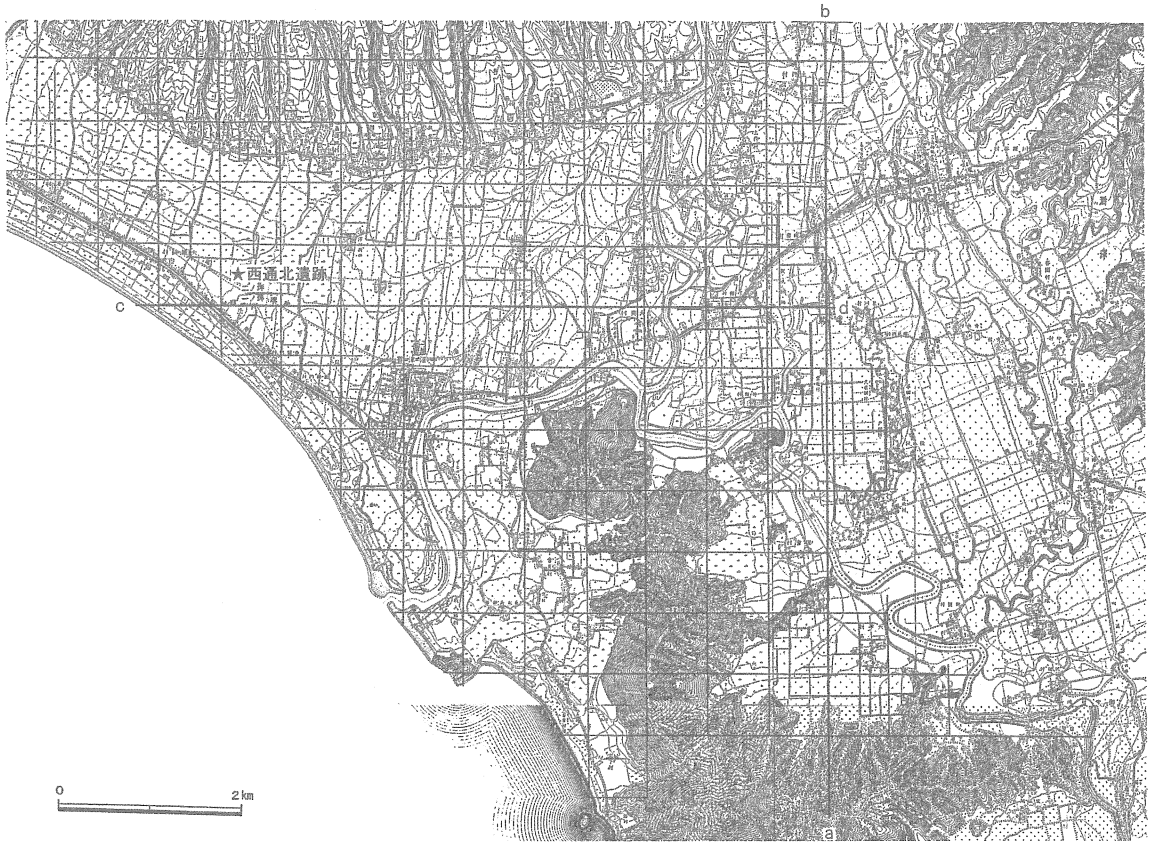
駿河郡の条里に関する研究は、古代の駿河国と伊豆国の国境を巡る問題を背景に、小野真一氏が駿東郡および田方郡の条里復元を試みた（小野 1961）ところに端を発する。小野氏は沼津・三島周辺には、東駿東条里・西駿東条里・田方条里・伊豆国府条里が存在し、東駿東・西駿東・伊豆（田方および伊豆国府）の３条里はそれぞれ方位を異にするものと考え、沼津周辺の条里制の大枠を固めた。

加藤雅功氏は沼津・三島のみならず、富士・富士宮周辺も含めた条里復元を試みた（加藤 1976)。沼津市域に残される土地区割りから、この地域の古代条里を正方位から５度内外東傾する点を指摘し、これは地形的条件によって水利の得やすい方位で決定されたものと考えた。先の小野氏の方位を異にする３条里の併存に関しては、追認する立場をとった。また、沼津周辺の正方位から５度内外東傾する条里に関しては、佐野五十三氏が駿河国東部地域の遺跡の遺構配置を検討した結果、類似する傾向は認められない点を指摘している（佐野 2004)。

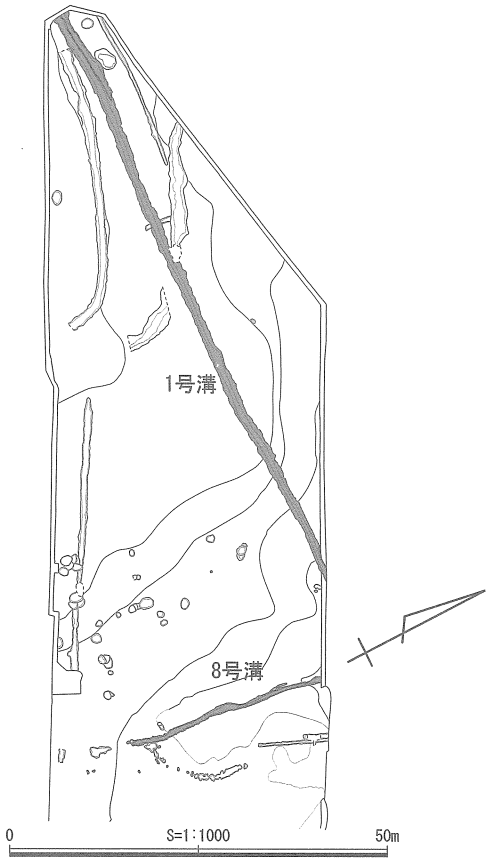
原秀三郎氏は、沼津周辺の残存する地割を手がかりに、駿河国駿河郡において、小野氏以来想定されてきた東駿河条里・西駿河条里の併存は認められず、駿河郡一帯の同一計画による統一条里（駿河条里）の存在を明らかにした（原・菊池 2004・2006)。原氏の復元する駿河条里は、ほぼ正方位で、境川およ



第102図　古代駿河国の主要官衙交通路（佐野2004に加筆）



第103図　駿河条里復元概念図（原・菊池2006に加筆）



第104図　１・８号溝状遺構の配置

び沼津市大平地区以西、沼津市東椎路・大諏訪に及ぶ、現在の沼津市域の大部分を含むものである（第103図）。

奈良時代までに施行された条里制が、ほぼ郡を基本単位とした統一的な土地区画制度であることを考慮すれば、駿河郡における統一条里を想定することが、現状では合理的と考えられる。

２．溝状遺構の特徴

ほぼ正方位に区画される駿河条里を念頭において考えれば、本調査で検出された１・８号溝状遺構は古代条里を意識して掘削された可能性も考えられる。１号溝状遺構はやや蛇行するものの、ほぼ東西方位に延伸し、上端での平均幅1.5m、平均深度0.25mを測る。長さは調査区内で80m程を確認できたが、西端・東端はさらに調査区外へと続いている。他の溝状遺構や土坑と比べ、掘り込みが深く、調査区内を途切れることなく横断する点、区画や地割を意識したものと思われる。また、出土遺物から８世紀代に掘削されたものと考えられる。８号溝状遺構は、蛇行しながらも、概ね南北方位に延伸し、上端での平均幅１m、平均深度0.15mを測る。長さは調査区内で26m程を確認できた。南端は途切れるが、北端はさらに調査区外へと続く。１号溝状遺構の東端と８号溝状遺構の北端は結節あるいは交差する可能性もあるが、推定結節点が調査区外にあたるため確認はできなかった。１号溝状遺構に隣接する３・５号溝状遺構からは、土師器や須恵器の集中出土が認められ、出土状況や出土土器の破面が磨滅していない点などから、付近での廃棄が想定された。調査区外にあたる１号溝状遺構の北方には律令期の居住域が展開していた可能性も考えられる。

駿河条里との関連を推定するには、情報と根拠に乏しい感も否めないが、坪呼称地に位置する遺跡で検出された正方位に準する遺構として取り上げておきたい。

参考文献

小野真一　1961　「条里制と古代集落」『沼津市誌』中巻　沼津市

加藤雅功　1976　「静岡県東部の条里遺構について」『沼津市歴史民俗資料館紀要』１　沼津市歴史民俗資料館

佐野五十三　2004　「富士川下流域における古代交通路の素描―地域古代史の立体的復元―」『設立20周年記念論文集』　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

原秀三郎・菊池吉修　2004　「駿河国駿河郡の条里と古代の駿豆国境問題―駿河条里豫察報告―」『沼津市史研究』第13号　沼津市教育委員会

原秀三郎・菊池吉修　2006　「駿河国駿河郡の条里と古代の駿豆国境問題 補考」『沼津市史研究』第15号　沼津市教育委員会

望月董弘　1961　「駿河の条里制について」『駿台史学』第11号　駿台史学会

第３節　総　　括

西通北遺跡の調査成果は弥生時代や奈良・平安時代を中心に多岐に渡る。最後に本調査の成果から判明したことを整理し、まとめとしたい。

弥生時代中期中葉の環濠の発見は、本調査における大きな成果の一つと言える。環濠内出土遺物からは当時の人々の生活を窺い知ることができたものの、調査範囲の制約により、環濠内部の集落の様相は判明しなかった。弥生時代中期中葉の集落としては、静岡県中部地域において静岡市の有東遺跡・川合遺跡・瀬名遺跡で集落関連の遺構が見つかっている。また南関東地方に目を向けると、神奈川県小田原市の中里遺跡では多数の竪穴住居址や掘立柱建物跡、方形周溝墓が検出されており、千葉県君津市の常代遺跡でも当該期の方形周溝墓や堰跡、また多量の木製農具が出土している。これらの事例は、弥生時代中期中葉に本格的な農耕集落が南関東地方にまで定着していることを示している。このことから、静岡県東部地域においても本格的な農耕集落の存在は予測されていたが、今回の西通北遺跡の調査成果は、静岡県東部地域における当該期の社会を探るうえで、また東日本の農耕集落の出現を考えるうえでも重要な役割をもつと言えよう。

７世紀末から９世紀にかけての溝状遺構や土坑が認められ、３・５溝状遺構では土師器や須恵器が集中して出土した。出土状況から、これらの土器は流れ込みによるものではなく、付近での廃棄等が想定され、近辺に当該期の集落が存在していたことを窺わせる。また、正方位に準じて延伸する１・８号溝状遺構は古代の駿河条里に則って掘削された土地区画溝である可能性が考えられる。出土した須恵器の中には、口縁部が歪むなどの焼け歪みが認められる焼成失敗品あるいは焼成不良品も含まれていた。こうした失敗品・不良品をも生産地から製品として供給されている点は、消費地としての本遺跡の特徴を示すものと考えられる。周辺に展開したであろう集落も、官衙等とは無縁であったのであろうか。

10世紀以降も遺構は検出されなかったものの、遺物の出土は認められ、断続的に人為的活動が営まれていたことが窺える。池状遺構とその周辺の溝状遺構や土坑の存在から、近世以降も居住域あるいは稲作や畑作といった生産域として、当地が活用されていたことが考えられる。

あとがき

発掘調査及び報告書作成に当たっては、以下の方々から多くの御教示・御指導を賜った。記して厚く御礼申し上げる。そして、現地調査・資料整理において、多くの方々の献身的な作業によって円滑に調査を遂行することができた。末筆ながら記して感謝申し上げたい。

（敬称略・順不同）

池田治　植田雄己　植松章八　押方みはる　柏木善治　今野まりこ　佐野五十三　篠原和大　鈴木一有
鈴木敏則　鈴木敏弘　高尾好之　立花実　土屋了介　贄元洋　西川修一　林雅恵　林美佐　松井一明
山岸良二　山本惠一　渡井英誉

現地作業員

五十嵐高丸　石川益男　井出忠夫　井原和子　上原きく江　宇津木美紀　遠藤裕己　奥山幸雄
小野三千男　笠間公雄　木村義子　熊坂勇　桑山隆充　後藤正司　小長井建昭　杉村桂子　杉山満義
鈴木稔　諏訪隆明　世利忠　芹澤志江　田川美恵子　土屋辰雄　永島民雄　中山忠義　中村未幸
奈良輪庄吉　橋本金五郎　服部正　浜田清治　原田郷子　深澤文夫　福田千征　細谷政以
本間日出男　松浦美智枝　松岡潔　松下隆宣　水落安治　水上綾子　望月久美子　八木範夫
山田里美　山田武義　行藤たけし　吉村たまみ　吉村秀雄　米山美代子　和田勝基　渡辺昇

整理作業員

池松由貴子　落合高志　加藤百合子　小泉文香　佐々木富士子　森田矢穂里

写真13　アフガニスタン研修生を現地に迎えて

写　真　図　版

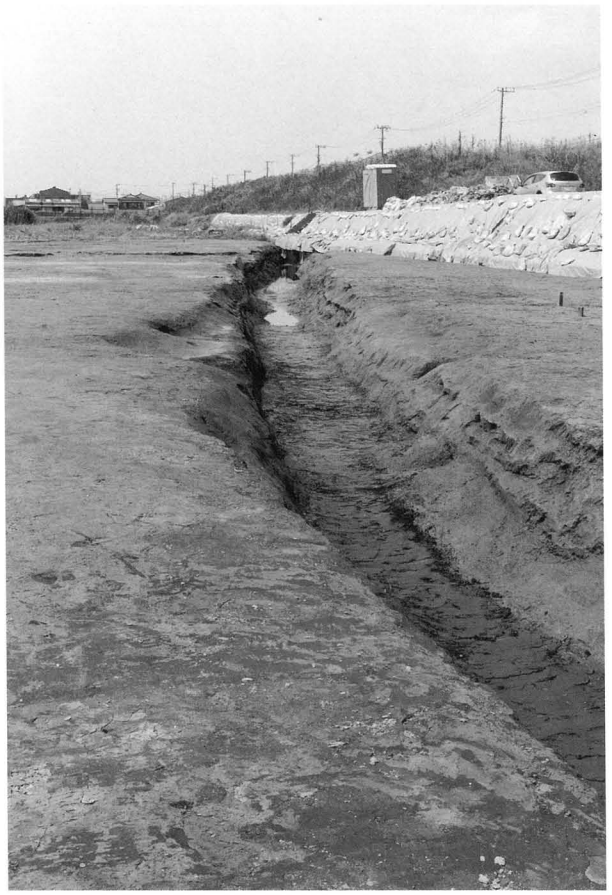
1　西通北遺跡遠景（南東より）

2　西通北遺跡完掘状況遠景（東より）

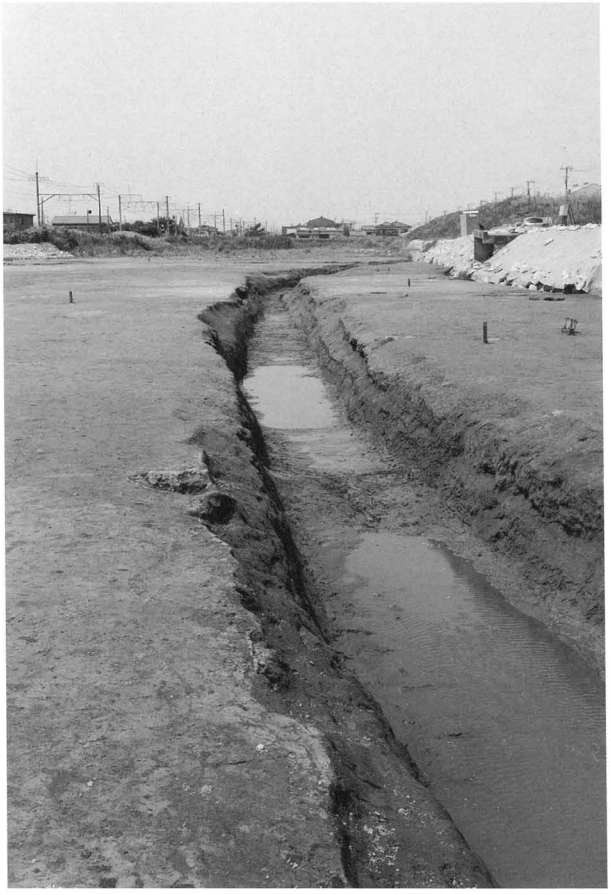
図版2

西通北遺跡完掘状況全景（合成）

１　環濠全景（南東より）



２　環濠西部完掘状況（南東より）

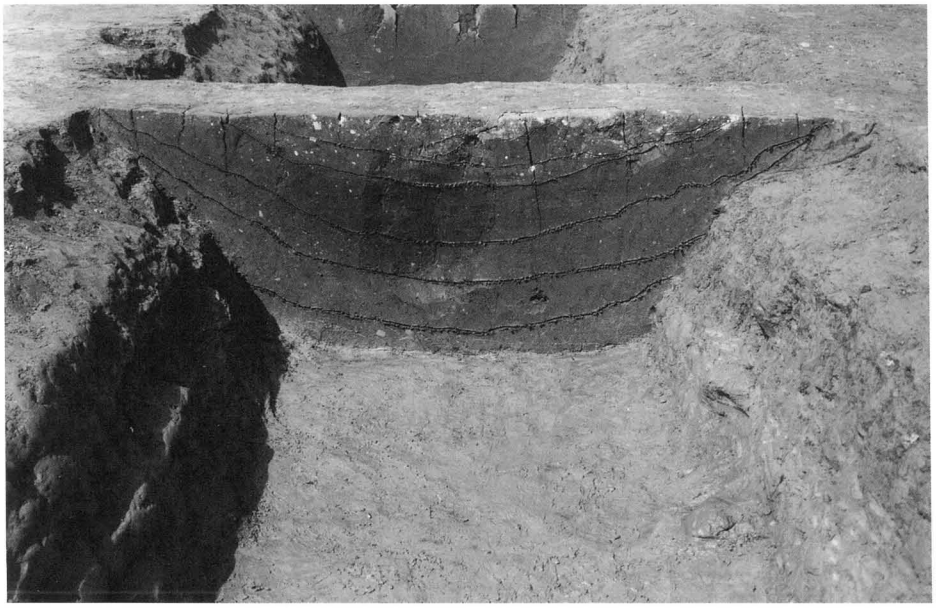


３　環濠中部完掘状況（東より）

４　環濠東部完掘状況（東より）

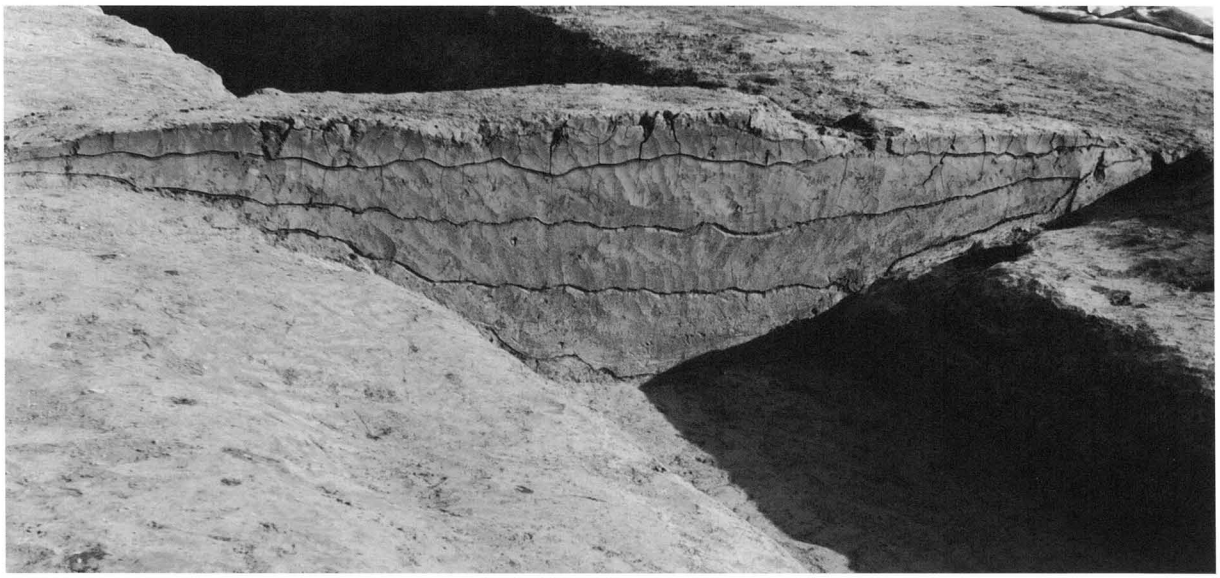
図版4

1　環濠土層断面①
（北西より）



2　環濠土層断面②
（東より）

3　環濠土層断面③
（西より）



1　環濠土層断面④（西より）

2　環濠土器出土状況①（南西より）

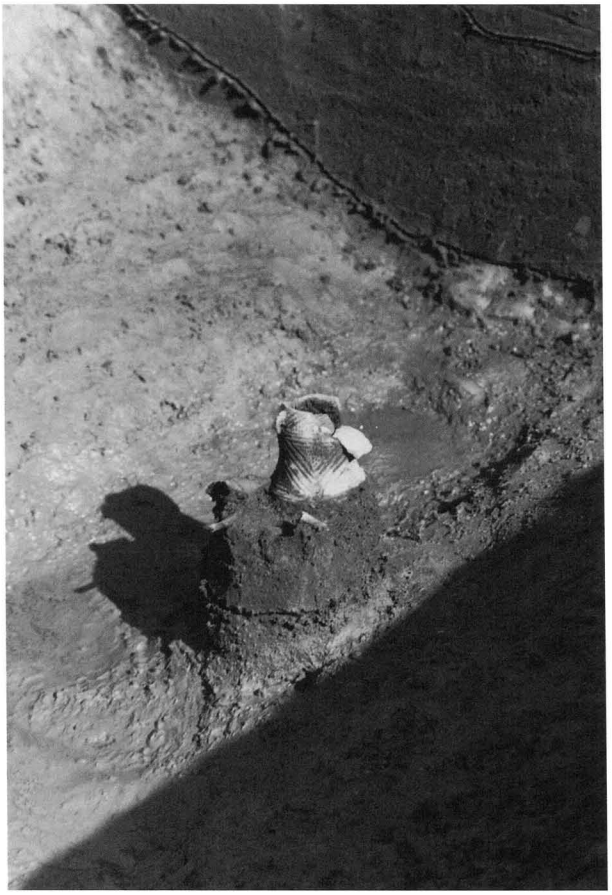
3　環濠土器出土状況②（北東より）

4　環濠土器出土状況③（北西より）

5　環濠石鏃出土状況（北西より）

図版6

1　環濠土器出土状況④（南東より）



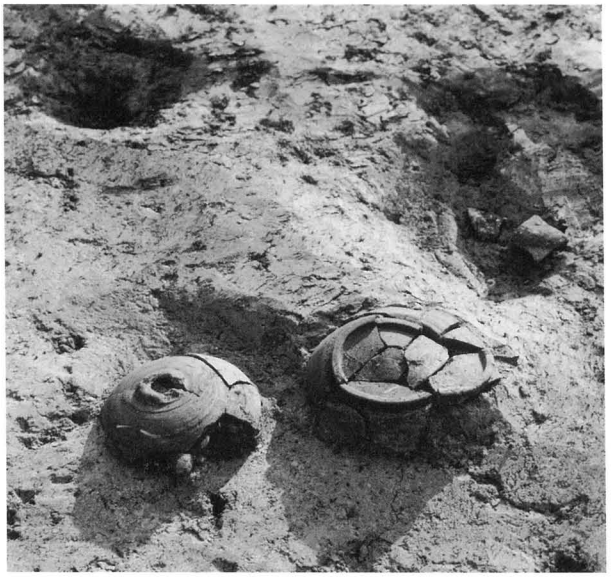
2　環濠土器出土状況⑤（南西より）

3　環濠鉄鉇出土状況（西より）

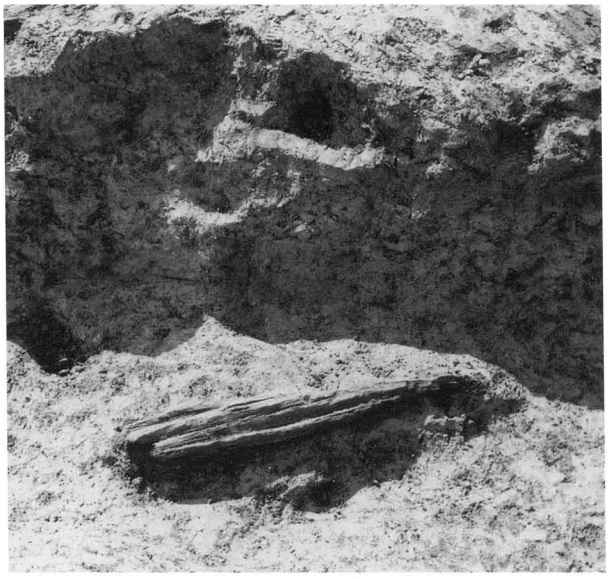
1　３号溝状遺構上端土器出土状況①（北東より）

2　３号溝状遺構上端土器出土状況②（北東より）

3　３号溝状遺構土器出土状況①（北より）

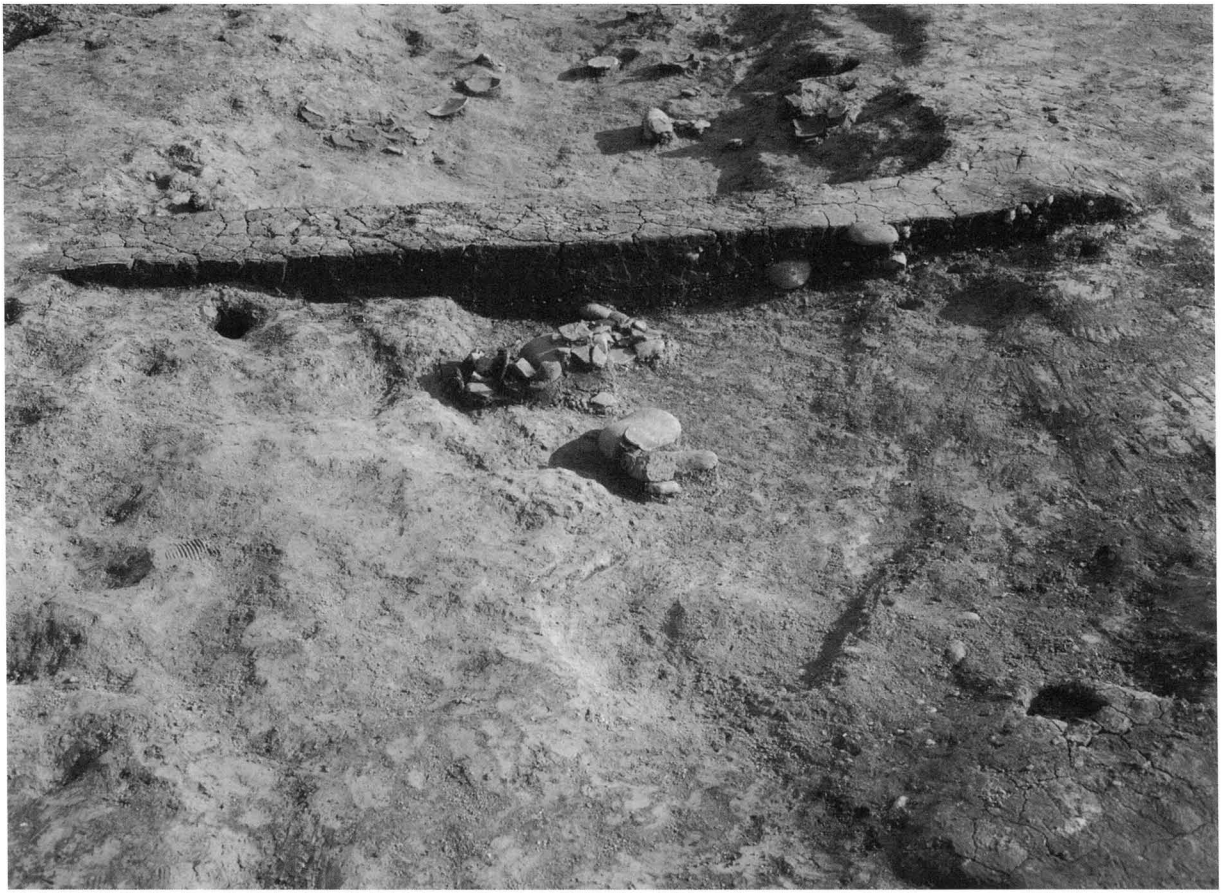


4　３号溝状遺構土器出土状況②（北東より）



5　１号溝状遺構木製品出土状況（北より）

図版8



1　５号溝状遺構遺物出土状況（北より）

2　池状遺構土層断面（南西より）

１　池状遺構遺物出土状況（東より）

２　20号溝状遺構遺物出土状況（西より）

３　近世陶器出土状況（北より）

図版10

28-2

30-1

30-3

32-2

32-1

32-1

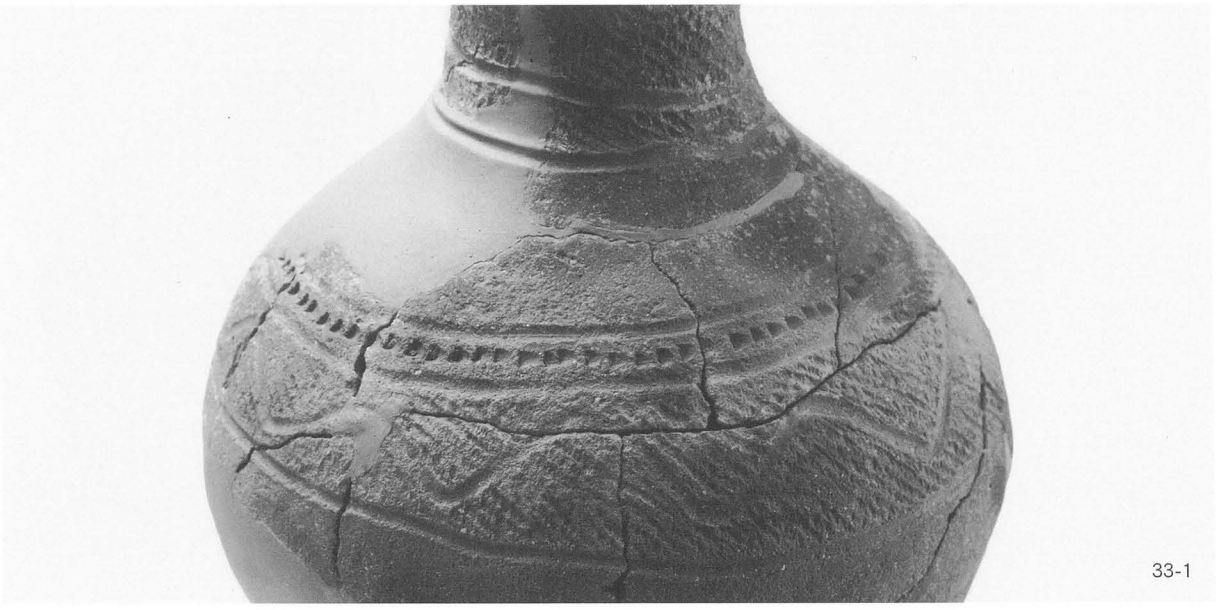
弥生土器壺①

33-1

33-2

33-4

33-3



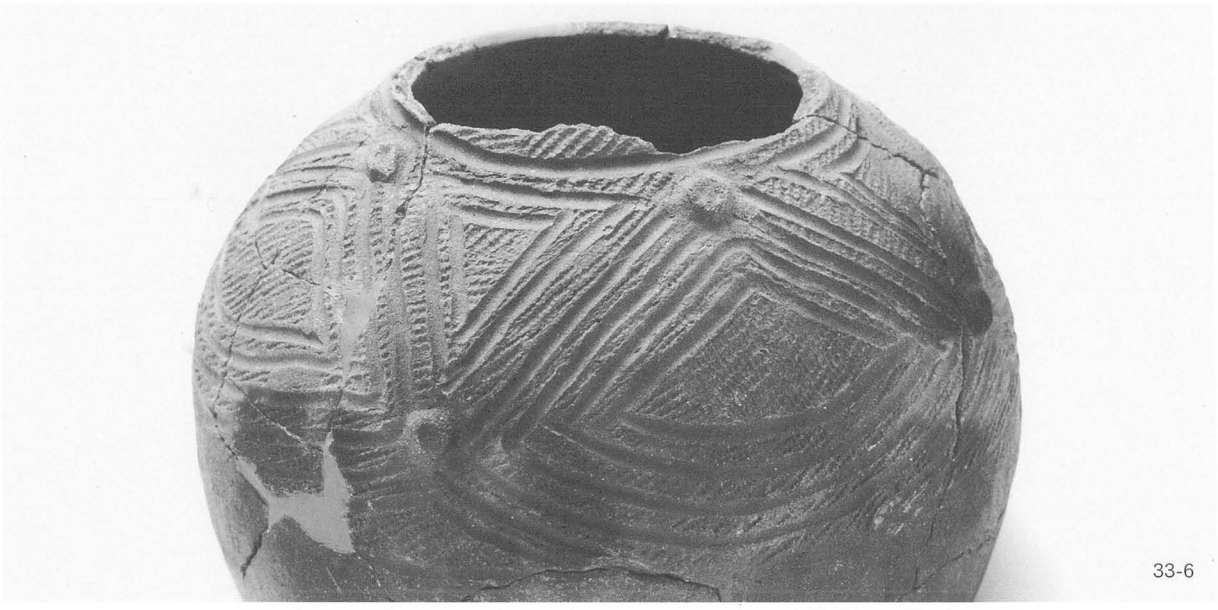
33-1

弥生土器壺②

図版12

33-5

33-6

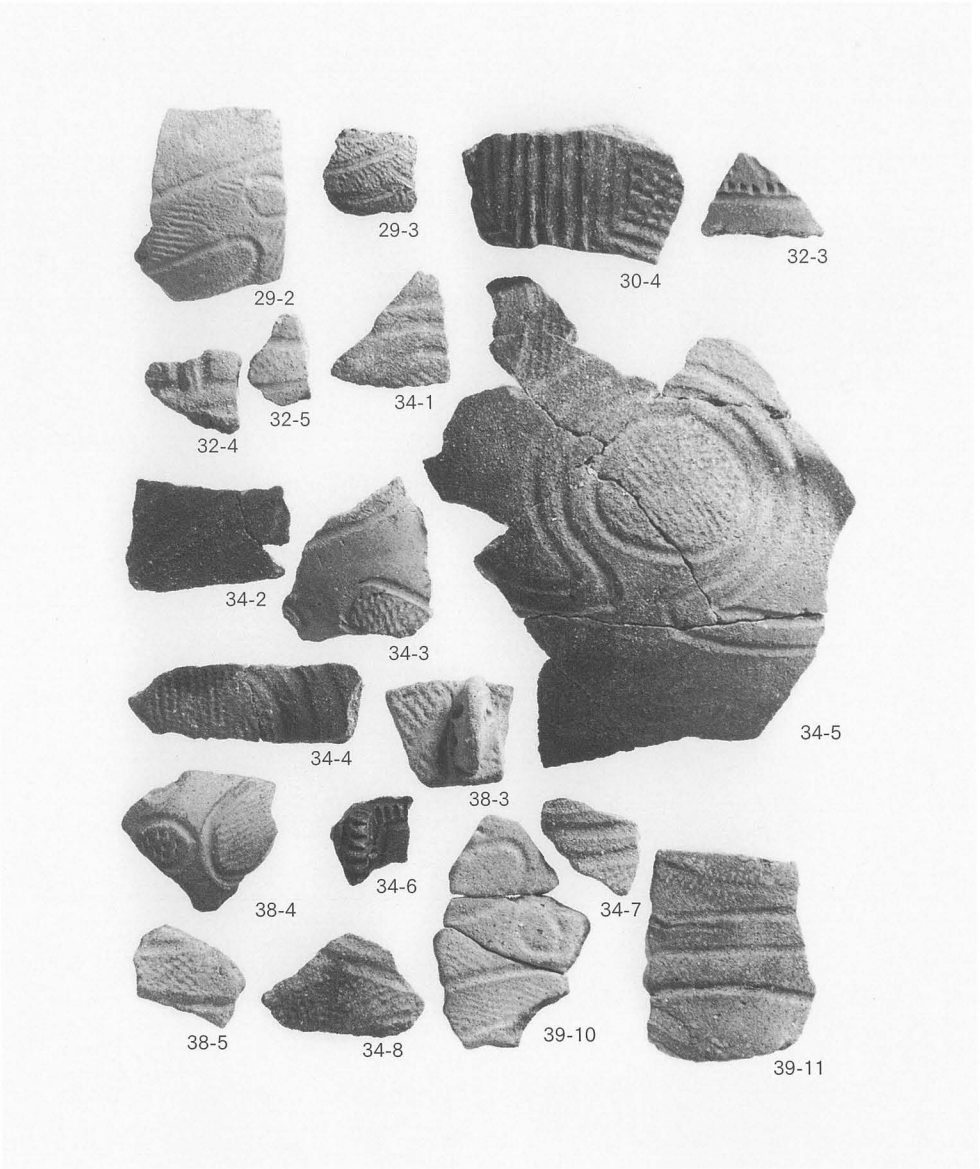


33-6

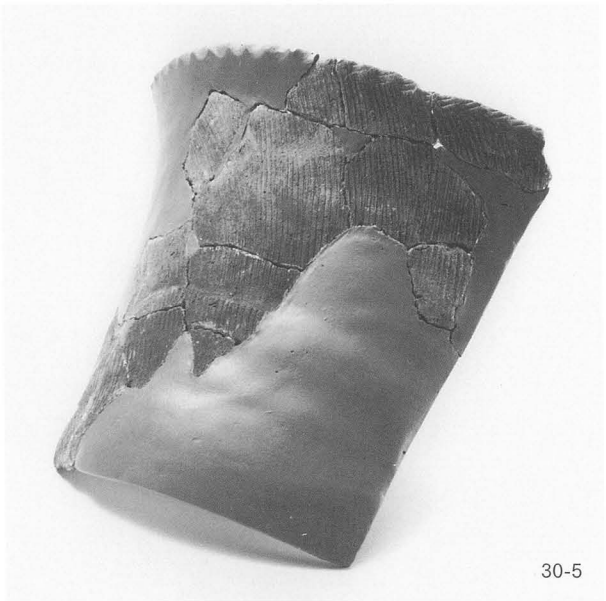
33-8

39-4

弥生土器壺③



1　弥生土器壺④

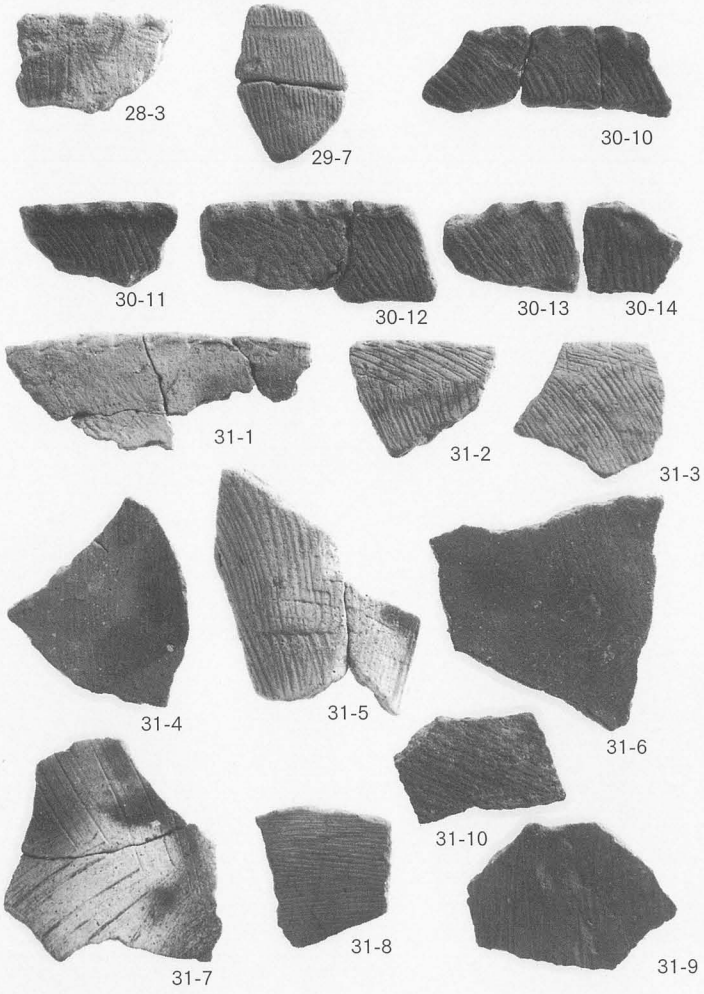


2　弥生土器甕①

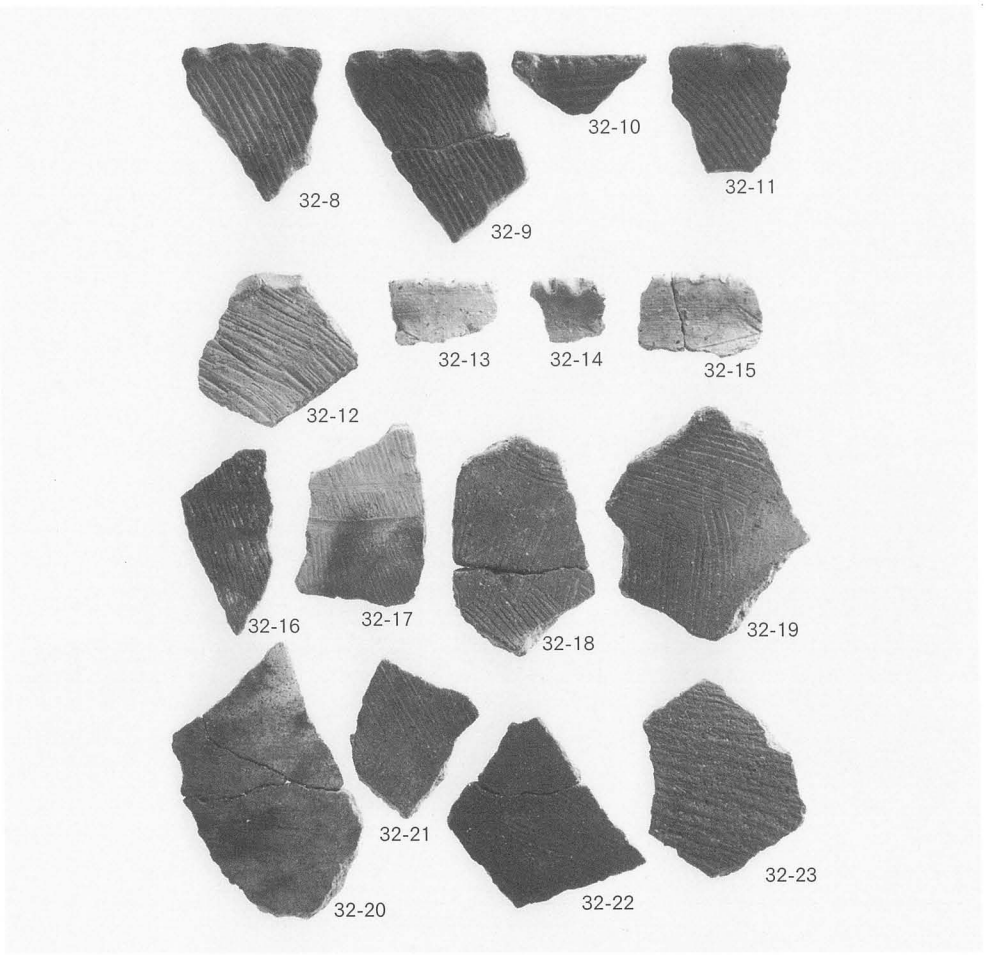
図版14

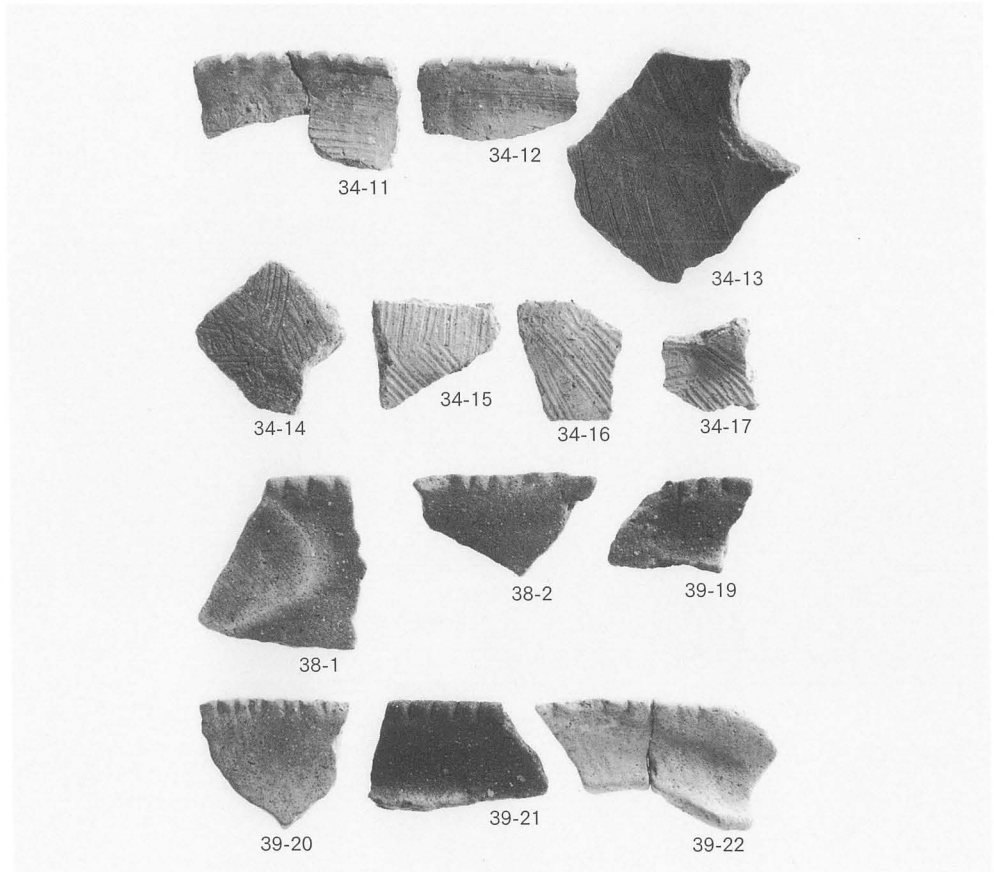
30-8

34-9



弥生土器甕②


32-8
32-9
32-10
32-11
32-12
32-13
32-14
32-15
32-16
32-17
32-18
32-19
32-20
32-21
32-22
32-23


34-11
34-12
34-13
34-14
34-15
34-16
34-17
38-1
38-2
39-19
39-20
39-21
39-22

弥生土器甕③

図版16

1　環濠出土弥生土器壺

2　環濠出土弥生土器甕

43-1

48-1

48-2

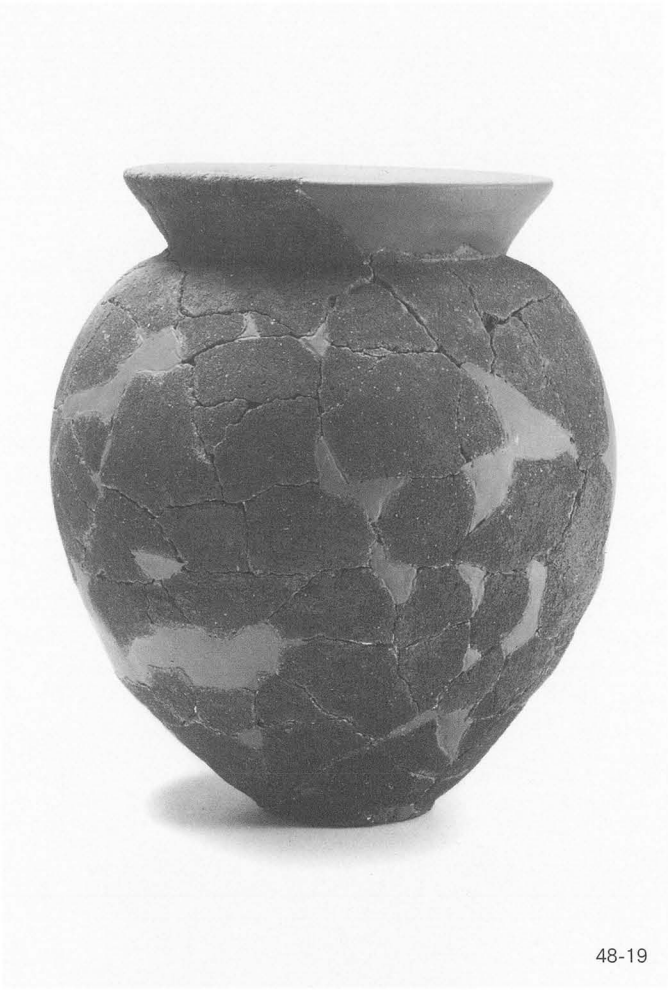
48-3

48-20

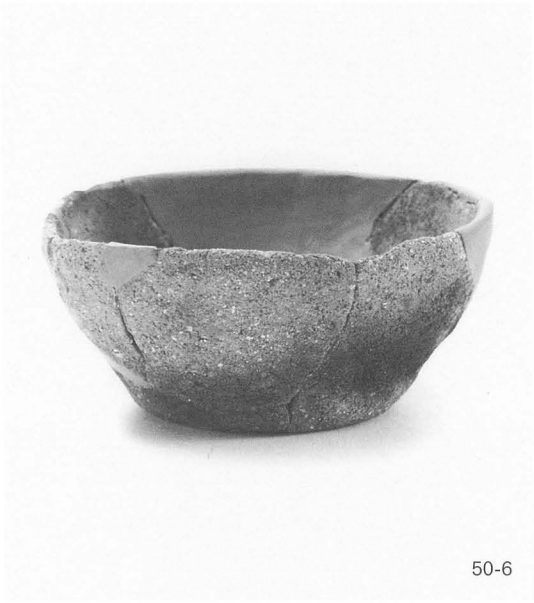
49-6

土師器坏・甕①

図版18



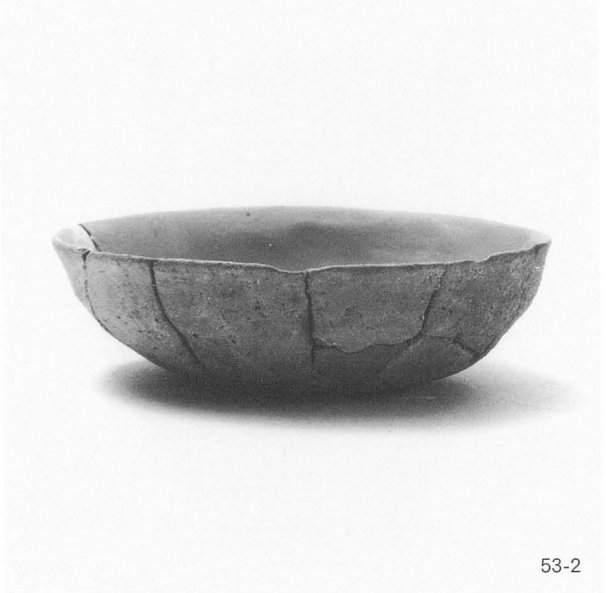
48-19



50-6

53-3

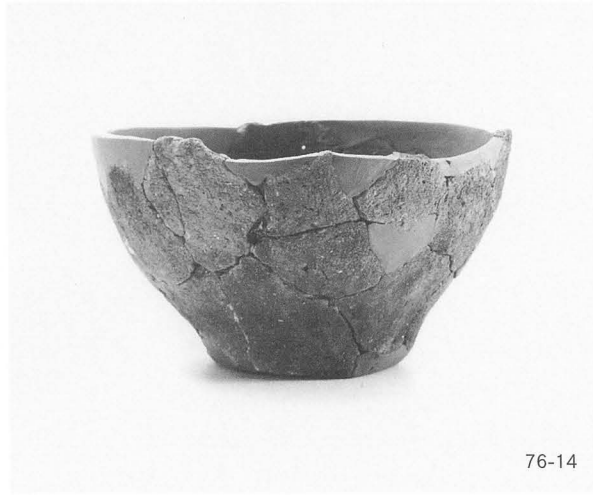
53-1



53-2

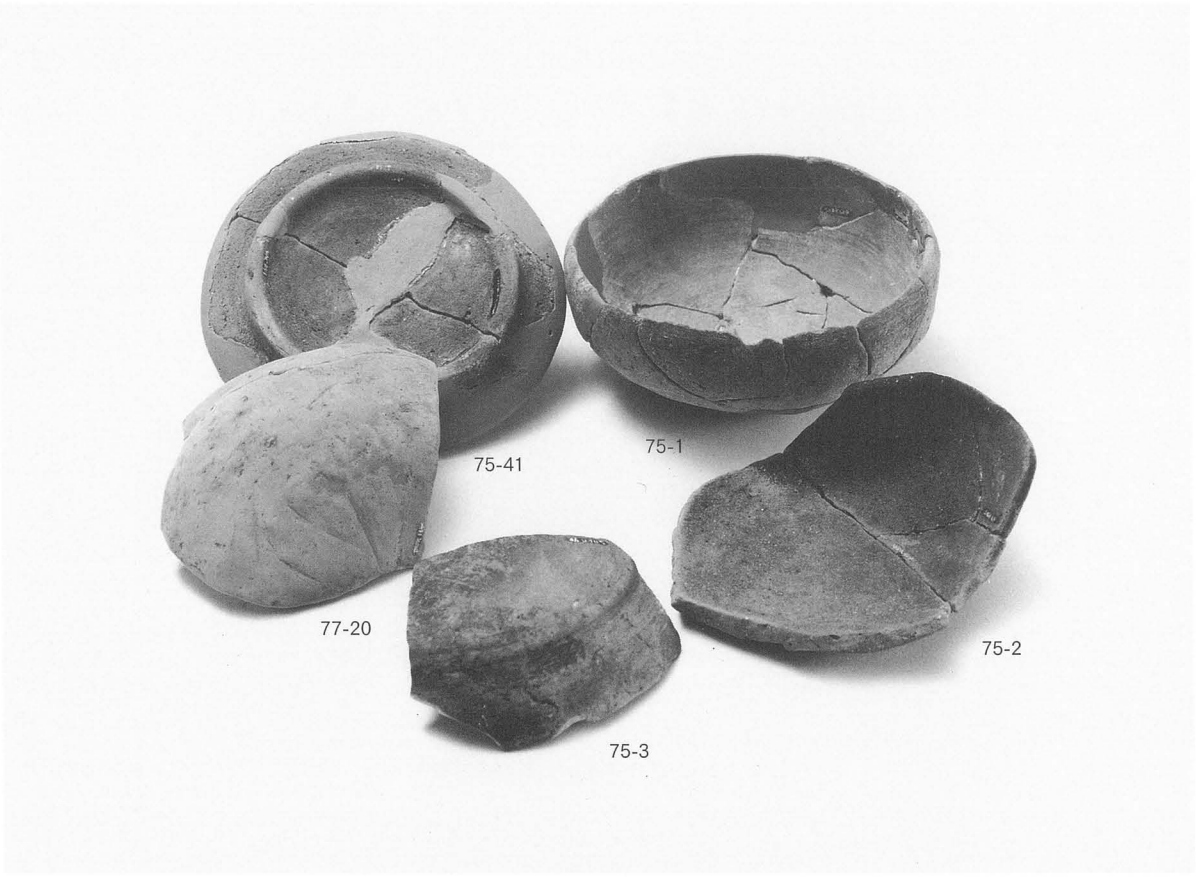
土師器坏・甕・鉢

1　3号溝状遺構出土土師器甕

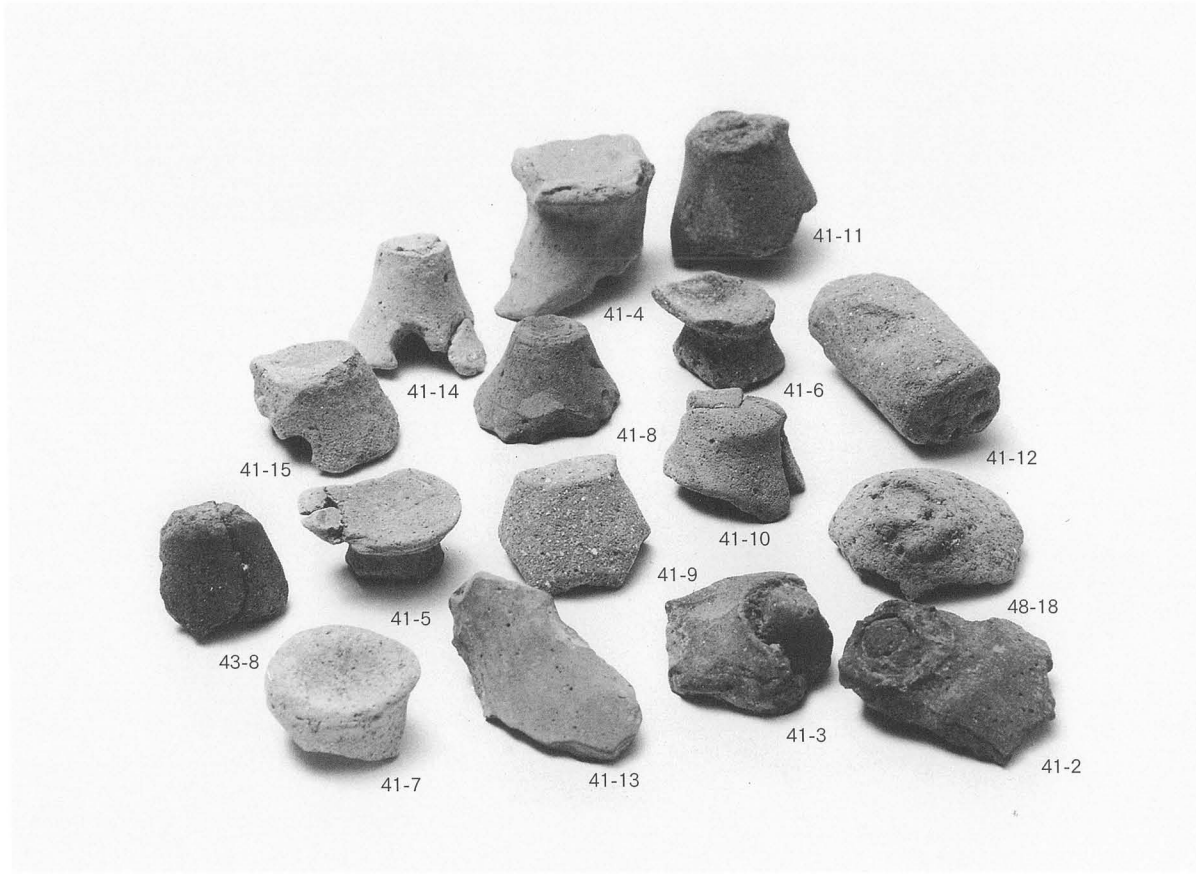


2　土師器坏・甕②

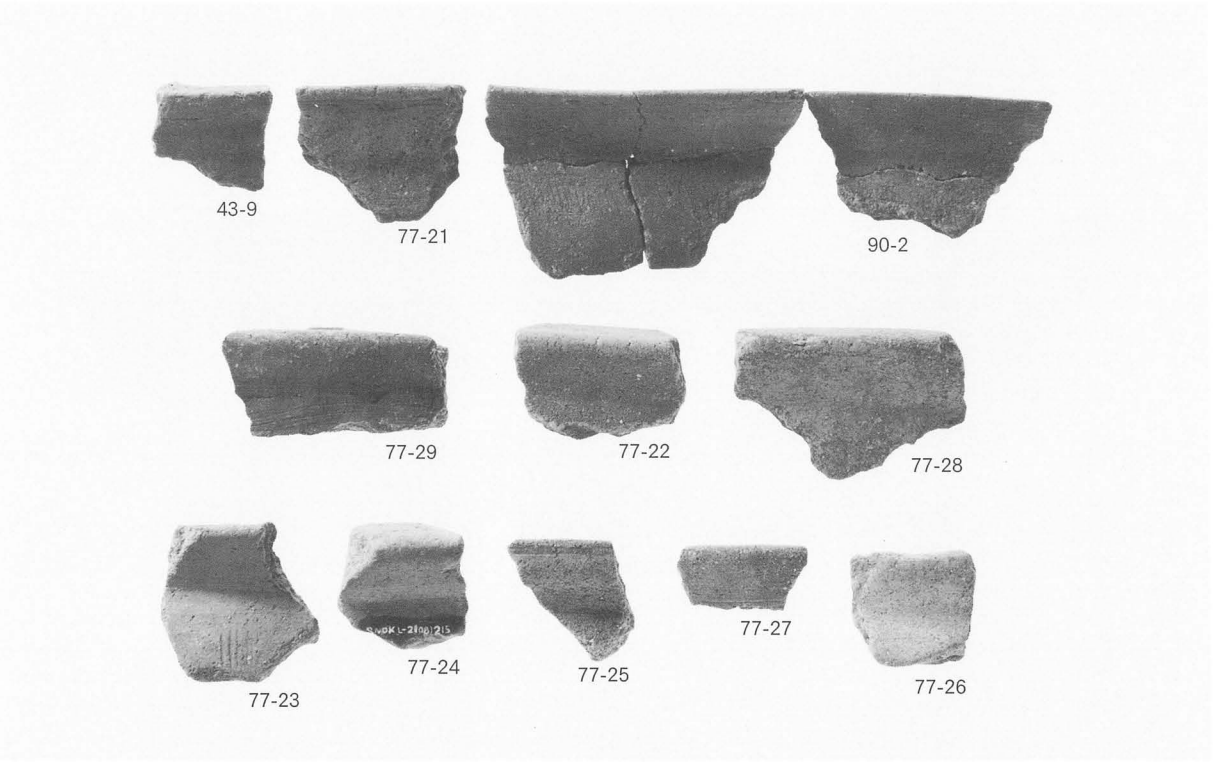
図版20



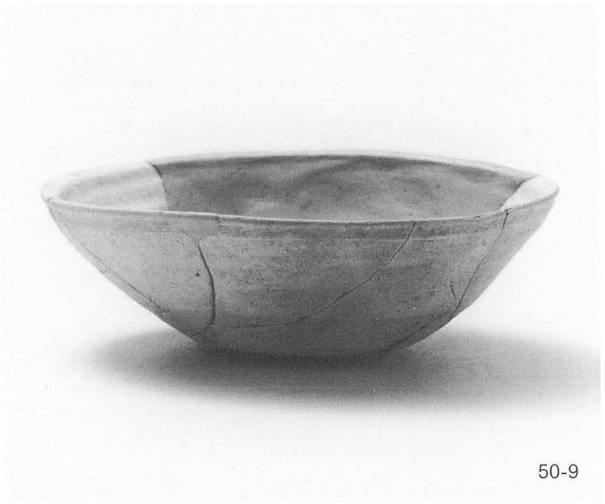
1　遺構外出土土師器坏



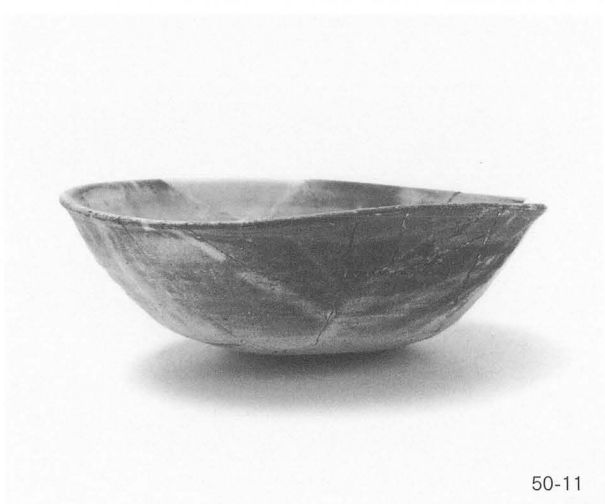
2　土師器高坏



1　土師器堝


50-9

50-10


50-11

50-12

2　須恵器坏①

図版22

50-13

50-17

50-18

50-19

51-1

51-2

須恵器坏②

51-3

51-5

51-6

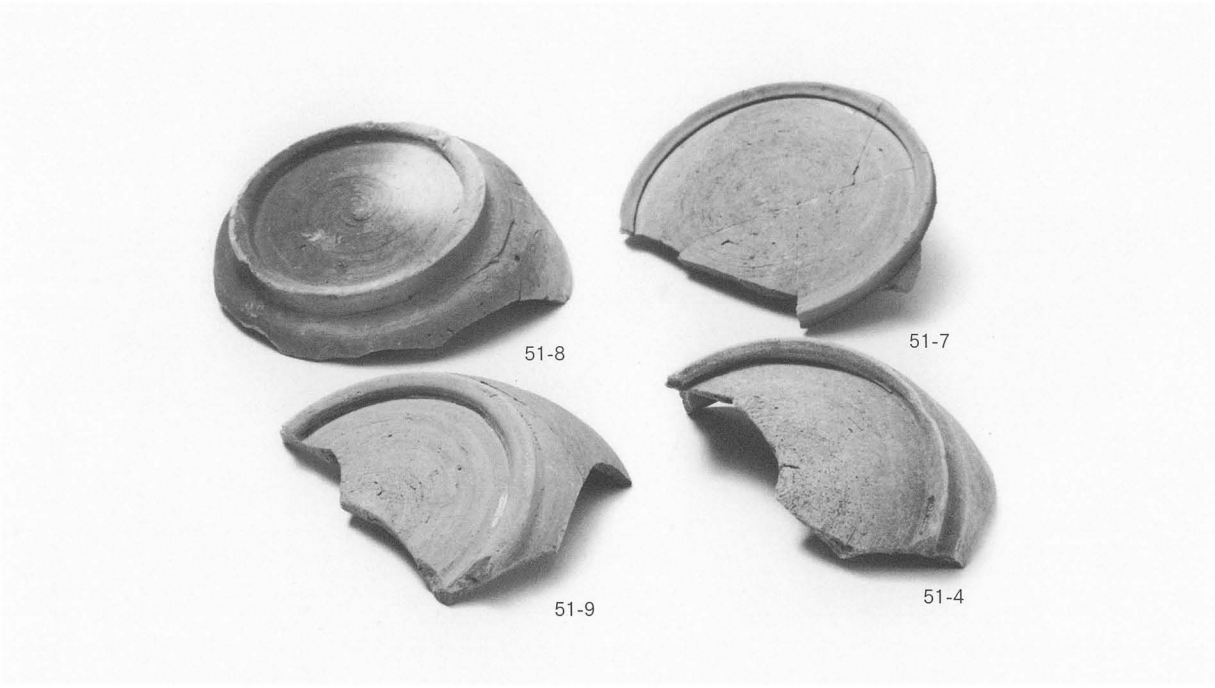
51-10

51-13

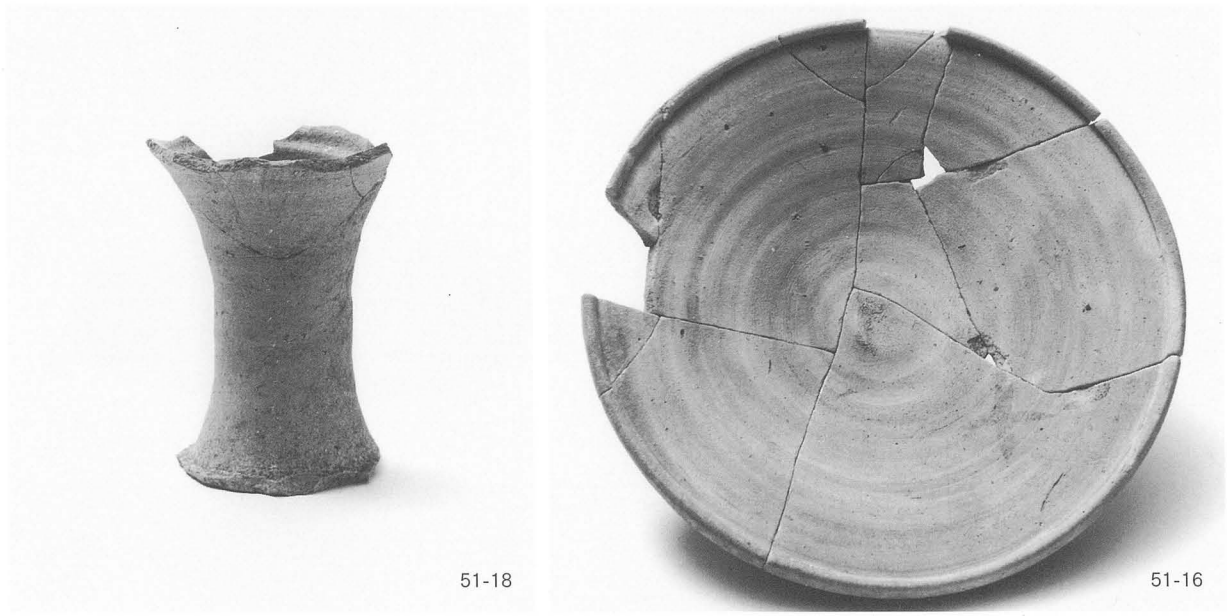
51-14

須恵器坏・高坏・坏蓋

図版24



1　3号溝状遺構出土須恵器坏



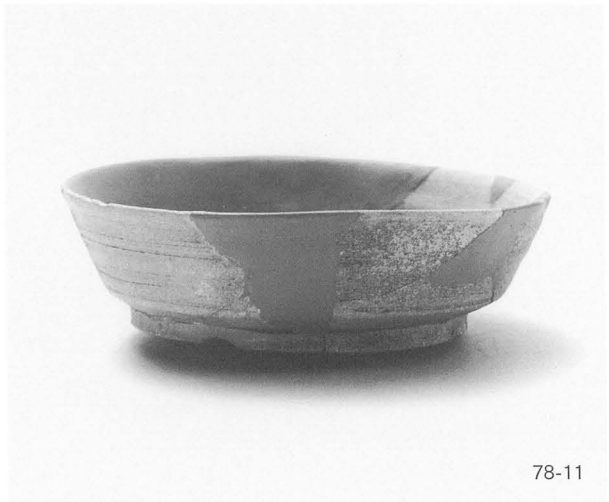
2　須恵器坏蓋・壺

1　5号溝状遺構出土須恵器坏

54-1

74-1

78-1


78-11

2　須恵器坏・壺

図版26

78-12

78-22

79-1

1　須恵器坏・坏蓋・壺

78-13

78-15

78-16

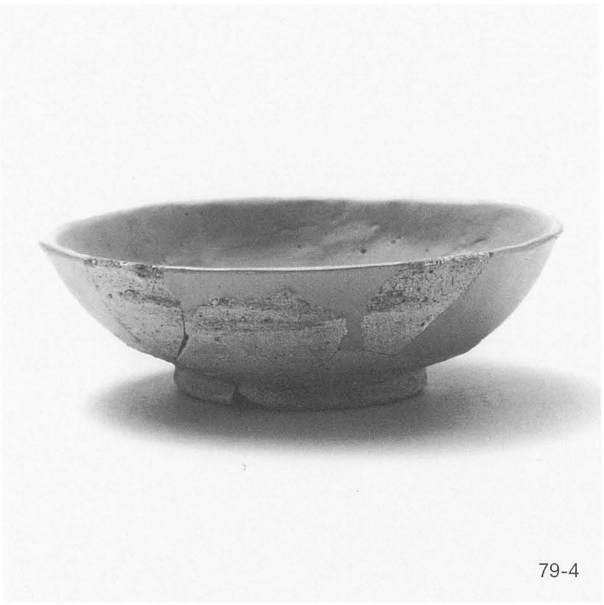
78-2

2　遺構外出土須恵器坏

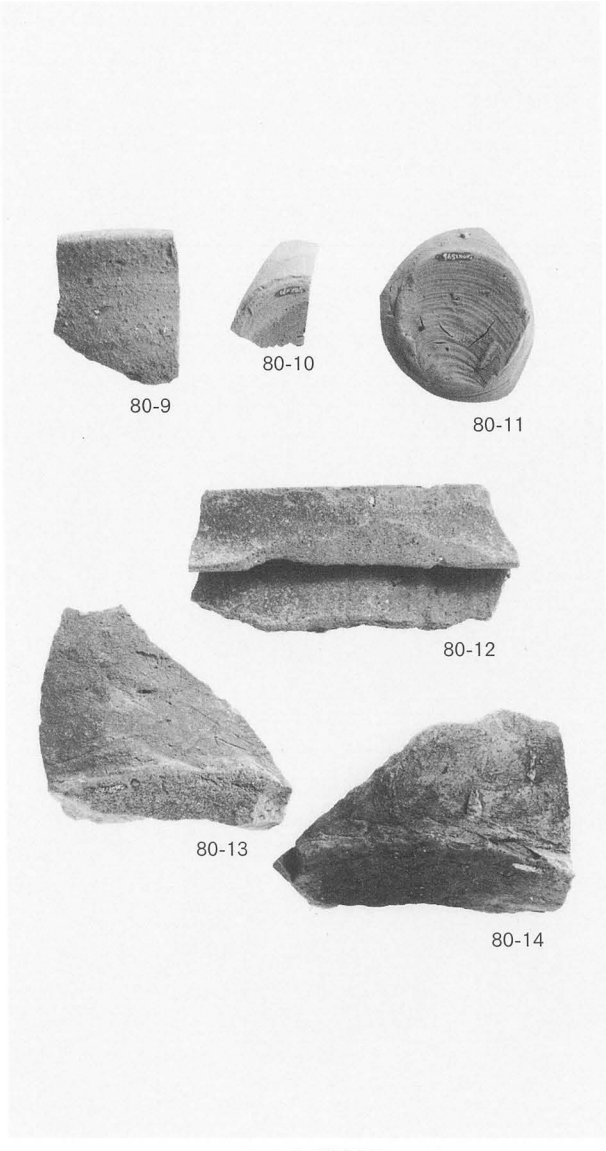
1　須恵器壺・甕・鉢

2　灰釉陶器

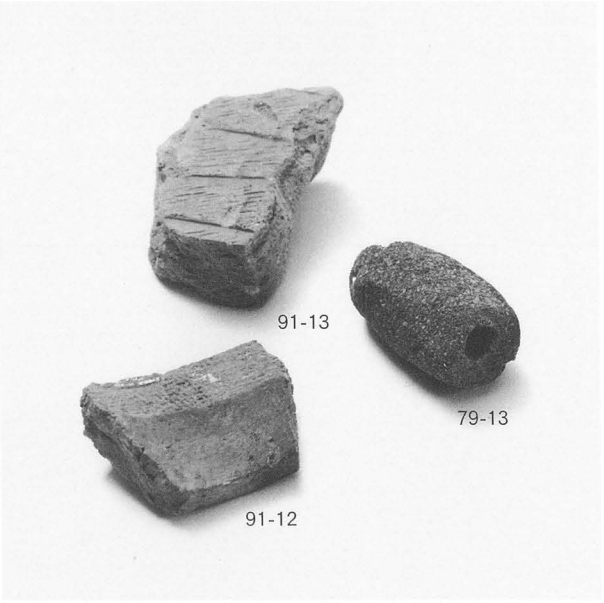
図版28



1　灰釉陶器坏・皿

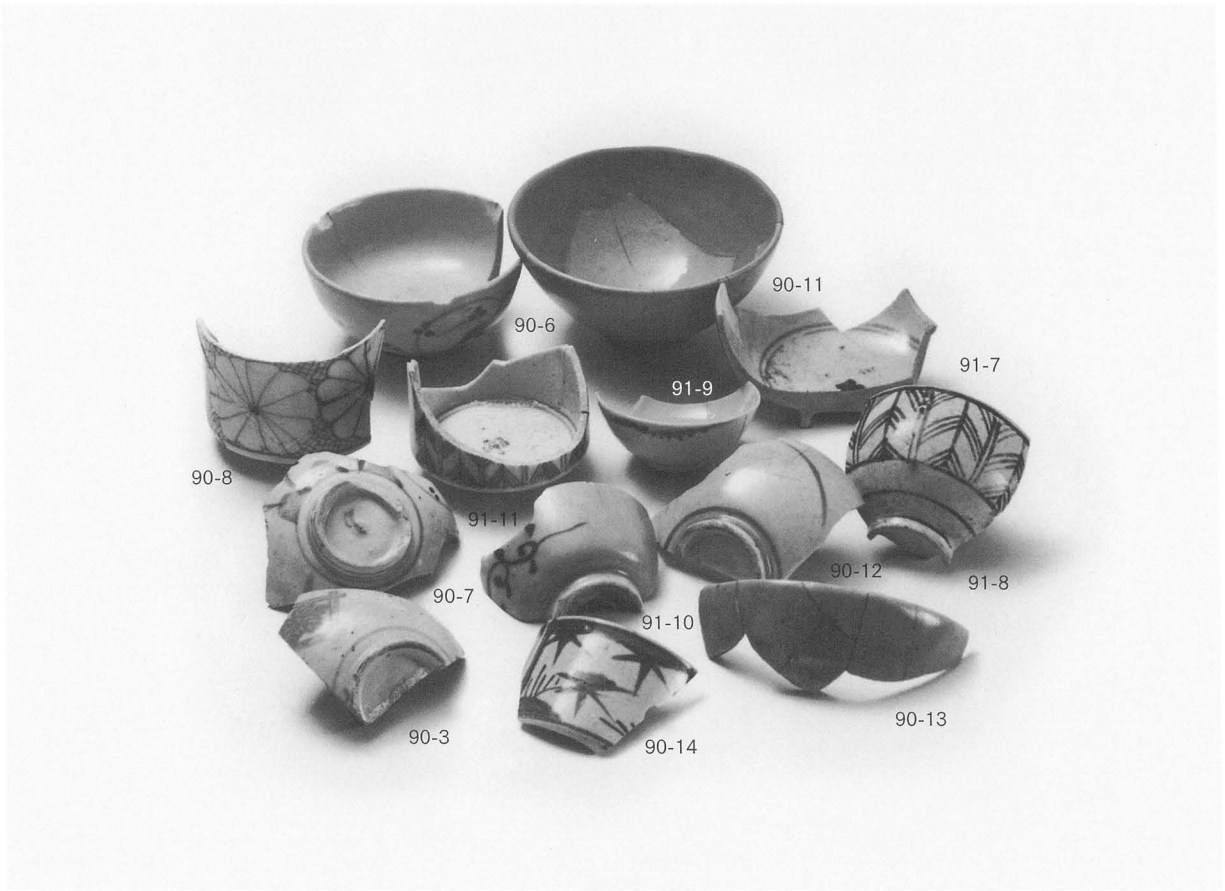


2　中世陶器



3　土製品

1　近世以降陶器

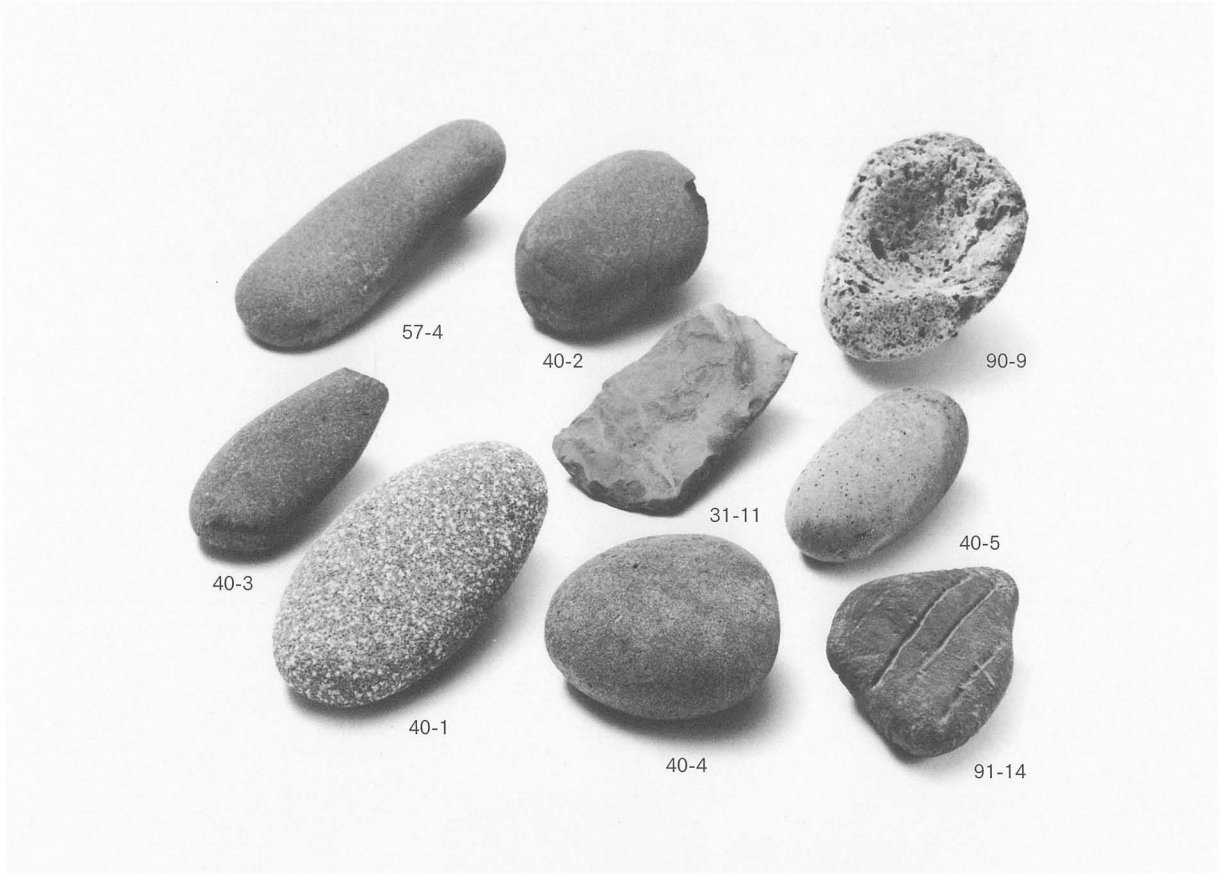


2　近世以降磁器

図版30

1　石鏃

2　石核



3　石器

4　木製品①

43-18

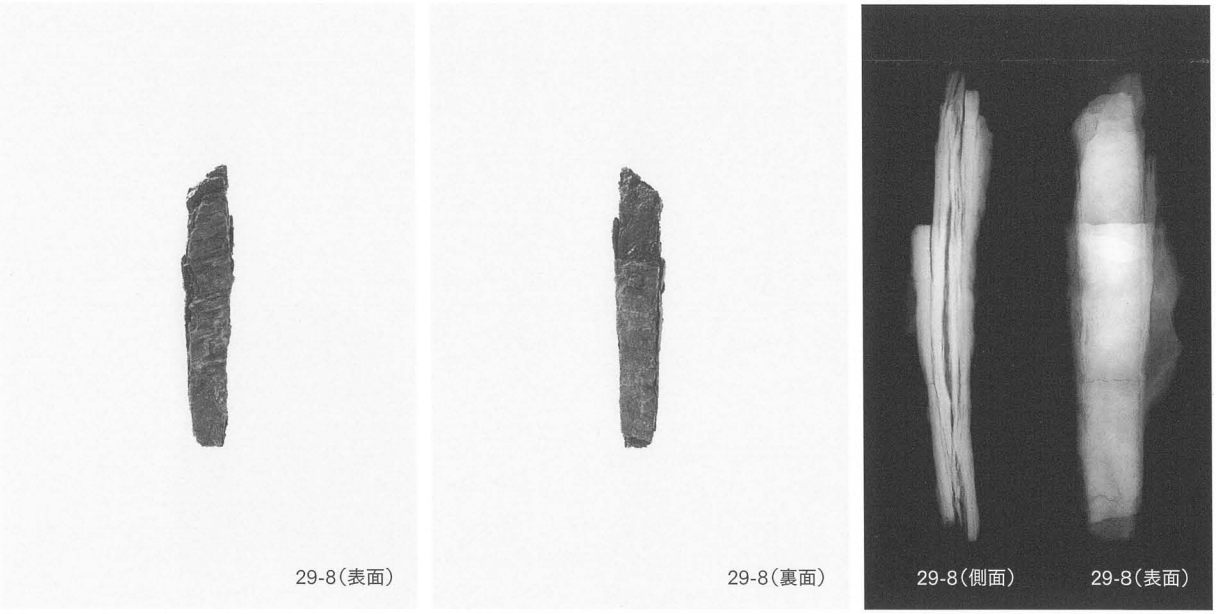
83-3

83-4（表面）

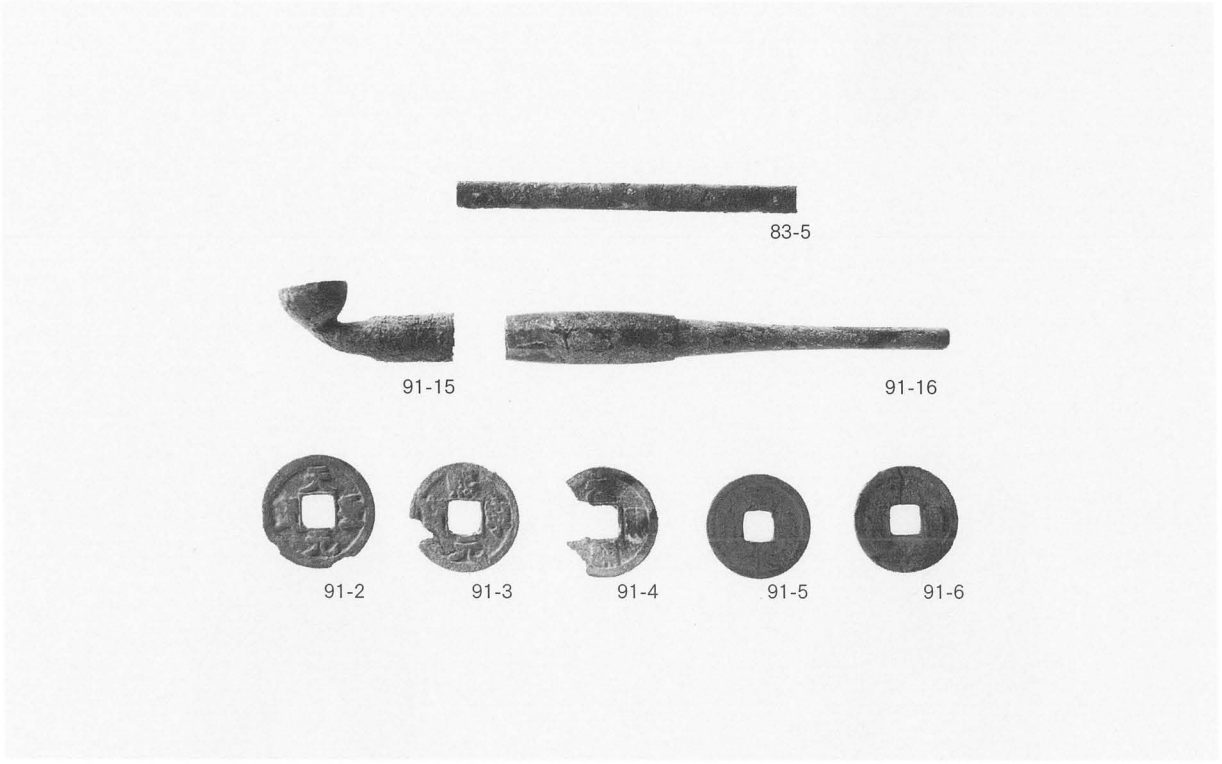
83-4（裏面）

木製品②

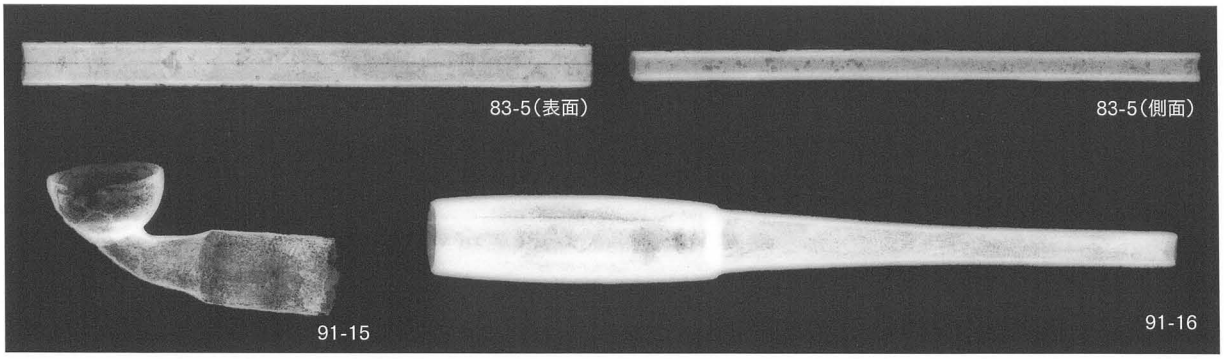
図版32



1　鉄製品



2　銅製品・銭貨



3　銅製品

報告書抄録

ふりがな	にしどおりきたいせき
書名	西通北遺跡
副書名	平成20～22年度JR東海道本線・JR御殿場線緊急地方道路整備事業（街路B） 平成21年度JR東海道本線・JR御殿場線都市高速鉄道高架事業（新車両基地） 建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第239集
編著者名	杉山和徳
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422－8002　静岡県静岡市駿河区谷田23番20号　TEL 054－262－4261（代表）
発行年月日	西暦2011年３月18日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
にしどおりきたいせき 西通北遺跡	しずおかけん 静岡県 ぬまづし 沼津市 おおずわあざ 大諏訪字 しんどおり 新通・ こずわあざ 小諏訪字 にのつぼ 二ノ坪	22203		世界測地系 35° 06’ 38”	世界測地系 138° 50’ 12”	20080602 ～ 20100129	16,409㎡	JR沼津駅付近鉄道高架事業による新車両基地建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西通北遺跡	散布地	縄文時代以前		石鏃・石核	
	集落	弥生時代	環濠１・土坑５・土坑列１	弥生土器・石鏃・敲石・木製品・鉄鉇	弥生時代中期中葉の環濠を検出
	散布地	古墳時代		土師器	
	集落	奈良・平安時代	溝状遺構12・土坑20・土坑列７	土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・土錘・敲石・木製品	溝状遺構から土師器・須恵器が集中して出土
	散布地	中世		陶器・磁器	
	集落	近世以降	池状遺構１・溝状遺構９・土坑15・土坑列１	陶器・磁器・瓦・凹石・線刻礫・木製品・棒状銅製品・煙管・銭貨	他に帰属時期不明の土坑117と小穴16を検出

要約

西通北遺跡は、南は千本浜、北は愛鷹山をのぞむ浮島ヶ原と呼ばれる低湿地帯の東縁に位置している。弥生時代中期から近代にわたり、断続的に人為的活動が営まれた複合遺跡である。

弥生時代中期中葉の環濠は、静岡県内最古級のものに位置づけられる。環濠内から出土した壺形土器や甕形土器は、当該期の資料数が少ない静岡県東部地域の弥生土器編年を補う貴重な資料である。

奈良・平安時代は7世紀末から9世紀にかけての遺構や遺物が認められた。溝状遺構内で土師器や須恵器が集中して出土しており、付近には集落が広がっていたことが想定される。また、正方位に準じて延伸する溝状以降も認められ、古代条里制との関連性が窺える。

近世以降では排水・導水・区画の機能が想定される池状遺構、溝状遺構や土坑が検出された。

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第239集

西通北遺跡

平成20～22年度JR東海道本線・JR御殿場線
緊急地方道路整備事業（街路B）
平成21年度JR東海道本線・JR御殿場線
都市高速鉄道高架事業（新車両基地）建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成23年３月18日

編集・発行　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23－20
TEL　054－262－4261㈹
FAX　054－262－4266
印　刷　所　みどり美術印刷株式会社
〒410-0058　沼津市沼北町２丁目16番19号
TEL　055－921－1839㈹